より、卒に宰相に登る。凡そ聖德を輔道し・國家に憂勤する所以、舊有り勞有り、始より卒に至るまで、五十餘年。公既に薨じて、先帝の名臣と、陛下の東宮の舊人と、皆、在る者無し。宜なり其寵優異にして、公を㊀甘盤に比すること。臣修、幸に筆を史官に執ることを得、事を上る。

明詔を奉じ、謹みて昧死して、臨淄公の事を上る。

曰く、公は諱は殊、字は同叔、姓は晏氏。其世次㊁晦顯、㊂徙遷、常ならず。其高祖諱は墉・唐の㊃咸通中・進士に擧げられ・官に江西に卒せしより、始めて㊄籍を高安に著はす。其後、三世、顯れず。曾祖、諱は延昌、又、其籍を臨川に徙す。祖、諱は郛、英國公に㊅追封せらる。曾祖より已下、皆、公を用て貴し。開府儀同三司・太師中書令兼尚書令を㊆累贈せらる。曾祖妣は張氏、陳國太夫人、祖妣は傅氏、許國太夫人、妣は吳氏、唐國太夫人たり。

公生れて七歲にして、學問を知り、文章を爲る。鄉里號して神童と爲す。故の丞相張文節公、江西を安撫し、公を得て以て聞す。眞宗召し見る。既に出身を賜ひ、後二日、又召して詩賦論を試みる。公徐ろに㊇啓して曰く、「臣嘗て私に此賦を習ふ」と。敢て隱さず。眞宗益〻之を嗟異す。因つて試みるに他の題を以てす。以て祕書省正字と爲し、之を祕閣に置き、悉く祕書を讀むことを得しめ、故の僕射陳文僖公に命じて、其學を視しむ。明年、其の爲る所の文を獻ず。召して中書に試みられ、㊈太常寺奉禮郎に遷さる。太山に封祀し、㊉恩を推して、光祿寺の丞に遷さる。數月にして、集賢校理に充て、明年、著作佐郎に遷さる。父の㊊憂に丁りて官を去る。已にして眞宗之を思ひ、㊋其家に卽きて起復せしめ、淮南の發運使に命じて、舟を具へて送りて京師に至らしむ、從うて㊌太淸宮に祀り、緋衣㊍銀魚を賜はり、同判太常禮院たり。又、母の憂に丁りて、官を去り喪に服せんことを求む。許されず。今の天子、始めて昇王に封ぜられしとき、公、選を以て府記室參軍と爲り、再び左正言直史館に遷さる。今の天子、皇太子たりしとき、戶部員外郎を以て太子の舍人に充てられ、㊎金紫を賜はり、知制誥・判集賢院たり。翰林學士に遷され、景靈宮の判官に充てられ、太子の左庶子・兼判太常寺・知禮儀院たり。

公既に道德文章を以て、東宮を㊏佐佑す。眞宗、諮訪する所有れば、多く方寸の小紙を以て、細書

【一】甘盤。殷の高宗の臣にして學を受けし師。
【二】晦顯。或は隱れ或は顯るる也。
【三】徙遷。住所の移轉。
【四】咸通。唐の懿宗の年號。
【五】籍を著す。籍を其地に置く也。
【六】追封。死後に封ずる也。
【七】累贈。しきりに官位を贈進せらるる也。
【八】啓。申上ぐる也。

之を祕閣に置き、悉く祕書を讀むことを得しめ、故の僕射陳文僖公に命じて、其學を視しむ。明年、其の爲る所の文を獻ず。召して中書に試みられ、㊈太常寺奉禮郎に遷さる。太山に封祀し、㊉恩を推して、光祿寺の丞に遷さる。數月にして、集賢校理に充て、明年、著作佐郎に遷さる。父の㊊憂に丁りて官を去る。已にして眞宗之を思ひ、㊋其家に卽きて起復せしめ、淮南の發運使に命じて、舟を具へて送りて京師に至らしむ、從うて㊌太淸宮に祀り、緋衣㊍銀魚を賜はり、同判太常禮院たり。又、母の憂に丁りて、官を去り喪に服せんことを求む。許されず。今の天子、始めて昇王に封ぜられしとき、公、選を以て府記室參軍と爲り、再び左正言直史館に遷さる。今の天子、皇太子たりしとき、戶部員外郎を以て太子の舍人に充てられ、㊎金紫を賜はり、知制誥・判集賢院たり。翰林學士に遷され、景靈宮の判官に充てられ、太子の左庶子・兼判太常寺・知禮儀院たり。

公既に道德文章を以て、東宮を㊏佐佑す。眞宗、諮訪する所有れば、多く方寸の小紙を以て、細書

【三】太常寺奉禮郎。朝廷の謁見會合及び祭祀等の禮を掌る官。
【四】恩を推す。特別の恩惠を得る也。
【五】憂に丁る。喪に居る也。
【六】其家に卽きて起復ざしむ。私宅に使者を遣はして喪服を免除して出勤せしむるなり。
【七】太淸宮。老子を祭れる宮殿。
【八】銀魚。銀魚袋。銀を以て製せる魚形の袋。禮服の帶に垂るる者。
【九】金紫。金印紫佐佑。輔佐。

して之を問ふ。是に由つて㊃機密に參與し、對ふる所有れば、必ず其㊄藁を以て進め、洩さざることを示す。其後、悉く眞宗閣中の遺書を閱し、公の進むる所の藁を得、㊅類して八十卷と爲し、之を禁中に藏す。人、之を見るもの莫きなり。

初め眞宗、㊆章獻明肅太后に遺詔して、權に軍國の事を聽かしむ。宰相丁謂樞密使曹利用、各〻、獨り見えて事を奏せんと欲す。敢て其議を決する者無し。公建言す、「羣臣事を太后に奏する者、簾を垂れて之を聽き、皆、見ゆるを得ると雖も、給事中・景靈宮の副使・判吏部流內銓に遷され、易を以て侍讀學士に拜せられ、禮部侍郎・知審官院に遷され、樞密副使と爲り、刑部侍郎に遷さる。上疏して、㊈張耆の樞密使と爲る可からざることを論ず。是に由つて太后の旨に忤ふ。笏を以て其僕を擊ち、誤りて其齒を折くに坐せられ、罷められて南京に留守たり。大いに學校を興し、以て諸生を敎ふ。五代より以來、天下の學廢る。興ること公より始まる。召して御史中丞に拜せられ、兵部侍郎・兼祕書監・㊉資政殿の學士・翰林侍讀學士に改められ、天聖八年の禮部の貢擧を知どり、明年、㊇三司使と爲り、復た樞密副使と爲る。未だ

【四〇】機密に參與す。朝廷の重要なる政務に關係す。
【四一】藁。草稿。
【四二】類。分類。
【四三】章獻明肅太后。眞宗の后、劉氏。
【四四】張耆。劉太后、徵なりし時、其家に寓せしもあり、之を德として樞密使となししなり。
【四五】資政殿。觀文殿に次ぎ、同じく殿閣學士の職なり。
【四六】三司使。鹽鐵、戶部、度支の長官。

拜せずして、參知政事に改められ、尙書左丞に遷さる。太后、太廟に謁せしとき、㊇衮冕を服せんとを請ふ者あり。太后、以て公に問ふ。公、㊆周官の后服を以て對ふ。

太后崩じ、大臣・政を執る者、皆罷められる。公を以て禮部尙書と爲し、亳州に知たらしむ。徙りて陳州に知たり、刑部尙書に遷る。復た召されて御史中丞と爲り、又、三司使と爲り、樞密院事に知たり、再び檢校太尉・同中書門下平章事を加へらる。慶曆三年三月、遂に刑部尙書を以て相位に居り、集賢殿の大學士・兼樞密使に充てらる。

公復た召し用ひられてより、而して趙元昊反し、師、陝西に出で、天下、兵に㊈弊す。公數〻利害を建て、㊉監軍を罷めんことを請ひ、兼ねて陳圖を以て諸將に授け、敵に應じて攻守を爲すことを得しめ、及び財用出入の要を制す。皆、法有り。天子悉く爲めに施行し、宮禁より先んじ、以て天下を率ゐる。而して財賦の職は、悉く有司に歸す。卒に能く謀を以て㊋元昊を臣とし、約束を聽かしむ。㊌乃ち其王號を還す。

公、人と爲り、㊍剛簡、人を遇するに必ず誠を以てす。富貴に處ると雖も、㊎寒士の如く、㊏罇酒

【四七】衮冕。天子の服裝。
【四八】周官の后服。周禮の周官の中に在る皇后の服制。
【四九】弊。疲弊。
【五〇】監軍云々。此時陝西の監軍として、朝廷の內侍宦官を用ひ、其弊害甚だ少からざりしかば、之を罷めんことを請ひしなり。
【五一】陳圖。軍陣の圖。
【五二】元昊。是より先、趙元昊に策命して夏國王と爲す。
【五三】剛簡。剛毅簡約。
【五四】寒士。貧困の人。
【五五】罇酒云々。樽酒を置きて對酌して歡ぶ。

相對して歡如たり。一善を得れば、之を稱すると、己より出づるが如し。當世の知名の士、范仲淹・
(五六)孔道輔等の如き、皆其門に出づ。相と爲るに及びて、益〻務めて賢材を進む。公の・相府に居る時
に當りて、范仲淹・韓琦・富弼、皆進用せられ、臺閣に一時の賢多きに至る。天子既に西兵を厭ひ、天下
の困弊を憫み、奮然として意有り。遂に羣材に因りて以て(五七)更始せんと欲
し、數〻大臣に詔して、天下の事を(五八)條せしめ、方に施行す。而るに小
人の(五九)權倖、皆、便とせず。明年の秋、會〻公、事を以て罷められ、而し
て仲淹等相次ぎて亦皆去り、事遂に止む。

公既に罷められ、工部尚書を以て、潁州に知たり、徙りて陳州に知たり、
又、許州に徙り、三たび戸部尚書に遷り、觀文殿の大學士に拜せられ、永
興軍に知たり、(六〇)一路都部署安撫使に充てられ、徙りて河南府に知たり、
西京の留守を兼ぬ。累に階を進めて、開府儀同三司・勳上柱國・爵臨淄公に
至る。食邑萬二千戸、(六一)實封三千七百戸。

公、享年六十有五。少きより篤學、其病亟かなるに至りて、猶ほ手に卷を釋てず。文集二百四十
卷あり。嘗て勅を奉じて上訓及び眞宗實錄を修す。又、古今の文章を集類して、集選二百卷と爲す。

【五五】孔道輔。字は原魯、孔子四十五世の孫、仁宗に事へ、御史中丞に至る。
【五七】更始。改革。
【五八】條。條陳。個條書きにして陳述する也
【五九】權倖。權力あり寵倖ぜらるる者。
【六〇】一路都部署安撫使。一路の兵民を治むる監督官。
【六一】實封。實際其の食む所の租稅の高。

公、政を爲すこと敏、而して務めて簡を以て其民に便にす。其の家に於けるや嚴にして、子弟の見
ゆる、時有り。(六二)寡姉に事へて孝順なり。未だ嘗て子弟の爲めに恩澤を求めず。其の陳州に在るや、
上、宰相に問うて曰く、「晏某、外に居り、未だ嘗て請ふ所あらず。其れ亦欲する所有らんか」と。宰
相、以て公に告ぐ。公自ら表を爲りて起居を問ふのみ。故に其薨ずるや、天子尤も之を哀悼し、(六三)賜
予、等を加へ、其子承裕を以て祭文院檢討と爲し、孫及び甥の未だ官せざる者九人、皆命ずるに官を
以てす。

公始め李氏を娶る。工部侍郎虛己の女なり。次は孟氏、屯田員外郎虛舟
の女なり、鉅鹿郡夫人に封ぜらる。次は王氏、太師尚書令超の女なり、榮
國夫人に封ぜらる。子八人あり。長を居厚と曰ひ、大
す。次は承裕、尚書屯田員外郎たり。宣禮は贊善大夫たり。崇讓は著作佐郎たり。明遠・祇德は皆大
理評事たり。幾道・傅正は皆太常寺太祝たり。女六人あり。長は戸部侍郎同中書門下平章事富弼に適き、
次は禮部侍郎三司使楊察に適く。其四は尚ほ幼なり。孫十有三人あり。

公既に善を樂しみ、而して稱ぜらるる者、公の(六四)薦達する所多
し。其女の從ふ所を擇ぶに至りて、又、二人の者を得ること、此の如し。賢と謂ふ可きなるのみ。銘

【六二】寡姉。寡婦となりし姉。
【六三】賜予。賜與。
【六四】薦達。推薦。

に曰く、

(六五)有姜の裔、齊に晏氏と爲る、齊・春秋に在り、晏・諸侯に顯れ、傳に(六六)桓子を載せ、(六七)嬰、(六八)邱に稱せらる。其後聞ゆる無く、亡びずして僅に存す。(六九)煒たる有るは公よりす、厥聲以て振ふ。公の聲を顯す、實に(七〇)天子に相たり。天子曰く「噫、予の考眞宗、唯だ名臣多し、以て盛隆に臻る。汝初め我に事ふる、王官東宮、以て予に相たるに暨ぶまで、(七一)始卒一躬、我を輔くるに德を以てし、邦に勞有り。」公疾みて外に在り、洛より來り歸る。凡そ今庭に在るもの、汝の舊に如くは莫し。孰か以て予に畀ふる、惟の予の(七二)聖考。今既に亡し。孰か我が(七三)老と爲る。何を以てか之に贈らん、司空侍中。禮は則ち加ふる有るも、予の思何ぞ窮まらん。」(七四)篆有り其文、其碑首に在り、天子の褒なり。史臣・詔有り、銘して以て之を述べ、永く其後に昭かにす。

資政殿學士・戶部侍郎・文正范公神道碑銘

【六五】有姜。姜は齊の姓。
【六六】桓子。名は弱、晏嬰の父。左傳の襄公十七年に見ゆ。
【六七】嬰。晏嬰、字は平仲、齊の相たり。
【六八】邱。丘、孔子を云ふ。論語の公冶長篇に曰く、晏平仲、善く人と交はる、久しうして人之を敬すと。
【六九】煒。明盛の貌。
【七〇】天子。仁宗。
【七一】始卒一躬。始終汝の一身を以て。
【七二】聖考。眞宗。
【七三】老。元老。
【七四】篆あり云々。舊學之碑の四字を賜はりたるを云ふ。

(一)皇祐四年五月甲子、資政殿の學士・尚書戶部侍郎・汝南の文正公、徐州に薨ず。其年十二月壬申を以て、河南の尹樊里の萬安山下に葬る。

公、諱は仲淹、字は希文。五代の際、世〻蘇州に家し、吳越に事ふ。太宗皇帝の時、吳越、其地を(二)獻ず。公の皇考、(三)錢俶に從ひて京師に朝す。後、武寧軍の掌書記と爲り て以て卒す。公生れて二歲にして孤なり。母夫人、貧しくして、(三)依る無く、再び長山の朱氏に適く。(公)既に長じて、其の(四)世家なることを知りて感泣す。去りて(五)南都に之き、學舍に入り、一室を掃ひ、晝夜講誦す。其起居飲食は、人の堪へざる所、而して公自ら刻し益〻苦しむ。居ること五年、大いに六經の旨に通ず。文章を爲るや、論說必ず仁義に本づく。(六)祥符八年、進士に擧げられ、禮部の選第一たり、(七)遂に乙科に中り、廣德軍の司理參軍と爲り、始めて歸りて其母を迎へて以て養ふ。公既に貴きに及び、天子、公の曾祖・蘇州の糧料判官・諱は夢齡に贈りて太保と爲し、祖・祕書監・諱は贊時を太傅と爲し、考・諱は墉を太師と爲し、妣・謝氏を吳國夫人と爲す。

公、少うして(八)大節あり、富貴貧賤・毀譽(九)歡戚に於て、一も其心を動かさず。而して慨然として天

【一】皇祐。仁宗の年號。
【二】錢俶。吳越王たりしが、其地を宋に獻す。
【三】依る無し。身を寄するに所無き也。
【四】世家。世〻祿秩ある家。
【五】南都。應天府。
【六】祥符。眞宗の年號。
【七】遂に乙科に中る。天子親ら試みらるる殿試の時に、乙科となりし也。
【八】大節。大いなる志節。
【九】歡戚。歡樂哀戚。

下に志有り、常に自ら稱して曰く、「士は當に天下の憂に先だちて憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむべきなり」と。其の上に事へ人を遇するは、一に以て自ら信じ、利害を擇び(一〇)趨舍を爲さず。其の爲す有る所は、必ず其の(一一)方を盡す。曰く、「之を爲すこと我よりする者は、當に是の如くなるべし。其の成ると否ざるとは、我に在らざる者有り。聖賢と雖も、必ずしも能はず。吾豈に苟くもせんや」と。

(一二)天聖中、(一三)晏丞相、公を文學に薦め、(公)大理寺の丞を以て祕閣校理と爲る。事を言ふを以て、章獻太后の旨に忤ひ、河中府に通判たり。之を久しうして、上、其の忠を記し、召して右司諫に拜す。太后の朝に臨み政を聽く時に當りて、(一四)至日を以て大いに前殿に會す。上、將に百官を率ゐて(一五)壽を爲さんとし、有司已に(一六)具す。公、上疏して言はく、「天子は北面すること無し。且つ、後世人主を弱くして以て母后を強くするの漸を開かん」と。其事遂に已む。又、上書して、政を天子に還されんことを請ふ。報せられず。

太后崩ずるに及びて、事を言ふ者、(一七)旨を希ひ、多く太后の時の事を求め、(一八)深く之を治めんことを請ふ。公獨り以謂らく、「太后、(一九)託を先帝に受け、聖躬を(二〇)保佑して、始終十年、未だ過失を見ず。宜しく其の(二一)小故を掩ひ以て大德を全うすべし」と。初め太后、遺命あり、(二二)楊太妃を立てて、代りて太后と爲さんとす。公諫めて曰く、「太后は母號なり。古より、代りて立つ者無し」と。是に由りて其の(二三)冊命を罷む。

是歲、大いに旱して蝗あり。使を奉じて東南を安撫す。使して還るや、會〻郭皇后廢せらる。(公)諫官御史を率ゐて、閤に伏して(二四)爭ふ。得ること能はず。貶せられて睦州に知たり、又、蘇州に徙さる。

歲餘にして、卽ち禮部員外郎・天章閣待制に拜して召還せられ、益〻時政の闕失を論ず。而して大臣權倖、多く之を(二五)忌惡す。居ること數月にして、公を以て開封府に知たらしむ。開封は、素、治め難しと號せらる。公の治、(二六)聲有り、事日に益〻(二七)脩なり。

暇あれば則ち益〻古今の治亂安危を取りて、上の爲めに開說す。又、(二八)百官の圖を爲りて以て獻ず。曰く、「人に任ずるに各〻其材を以てし、而して百職修まる。堯舜の治も此に過ぎざるなり」と。因つ

【一〇】趨舍。利に趨き害を避くるを云ふ。
【一一】方。方法。
【一二】天聖。仁宗の年號。
【一三】晏丞相。晏殊。
【一四】至日。冬至の日。
【一五】壽を爲す。祝辭を述ぶ。
【一六】具。準備の具はりし也。
【一七】旨を希ふ。天子の御氣に入らんと思ふ也。
【一八】深く之を治む。嚴しく之を調査する也。

【一九】託。遺託。
【二〇】保佑。やすんじ、たすく。
【二一】小故。細小なる過失。
【二二】楊太妃。先帝の妃にして太后と共に仁宗を保佑せし人。
【二三】冊命。立てて皇太后と爲すとの式文。
【二四】爭。諫爭。
【二五】忌惡。いみ、にくむ。
【二六】聲。名聲。
【二七】脩。簡約。
【二八】百官の圖。蓋し百官進級の次第を圖に作れる者なり。

て其の(二九)遷進の遲速の次序を指して曰く、「此の如くにして、以て公と爲す可く、以て私と爲す可し。亦、以て察せずんばある可からず」と。是に由つて(三〇)呂丞相怒り、上の前に(三一)交論するに至る。公、(三二)對辨を求む、語・(三三)切なり。坐して職を落され、饒州に知たり。明年、呂公も亦罷められる。

公、潤州に徙り、又、越州に徙る。而して趙元昊、河西に反するや、上復た召して呂公を相とし、乃ち公を以て陝西の經略安撫副使と爲し、龍圖閣の直學士に遷す。

是時(三四)新に大將を失ひ、延州危し。公、自ら鄜延を守りて賊を捍がんと請ふ。乃ち延州に知たり。元昊、人を遣はし、書を遺りて以て和を求む。公以謂らく、「事無くして和を請ふは、信じ難し、且つ書に(三五)僭號あり、以て聞す可からず」と。乃ち自ら書を爲り、告ぐるに(三六)逆順成敗の說を以てし、甚だ辨ず。擅に復書するに坐して、一官を奪はれ、耀州に知たり。未だ月を逾えずして、徙りて慶州に知たり。既にして(三七)四路に帥を置くや、公を以て環慶路の經略安撫招討使・兵馬都部署と爲し、諫議大夫・樞密直學士に累遷す。

【二九】遷進。轉任昇進。
【三〇】呂丞相。呂夷簡。
【三一】交論。こもごも論ずるなり。
【三二】對辨。之に對する辨駁。
【三三】切。激切。
【三四】新に大將を失ふ。趙元昊、延州に入寇せしとき、副總管劉平石元孫等戰死せり。
【三五】僭號。趙自ら稱して王と曰ひしを云ふ。
【三六】逆順成敗。歸順すれば事成り、叛逆すれば事敗るを云ふ。
【三七】四路。秦鳳、涇原、環慶、鄜延。

公、將と爲るや、務めて持重し、近功小利を急にせず。延州に於て、青澗城を築き、(三八)營田を(三九)墾し、承平・永平の廢寨を復す。(四〇)熟羌の業に歸する者、數萬戶、慶州に於て、大順に城き、以て要害に據り、賊の地を奪うて之を耕す。又、(四一)細腰・胡蘆に城く。是に於て、(四二)明珠・滅臧等の大族、皆、賊を去りて中國の用を爲す。(四三)邊制久しく隳れてより、兵と將と常に相識らざるに至る。公始めて延州の兵を分ちて六將と爲し、訓練齊整なり。諸路、皆、用ひて以て法と爲す。公の在る所は、賊敢て犯さず。人或は疑ふ、公の敵を見て變に應ずるは如何と爲すと。其の大順に城くに至りてや、一旦、兵を引きて出づ。諸將、向ふ所を知らず。軍、(四四)柔遠に至り、始めて號令して其地處を告げ、往いて城を築かしむ。(四五)版築の用に至るまで、大小異く具はる。而して軍中初めより知らず。賊、騎二萬を以て來り爭ふ。公、諸將を戒む、「戰つて賊走らば、追うて河を過ぐること勿れ」と。已にして賊果して走る。追ふ者渡らず。而して賊、計を失ひ、乃ち引き去る。是に於て、諸將、皆、公に服して、及ぶ可からずと爲す。

公の將吏を待するは、必ず、法を畏れて己を愛せしむ。得る所の(四六)賜賚は、皆、上の意を以て、

【三八】營田。屯田。
【三九】墾。開墾。
【四〇】熟羌。羌は夷種なり。羌の常に中國に接近往來して其風俗に慣れたる者。
【四一】細腰胡蘆。竝に地名。環州に在り。
【四二】明珠滅臧。羌の二族。
【四三】邊制。邊境の防備の兵制。
【四四】柔遠。地名。
【四五】版築。築城の具。
【四六】賜賚。上よりの賜物。

諸將に分賜し、自ら謝を爲さしむ。諸蕃の(四七)質子は、其出入を縱すも、一人の逃るる者無し。(四八)蕃酋來り見るや、之を(四九)臥內に召し、(五〇)人を屛け衞を撤し、與に語りて、疑はず。公居ること三歲、士・勇に(五一)邊・實し、恩信大いに洽し。乃ち策を決して、橫山を取り靈武を復せんことを謀る。而して元昊、數〻使を遣はし、臣と稱し和を請ふ。上も亦公を召して歸らしむ。初め西人、其(五二)鄕兵の者十數萬を(五三)籍し、既にして(五四)黥して以て軍と爲す。惟だ公の(五五)部する所は、但だ其手を(五六)刺すのみ。公去り兵罷みて、獨り、復た民と爲ることを得。其の(五七)兩路に於て、既に熟羌を得て用と爲し、以て邊を守らしむるや、因つて屯兵を徙して、食に內地に就かしめ、而して西人の(五八)饋輓の勞を紓くす。其の設施する所、(公)去りて而も人之を德とす。與に其法を守りて敢て變ぜざる者、今に至るまで尤も多し。

公の・呂公(事ノ)に坐して貶せられしより、羣士大夫、各〻二公の曲直を持す。呂公之を患へ、凡そ公を直とする者をば、皆指して黨と爲し、或は坐して(五九)竄逐せらる。呂公復た相たるに及びて、公も亦再び起つて用ひらる。是に於て二公驩然とし

【四七】質子。人質として送りたる子弟。
【四八】蕃酋。蕃族の酋長。
【四九】臥內。寢室。
【五〇】人を屛け衞を撤す。侍者衞兵を退け去る。
【五一】邊實す。邊境の防備完備す。
【五二】鄕兵。土兵。
【五三】籍。軍籍に記入す。
【五四】黥。いれ墨。
【五五】部。部署。
【五六】刺。入れ墨する也。
【五七】兩路。奉鳳及び環慶。
【五八】饋輓の勞を紓くす。兵糧運送の勞苦を少くす。
【五九】竄逐。流竄逐斥。

て相約し、力を戮せて賊を平らぐ。天下の士、皆、此を以て二公を多とす。然れども朋黨の論遂に起りて、止むること能はず。上既に公を賢とし、大いに用ふ可しとす。故に卒に羣議を置きて之を用ふ。

慶曆三年の春、召して樞密副使と爲す。五たび讓れども許されず、乃ち道に就く。既に至りて數月、以て參知政事と爲す。進見する每に、必ず太平を以て之を責む。公歎じて曰く、「上の我を用ふる者至れり。然れども事に先後あり。而して(六〇)弊を久安に革むるは、(六一)朝夕にして可なるに非ざるなり」と。既にして上再び手詔を賜ひ、趣して天下の事を(六二)條せしむ。又、天章閣を開き、召見して坐を賜ひ、授くるに紙筆を以てし、(六三)前に疏せしむ。公、惶恐して席を避け、始めて退きて、時の宜しく先にすべき所の者十數事を(六四)條列して之を上る。其の天下に詔して學を興し、士を取るには、德行を先にして、文辭を專らにせず、(六五)磨勘の例遷を革めて以て能否を別ち、(六六)任子の數を減じて濫官を除き、農桑を用つて守宰を(六七)考課する等の事は、方に施行す。而して磨勘・任子の法は、僥倖(ヲ喜ア)の人、皆、

【六〇】弊を久安に革む。久しく慣れ安んじたる弊害を改革する也。
【六一】朝夕。一朝一夕。
【六二】條。條陳。
【六三】前に疏せしむ。上の前に於て直に意見を上書せしむる也。
【六四】條列。箇條書にして書き列ぬる也。
【六五】磨勘の例遷。官吏進級の事を調査する役所を磨勘院と曰ふ。文官は三年にして一たび還り、武官は五年にして一たび還るの例。
【六六】任子。父が官に在りて其子を官に擧ぐるを云ふ。任は保證の義。
【六七】考課。官吏の職務勤惰の優劣を考ふる也。

便とせず、因つて相與に(六八)聲を騰ぐ。而して公を嫉む者も亦、外に(六九)言有るを幸として、喜びて之が爲めに佐佑す。會〻(七)邊奏、警あり、公卽ち行かんと請ふ。乃ち公を以て河東陝西の宣撫使と爲す。至れば則ち上書して、復た邊を守らんことを願ふ。卽ち資政殿の學士に拜せられ、邠州に知たり、陝西四路の安撫使を兼ねしむ。

其の政事を知ること纔に一歲にして罷むるや、有司悉く、公が前に施行する所を罷めて、其故に復せんと奏す。言ふ者遂に(七一)危事を以て之に中つ。上、其忠を察するに賴りて、聽かず。

是時、夏人已に臣と稱す。公因つて疾を以て鄧州を請ひ、鄧を守ること三歲、杭州に知たらんことを求め、又、靑州に徙さる。公益〻病む。又、潁州に知たらんことを求め、(七二)肩舁して徐に至り、遂に起たず。享年六十有四。公の病むに方りて、上、藥を賜ひて存問す。旣に薨じて、朝を輟むること一日。其遺表、請ふ所無きを以て、就きて其家に欲する所を問はしめ、贈るに兵部尙書を以てし、之を哀恤する所以甚だ厚し。

公、人と爲り、外和にして內剛に、善を樂しみて汎く愛す。其母を喪ふ時尙は貧し。身を終ふるまで、賓客に非ざれば、食、肉を重ねず。財に臨みては、施すことを好み、(七三)意豁如たり。退きて其(七四)私を見るに及びては、妻子僅に衣食を給す。其の政を爲すや、至る所の民多く祠を立て像を畫く。其の己を行ひ事に臨むや、山林の處士・里閭田野の人より、外は夷狄に至るまで、(七五)其名字を知らざるは莫く、而して其事を道ふを樂しむ者甚だ衆し。

其(七六)世次官爵墓に誌し、家に(七七)譜し、有司に藏する者に及びては、皆、論せず、其の天下家國の大に繫る者を著はす。亦公の志ならんか。銘に曰く、

范の・吳越に於ける、世〻實に(七八)陪臣たり。(七九)俶云々。錢俶、國土山川及び、范始めて北に來り、中閒幾んど(八〇)息む。公奮うて躬より、時と偕に逢ふ。事に(八一)罪功あり、言に(八二)違從あり。豈に公必ず能くせんや。天子・公を用ふ。其艱其勞、其初終を一にす。(八三)夏童・邊に跳り、吏の(八四)怠安に乘ず。帝・公に命じて往き、彼の驕頑(罪ノ)を問はしむ。聽順せざる有れば、其(八五)穴根を鋤せよと。公居ること三年、怯は勇に(八六)隳は完し。(八七)兒

【六八】聲を騰ぐ。不平を唱ふる也。
【六九】言。非難の言を云ふ。
【七〇】邊奏警あり。慶曆四年、契丹、夏を伐つを云ふ。
【七一】危事を以て之に中つ。不正の事を以て公を誣ひて之を陷れんとするを云ふ。
【七二】肩舁。輿に乘る也。

【七三】意豁如たり。心打開けて毫も惜む所無きを云ふ。
【七四】私。內政の情態。
【七五】其名字。范文正公の名字。
【七六】世次。家系。
【七七】譜。家譜に記錄する也。
【七八】陪臣。范氏は吳越王に仕ふ。故に宋に對しては陪臣たる也。
【七九】俶云々。錢俶、國土山川と人民とを宋の朝廷に獻上せしを云ふ。
【八〇】息。衰へて顯はれざるを云ふ。
【八一】罪功。罪とせられたると、功とせられたると。
【八二】違從。反對せられたると贊成せられたると。
【八三】夏童。趙元昊を指す。
【八四】怠安。怠惰安逸。

憐獸擾して、卒に來り臣たらしむ。夏人庭に在り、(八)其事を方に議す。(八)帝公を趣して來らしむ、以て予が治を就せと。公拜稽首す。茲れ惟れ艱きかな。初めは其難きに非ず、(難キ)其の之を終ふるに在りと。(九)羣言營營たり、卒に成るを壞る。其成るを惡むに匪ず、惟だ公を是れ傾けんとす。傾かず危からざるは、天子の明なり。存しては顯榮あり、歿しては贈諡あり。(書シ)其子孫に藏し、(一〇)寵を後世に及ぶ。惟れ百の有位(人ノ)、勸めて怠る無かる可し。

【八五】穴根を鋤す。根據地を一掃す。
【八六】寇。壞類したる城塞。
【八七】兒憐獸擾。小兒の如く憐み、獸類の如く馴らす。
【八八】其事。降服の事。
【八九】帝公を云々。帝は公を促がして都に還らしめ、余が內地の政を成就せしめよと仰せらる。
【九〇】羣言營營。群小人の非難、頻繁なり。
【九一】寵。寵遇。

卷の十三

歐陽修 永叔著

徂徠石先生墓誌銘

徂徠先生、姓は石氏、名は介、字は守道、兗州奉符の人なり。徂徠は魯の東山にして、而して先生は隱者に非ざるなり。其の仕へて嘗て朝に位するや、魯の人、其官を稱せずして、其德を稱す。以爲らく、(一)徂徠は魯の望にして、先生は魯人の尊ぶ所なりと。故に其の居る所の山に因りて、以て其(二)有德の稱に配して、徂徠先生と曰ふは、魯人の志なり。

先生は貌厚くして氣完く、學篤くして志大なり。(三)畎畝に在りと雖も、天下の憂を忘れず。以爲らく、「時は爲す可からざるは無く、之を爲せば至らざるは無し。其位に在らざれば則ち其言を行ふ。吾が言用ひられて、(四)功利、天下に施さば、必ず

【一】徂徠は魯の望。徂徠山は魯人の每に望祭する所。望は望祭なり、遙かに山川を祭るなり。
【二】有德の稱。先生の二字なり。
【三】畎畝。田舍。
【四】功利。功德利益。

しも己より出さじ。吾が言用ひられずんば、禍咎を獲と雖も、死に至りて而も悔いじ」と。其の事に遇ひ憤を發し、文章を作爲するや、古今の治亂成敗を極陳して、以て當世の賢愚善惡を(三)指切し、是を是とし非を非とし、諱忌する所無し。世俗頗る其言に駭く。是に繇りて謗議喧然たり。而して小人尤も之を嫉惡し、相與に力を出して、必ず之を死に擠さんとす。先生安然として惑はず變せずして曰く、「吾が道は固より是の如し。吾が勇は(六)孟軻に過ぐ」と。不幸にして疾に遇うて以て卒す。既に卒して、而も(七)姦人、奇禍を以て大臣を中傷せんと欲する者あり。猶ほ先生を指して以て事を起し、其の詐り死して北(八)契丹に走るを謂ひ、棺を發きて以て驗せんと請ふ。天子仁聖、其(九)誕を察するに賴りて、棺を發かずして其妻子を保全することを得たり。

先生は世〻農家たり。父諱は丙、始めて仕進を以て、官、太常博士に至る。先生、年二十二、進士甲科に擧げられ、鄆州の觀察推官南京の留守推官と爲る。御史臺、主簿に辟す。未だ至らず。上書して赦を論ずるを以て、罷めて召されず。(一〇)秩滿ちて、某軍の節度掌書記に遷り、其父に代りて蜀に官し、嘉州の軍事判官と爲る。(一一)內外の艱に丁りて官を去り、垢面跣足、躬ら徂徠の下に耕し、其五

【五】指切。指摘して切論する也。
【六】孟軻。孟子。
【七】姦人云々。姦人とは夏竦を指す。大臣とは富弼を指す。
【八】契丹。東胡、後の遼。
【九】誕。妄誕。
【一〇】秩滿つ。任期滿つる也。
【一一】內外の艱。父母の喪。內艱は母の喪。外艱は父の喪。

世の未だ葬らざる者を葬ること七十喪。服除きて、召されて(一二)國子監直講に入る。

是時、兵、元昊を討ちて、久しく功無く、海內重困す。天子奮然として、威德を振起せんと思欲し、而して(一三)二三の大臣を進退し、諫官御史を增置し、治を求むる所以の意甚だ鋭し。先生躍然として喜びて曰く、「此れ盛事也。雅頌は吾が職なり、其れ已む可けんや」と。乃ち慶歷聖德の詩を作りて、以て(一四)大臣を褒貶し、邪正を分別し、數百言を累ぬ。詩出づるや、太山の(一五)孫明復曰く、「子が禍此に始まらん」と。明復は先生の師友なり。其後、謂はゆる(一六)奸人奇禍を作すものは、乃ち詩の斥くる所なり。

先生、徂徠に閒居してより、後、南京に官す。嘗て經術を以て教授す。太學に在るに及びて、益〻師道を以て自ら居る。門人弟子之に從ふ者甚だ衆し。太學の興るは先生より始まる。

其の爲る所の文章は、某集と曰ふ者若干卷、其の佛老時文を斥くるは、則ち怪說中國論有り。曰く、「此三つの者を去りて、然る後に、以て爲す有る可し」と。其の姦臣宦女を戒むるは、則ち

【一二】國子監直講。大學の教授。
【一三】二三の大臣を進退す。呂夷簡・夏竦を罷め、杜・韓・范・富等を用ひたるを云ふ。
【一四】大臣を褒貶す。詩に云はく、衆賢之進、如二茅斯拔一、大姦之去、如二距斯脫一云々と。衆賢とは、杜衍・范仲淹・富弼等を指し、大姦とは夏竦を謂ふ。
【一五】孫明復。孫復。字は明復、太山に住するを以て太山先生と云ふ。
【一六】奸人奇禍を爲す。夏竦、石介を恨むること甚だしく、又富弼等を傾けんと欲し、介の僞書を作りて廢立の意志ありと誣ひ、飛語を放ちて聖聽に入るるに至りしを云ふ。

唐鑑あり。曰く、「吾、一世の監と爲すに非ざるなり」と。其餘、喜怒哀樂、必ず文に見はる。其辭、博辨雄偉にして、〔一七〕〔一八〕憂思深遠なり。

其の言を爲すや曰く、「學とは仁義を爲すを學ぶなり。惟だ忠にして能く其身を忘れ、惟だ自ら信ずるに篤き者、乃ち、以て力行す可きなり」と。是を以て己に行ひ、亦、是を以て人に教ふ。謂はゆる堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・孟軻・揚雄・韓愈氏は、未だ嘗て一日も口に誦せずんばあらず。天下の士と皆周孔の徒と爲り、以て其君を致して堯舜の君と爲し、民を堯舜の民と爲さんことを思ふ、亦、未だ嘗て一日少くも心に忘れず。

其の世に違ひ衆を驚かし、人或は之を笑ふに至りては、則ち曰く、「吾は狂癡の者に非ざるなり」と。是を以て、君子は、其行を察して其言を信じ、其の心を用ふるを推して其志を哀しむ。

先生、直講たること歳餘、〔一九〕杜祁公、之を天子に薦め、太子の中允に拜せらる。今の丞相〔二〇〕韓公、又之を薦め、乃ち集賢院に直す。又歳餘、始めて太學を去り、濮州に通判たり。〔二一〕方に徂徠に〔二二〕待次し、慶曆五年七月某日を以て家に卒す。享年四十有一。友人廬陵の歐陽修、之を哭するに詩を以て

【一七】博辨。事博くして筋道立つ。
【一八】憂思。世道人心を憂ふる念。
【一九】杜祁公。杜衍。
【二〇】韓公。韓琦。
【二一】待次。遷任の命を待つなり。

し、以謂らく、彼の謗焰熄むを待ちて、然る後先生の道明かならんと。

先生既に歿し、妻子凍餒自ら勝へず。今の丞相韓公と、河陽の〔二三〕富公と、俸田を分ちて以て之を活す。後二十一年、其家始めて克く先生を某所に葬る。將に葬らんとするや、其子師訥、其門人姜潛・杜默・徐遁等と、來り告げて曰く、「謗焰熄めり。以て先生の光を發す可し。敢て銘を請ふ。」某曰く、「吾が詩に云はずや、子が道自ら能く久しと。何ぞ吾が銘を必とせん。」遁等曰く、「然りと雖も、魯人の欲するなり」と。乃ち之が銘を爲りて曰く、

徂徠の〔二四〕巖巖たる、子の德とは、魯人の瞻る所なり。汝水の〔二五〕湯湯たると、子の道とは、逾〻遠くして彌〻長し。道の行はれ難き、孔孟も亦云に〔二六〕遑遑たり。〔二七〕一世の屯、萬世の光。曰く、「吾命有らざらんや、安んぞ夫の〔二八〕桓魋と〔二九〕臧倉とに在らん。」古より聖賢皆然り。噫子毀らると雖も其れ何ぞ傷まん。

尹師魯の墓誌銘

【二三】富公。富弼。
【二四】巖巖。山の高峻なる貌。
【二五】湯湯。水の流るる貌。
【二六】遑遑。一所に安んぜざるなり。
【二七】一世云々。屯は難なり。障害多くして進み難き也。この艱難は僅に一代の艱難にして、反つて萬世の後までも光を輝かす所以なりとの意。
【二八】桓魋。司馬桓魋、孔子を宋に殺さんとせしことあり。
【二九】臧倉。魯の平公の嬖臣、平公を沮みて孟子と會見せしめざりしことあり。

師魯は河南の人、姓は尹氏、諱は洙。然れども天下の士、識ると識らざると、皆、(一)之を稱して師魯と曰ふ。蓋し其名、當世に重きなり。而して世の師魯を知る者は、或は其文學を推し、或は其議論を高しとし、或は其材能を多しとす。其忠義の節・窮達に處し・禍福に臨み・古の君子に愧づること無きに至りては、則ち天下の師魯を稱する者、未だ必ずしも盡く之を知らず。

師魯の文章を爲るや、簡にして法あり。博學(二)強記にして、古今に通知し、春秋に長ず。其の人と言ふや、是を是とし非を非とし、務めて道理を窮盡して乃ち已む。苟くも止めて妄に隨ふことを爲さず、而して人も亦、能く過ぐること罕なり。事に遇ふや難易無く、而して敢爲に勇む。其の世に稱せらるる所以の者は、亦、嫉を人に取る所以なり。故に其れ卒に窮して以て死せり。

師魯は少くして進士に擧げられて及第し、(三)書判拔萃に擧げられ、山南東道の掌書記に遷され、伊陽縣に知たり。王文康公、其才を薦め、召し試みられて館閣校勘に充てられ、太子の中允に遷さる。天章閣の待制・(四)范公、饒州に貶せらるるとき、諫官御史、肯て言はず。師魯上書して言はく、「仲淹は臣が師友なり。願はくは俱に貶せらるることを得ん」と。貶せられて郢州の酒稅を監す。又、唐州に徙さる。父の喪に遭ひ、服除きて、復た太子の中允を得、河南縣に知たり。趙元昊・反し、陝西、兵を用ふるや、大將葛懷敏奏して、起して經略判官と爲す。師魯、懷敏の辟に用ひらるると雖も、而れども尤も經略使(五)韓公の深く知る所と爲る。其後、諸將、好水に敗れ、韓公は降りて秦州に知たり、師魯も亦徙されて濠州に通判たり。之を久しうして韓公奏して、秦州に通判たることを得たり。遷りて涇州に知たり。又、渭州に知たり。涇原路の經略部署を兼ね。水洛に城き、(六)邊將と議を異にするに坐して、徙されて晉州に知たり、又、潞州に知たり。政を爲すに惠愛あり。潞州の人、今に至るまで之を思ふ。累遷して官、起居舍人・直龍圖閣に至る。

師魯は、天下無事の時に當りて、獨り喜んで兵を論じ、敍燕・息戍の二篇を爲り、世に行はる。(七)西兵起りてより、凡そ五六歲、未だ嘗て其閒に在らずんばあらず。故に其論議益〻精密に、而して西事に於て、尤も其詳を習ふ。其の兵制の說を爲るや、戰守勝敗の要を述べ、當今の利害を盡す。又、土兵を訓へて(八)戍卒に代へ・以て(九)邊用を減じ・鄕兵を戍長久の策を爲さんと欲す。皆、未だ施爲するに及ばずして、元昊は臣たり。西兵は(一〇)嚴を解き、師魯も亦去りて罪を得たり。然らば則ち天下の・師魯を稱する者の、其材能に於ける、亦未だ必ずしも盡

【一】之を稱して云々。字を言ひて名を言はざるは之を尊敬する所以なり。
【二】強記。記憶力強き也。
【三】書判拔萃。選擧の科目の名。書は寫字なり、判は判決なり、拔萃は衆の中より優等者を拔き取るの義。
【四】范公。范仲淹。

【五】韓公。韓琦。
【六】邊將。劉滬。
【七】西兵。趙元昊。
【八】戍卒。派遣の守備兵。
【九】邊用。邊境の費用。
【一〇】嚴を解く。警戒を解除す。

く之を知らざるなり。

初め師魯の渭州に在るや、將吏に、其節度に違ふ者あり。(一)軍法を按じて之を斬らんと欲して、而も果さず。其後、吏、京師に至り、上書して、「師魯、(二)公使錢を以て部將に貸す」と訟ふ。崇信軍の節度副使に貶せられ、徙されて均州の酒稅を監す。疾を得て醫藥無し。舁して南陽に至りて醫を求む。(三)疾革る、凡に憑りて坐す、稚子の前に在るを顧みるも、甚だ憐むの色無く、(四)賓客と言ふに、終に(五)其私に及ばず。享年四十有六にして以て卒す。

師魯は張氏を娶る、某の縣君なり。兄源字は子漸といふもの有り、亦、文學を以て名を知らる。前一歲卒す。師魯は凡そ十年の閒に三たび官を貶せられ、其父を喪ひ、又其兄を喪ふ。子四人あり、連に其三を喪ふ。女一、人に適く、亦卒す。而して其身は終に貶を以て死す。一子は三歲、四女は未だ嫁せず、家に(六)餘貲無く、其喪に南陽に客たり、歸ること能はず。平生の(七)故人、(八)遠邇と無く、皆、往いて之に(九)賻す。然る後、妻子、其柩を以て河南に歸ることを得、某年某月某日を以て、(一〇)先塋の次に葬る。余、師魯兄弟と交はり、嘗て其父の墓に銘せり、故に、復た其(一一)世家を次でず。

【一】軍法を按ず。軍法を調べて之に引き當つる也。
【二】公使錢。公用の金錢。
【三】疾革る。病氣危篤となる。
【四】賓客。范仲淹なり。
【五】其私に及ばず。家事一身上の事に言ひ及ばず。
【六】餘貲。餘財。
【七】故人。故舊。
【八】遠邇。遠近。
【九】賻。葬費を助くる也。
【一〇】先塋。先祖の墓地。
【一一】世家。家系。

銘に曰く、

(一三)藏の深き、固の密なる、石は朽つ可きも、銘は滅せじ。

張子野の墓誌銘

吾が友張子野、既に亡するの二年、其弟奇充、書を以て來り請うて曰く、「吾が兄の喪、將に今年三月某日を以て開封に葬らんとす。以て銘せずんばある可からず。之に銘するは子の宜しきに如くは莫し」と。嗚呼、予、銘することを能はずと雖も、然れども天下の善を道ひて以て傳ふることを樂しむ。況んや吾が子野の若き者は、獨其善の銘す可きのみに非ず、又、平生の(一)舊朋友の恩と。其の哀しむ可き者と有り、皆、宜しく予が文に見はすべきをや。宜なり其の來りて予に請ふや。

初め(二)天聖九年、予、西京の留守推官と爲る。是時、陳郡の謝希深、南陽の張堯夫、吾が子野と、尚ほ皆恙無し。時に、一府の士、皆魁傑賢豪にして、日に相往來し、酒を飲みて懽呼し、(三)上下角逐し、爭うて相先後し、以て笑樂を爲す。而して堯夫・子野は、其閒に(四)退然として、聲氣を動かさず。

【一】藏云々。墓誌を石に刻して地中に藏むること深く、地中に埋むること固し。
【二】舊。故舊。
【三】天聖。仁宗の年號。
【三】上下角逐し云々。負けず劣らず歡樂したるを云ふ。角逐は競爭なり。
【四】退然。柔和なる貌。

衆皆指して㈤長者と爲す。予は時に尙ほ少く、心壯に志得たり、以爲らく、洛陽は東西の㈥衝にして、賢豪の聚まる所の者多し、適に然りと爲すのみと。其後、洛を去りて京師に來り、南、夷陵に走り、江漢に竝ひ、其行くこと萬三四千里、㈦山阻水厓、窮居して獨り遊び、曩の人に從はんことを思へども、㈧邈として得可からず。然して洛人と雖も、今に至りて皆以謂らく、嚮時の盛んなるに如くは莫しと。然る後、世の賢豪は常に聚まらずして・交遊の得難きことは惜む可きものたるを知るなり。

初め洛に在る時、已に堯夫を哭して之に銘す。其後六年、又、希深を哭して之に銘す。今、又、吾が子野を哭して銘するの難きのみに非ずして・善人君子は、幸にして久しく世に在らしめんと欲するも・亦得可からざることを知る。嗚呼、哀しむ可きなるのみ。

子野の㈨世は、曰く、贈太子太師・諱は某、曾祖なり。宣徽北院使・樞密副使・累贈尙書令・諱は遜、皇祖なり。尙書比部郎中・諱は敏中、皇考なり。曾祖妣は李氏、隴西郡夫人たり。祖妣は宋氏、昭化郡夫人、孝章皇后の妹なり。妣は李氏、永安縣太君たり。

子野の家は、㈩后姻に聯なり、世〻久しく貴仕す。而れども被服㈪操履、㈫寒儒よりも甚だしく、學を好み自ら力め、㈬筆札を善くす。天聖二年、進士に擧げられ、漢陽軍の司理參軍・開封府の咸平の主簿・河南の法曹參軍を歷たり。王文康公・錢思公・謝希深と、今の參知政事㈭宋公と、咸其能を薦め、著作佐郎に改められ、鄭州の酒稅を監し、閬州閬中縣に知たり。就きて祕書丞に拜せらる。秩滿ちて亳州の鹿邑縣に知たり。㈮寶元二年二月丁未、疾を以て官に卒す。享年四十有八。

【五】長者。長老の義。
【六】衝。交通の要路。
【七】山阻。阻は土山の石を藏くものの。
【八】邈。遙なる貌。
【九】世。家柄。
【一〇】后姻に聯なる。祖母宋氏が孝章皇后の妹なるを云ふ。
【一一】操履。操行。
【一二】寒儒。貧儒。

子伸は、郊社掌生たり。次は從、次は幼にして未だ名あらず。女五人。一は人に適く。妻は劉氏、長安縣君たり。

子野の人と爲り、外は㈫愉怡すと雖も、中は自ら刻苦す。人を遇するとき、㈬渾渾として・㈭圭角を見はさず。而して㈯志守は端直にして、事に臨みて果決なり。平居酒半にして、冠を脫し頭を垂る。㈰童然として禿げて且つ白し。予固より已に、其の早く衰ふるを悲む。而して遂に此に止まる。豈に其中に亦㈱自得せざる者有るか。

子野、諱は先、其㈲上世は博州高堂の人、曾祖より已來、京師に家す。而して開封に葬るは、今は開封の人たればなり。銘に曰く、

【三】筆札。書簡。
【四】宋公。宋庠。
【五】寶元。仁宗の年號。
【六】愉怡。和樂なり。
【七】渾渾。圓滿なる貌。
【八】圭角。圭は稜ある瑞玉。角は、かど。
【九】志守。操守。
【一〇】童然。頭髮少き貌。
【一一】自得せず。心に滿足せざるなり。
【一二】上世。祖先。

嗟夫子野、質厚く材良し。孰か其の(三)亨を屯し、孰か其の(三)長を短くする。豈に其中・自得せざるあり て、外物の以て戕ふあるか。開封の原、(三)新里の鄉、此に三世なり、其れ其の(三六)藏に歸せよ。

湖州の長史蘇君の墓誌銘

故の湖州の長史・蘇君、賢妻杜氏あり、君の喪せしより、布衣蔬食、居ること數歲、君の孤子を提げ、其平生の文章を斂めて南京に走り、(一)其父に號泣して曰く、「吾が夫は生に屈せり、猶ほ死に伸ぶ可し」と。其父・太子太師、以て予に告ぐ。予爲めに其文を(二)集次して之に序し、以て君の大節と、其の屈伸得失する所以とを著はし、以て深く、世の君子・當に國家の爲めに賢材を育ふことを樂しむべき者を謀め、且つ君の不幸を悲む。

其妻、卜して(三)嘉祐元年十月某日を以て、君を潤州丹徒縣の義里鄉・檀山里の石門村に葬らんとし、又、其父に號泣して曰く、「吾が夫、(四)人閒に屈せり、猶ほ地下に伸ぶ可し」と。是に於て杜公及び君の子泌、皆、書を以て來りて銘を乞うて以て葬らんとす。

君、諱は舜欽、字は子美。其上世は蜀に居る。後、開封に徙りて、開封の人と爲る。君の祖・諱は易

【三】亨を屯す。榮達すべきを障害する也。
【一四】長を短くす。長かるべき壽命を短くする也。
【一五】新里。地名。
【一六】藏。墓所。
【一】其父。杜衍。
【二】集次。編輯。蘇氏文集なり。其序は第十一卷に在り。
【三】嘉祐。仁宗の年號。
【四】人閒。人世。

簡より、文章を以て名あり、太宗の時、翰林に(五)承旨として、學士と爲り、政事に(六)參知し、官、禮部侍郎に至る。父・諱は耆、官、工部尚書・直集賢院に至る。

君少うして、(七)父蔭を以て太廟齋郎に補せられ、(君)之に好む所に非ざるなり。已にして(八)其廳を鎖して去る。進士に擧げられて第に中り、光祿寺の主簿に改められ、蒙城縣に知たり。大理評事・監在京樓店務に遷さる。服除きて長垣縣に知たり。

君、狀貌奇偉、慷慨にして大志有り。少うして古を好み、工に文章を爲る。至る所、皆、善政あり。京師に官す。位、卑しと雖も、數〻上疏して、朝廷の大事を論じ、敢て、人の言ひ難き所を道ふ。范文正公、君を薦む。召し試みられて集賢校理を得。元昊反してより、兵を出せども功無し。而して天下、(一〇)父安に殆く、尤も兵事に困しむ。(一一)天子奮然として(一二)三四の大臣を用ひ、盡く衆弊を革めて以て民を(一三)紓くせんと欲す。是時に於て、范文正公と、今の富丞相と、設施する所多し。而して小人、便とせず、人主の方に信用するを願み、以て(一四)撼動すること有らんことを思へども、未

【五】承旨。翰林院中の年齡道德俱に高き者の稱。
【六】參知。參與。
【七】父蔭。蔭補。父の功績によりて子孫の官に補せらるる也。
【八】其廳を鎖す。官職を辭するを云ふ。
【九】憂。喪。
【一〇】父安に殆し。殆んど太平の續きたる樣なりしを云ふ。
【一一】天子。仁宗。
【一二】三四の大臣。范仲淹、杜衍、韓琦、富弼等を云ふ。
【一三】紓くす。樂にする。緩和する。
【一四】撼動。地位を動搖さするなり。

だ其(一五)根を得ず。君は文正公の薦むる所にして・宰相杜公の壻なるを以て、乃ち事を以て君に中つ。(一六)進奏院を監して・(一七)神を祠る奏用の・故紙を市りし錢をもて・客を會するに坐し、(一八)自盜と爲して(一九)名を除かる。君の(二〇)名は天下に重く、會する所の客は皆一時の賢俊なり。悉く坐して貶逐せらる。然る後、君に中つる者喜びて曰く、「吾一擧に網して之を盡せり」と。其後、三四の大臣悉く罷め去り、天下の事、卒に復た施爲せず。

君、妻子を携へて蘇州に居り、木石を買ひて滄浪亭を作り、日に益〻書を讀み、大いに六經に(二一)涵肆し、而して時に其の(二二)憤懣を歌詩に發し、其の激する所に至りては、往往(二三)驚絶せしむ。又、行草の書を喜む、皆、愛す可し。故に、其の(二四)短章醉墨と雖も、筆を落せば、爭うて・人の傳ふる所と爲る。天下の士、其名を聞きて慕ひ、其の傳ふる所を見て喜び、往いて其貌を揖して(二五)竦し、其論を聽きて驚き以て服す。(二六)久しく之と居りて、舍てて以て去ること能はざるなり。

【一五】根。根據。讒誣の根據とすべき口實。
【一六】進奏院。詔勅及び宣劄符牒を受くることを掌る。
【一七】神を祠る奏用云々。蓋し故紙を市りたる錢を以て祠神の奏用に供する也。奏用は進御なり。故紙は反古紙なり。
【一八】自盜。監守盜。
【一九】名を除かる。官籍を削除する也。
【二〇】名。名聲。
【二一】涵肆。十分に、ひたり込む。
【二二】憤懣。不平。
【二三】驚絶。大に人を驚かす也。
【二四】短章醉墨。短き章句、醉餘の揮毫。
【二五】竦。氣おおする也。
【二六】久しく之と居りて云々。久しく子美と共に居るときは見捨てて去り兼ぬる也。

居ること數年、復た湖州の長史を得たり。(二七)慶歷八年十二月某日、疾を以て蘇州に卒す。享年四十有一。君、先に鄭氏を娶り、後に杜氏を娶る。三子あり。長を泌と曰ふ、將作監の主簿たり。次を液と曰ひ、激と曰ふ。女二あり。長は前進士趙紘に適き、次は尙は幼なり。

初め君、罪を得る時、奏用錢を以て盜と爲らる。敢て其冤を辨ずる者無し。君卒してより後、天子感悟し、凡そ逐はるる所の臣、復た召し用ひられ、皆、朝に顯列す。而るに今に至るまで、復た君の爲めに言ふ者無し。宜なり其の地下に伸びんことを求めんと欲するや。宜なり予が其の罪を得て以て死するの詳を述べて・後世をして其の以有ることを知らしめんとするや。既に又(二八)長言して以て之が辭を爲る。庶幾はくは竝せて予が君を哀しむ所以の者を寫さん。其辭に曰く、

(二九)謂ひて力無しと爲さんか、孰れか擊つて之を去れる。謂ひて力有りと爲さんか、胡ぞ子の歸に反れども、一たび非毀するときは一生押しころばさるる也。天道は荒漠として、誰にか之を問はん。杳杳として遂に知ること能はず。ああ、君の心中には材能を包めども、之を施すに由なく、只文章のみ外に光を發し、日の如く、星の如く輝けり。冥冥として不遇の恨を含めども、其文章は昭昭として永く後世に傳はるべし。

【二七】慶歷。仁宗の年號。
【二八】長言。永言なり。歌ふ也。
【二九】謂ひて云々。若し天を目して力無しと謂はんか。君に打擊を加へて朝廷を去らしめたる者は天に非ずや。若し天を力有りと謂はんか。何ぞ君の歸るべき所に君を反さざりしぞ。豈に陷ることを能くせざるの理あらんや。凡そ善は百たび譽むるとも進まぬ者な

さざる。豈に彼れをば能くして此れをば爲さざらん。善は百譽すれども進まず、一毀は終世顚擠する所。荒として孰れにか問はん。杳として知り難し。嗟子の中は、韜める有れども施す無し。文章發耀して、星日光輝あり。冥冥として以て恨を掩ふと雖も、宜しく昭昭として其れ永く垂るべし。

故覇州文安縣の主簿蘇君の墓誌銘

有蜀の君子を蘇君と曰ふ。諱は洵、字は明允、眉州眉山の人なり。君の行義、家に修まり、鄉里に信せられ、蜀の人に聞ゆること久し。(一)至和嘉祐の閒に當りて、其の子軾・轍と偕に京師に至る。翰林學士歐陽修、其の著はす所の書二十二篇を得て、諸を朝に獻ず。書既に出でて、公卿士大夫爭うて之を傳ふ。其の子、進士に擧げられ、皆。(二)高等に在り、亦、文章を以て時に稱せらる。眉山は、西南數千里の外に在り。(三)一日、父子、(四)隱然として名、京師を動かす。而して蘇氏の文章、遂に天下に擅なり。君の文は博辨宏偉、讀む者(五)悚然として其人を想見す。既に見れば、(六)溫溫として、言ふこと能はざるに似たり。之に卽きて與に居るに及びて、愈〻久しくして愈〻愛す可し。閒くありて、其の有する所を出すや、愈〻(七)叩きて愈〻窮まり無し。嗚呼、純明篤實の君子と謂ふ可し。

【一】至和嘉祐。竝に仁宗の年號。
【二】高等。高第。
【三】一日。一朝にして。
【四】隱然。氣の引締る貌。
【五】悚然。愼む貌。
【六】溫溫。寬緩和柔の貌。
【七】叩。意見を問ふ也。

曾祖、諱は祐。祖、諱は杲。父、諱は序、尙書職方員外郎を贈らる。三世皆顯はれず。職方君、三子あり、澹と曰ひ、渙と曰ふ、洵と曰ふ、皆、文學を以て進士に擧げらる。而るに君は少うして獨り學を喜ばず、年已に壯にして、猶ほ書を知らず。職方君、一ひと其故を問ふ。職方君、笑つて答へず。君も亦(八)自如たり。

年二十七、始めて大いに憤を發し、其の素より往來する所の少年を(一〇)謝し、戸を閉ぢて書を讀み、文辭を爲る。歲餘にして進士に擧げられ、再び(一一)中らず、又、(一二)茂材異等に擧げられ、中らず。退きて歎じて曰く、「此れ吾が學と爲すに足らざるなり」と。悉く、て之を焚き、益〻戸を閉ぢて書を讀み、筆を絶ちて六年、乃ち大いに六經百家の說を究め、以て古今の治亂成敗・聖賢の窮達出處の際を考覈し、其粹精を得、涵蓄充溢して、うして慨然として曰く、「可なり」と。是に由りて驅馳、必ず(一三)深微に造りて、而る後止む。蓋し其の(一四)稟くるや厚し、故に之を發すること遲し、志ざすや(一五)懿なり、故に之を得ること精し。

【八】縱つ。自由に任する也。
【九】自如。平氣で居る貌。
【一〇】謝。謝絶。
【一一】中らず。及第せざる也。
【一二】茂材異等。人を取る科目の名。
【一三】深微。深奥微妙。
【一四】稟。天稟の材。
【一五】懿。誠實。

京師に來りてより、一時の後生學者、皆、其賢を尊び、其文を學び、以て師法と爲す。其父子俱に名を知らるるを以て、故に老蘇と號して以て之を別つ。

初め修、爲めに其書を上り、紫微閣に召試せらる。辭して至らず。遂に祕書省校書郎に(一六)除試せらる。會〻(一七)太常、(一八)建隆以來の禮書を修纂す。乃ち以て覇州文安縣の主簿と爲し、其祿を食ましむ。陳州の項城縣の令・姚闢と。同じく禮書を修め、太常因革禮一百卷を爲る。書成り、方に奏して、未だ報せられず。而して君、疾を以て卒す。實に(一九)治平三年戊申の四月なり。享年五十有八。天子、聞きて之を哀しみ、特に光祿寺の丞を贈り、有司に勅して舟を具へ、其喪を載せて蜀に歸らしむ。

君、程氏を娶る。大理寺の丞・文應の女なり。三子を生む。景先と曰ふ。早く卒す。軾は今殿中丞・直史館たり。轍は權大名府推官たり。三女あり。皆早く卒す。孫を邁と曰ひ。遲と曰ふ。文集二十卷・謚法三卷あり。

君善く人と交はり、人の患難に急にし、死すれば則ち其孤を(二〇)鄒養す。鄉人、多く之を德とす。蓋し(二一)晚にして易を好む。曰く、「易の道は深し。(二二)汨として・明かならざる者は、諸儒・(二三)附會の說。こじつけたる臆說。

【一六】除試。任命するなり。
【一七】太常。禮儀を掌る官。
【一八】建隆。太祖の年號。
【一九】治平。英宗の年號。
【二〇】鄒養。めぐみ養ふ。
【二一】晚。晚年。
【二二】汨。沈沒して明かならざる貌。
【二三】附會の說。こじつけたる臆說。

說を以て之を亂せばなり。之を去らば則ち聖人の旨見はれん」と。易傳を作る。未だ成らずして卒す。治平四年十月壬申、彭山の安鎭鄉の可龍里に葬る。

君、遠方に生れ、而して文を學びて晚成す。常に歎じて曰く、「我を知る者は惟だ吾が父と歐陽公となり」と。然らば則ち余に非ずして誰か宜しく銘すべき。銘に曰く、

蘇・當世に顯はる、實に(二四)欒城の人。宦を以て眉に留まる。(二五)蕃蕃たる子孫。其(二六)高曾より、鄉里・仁を稱す。偉なるかな明允、大いに文に發す。亦既に文あり、而も又子あり。其は存して朽ちず、其(二七)嗣(二八)昌なり。鳴呼明允、亡びずと謂ふ可し。

黃夢升の墓誌銘

予が友黃君夢升は、其先は蘡州金華の人、後洪州の分寧に徙る。其曾祖は諱は元吉、祖は諱は某、父は諱は中雅、皆仕へず。黃氏は世〻江南の大族たり。其祖父より以來、素(二九)家貲を以て鄉里を賑し、多く書を聚めて以て(三〇)文章(三一)意氣を以て自ら豪とす。

予、少うして隨州に家す。夢升、其兄茂宗の・隨に官するに從ふ。予、童子たりしとき、諸兄の側に

【二四】欒城。河北の地名。
【二五】蕃蕃。繁殖の貌。
【二六】高曾。高祖・曾祖。
【二七】家貲。家財。
【二八】招延。招き寄す。
【二九】意氣。氣概ある也。

立ちて夢升を見るに、年十七八、眉目明秀、善く酒を飲みて談笑す。予、幼なりと雖も、心に已に獨り夢升を奇とす。後七年、予と夢升と、皆進士に京師に擧げらる。夢升は丙科を得、初め興國軍の永興主簿に任せられ、㊃怏怏として志を得ず、疾を以て去る。之を久しうして復た江陵府の公安主簿に調せらる。時に予、夷陵の令に謫せられ、之に江陵に遇ふ。夢升、顔色憔悴して、初め識る可からず。久しうして手を握りて㊄噓唏し、相飲むに酒を以てす。夜醉うて起ちて舞ひ、歌呼して大いに㊅噱ふ。予益〻、夢升の志衰ふと雖も少時の意氣尚ほ在ることを悲むなり。

後二年、予、㊆乾德の令に徙る。夢升復た南陽の主簿に調せらる。又、之に㊇鄧の閒に遇ふ。嘗て、其の平生爲る所の文章幾何ぞと問ふ。夢升、慨然として歎じて曰く、「吾已に㊈之を諱めり。㊉窮達は命有り。世の人、我を知らざるに非ず、我、世人に道ふことを羞づるなりと。之を求むれども、肯て出さず。遂に之に酒を飲ましむ。復た大いに醉ひ、起ちて舞ひ歌呼す。因つて笑つて曰く、「子は我を知る者なり」と。乃ち肯て其文を出す。之を讀むに、博辨雄偉、意氣奔放、禦ぐ可からざるが若し。予又益〻、夢升の志困しむと雖も文章未だ衰へざるを悲しむなり。

【四】怏怏。樂しまざる也。
【五】噓唏。歎息する也。
【六】噱。大に笑ふ也。
【七】乾德。縣の名。
【八】鄧。州の名。
【九】之。文章を示すを云ふ。
【一〇】窮達。困窮と榮達。

是の時、謝希深、出でて鄧州に守たり、尤も、天下の士を稱道するを喜ぶ。予因つて手づから夢升の文一通を書して、以て希深に示さんと欲す。未だ及ばずして希深卒し、予も亦鄧を去る。後の鄧に守たる者は皆俗吏にして、復た夢升を知らず。夢升、素と剛にして苟くも合はず、㈡其の有する所を負うて、常に怏怏として、施す所無し。卒に、志を得ざるを以て、南陽に卒す。

夢升は諱は注、㈢寶元二年四月二十五日を以て集・公安集・南陽集と曰ふ。凡そ三十卷あり。潘氏を娶り、四男二女を生む。將に慶歷四年某月某日を以て、董坊の先塋に葬らんとす。其弟渭泣いて來り告げて曰く、「吾が兄は、世の吾を知る莫きを悲む。執か其銘を爲る可き」と。予素より夢升を悲む者なり。因つて之が銘を爲りて曰く、

予嘗て夢升の文を讀み、其兄の子庠を哭するの詞に、「子の文章、電のごとく激し雷のごとく震ふ、雨雹忽ち止みて、㈢闃然として滅泯す」と曰ふに至りて、未だ嘗て諷誦せず・(ンバアラズ)歎息して已まずんばあらず。嗟夫夢升曾て庠に及ばず、震はず驚かさず、㈣鬱塞埋藏せり。執か其有を予へて、其れを施さしめざる。吾咎を歸する所を知らず、徒らに夢升の爲めにして悲しむ。

【一】其の有する所。才能學藝。
【二】寶元。仁宗の年號。
【三】闃然。靜なる貌。
【四】鬱塞埋藏 ふさがり、うづもる。

尙書都官員外郎歐陽公の墓誌銘

公諱は曄、字は日華。檢校工部尙書・諱は託・彭城縣君劉氏の室に於ては、曾孫たり。武昌縣令・諱は梯・蘭陵夫人蕭氏の室には、孫たり。贈太僕少卿・諱は偃・追封潘原縣の太君・李氏の室には、第三子たり。修に於ては叔父たり。修、不幸にして幼にして孤なり、叔父に依りて長ず。嘗て〔一〕太夫人の敎を奉ず、曰く、「爾、爾の父を識らんと欲するか、爾の叔父を視よ、其狀貌起居言笑、皆爾の父なり」と。修、幼なりと雖も、已に能く、太夫人の言を悲しと爲し、而して叔父の親たることを知れり。

歐陽氏は世〻江南に居る。〔二〕僞唐李氏の時、廬陵の大族たり。李氏亡び、先君の昆弟時を同じうして仕ふる者四人、獨り先君は早世す、其後三人は皆朝に登りて以て歿す。

公は〔三〕咸平三年、進士の甲科に擧げられ、南雄州の判官・隨・閬二州の推官・江陵府の掌書記を歷て、太子の中允・太常丞・博士・尙書屯田都官の二員外郎に拜せらる。享年七十有九、最後に家に終る。〔四〕慶歷四年三月十日を以て、安州應城縣高風鄕の彭樂村に葬る。

其葬るに於てや、其の素と養ふ所の兄の子修、泣いて書して曰く、嗚呼、叔父の亡する、吾が〔五〕先君の昆弟、復た在る者無し。其長養敎育の恩、既に報ゆ可からず、而して狀貌起居言笑の（先君）思慕す可き者に至りては、皆、得て見ず。惟だ勉めて、吾が叔父の世に傳ふ可き者を紀し、庶はくは以て修の志を盡さん。

公、太子の中允を以て、興國軍の鹽酒稅を監し、大常丞にして、漢州雒縣に知たり、博士にして、端州桂陽監に知たり、屯田員外郎にして、黃州に知たり、都官に遷りて、永州に知たり、皆、〔六〕能政あり。〔七〕擧人に坐せられて官を奪はれ、復た屯田を以て歙州に通判たり、本官を以て西京に分司し、〔八〕家を隨に託し、復た都官に家に遷され、遂に致仕す。景祐四年四月九日卒す。

公、人と爲り、〔九〕嚴明方質、尤も潔廉を以て自ら持す。〔一〇〕布衣たりしより、其義に非ざれば、輒く人の〔一一〕遺を受けず。少うして與にする所の親舊、後或は甚だ貴ければ、終身、其門に造らず。

其の官に涖み事に臨むや、決斷に長せり。初め隨州の推官と爲り、〔一二〕獄の決し難き者を決すること數百人。轉運使、其〔一三〕積物多く

【一】太夫人。母を尊稱して曰ふ。歐陽修の母鄭氏なり。
【二】僞唐。後唐。
【三】咸平。眞宗の年號。
【四】慶歷。仁宗の年號。
【五】先君。亡父の尊稱。

【六】能政。好政績。
【七】擧人に坐す。擧人は州縣より朝に人を進むるなり。擧人に其人を得ざりしとの罪に坐する也。
【八】家を隨に託し云々。家族を隨州に託し置き、また都官と爲りて、家に居り、其後、仕官を辭する也。
【九】嚴明方質。嚴格明智方正質朴。
【一〇】布衣。無官の士。
【一一】遺。贈物。
【一二】獄。裁判。
【一三】積物。蓄積したる財穀。

して・僧・(一四)姦利を爲すと疑ひ、公に命じて往いて之を(一五)籍せしむ。僧、白金千兩を以て公に餽る。公笑つて曰く、「吾安んぞ此を用ひん。然れども汝能く我が言を聽くか。今歲大凶にして、汝、積穀六七萬石あり。能く盡く以て官に輸して民を賑さば、則ち吾、汝を籍せじ。」僧喜びて曰く「諾」と。民賴りて以て全活す。

(一六)陳堯咨、豪貴を以て自ら驕る。官屬、敢て仰ぎ視る莫し。江陵に在り、(一七)帖を持し、(一八)僚佐を强て私錢を用ひ、許りて官市の黃金と爲す。府吏、(一九)署せしむ。公、吏を呵して曰く、「官市の金は當に(二〇)文符あるべし」と。獨り、肯て署せず。堯咨、憚りて止むと雖も、然れども轉運使に諷して公を出し、府中に居らしめず。

鄂州の滎陽、素と、治め難しと號せらる。乃ち公を徒して之を治めしむ。至れば則ち(二一)滯獄百餘事を決す。縣民王明、其同母兄弟李通と、(二二)產を爭ふこと數歲、明、自ら(二三)理すること能はず、貧にして人の爲めに(二四)賃舂するに至る。公、之を一言に(二五)折し、通則ち具に伏し、盡く其產鉅萬を取りて明に歸す。通退きて怨言無し。桂陽の民、舟を爭うて相毆ちて死に致す者あり、獄久しく決せず。公自ら其獄に臨み、

【一四】姦利。不正なる利得。
【一五】籍。官に沒收する也。
【一六】陳堯咨。節度使たり。
【一七】帖。帳簿。
【一八】僚佐。下役。
【一九】署。署名。
【二〇】文符。公文書。
【二一】滯獄。澁滯せし訴訟。
【二二】產。財產。
【二三】理。辯論して言ひ分けする也。
【二四】賃舂。他人に雇はれて米を舂く。
【二五】折。審判。

囚を出して(二六)庭中に坐せしめ、其(二七)桎梏を去りて之に飮食せしめ、食訖りて、悉く勞うて獄に還し、獨り一人を庭に留む。留まる者色動きて(二八)惶顧す。公曰く、「人を殺せる者は汝ならん」と。囚、然る所以を知らず。公曰く、「吾、食する者を視るに、皆、右手を以て(二九)匕を持つ。而るに汝獨り左を以てす。今、死者の傷は右肋に在り。此れ汝之を殺せること明かなり」と。囚卽ち涕泣して曰く、「我殺せるなり。敢て以て(三〇)他人を累はさず」と。公の事に臨みて明かに辯ずる、古の良吏の獄を決するの術あること、多く此の如し。居る所の人、皆之を愛思す。

公、范氏を娶る。(范氏)福昌縣君に封せらる。子・男四人、長を宗閔と曰ひ、次を宗閱と曰ひ、其二は早く亡す。女一人、張氏に適く、亦早く亡す。銘に曰く、

公の明は以て事を決するに足り、愛は以て人に思はるるに足り、仁は以て其族に施すに足り、淸は以て其身を潔くするに足る。而して之を銘するに此を以てす、以て其子孫に遺すに足る。

南陽縣君(一)謝氏の墓誌銘

【二六】庭中。法廷。
【二七】桎梏。足かせ、手かせ。
【二八】惶顧。おそれて、きよろつく。
【二九】匕。匙。
【三〇】他人を累す。他人に迷惑をかける也。
【一】謝氏。梅聖俞の妻。

(二)慶歷四年秋、予が友宛陵の梅聖俞、吳興より來り、其の(三)內を哭するの詩を出して、悲みて曰く、「吾が妻謝氏亡せり」と。我に丐ふに銘を以てして葬らんとす。予、之を諾して未だ作るに暇あらず。居ること一歲の中、書七八至る。未だ嘗て謝氏の銘を以て言を爲さずんばあらず。

且つ曰く、「吾が妻は故の(四)太子賓客諱は濤の女、希深の妹なり。希深父子は、時の(五)聞人たり、而して世〻顯榮なり。謝氏、(六)盛族に生れ、年二十にして以て吾に歸ぎ、凡そ十七年にして卒す。卒するの夕べ、(七)斂むるに嫁する時の衣を以てす。甚だしいかな吾が貧知る可きなり。然れども謝氏は(八)怡然として之に處る。其家を治むるに常法あり。其飲食器皿、(九)豐侈に及ばずと雖も、而れども必ず(一〇)精にして以て旨し。其衣、(一一)故新無し、而れども(一二)澣濯縫補して、必ず潔にして以て完し。至る所の官舍、卑陋なりと雖も、而れども庭宇灑掃して、(一三)肅にして以て嚴なり。其平居語言容止、必ず從容として以て和らぐ。吾、世に窮することの久し。其れ出でて幸に賢士大夫と遊びて樂しみ、入れば則ち吾が妻の怡怡たるを見て、其憂を忘る。吾をして富貴

【一】慶歷。仁宗の年號。
【二】內。妻。
【三】太子賓客。官名。
【四】聞人。名聲ある人。
【五】盛族。立派なる家柄。
【六】斂むるに云々。遺骸に衣すべき衣服無きを以て嫁入の時の衣服を衣せて斂めたり。
【七】怡然。安んじ喜ぶ貌。
【八】豐侈。贅澤。
【九】精。精良。
【一〇】故新無し。新舊の別無し。
【一一】澣濯縫補。汚れたるを洗濯し綻びたるを縫ふ。
【一二】肅にして以て嚴。端然として亂れざるなり。

貧賤を以て其心を累はさざらしめしは、抑〻吾が妻の助なり。

「吾嘗て士大夫と語るや、謝氏多くは(一四)戶屛より竊に之を聽き、(一五)閒あれば則ち盡く能く其人の才能賢否及び時事の得失を(一六)商搉するに、皆、條理あり。

「吾、吳興に官するや、或は外より醉うて歸れば、必ず問うて曰く、『今日孰と與に飮みて樂しめりや』と。其の賢者なるを聞けば、則ち悅ぶ。否ざれば則ち歎じて曰く、『君の交はる所は皆一時の(一七)賢儁なり、豈に其れ己を屈して之に下らんや。惟だ道德を以てす、故に合ふ者尤も寡し。今、是のノと飮みて歡ぶか』と。

「是の歲南方旱す。仰ぎて飛蝗を見て歎じて曰く、『今、(一八)西兵、未だ解けず、天下重困し、盜賊暴に(一九)江淮に起る。而して天旱し且つ蝗あること此の如し。我は婦人たり。死して君我を葬ることを得ば、幸なり』と。其の能く貧に安居して困しまざる所以は、其性識明かにして道理を知ること、此類多ければなり。

「嗚呼、其の生けるや、吾の貧に迫り、而して沒するや、又、以て厚くすること無し。謂ふに惟だ文字のみ、以て其不朽を著はす可し。且つ其生平、尤も、文章の貴ぶ可きものたるを知れり。歿して此

【一四】戶屛より。戶又はツイタテの蔭より。
【一五】閒。暇。
【一六】商搉。おしはかる、推理して批評する也。
【一七】賢儁。儁は俊と同じ。すぐれたる人。
【一八】西兵。趙元昊の亂を云ふ。
【一九】江淮。揚子江と淮河との間。

を得ば、庶幾はくは以て其魂を慰め、且つ予が悲を寒がん。此れ我が、銘を子に請ふことの勤むる所以なり」と。此の若くんば、予、銘せざるに忍びんや。

夫人は享年三十七、(一)夫の恩を以て南陽縣君に封せらる。二男一女あり。其年七月七日を以て高郵に卒す。貧しきを以て、(二)歸することを能はざるなり。某年某月某日、潤州の某縣某原に葬る。銘に曰く、

高崖斷谷、(三)京口の原、山蒼く水深く、土厚くして而も堅し。之に居らば樂しかる可し。卜者曰く「然り」と。骨肉は土に歸し、魂氣は天に昇る。何ぞ必ずしも故鄉にして、然る後に安しと爲さん。

【一】夫の恩を以て。夫が官に在るの故を以て。
【二】歸。歸葬。
【三】京口。地名。

卷の十四

歐陽修永叔著

胡先生の墓表

先生、諱は瑗、字は翼之、姓は胡氏、其上世は陵州の人たり、後、泰州如皐の人となる。

先生、人の師たるや、(一)言行して之を身化し、誠明なる者をして(二)達し、昏愚なる者をして勵み、而して頑傲なる者をして革めしむ。故に其の法た るや嚴にして信せられ、道たるや久しうして遵はる。師道の廢ること久し。(三)景祐明道より以來、學者の師あるは、惟だ先生暨び泰山の孫明復・石守道・三人にして、而して先生の徒最も盛んなり。

其の湖州の學に在るや、弟子の去來すること常に數百人、各〻其經を以て(四)轉た相傳授す。其教學の法最も備はる。之を行ふこと數年にして、東南の士、仁義禮樂を以て學

【一】言行して之を身化す。言行を一致し、躬行して之を教化す。
【二】達。上達。
【三】景祐明道。共に仁宗の年號。
【四】轉た相傳授す。先輩より後輩へ傳へ授くる也。

と爲さざるは莫し。

(三)慶歷四年、天子、天章閣を開き、大臣と、天下の事を講ず。始めて慨然として州縣に詔し、皆、學を立てしむ。是に於て太學を京師に建つ。而して有司、湖州に下り・先生の法を取りて・以て太學の法と爲さんと請ふ。今に至るまで(六)著令と爲る。

後十餘年、先生始めて來りて太學に居る。學者、遠きよりして至る。太學、容ること能はず、旁の官署を取りて以て之を得る所の士には、先生の弟子、十に常に四五に居る。其高弟の者は、歲〻名を當時に知られ、或は甲科を取り、(七)顯仕に居り、其餘は散じて四方に在り、其人の賢愚に隨ひて、皆、(八)循循として(九)雅飭し、其言談(一〇)擧止、問はずして、先生の弟子たることを知る可し。其學者、相語りて先生と稱するは、問はずして、胡公たることを知る可し。

先生、初め(一一)白衣を以て天子に見えて樂を論じ、祕書省校書郎に拜せられ、丹州の軍事推官に辟せられ、密州の觀察推官に改められる。父の(一二)憂に丁りて職を去り、服除きて、保寧軍の節度推官と爲り、遂に(一三)湖學に居る。召されて諸王宮の敎授と爲る。疾を以て免せらる。已にして太子中舍を以

【五】慶歷。仁宗の年號。
【六】著令。法令。
【七】顯仕。顯官。
【八】循循。徐々として順序ある也。
【九】雅飭。正しく謹む。
【一〇】擧止。動作。
【一一】白衣。無位無官の平民。
【一二】憂。喪。
【一三】湖學。湖州の學校。

て致仕し、殿中丞に(一四)家に遷さる。皇祐中、(一五)驛召して京師に至り樂を議せしむ。復た以て大理評事・兼太常寺の主簿と爲す。又、疾を以て辭す。歲餘にして光祿寺丞・國子監直講と爲る。遷ち太學に居り、大理寺丞に遷され、緋衣銀魚を賜ふ。(一六)嘉祐元年、太子中允に遷され、天章閣の侍講に充てられ、仍ほ太學に居る。已にして病みて、朝することを能はず。天子、數〻使者を遣はして存問せしむ。又、太常博士を以て致仕す。東歸の日、太學の諸生と朝廷の賢士大夫と、之を東門に送り、弟子の禮を執る。路人嗟歎して以て榮と爲す。

四年六月六日を以て、杭州に卒す。享年六十有七。明年十月五日を以て、烏程何山の原に葬る。其(一七)世次官邑と其行事とは、莆陽の蔡君謨、具に(一八)幽堂に誌す。

嗚呼、先生の德は(一九)人に在り、(二〇)表して後世に見すことを待たず、然れども此に非ざれば、以て學者の思を慰むる無し。乃ち其墓の原に揭ぐ。六年八月三日、廬陵の歐陽修述ぶ。

石曼卿の墓表

【一四】家に遷さる。家に在りながら此官に轉任せしなり。
【一五】驛召。宿次にて召し寄する也。
【一六】嘉祐。仁宗の年號。
【一七】世次。系譜。
【一八】幽堂。墓穴。卽ち石に刻して墓穴に埋むる也。
【一九】人に在り。世人皆之を記憶す。
【二〇】表。墓表に記する也。

曼卿、諱は延年、姓は石氏。其上世は幽州の人たり。(一)幽州、契丹に入るや、其祖・自成、始めて其族を以て、(二)閒走して南に歸す。天子、其來るを嘉し、將に之に祿せんとす。可かず。乃ち宋州の宋城に家す。父、諱は補之、官、太常博士に至る。

(三)幽燕の俗は(四)勁武なり。而して曼卿少うして亦(五)氣を以て自ら豪とし、書を讀むに(六)章句を治めず、獨り古人の奇節偉行・非常の功を慕ひ、世俗を視るに、(七)屑屑として、其意を動かすに足る者無し、自ら顧へらく、時に合はずと、乃ち一に(八)酒に混ず。然して劇飲大醉を好み、(九)頹然として自ら放にす。是に縁りて益〻時と合はず。而して人の・其れに從つて遊ぶ者は、皆、曼卿の(一〇)落落として奇とす可きを愛するを知りて、而も其才の以て用ふべき有るを知らざるなり。年四十八、(一一)康定二年二月四日、太子中允祕閣校理を以て京師に卒す。

曼卿、少うして進士に舉げられて第せず。眞宗、(一二)恩を推して、三たび進士に舉げられ、皆、奉職に補せらる。曼卿、初め肯て就かず。張文節公、素と之を奇とし、謂ひて

【一】幽州契丹に入る。後晉の石敬瑭、雁州以北十六州を割きて契丹に與へしを云ふ。
【二】閒走。閒道より走る也。
【三】幽燕。古の燕趙の地。
【四】勁武。剛武。
【五】氣。氣概。
【六】章句を治めず。一章一句を研究せず。
【七】屑屑。こまかしき貌。
【八】酒に混ず。酒を飲みて取り紛るる也。
【九】頹然。大に醉ふ貌。
【一〇】落落。事物に拘泥せざる貌。
【一一】康定。仁宗の年號。
【一二】恩を推す。眞宗、大郊祀の祭を行ひ、廣く恩惠を臣下に及ぼしを云ふ。

曰く、「母老いたり、(二)然ル乃ち祿を擇ぶか」と。曼卿、(三)爰然として起つて之に就く。殿直に遷さる。之を久しうして太常寺の太祝に改められ、濟州金鄉縣に知たり。歎じて曰く、「此れ亦、以て政を爲す可きなり」と。縣、(四)治聲あり。乾寧軍に通判たり。母永安縣君李氏の憂に丁る。服除きて、永靜軍に通判たり。皆、(五)能名あり。館閣校勘に充てられ、大理寺丞に累遷し、海州に通判たり。莊獻明肅太后、朝に臨む。曼卿、上書して、政を天子に還つて校理と爲る。

(六)言を以て幸せらる。嘗て太后の事を言へる者を引きて、遽に顯官を得しむ。曼卿、固く之を止む。乃ち已む。

(七)契丹の・中國に通じ、(八)德明盡く河南を有して臣屬せしより、務めて兵を休めて養息し、天下晏然たり。內外、武を弛むること、三十餘年。曼卿、上書して十事を言ふ。報せられず。已にして元昊反し、西方、兵を用ふ。(朝)廷始めて其言を思うて、召見して稍其說を用ひ、河北・河東・陝西の民を籍して、(九)鄉兵數十萬を得たり。曼卿、使を奉じて、(一〇)兵を河東に籍す。還つて(一一)旨に稱ひ、緋

【二】然ル。驚き視る貌。
【三】爰然。
【四】治聲。治まりたる評判。
【五】能名。才能ある名聲。
【六】言を以て幸せらる。范諷、曾て太后の事を言ひしを以て後天子に寵幸せらる。
【七】契丹云々。契丹の中國に通ぜしは、眞宗の景德元年なり。
【八】德明云々。張德明の臣屬せしは景德二年なり。德明は元昊の父なり。
【九】鄉兵。各地の農民を調練して兵と爲したる者。
【一〇】兵を籍す。兵となるべき戶口を調査す。
【一一】旨。御思召。

衣銀魚を賜ふ。天子、方に其才を盡さしめんことを思ふ。而るに(卿)曼且つ病めり。既にして、邊將に鄉兵を以て賊を捍がんと欲する者ありと聞き、笑つて曰く、「此れ吾が〔三〕粗を得たるなり。夫れ敎へざるの兵は、勇怯相雜る。若し怯者、敵を見て動かば、則ち勇者も亦率ゐて潰えん。今或は敎ふるに暇あらずんば、其敢行の者を募るに若かず。則ち人人皆勝兵ならん」と。其の世を視るや、〔三〕蔑して、爲すに足らざるが若し。(而レ)其設施の方を聽くに及びては、精思深慮すと雖も、過ぐること能はざるなり。

狀貌偉然、酒を喜みて自ら豪とし、繩すに法度を以てす可からざるが若し。(然レ)退きて其平生を質せば、〔四〕趣舍の大節、一も理に悖る者無し。人を遇するに賢愚と無く、皆、忻懽を盡す。天下の是非善惡を可否するに及びては、其〔五〕意に當る者、幾人も無し。其の文章を爲るや、勁健にして其意氣に稱ふ。

子濟滋あり。天子、其喪を聞きて、其一子を官にし、〔六〕其家に祿せしむ。既に卒するの三十七日、太淸の〔七〕先塋に葬る。

其友歐陽修、其墓に表して曰く、嗚呼。曼卿は、寧ろ自ら混じて以て高しと爲すも、少しも屈して

〔三〕粗。意見の粗なる處。
〔四〕趣舍。出處進退。
〔五〕意に當る。意に叶ふ也。
〔六〕其家に祿せしむ。家に在りて祿を受けしむる也。
〔七〕先塋。先代の墓地。

以て世に合はず。自ら重んずるの士と謂ふ可し。士の負ふ所の者愈〻大なれば、則ち其の自ら顧みるや愈〻重し。自ら顧みること愈〻重ければ、則ち其の合ふこと愈〻難し。然れども、與に大事を共にし奇功を立てんと欲せば、合ひ難く自ら重んずるの士を得るに非ずんば、爲す可からざるなり。古の〔八〕魁雄の人、未だ始めより〔九〕高世の志を負はずんばあらず。故に寧ろ或は身を毀ち迹を汚し、卒に聞ゆる無きに困しめども、或は老いて且に死せんとして、幸に一たび遇はば、猶ほ克く少しく世に施さん。曼卿の若き者は、徒に世と合ひ難くして施す所を克くせざるのみに非ず、亦其れ不幸にして中壽に至ることを得ず。其れ命なるかな、其れ哀しむ可きなるかな。

河南府司錄張君の墓表

故の大理寺丞・河南府司錄張君は、諱は汝士、字は堯夫、開封の襄邑の人なり。(一)明道二年八月壬寅、疾を以て官に卒す。享年三十有七。卒するの七日、洛陽(二)北邙山の下に葬る。其友人・河南の尹師魯、其墓に志し、而して廬陵の歐陽修、之が銘を爲る。其葬の速かなるを以て、石に刻すること能はず、乃ち(三)金谷の(四)古甎を得、太原の王顧に命じ、丹を以て篆書を爲らしめ、(五)壙中に納る。

〔八〕魁雄の人。大人物。
〔九〕高世の志。世にすぐれた大志。
〔一〕明道。仁宗の年號。
〔二〕北邙山。河南に在り。
〔三〕金谷。河南に在り。
〔四〕古甎。古き瓦。
〔五〕壙。墓穴。

(六)嘉祐二年某の月某の日、其子吉甫・山甫、君を伊闕の敎忠鄕の積慶里に改葬す。

君の始めて北邙に葬らるるや、吉甫は纔に數歲、而して山甫は始めて生る。余及び送る者、相與に穴に臨みて、(七)窆し且つ(八)封するを視て、哭して去る。今年春、予、主として天下の貢士を試みる。而して山甫は進士を以て禮部に試みらる。乃ち來り告ぐるに、將に其先君を改葬せんとするを以てす。因つて銘を出して以て余に示す。蓋し君の卒するは、今を距ること二十有五年なり。

初め(九)天聖・明道の閒、(一〇)錢文僖公、河南に守たり。公は(一一)王家の子、特に文學を以て仕へて貴顯に至り、至る所多く(一二)文士を招集す。而して河南の吏屬、適に皆當時の賢材知名の士なり。故に其幕府を、號して天下の盛と爲す。君は其一人なり。文僖公、善く士を待ち、未だ嘗て責むるに吏職を以てせず。而して河南は又名山水・竹林・茂樹・奇花・惟石多く、其(一三)平臺清池、(一四)荒墟(一五)草莽の閒に上下す。余、日に先生長者に從つて詩を賦し酒を飲み、以て樂みと爲すことを得たり。而して君は人と爲り靜默修潔にして、常に府に坐して事を治め、文書を(一六)省し、尤も心を、獄訟に盡す。初め(一七)辟を以て其府の推官と爲り、既に罷められ、又、司錄に辟せらる。河南の人多く(一八)之に賴る。而して(一九)守尹、屢〻其材を薦む。君は亦書を工にし、喜みて詩を爲り、閑あれば則ち予に從つて遊ぶ。其言語簡にして意あり。酒を飲みて終日亂れず、醉ふと雖も未だ嘗て(二〇)頹墮せず。之と居る者、其德に服せざるは莫し。故に師魯之を志して曰く、「身を飭へ事に臨む、余嘗て堯夫に媿づ、堯夫は余に媿ぢざるなり」と。始め君の葬らるるや、皆以へらく其地善からずと。又、葬ること速かにして、其禮備はらず。君の夫人崔氏、賢行あり、能く其子を敎ふ。而して二子孝謹、克く自ら(二一)樹立し、卒に能く君を改葬すること(二二)吉卜の如し。君は其れ後有りと謂ふ可し。

君卒してより後、文僖公は罪を得て漢東に貶死し、吏屬も亦各〻引き去る。今、師魯死して且に十餘年ならんとす。王顧といふ者死して亦六七年なり。其の君を送りて穴に臨みし者、及び君と府を同じくして遊びし者、十に蓋し八九は死せり。其の幸にして在る者も、老いざれば則ち病み且つ衰ふ。余の如き是れなり。嗚呼、盛衰生死の際は、未だ始めより是の如くならずんばあらず。是れ豈に道ふに足らんや。惟だ

【六】嘉祐。仁宗の年號。
【七】窆。棺を穴へ下す也。
【八】封。土を高く盛り上ぐる也。
【九】天聖明道。並に仁宗の年號。
【一〇】錢文僖公。名は惟演。文僖は諡なり。
【一一】王家の子。吳越の主錢氏の後なれば云ふ。
【一二】文士。一本には文字に作る。
【一三】平臺。平かなる臺觀。
【一四】荒墟。荒れ果てたる空地。
【一五】草莽。くさむら。
【一六】省。取り調ぶる也。

【一七】辟。官に任ずる爲めに召し出すも。
【一八】之に賴る。之を信賴す。
【一九】守尹。留守河南尹。
【二〇】頹墮。醉うてしだら無きこと。
【二一】樹立。身を立つる也。
【二二】吉卜。支那の風俗、子孫の發達を圖り、卜筮して葬地を定むる也。

善を爲す者のみ能く後あり、而して文字に託する者は、以て窮まり無かる可し。故に其改葬するに於てや、書して以て其子に遺り、墓に〔三〕碣せしめ、且つ以て余が思を寫す。

吉甫は今、大理寺丞と爲り、緱氏縣に知たり。山甫は始めて進士を以て〔四〕出身を賜ふと云ふ。

〔一〕瀧岡阡表

嗚呼、惟れ我が皇考崇公、〔二〕吉を瀧岡に卜するの六十年、其子修、始めて克く其阡に表す。敢て緩なるに非ざるなり、蓋し待つ有りしなり。

修、不幸にして、生れて四歲にして孤なり、〔三〕太夫人、節を守り自ら誓ひ、貧に居りて自ら衣食に力め、以て長じ以て敎へ、成人に至らしむ。太夫人、之に告げて曰く、「汝が父は吏と爲りて廉に、而も施與を好み、賓客を喜ぶ。其俸祿は薄しと雖も、常に、餘あらしめず、曰く、〔四〕是を以て我が累と爲すこと毋れ』と。故に其亡するや、〔五〕一瓦の覆・一壠の植の・以て庶うて生を爲すもの無し。吾、何を恃みて能く自ら守らんや。〔六〕吾、汝が父に於て其一二を知る、以て

【三】碣。いしぶみ。方なるを碑とし、圓なるを碣とす。
【四】出身。官に就くなり。
【一】瀧岡。地名。阡。墓道。
【二】吉を卜す。葬ること。卜筮により て葬地を選定するなり。
【三】太夫人。母の尊稱。
【四】是を以て云々。金錢の爲めに面倒を掛くることなかれとの意。
【五】一瓦の覆一壠の植。一枚の瓦の覆ひたる家、一壠の畠の植ゑ付けたる者。
【六】吾汝が父云々。吾は汝が父の事に就いて其一二を知りたれば、其善行の結果が汝に報い來るを待ちたるなり。

汝に待つあるなり。吾・汝が家の婦と爲りしより、〔七〕吾が姑に事ふるに及ばず、然れども汝が父の能く養へることを知れり。汝は孤にして幼なり。吾、汝が必ず立つあることを知る能はず、然れども汝が父の必ず將に後あらんとするを知れり。

「吾の始めて歸ぐや、汝が父は母の喪を免じて方に年を逾ゆ。歲時に祭祀すれば、則ち必ず涕泣して曰く、『祭りて豐なるは、養ふの薄きに如かざるなり』と。問ゝ酒食を御すれば、則ち又涕泣して曰く、『昔は常に足らずして、今は餘あり、其れ何ぞ及ばんや』と。吾始めて一二たび之を見て、以爲らく、新に喪を免じて適ゝ然るのみと。既にして其後常に然り。其の身を終ふるに至るまで、未だ嘗て然らずんばあらず。吾、姑に事ふるに及ばずと雖も、而れども此を以て、汝が父の能く養へることを知れり。

「汝が父、吏と爲り、嘗て夜〔八〕燭して官書を治め、屢ゝ廢して歎ず。吾、之を問へば則ち曰く、『此れ〔九〕死獄也。我、其生を求むれども得ざるのみ。』吾曰く、『生は求む可きか。』曰く、『其生を求めて而も得ざれば、則ち死者と我と皆恨無きなり。矧んや求めて得ること有るをや。其の得ること有るを以てして、則ち求めずして死する者の・恨あることを知るなり。夫れ常に其生を求むるも、猶ほ之を死に失す。

【七】吾が姑に事ふるに及ばず 姑は既に死せしを云ふ。
【八】燭して云々。燭を照らして官文書を調ぶ。
【九】死獄。死罪に行はるべき裁判。

而るに世（官ノ判）は常に其死を求むるなり』と。(一〇)乳者の汝を抱きて旁に立つを回顧して、因つて指して歎じて曰く、『(一一)術者謂はく、我が(一二)歳行は戌に在りて將に死せんとすと。其言をして然らしめば、吾は兒の(一三)立つを見るに及ばざらん。後、當に我が語を以て之に告ぐべし』と。其平居、他の子弟に教ふるに、常に此語を用ふ。吾が耳熟せり。故に能く詳かにせり。其の外事に施すことは、吾、知ること能はず。其の家に居るは、(一四)矜飾する所無し、而して爲す所は此の如し。是れ眞に中より發する者か。嗚呼、其心、仁に厚き者か。此に吾、汝が父の必ず將に後あらんとするを知れなり。汝其れ之を勉めよ。

「夫れ養は必ずしも豐ならざるも、孝ならんことを要す。利は物に博きを得ずと雖も、其心の仁に厚からんことを要す。吾、汝に教ふること能はず此れ汝が父の志なり」と。修泣いて之を志し、敢て忘れず。

先公、少うして孤、學を力め、(一五)咸平三年、進士に及第し、道州の判官・泗綿二州の推官と爲り、又、泰州の判官と爲る。享年五十有九。沙溪の瀧岡に葬る。

太夫人、姓は鄭氏、考の諱は德儀、世〻江南の名族たり。太夫人、恭儉仁愛にして禮あり、初め福

【一〇】乳者。乳母。
【一一】術者。方術を行ふ者。歳行云々。歳行とは年まはり也、年まはりより推すときは戌の年に死せんと云ふなり。
【一二】歳行。
【一三】立。成立。
【一四】矜飾。とりつくろひ、かざる。
【一五】咸平。眞宗の年號。

昌縣の太君に封ぜられ、樂安・安康・彭城三郡の太君に進封せらる。其家少うして徽なりし時より、其家を治むるに儉約を以てす。其後、常に之に過ぎしめずして曰く、「吾が兒、苟くも世に合ふこと能はず。(一六)儉薄は患難に居る所以なり」と。其後、修、夷陵に貶せらる。太夫人、言笑自若として曰く、「汝が家は故貧賤なり。吾、之に處すること素あり。汝能く之に安んぜよ。吾も亦安んせん」と。

先公の亡せしより二十年、修始めて祿を得て養ふ。又十有二年、官に朝に列し、始めて其親に贈封せらるることを得たり。又十年、修、龍圖閣の直學士・尚書吏部郎中と爲り、南京に留守す。太夫人、疾を以て官舍に終る。享年七十有二。又八年、修、非才を以て入りて樞密に副たり、遂に政事に參す。又七年にして罷めらる。(一七)二府に登りてより、天子、恩を推し、其三世を褒せらる。

蓋し(一八)嘉祐より以來、國の大慶に逢へば、必ず(一九)寵錫を加へらる。皇曾祖府君は、金紫光祿大夫・太師中書令を(二〇)累贈せられ、曾祖妣は、楚國太夫人に累封せられ、皇祖府君は、金紫光祿大夫・太師中書令・兼尚書令を累贈せられ、祖妣は、吳國太夫人に累封せられ、皇考崇公は、金紫光祿大夫・太師中書令・兼尚書令を累贈せられ、皇妣は、越國太夫人に累封せらる。(二一)今上、初めて(二二)郊するや、皇

【一六】儉薄。儉約。
【一七】二府。樞密と參知政事と二官を指す。
【一八】嘉祐。仁宗の年號。
【一九】寵錫。ありがたき賜物。
【二〇】累。度〻贈位贈官ありたるを云ふ。
【二一】今上。神宗。
【二二】郊。天を祭る也。

考は爵を賜ひて崇國公と爲し、太夫人は魏國に進號せらる。

是に於て㈢小子修泣いて言つて曰く、嗚呼、善を爲せば、報せざる無し、而れども遲速、時あり、此れ理の常なり。惟れ我が祖考、善を積み德を成すこと雖も、而れども爵を賜ひ封を受け、顯榮褒大にして、實に三朝の錫命あり。是れ、以て後世に㈣表見して、其の㈤子孫を庇賴するに足れり。乃ち其世譜を列して、具に碑に刻し、既にして又、我が皇考崇公の遺訓・大夫人の敎へて修に待つ有りし所以の者を載せ、竝に阡に揭げ、夫の小子修が德薄く能鮮く、時に遭ひ位を竊み・幸に大節を全くし・其先を辱めざるは・其來ること自る有ること を知らしむ。

熙寧三年、㈥歲、庚戌に次す、四月辛酉朔、十有五日乙亥、男・㈦推誠保德崇仁翊戴の功臣・觀文殿の學士・特進行兵部尙書・知靑州軍州事・兼管內勸農使・充京東東路安撫使・上柱國・樂安郡開國公・食邑四千三百戶・實封一千二百戶・修・表す。

㈡禮樂志の論

【三】小子。父に對する自稱。
【四】表見。あらはし、しめす。
【五】子孫を庇賴す。子孫に恩澤を被らしむ。
【六】歲。歲星。
【七】推誠云々。功臣に賜はる稱號。
【一】禮樂志の論。新唐書に載する所なり。後世に至りて、禮樂は虛器となりて政治の用を爲さざる事を言ふ。

㈡三代よりして上つかたは、㈢治、一に出でて、禮樂、天下に㈣達す。三代よりして下つかたは、治、二に出でて、禮樂、虛名と爲る。

古は宮室車輿を、以て㈤居と爲し、衣裳㈥冕弁を、以て服と爲し、㈦尊爵㈧俎豆を、以て器と爲し、㈨金石絲竹を、以て樂と爲し、以て㈩郊廟に適き、以て朝廷に臨み、以て神に事へて民を治む。其の歲時の聚會は、以て(一)朝覲(二)聘問を爲し、歡欣交接は、以て(三)射鄕食饗を爲し、衆を合はせ事を興すは、以て(四)師田學校を爲す。下、(五)里閭田畝の吉凶哀樂に至るまで、凡そ民の事、一も禮に出でざるは莫し。之に由りて以て其民を敎へ、孝慈友悌忠信仁義を爲す者は、常に、居處動作・衣服・飮食の閒を出でず。蓋し其朝夕從事する者、此に非ざるは無きなり。此れ謂はゆる治、一に出でて、禮樂、天下に達し、天下をして(六)安習して之を行ひ・善に遷り罪に遠ざかる所以を知らずして俗を成さしむるなり。

【二】三代。夏殷周。
【三】治。政治。
【四】達。行きわたる。
【五】居。居場所。
【六】冕弁。冠の名。
【七】尊爵。酒器。樽と杯。
【八】俎豆。まないた、たかつき。
【九】金石絲竹。樂器。
【十】郊。天を祭るところ。廟。祖先を祭るところ。
【一】朝覲。諸侯が春秋二季に朝すること。
【二】聘問。諸侯が大夫を使者として相訪問すること。
【三】射鄕。競射會。食饗。親睦會。
【四】師田。練兵及び田獵の儀式。
【五】里閭田畝。村里片田舍。
【六】安習。おちつきて、慣れそむ也。

三代已に亡ぶるに及び、秦の・古を變ずるに遭ひ、後の・天下を有つ者、天子・百官・名號・(一七)位序・國家の制度・宮車・服器より、一切、秦の舊を用ふ。其間に、治を欲するの主ありて改作する所を思ふと雖も、超然として遠く三代の上に復ること能はず、而して其時俗に牽かれ、稍(在來ノ者ニ)卽いて以て(一八)損益し、大抵、(一九)苟簡に安んずるのみ。其朝夕從事するは、則ち(二〇)簿書(二一)獄訟・(二二)兵食を以て急と爲し、曰く、「此れ政を爲すなり。民を治むる所以なり」と。三代の禮樂に至りては、其(二三)民物を具へて有司に藏し、時に出して之を郊廟・朝廷に用ひ、曰く、「此れ禮を爲すなり、民を敎ふる所以なり」と。此れ謂はゆる治、二に出でて、禮樂、虛名と爲るなり。

故に漢より以來、史官の記する所の事物・(二四)名數・(二五)降登・(二六)揖讓・(二七)拜俛・(二八)伏興の節は、皆、有司の事のみ。謂はゆる(二九)禮の末節なり。夫れ然り、之を郊廟・朝廷に用ひ、(三〇)搢紳大夫より、其閒に從事する者、皆、能く(三一)曉習する莫く、而して天下の人は、老死するに至るまで、未だ嘗て見ざるなり。況んや禮樂の盛んなるを識り、(三二)曉然として其意を諭り、而して其

【一七】位序。官位の順序。
【一八】損益。增減。
【一九】苟簡。閒に合はせと、手輕と。
【二〇】簿書。帳簿。
【二一】獄訟。訴訟。
【二二】兵食。兵備農政。
【二三】民物。當に名物に作るべし。禮樂の名目と物品。
【二四】名數。名目と物數。
【二五】降登。階を上下する也。
【二六】揖讓。人に挨拶する也。
【二七】拜俛。拜伏の禮。
【二八】伏興。或は伏し或は起つ也。
【二九】禮の末節。禮の末の細目なり。
【三〇】搢紳。貴人。
【三一】曉習。明かに習熟するなり。
【三二】曉然。明かなる貌。

敎化を被り、以て俗を成さんと欲するをや。嗚呼、(三三)其器を習うて而も其意を知らず、其本を忘れて而も其末を存し、又、備具すること能はず。謂はゆる朝覲・聘問・射鄕・食饗・師田・學校・(三四)冠昏・喪葬の禮は、在る者幾何ぞ。

梁より以來、始めて其當時の行ふ所を以て、周官の(三五)五禮の名に(三六)傅し、各〻一家の學を立つ。唐の初めは卽ち隋の禮を用ひ、太宗の時に至りて、中書令房元齡・祕書監魏徵、禮官・學士等と、隋の禮に因りて、增すに(三七)天子上陵・(三八)朝廟・(三九)養老・(四〇)大射・(四一)講武・(四二)讀時令・(四三)納皇后・皇太子の入學・(四四)太常行陵・(四五)合朔・(四六)陳兵・(四七)大社等を以てし、吉禮六十一篇・賓禮四篇・軍禮二十篇・嘉禮四十二篇・凶禮十一篇を爲り、是を(四八)貞觀禮と爲す。

高宗、又、太尉長孫無忌・中書令杜正倫・李義府・中書侍郎李友益・黃門侍郎劉祥道・許圉師・太子賓客許敬宗・太常卿韋琨等に詔して、之を增して一百三十卷と爲し、是を(四九)顯慶禮と爲す。其文、雜ふる

【三三】其器。禮の器物。
【三四】冠昏。冠禮と、婚禮。
【三五】五禮。吉、凶、軍、嘉、賓の五禮。
【三六】傅。傅會。
【三七】天子上陵。天子が祖宗の山陵に參詣せらるること。
【三八】朝廟。宗廟への參詣。
【三九】養老。天子自ら老人を養ひたまふ禮。
【四〇】大射。射禮。
【四一】講武。觀兵式などの禮。
【四二】讀時令。時節の行事を讀む禮。
【四三】納皇后。皇后御入內の禮。
【四四】太常行陵。太常の禮儀官が山陵を巡拜する禮。
【四五】合朔。月朔の禮。
【四六】陳兵。練兵の禮。
【四七】大社。三月社日の祭。
【四八】貞觀。唐の太宗の年號。
【四九】顯慶。唐の高宗の年號。

に〔三〇〕式令を以てし、而して義府・敬宗、方に〔三一〕幸を得、多く〔三二〕旨を希ひて傅會す。事既に施行せられ、議者皆以て非と爲す。上元三年、詔して復た貞觀禮を用ふ。是に由りて高宗の世を終るまで、貞觀・顯慶の二禮兼ね行はれ、而して有司、事に臨み、遠く古義を引き、二禮を參考して之を增損し、復た定制無し。〔三三〕武氏・中宗、繼ぐに亂敗を以てし、言ふ可き者無し。博士は禮を掌るも、官に備はるのみ。

〔三四〕元宗の開元十年、國子司業韋縚を以て禮儀使と爲し、以て五禮を掌らしむ。十四年、通事舍人王嵒、上疏して、禮記の舊文を刪去して益すに今の事を以てせんと請ふ。詔して集賢院に付して議せしむ。學士張說以爲く、「禮記は〔三五〕不刊の書なり、聖を去ること久遠にして、改易す可からず。而して唐の貞觀と顯慶との禮は、〔三六〕儀注、前後同じからず。宜しく〔三七〕折衷を加へて以て唐の禮と爲すべし」と。乃ち集賢院の學士右散騎常侍徐堅・左拾遺李銳及び太常博士施敬本に詔して撰述せしむ。年を歷れども未だ就らず。而して銳・卒す。蕭嵩、銳に代りて學士と爲り、奏す、起居舍人王仲邱・撰定して、一百五十卷と爲すと、是を大唐開元禮と爲す。是に由りて唐の五禮の文始めて備はり、而して後世之を用ふ。時に小しく損益ありと雖も、過ぐること能はざるなり。

〔三八〕貞元中、太常禮院修撰・王涇、歷代の〔三九〕郊廟沿革の制・及び其〔四〇〕工歌祝號を考次して、其〔四一〕壇屋陟降の序を圖し、郊祀錄十卷を爲る。

〔四二〕元和十一年、祕書郎修撰・韋公肅、又、開元已後の禮文損益を錄して、禮閣新儀三十卷を爲る。

十三年、太常博士・王彥威、曲臺新禮三十卷を爲る。又、元和以來の王公士民の婚祭喪葬の禮を採りて、續曲臺禮三十卷を爲る。

嗚呼、其〔四三〕文記を考ふるに、備はれりと謂ふ可し。之を以て貞觀・開元の閒に施せるは、亦、盛んなりと謂ふ可し。而れども三代の隆に至ること能はざるは、其文を具ふれども而も意焉に在らざればなり。此れ謂はゆる禮樂、虛名と爲れるなり。

〔二〕食貨志の論

【三〇】式令。式は百官の官曹にて行ふ作法、令は天下へ發する令。
【三一】幸。寵幸。
【三二】旨を希ひて云々。天子の御思召を窺ひ迎へて强ひて附け合はす。
【三三】武氏。則天武后。
【三四】元宗。玄宗。諱を避けて玄を元に書き改めたるなり。上の房元齡も同じ。
【三五】不刊の書。けづり去る可からざる書。
【三六】儀注。儀式の注釋。
【三七】折衷。中程にて折り合ひをつくる也。

【三八】貞元。唐の德宗の年號。
【三九】郊廟沿革。郊廟の禮式の沿革。
【四〇】工歌祝號。樂人の歌、祝人の神に上つる尊稱。
【四一】壇屋。壇は祭場、屋も祭を行ふ所の建築。陟降。昇降。
【四二】元和。唐の憲宗の年號。
【四三】文記。其書に記する所。

〔一〕食貨志の論。新唐書に載する所の論を節取したる者にして、其全文に非ず。食貨とは財政といふが如し。唐の財政紊亂は經常の法を失ひしに由ることを述ぶ。

古の善く其國を治めて斯民を愛養する者は、必ず經常簡易の法を立て、上をして物を愛して以て其下を養ひ、下をして力を勉めて以て其上に事へ、上足りて而も下困しまざらしむ。故に人の力を量りて之に田を授け、地の(三)産を量りて取り、以て公上に給し、其入るを量りて之を出し、以て(三)用度の數を爲す。是の三つの者、常に相須つて(四)濟して、失ふ可からず。其一を失へば、則ち其二を守ること能はず。

暴君庸主の、其(五)佚欲を縱にするに及びて、(六)苟且の吏、之に從つて(七)制を變じ時に合はせ、以て寵を上に取る。故に上に用ふる者(八)節無くして、下に取る者限無く、民、其力を竭せども、供すること能はず、是に由りて上は愈〻足らずして、下は愈〻困しむ。則ち財利の說興りて、(九)聚斂の臣用ひらる。(一〇)記に曰く、「寧ろ盜臣を畜はん」と。盜臣は誠に惡む可し。然れども一人の害のみ。聚斂の臣用ひらるれば、則ち經常の法壞れて、下に有らんよりは、寧ろ盜臣あれ

唐の始めの時、人に授くるに(一一)口分世業の田を以てし、而して之を取るに(一二)租庸調の法を以てす。

【一】産。生産額。
【二】用度の數。費用の額。
【四】濟。目的を遂ぐる也。
【五】佚欲。安逸私欲。
【六】苟且。一時の間に合はせを爲す也。
【七】制。制度。
【八】節。節度。
【九】聚斂。人民より租稅を重く取る也。
【一〇】記に曰く云々。禮記の大學の篇に曰く、其の聚斂の臣有らんよりは、寧ろ盜臣あれと。
【一一】口分世業の田。凡そ田を分つて二等と爲す、一は世業田、一は口分田なり。家に附けて渡さるる田を世業田と云ひ、人別に割り渡さるる田を口分田と云ふ。
【一二】租庸調。租は田地より出す稅、庸は人身より出す稅、調は家より出す稅。

其の之を用ふるや節あり。蓋し其の兵を畜ふるには、(一三)府衞の制を以てす。故に兵多しと雖も而も損する所無し。官を設くるには、(一四)常員の數あり。故に官濫れずして祿し易し。三代の盛時に及ばずと雖も、然れども亦、以て經常の法と爲す可きなり。

其弊に及びてや、兵は冗く官は濫にして、(一五)之が大蠹を爲す。(一六)天寶より以來、(一七)大盜屢〻起り、(一八)方鎭數〻叛き、兵革の興ること、累世息まず、而して用度の數、節すること能はず、加ふるに、驕君昏主姦利の邪臣、(一九)濟を一時に取り、屢〻其制を更むるを以てす。而して經常の法、(二〇)蕩然として盡く。是に由りて財利の說興り、聚斂の臣進む。蓋し口分世業の田壞れて、(二一)兼幷と爲り、租庸調の法壞れて、(二二)兩稅と爲り、(二三)鹽鐵・(二四)轉運・屯田・(二五)和糴・鑄錢・(二六)括苗・(二七)榷利・(二八)借商・(二九)進奉・獻助に至るまで、爲さざ

【一三】府衞。府とは唐の太宗の時、天下を十道に分ち、六百三十四箇所の府を置く、今の師團の如し。衞とは天子の親兵にして六衞あり、今の近衞兵の如し。
【一四】常員の數。一定の人員。
【一五】之が大蠹。國の大害。
【一六】天寶。玄宗の年號。
【一七】大盜云々。安祿山史・思明以來叛亂相繼ぎしを云ふ。
【一八】方鎭。節度使。
【一九】濟。一時に取る。一時の便利を圖る。
【二〇】蕩然。跡方も無き也。
【二一】兼幷。有力者の土地兼幷。
【二二】兩稅。唐の德宗の時、宰相楊炎、兩稅法を作り、夏秋二期に租稅を徵收することとす。
【二三】鹽鐵。食鹽鐵器を官營とすること。
【二四】轉運。官營の米穀運送法。
【二五】和糴。錢を出して米を買ふ也。
【二六】括苗。青苗を檢して收穫を豫想して貢賦を納めしむる也。
【二七】榷利。專賣。
【二八】借商。金を富商より借り入るること。
【二九】進奉獻助。御用金若しくは獻金の類。

る所無し。蓋し愈〻煩はしくして愈〻弊え、以て亡ぶるに至れり。

(一)藝文志の論

六經・秦に焚かれしよりして、復た漢に出でしが、其(二)師傳の道中絕し、而して簡編脫亂訛缺し、學者、其本眞を得る莫し。是に於て諸儒の(三)章句の學起る。其後、(四)傳注・箋解・義疏の流を、轉た相講述して、聖道粗明かなり。然れども其の說たるや、固より已に其繁に勝へず。

上古三王五帝以來の世次・國家興滅の終始・(五)僭竊僞亂に至るまで、史官備はれり。而して傳記・(六)小說より、外、(七)方言・地理・(八)職官・(九)氏族に暨ぶまで、皆、史官の流に出づるなり。

孔子在しし時・方に聖經を修明して以て(一〇)繆異を絀け・而して老子・書を著はして道德を論せしより、周衰ふるに接して、戰國の遊談放蕩の士、(一一)田駢・(一二)愼到・(一三)列・莊の徒、各〻其辯を極め、而して孟軻・荀卿、始めて專ら孔氏を修めて、以て異端を折く。然れども諸子の論、各〻一家を成し、前

【一】藝文志の論。新唐書の中に在る所なり。
【二】師傳。師より弟子に直接に傳ふる也。
【三】章句の學。王肅・鄭玄等が古經の章句を研究せしを云ふ
【四】傳注箋解義疏。何れも注釋なり。
【五】僭竊。僭稱竊位。
【六】小說。歷史の一種にして小事を記する者。
【七】方言。地方の言語を記する書。
【八】職官。職原の書。
【九】氏族。姓氏錄。
【一〇】繆異。繆說異端。
【一一】田駢。齊の人。談論を好む。
【一二】愼到。韓の大夫、刑名を能くす。
【一三】列莊。列子と莊子と。

世より皆存して、絕えざるなり。

夫れ(一四)王迹熄みて詩亡び、(一五)離騷作りて文辭の士興る。歷代の盛衰するや、文章、時と高下して、然して其變態百出して、窮極す可からず。何ぞ其の多きや。

漢より以來、(一六)史官、其名氏篇第を列して、以て(一七)六藝・(一八)九種・(一九)七略と爲す。唐に至りて始めて分ちて四類と爲し、經・史・子・集と曰ふ。而して藏書の盛んなる、開元よりも盛んなるは莫し。其著錄する者、五萬三千九百一十五卷、而して唐の學者自ら爲るの書、又、二萬八千四百六十九卷。

嗚呼、盛んなりと謂ふ可し。

六經の道は、簡嚴易直にして、(二〇)天人備はる。故に其れ愈〻久しくして益〻明かなり。其餘の作者は衆し。之を聖人に質せば、或は離れ或は合ふ。然れども其精深閎博、各〻其術を盡し、而して怪奇偉麗、往往其閒に震發す。此れ、奇を好み博く愛する者をして忘るること能はざらしむる所以なり。然れども(二一)凋零磨滅せるも、亦、數ふるに勝ふ可からず。豈に其れ文を(二二)華

【四】王迹。王者の迹。孟子離婁下に云はく、王者の迹熄みて詩亡ぶと。
【一五】離騷。楚の屈原の作りし者。
【一六】史官。班固、劉歆等。
【一七】六藝。詩、書、易、春秋、禮、樂の六經。
【一八】九種。六經に論語、孝經、爾雅を加へたる者。
【一九】七略。劉歆、天下の書を七略に分類す。卽ち輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方技略なり。
【二〇】天人。天道人道。
【二一】凋零磨滅。凋零は草木の凋みて落つるに譬へ、磨滅は金石などの磨り減りて消滅するに譬ふ。散亂亡失の意。
【二二】華。はなやかに飾る也。

にし實少くして、以て遠きに行はるるに足らざるか。而して(三)俚言俗說、猥に、存する者あり。亦其れ幸不幸の者あるか。今、篇に(目錄ナシ)著はせども、其名ありて而も其實無き者、十に蓋し五六なり。惜まざる可けんや。

(一)伶官傳の敍論

嗚呼、盛衰の理は、天命と曰ふと雖も、豈に人事に非ずや。(二)莊宗の天下を得る所以と、其の之を失ふ所以とを原ぬれば、以て之を知る可し。世に言ふ、(三)晉王の將に終らんとするや、三矢を以て莊宗に賜ひ、而して之に告げて曰く、「(四)梁は吾が仇なり。(五)燕王は吾が立つる所、契丹は吾と約して兄弟たり、而るに皆晉に背きて以て梁に歸す。此三者は、吾が遺恨なり。爾に三矢を與ふ。爾其れ乃父の言を忘るること無かれ」と。莊宗受けて之を廟に藏む。其後、兵を用ふれば、則ち從事を遣はし、一(六)少牢を以て廟に告げ、其矢を請ひ、盛るに錦囊を以てし、負うて前驅し、凱旋するに及びて之を納む。其の燕父子を繫ぐに(七)組を以てし、梁の君臣の首を

【三】俚言俗說。上に言へる傳記小說の類。
【一】伶官傳の敍論。五代史に載する所なり。五代史は歐陽公の傑作と稱せらる。伶官とは樂人なり。五代の唐の莊宗、伶官周匝・俳優敬新磨等を嬖し、末路振はず、遂に郭門高に弑せらる。
【二】莊宗、諱は存勗、晉王克用の長子、後梁を亡ぼして帝となる、是を後唐となす。
【三】晉王。克用。莊宗の父。
【四】梁。梁の太祖朱全忠。
【五】燕王。劉守光。盧陵の節度使劉仁恭の子なり。仁恭は晉王が唐に薦めて節度使となしし所の人なり。然るに其子守光、晉に背きて燕王となる。
【六】少牢。羊の供物。
【七】組。紐。

(八)函するに方りて、太廟に入り、矢を先王に還して、告ぐるに成功を以てす。其意氣の盛んなる、壯と謂ふ可きかな。

仇讐已に滅び、天下已に定まるに及びて、(九)一夫夜呼びて、亂者四もに應ずるに及ばずして、士卒離散し、(一〇)莊宗倉皇として(一一)東に出で、未だ賊を見るに及ばずして、君臣相顧みて、歸する所を知らず、天に誓ひ髮を斷ち、泣下りて襟を沾すに至る。何ぞ其の衰ふるや。

豈に得るの難くして失ふの易きか。抑〻其成敗の迹を本ぬるに、而ち皆人に自るか。(一二)書に曰く、「滿は損を招き、謙は益を受く」と。憂勞は以て國を興す可く、(一三)逸豫は以て身を亡ぼす可し。自然の理なり。故に其盛んなるに方りてや、天下の豪傑を擧りて、能く之と爭ふ莫し。其衰ふるに及びてや、數十の(一四)伶人、之を困しめ、而して身死し國滅び、天下の笑と爲る。

夫れ禍患は(一五)忽微に積み、而して智勇は多く溺るる所に困しむ。豈に獨り伶人のみならんや。伶官傳を作る。

【八】函。箱詰めにする也。
【九】一夫云々。李嗣源、命を奉じて趙在禮を鄴に討つや、一夜從馬直の軍士趙破敗と云ふ者、亂を作し、嗣源を擁して城に入る、在禮迎へて嗣源を奉じて將となす、是に於て軍を率ゐて京師を犯す。
【一〇】倉皇。あはただしき貌。
【一一】東に出づ。莊宗の汴に出奔せしを云ふ。
【一二】書に曰く云々。書經の大禹謨の語。
【一三】逸豫。安逸豫樂。
【一四】伶人。樂人。
【一五】忽微。微小なること。

(二)宦官傳の論

古より宦者、人の國を亂る。其(一)源流、女禍よりも深し。女は(二)色のみ。宦者の害は一端に非ざるなり。

蓋し其の事を用ふるや、(四)近くして習れ、其の心たるや、(三)專らにして忍び、能く小善を以て人の意に中り、小信もて人の心を固くし、人主をして必ず之を信じて親しましめ、其の已に信ずるを待ちて、然る後、懼すに禍福を以てして之を(五)把持す。忠臣(七)碩士の、朝廷に列するありと雖も、而も人主以爲らく、己を去ると疎遠なり、起居飲食、前後左右の・親しくして恃む可きものたるに若かざる也と。故に前後左右の者日に益〻親しければ、則ち忠臣碩士日に益〻疎く、而して人主の勢日に益〻孤なり。勢孤なれば則ち禍を懼るるの心日に益〻切にして、把持する者日に益〻牢し。

(九)安危は其喜怒に出で、禍患は帷闥に伏す。則ち嚮の謂はゆる恃む可きものは、乃ち患を爲す所以なり。患已に深くして之を覺り、疎遠の臣と與に左右の親近を圖らんと欲す。之を急にすれば則ち人主を挾みて以て質と爲す。聖智あり(一〇)姦豪をして借りて以て資と爲して起つを得しめ、其種類を挾し、盡く殺して以て天下の心を快くするに至りては、則ち俱に傷つきて兩ながら敗る。故に其大なる者は國を亡ぼし、其次に身を亡ぼし、而して(一一)姦の禍、常に此の如き者、一世に非ざるなり。夫れ人主たる者は、禍を內に養うて忠臣碩士を外に疎んずることを欲するに非ず。蓋し其(一二)漸積して勢之を然らしむればなり。

夫れ女色の惑は、不幸にして悟らざれば、則ち禍斯に及ぶ。其れをして一たび悟らしめば、(一三)捽して之を去りて可なり。宦者の・禍を爲すは、悔悟せんと欲すと雖も、而も勢、得て去らざる有るなり。唐の(一三)昭宗の事は、是れのみ。故に「女禍よりも深し」と曰ふは、此を謂ふなり。戒めざる可けんや。

【一】宦官傳の論。五代史中に載する所なり。
【二】源流。本末。五代史には流の字無し。
【三】色。容貌。
【四】近くして習る。其君に接近して諸事に習熟す。
【五】專らにして忍ぶ。專一にして辛抱强し。
【六】把持。人をくるめ込むこと。
【七】碩士。賢人。
【八】孤。孤立。
【九】安危云々。人主の安危は宦官の喜怒に因り、國家の禍患は禁中に伏在す。

【一〇】姦豪云々。姦雄は名を官官征伐に借り、此れを踏み臺として起り、宦官の種類を遍く搜し出し、盡く殺して天下の人心を滿足せしめて而して後に已む。
【一一】漸積。漸次に積み重なる。
【一二】捽。頭髮をつかむ也。
【一三】昭宗の事。昭宗の時、宦官劉季述、諸王十一人を圍み殺し、帝を少陽院に幽して、太子裕を立つ。崔胤討つて季述を誅す。帝、位に復す。朱全忠、兵を擧ぐるに及びて、宦者韓全誨、上を劫かして鳳翔に往く。

(二)周臣列傳の贊

嗚呼、器を作るには、良材無くして良匠あり、國を治むるには、能臣無くして能君あり。蓋し材は匠を待ちて成り、臣は君を待ちて用ひらる。故に曰く、國を治むるは、之を(三)奕に譬ふ。其用を知りて置くこと其處を得る者は勝ち、其用を知らずして置くこと其處に非ざる者は敗る。敗者は棊に臨みて、終日、目を注ざて心を勞す。奕を善くする者をしてこれを視しめ、之が爲めに其處を(三)易置せば則ち勝つ。勝者の用ふる所は、敗者の棋なり。興國の用ふる所は、亡國の臣なり。

(四)王朴の材は、誠に能と謂ふ可し。世宗に遇はずんば、何ぞ施す所あらんや。世宗の時、外は征伐を事とし、攻むれば取り戰へば勝ち、內は制度を修め、刑法を議し、(五)律歷を定め、禮樂の(六)遺文を講求す。用ふる所の者は、五代の士なり。豈に皆晉漢に愚怯にして周に材智ならんや。惟だ用ふる所を知るのみ。

夫れ亂國の君は、常に愚不肖を上に置きて、其不能を彊ひて以て其(七)短惡を暴はし、賢智を下に置きて、其材能を泯沒す。君子小人をして皆其所を失うて身危亡に陷らしむ。治國の君は、能く賢知を近きに置き、而して愚不肖を遠きに置き、君子小人をして各〻其分に適して身安樂を享けしむ。治亂相去る遠きこと甚だしと雖も、而も其の之を致す所以の者は多からざるなり。其の置く所を反するのみ。

嗚呼、古より治君少くして亂君多し。況んや五代に於てをや。士の遇不遇なる者、歎ずるに勝ふ可けんや。

【一】周臣列傳の贊。五代史に在り。周の世宗が善く亡國の臣を用ひたるを云ふ。
【二】奕。碁。
【三】易置。置き易ふる也。
【四】王朴。周の世宗、擧げて樞密使と爲す。能く謀り、能く斷ず。
【五】律歷。歷は曆と通ず。こよみ。
【六】遺文。古くより遺り傳はりたる文。
【七】短惡。缺點。

(二)一行傳の敍論

嗚呼、五代の亂は極まれり。(二)傳に謂はゆる天地閉ぢ賢人隱るるの時か。此の時に當りて、臣、其君を弑し、子、其父を弑し、而して搢紳の士、其祿に安んじて其朝に立ち、(三)充然として復た廉恥の色無き者、皆是れなり。吾以謂らく、古より忠臣義士は多く亂世に出づと。而して怪しむ、當時、道ふ可き者何ぞ少きや。豈に果して其人無からんや。

干戈興り、學校廢れ、而して禮義衰へ、風俗(四)隳壞すること、此の如きに至ると雖も、然れども古より天きて、其材能を泯沒す。君子小人をして皆其所を失うて身危亡に陷らしむ。治國の君は、能く賢知を近きに置き、而して愚不肖を遠きに置き、君子小人をして各〻其分に適して身安樂を享けしむ。治亂相去る遠きこと甚だしと雖も、而も其の之を致す所以の者は多からざるなり。其の置く所を反するのみ。

嗚呼、古より治君少くして亂君多し。況んや五代に於てをや。士の遇不遇なる者、歎ずるに勝ふ可けんや。

【一】一行傳の敍論。五代史に在り。一行傳とは、孝悌とか忠義とか云ふが如き或る一事の傳ふべきものある人の傳記なり。
【二】傳。易の坤卦の文言傳なり。
【三】充然。平氣なる貌。
【四】隳壞。墮落破壞。

下、未だ嘗て人無くんばあらざるなり。吾意ふに、必ず、身を潔くして㊁自負するの士の、世を嫉み遠く去りて見る可からざる者あらん。

古より材賢、中に㊂韜みて外に見はさざるあり、或は陋巷に窮居して身を草莽に委す。顔子の行と雖も、仲尼に遇はずんば、名彰れじ。況んや世變㊆多故にして、君子の道消するの時をや。吾又以謂らく、必ず、材能を負ひ節義を修めて而も下に㊇沈淪し泯泯として聞ゆる無き者あらん。之を傳記に求むるに、而も亂世㊈崩離し、文字殘缺して、復た得可からず。然れども僅に得る者四五人のみ。

山林に處して麋鹿に羣するは、以て㊉中道と爲すに足らずと雖も、然れども其の人の祿を食み俛首して羞を包まんよりは、心に愧づること無く身を放にして自得するに孰若ぞや。吾、二人を得たり。鄭遨・張薦明と曰ふ。勢利、其心を屈せず、去就、其義に違はざるは、吾、一人を得たり。石昂と曰ふ。苟くも君に利ならば、忠を以て罪を獲とも、何ぞ必ずしも自ら明かにせん、死に至りて而も言はざる者あり、此れ古の義士なり。吾、一人を得たり。程福賛と曰ふ。

【五】自負。自ら才能をたのむ也。
【六】韜。包藏する也。
【七】多故。事故多き也。
【八】沈淪。物の水底に沈みたるが如きを云ふ。
【九】崩離。くづれ離れて統一無きを云ふ。
【一〇】中道。中正の道。

五代の亂、君、君たらず、臣、臣たらず、父、父たらず、子、子たらず、兄弟夫婦人倫の際に至るまで、大いに壞れざるは無く、而して天理、其れ滅するに幾し。此の時に於て、能く孝悌を以て、自ら一鄕に修めて、風、天下に行はるる者、猶ほ或は之れ有らん。然れども其事迹著はれずして、㊁紀次す可き無し。獨り其名氏のみ、或は書に見はるる者に因り、吾亦敢て沒せず、而して其の略錄す可き者、吾、一人を得たり。李自倫と曰ふ。

一行傳を作る。

㊂唐の六臣傳の後論

嗚呼、始めて朋黨の論を爲す者は誰ぞや。㊂俑を作る者よりも甚だしきなり。眞に不仁の人と謂ふ可きかな。

予嘗て繁城に至りて、㊃魏の受禪の碑を讀み、漢の羣臣魏の功德を稱して、㊄大書深刻し、自ら其姓名を列して、以て世に㊅夸耀するを見、又、梁の實錄を讀み、文蔚等の爲す所此の如きを見て、未だ嘗て之が爲めに涕を流さずんばあらざるなり。夫

【一】紀次。記錄。
【二】唐の六臣傳の後論。五代史に在り。六臣とは、張文蔚、張策、趙光逢、薛貽矩、蘇循、楊涉の六人、皆唐の臣にして梁に降りし者なり。
【三】俑。死者に隨はしめて埋むる所の人形なり。孔子曰く、始めて俑を爲る者は、其れ後無からんかと。
【四】魏の受禪の碑。魏の曹丕が漢の獻帝の禪讓を受けたる詔を刻みたるもの。
【五】大書深刻。大字にて書き深く石に彫刻する也。
【六】夸耀。誇りかがやかす。

れ國を以て人に予へて、而も自ら夸耀し、乃ち遂に之を相く、此れ小人に非ずんば、孰れか能く爲さんや。

漢唐の末、其朝を擧げて皆小人なり。而して其君子は何に在るや。漢の亡ぶるに當りてや、先づ朋黨を以て天下の賢人君子を禁錮す。而して其朝に立つ者は、皆小人なり、然る後漢從つて亡ぶ。唐の亡ぶるに及びてや、又、先づ朋黨を以て、盡く朝廷の士を殺す、而して其餘の存する者は、皆〔六〕庸懦不肖〔七〕傾險の人なり、然る後唐從つて亡ぶ。

夫れ人の國を空しくして其君子を去らんと欲する者は、必ず朋黨の說を進む。人主の勢を孤にして其耳目を蔽はんと欲する者は、必ず朋黨の說を進む。國を奪つて人に與へんと欲する者は、必ず朋黨の說を進む。

夫れ君子たる者は、固より常に過寡し。小人、之に害を加へんと欲すれば、則ち誣ふ可き者あり、誣ふ可からざる者あり、遍く及ぶこと能はざるなり。天下の善を擧げ、其類を求めて、盡く之を去らんと欲するに至りては、惟だ指して以て朋黨と爲すのみ。故に其親戚故舊を、〔八〕交游〔九〕執友をも、之を朋黨と謂ひて可なり。〔一〇〕官學相同じきをも、之を朋黨と謂ひて可なり。門生〔一一〕故吏をも之を朋黨と謂ひて可なり。是數者は、皆、其類なり。皆、

【六】庸懦。凡庸懦弱。
【七】傾險。心の曲りて隘險なること。
【八】交游。互に往來する人。
【九】執友。同志友人。
【一〇】官學。仕官と游學。
【一一】故吏。もと部下たりし役人。

善人なり。故に曰く、人の國を空しうして其君子を去らんと欲する者は、惟だ朋黨を以て之を罪すれば、則ち免るる者無し。

夫れ善を善とするの相樂しむは、其類同じきを以てなり、此れ自然の理なり。故に善なる者を聞けば、必ず相稱譽す。稱譽すれば則ち之を朋黨と謂ふ。善なる者を得れば、必ず相〔一二〕薦引す。薦引すれば則ち之を朋黨と謂ふ。人をして、善を聞くも敢て稱せざらしめば、則ち人主の耳、下に善あることを聞かじ。善を見るも敢て薦めずんば、則ち人主の目、善人を見ること を得じ。善人日に遠くして小人日に進まば、則ち人主たる者、〔一三〕偎偎然として、誰と與にか之れ治安の計を圖らんや。故に曰く、人主の勢を孤にして其耳目を蔽はんと欲する者は、必ず朋黨の說を用ふ。

一君子存すれば、羣小人、衆しと雖も、必ず忌む所ありて、敢て爲さざる所あり。惟だ國を空しうし、君子無くして、然る後小人、志を爲さざる所無きに肆にするを得。則ち漢魏唐梁の際、是れなり。故に曰く、國を奪うて人に予ふ可きは、其國に君子無きに由る。國を空しうして君子無きは、朋黨を以て之を去るに由る。

嗚呼、朋黨の說、人主、察せざる可けんや。〔一四〕傳に曰く、「一言にして以て國を喪ぼす可し」とは、

【一二】薦引。推薦擧用する也。
【一三】偎偎然。往く所を知らざるの貌。
【一四】傳に曰く云々。論語の子路篇に見ゆ。

其れ是れを之れ謂ふか。鑒みざる可けんや、戒めざる可けんや。

國譯唐宋八家文 上卷 終

唐宋八家文卷一

韓愈退之著

原道

博愛之謂ㇾ仁。行而宜ㇾ之之謂ㇾ義。由ㇾ是而之焉之謂ㇾ道。足ニ乎己一無ㇾ待ニ於外一之謂ㇾ德。仁與ㇾ義爲ニ定名一。道與ㇾ德爲ニ虛位一。故道有ニ君子小人一。而德有ㇾ凶有ㇾ吉。老子之小ニ仁義一非ニ毀之一也。其見者小也。坐ㇾ井而觀ㇾ天。曰ニ天小一者。非ニ天小一也。彼以ニ煦煦一爲ニ仁。孑孑爲ㇾ義。其小ㇾ之也亦宜。其所ㇾ謂道。道ニ其所ㇾ道一。非ニ吾所ㇾ謂道一也。其所ㇾ謂德。德ニ其所ㇾ德一。非ニ吾所ㇾ謂德一也。凡吾所ㇾ謂道德云者。合ニ仁與ㇾ義言ㇾ之也。一人之私言也。周道衰。孔子沒。火ニ於秦一。黃老於ニ漢。佛一於ニ晉魏梁隋之閒一。其言ニ道德仁義一者。不ㇾ入ニ於楊一。則入ニ於墨一。不ㇾ入ニ於老一。則入ニ於佛一。入者汙ㇾ之。噫。後之人。其欲ㇾ聞ニ仁義道德之說一。孰從而聽ㇾ之。老者曰。孔子吾師之弟子也。爲ニ孔子者一習ニ聞其說一。樂ニ其誕一而自小也。亦曰。吾師亦嘗師ㇾ之云爾。不ニ惟舉一之於其口一。而又筆ニ之於其書一。噫。後之人雖ㇾ欲ㇾ聞ニ仁義道德之說一。其孰從而求ㇾ之。甚矣人之好ㇾ怪也。不ㇾ求ニ其端一。不ㇾ訊ニ其末一。惟怪之欲ㇾ聞。古之爲ㇾ民者四。今之爲ㇾ民者六。古之教者處ニ其一一。今之教者處ニ其三一。農之家一。而食ニ粟之家六一。工之家一。而用ニ器之家六一。賈之家一。而資ニ焉之家六一。奈之何民不ニ窮且盜一也。古之時。人之害多矣。有ニ聖人者一立。然後教之。以ニ相生養之道一。爲ニ之君一。爲ニ之師一。驅ニ其蟲蛇禽獸一。而處ニ之中土一。寒然後爲ニ之衣一。饑然後爲ニ之食一。木處而顚。土處而病也。然後爲ニ之宮室一。爲ニ之工一。以贍ニ其器用一。爲ニ之賈一。以通ニ其有無一。爲ニ之醫藥一。以濟ニ其夭死一。爲ニ之葬埋祭祀一。以長ニ其恩愛一。爲ニ之禮一。以次ニ其先後一。爲ニ之樂一。以宣ニ其湮鬱一。爲ニ之政一。以率ニ其怠惰一。爲ニ之刑一。以鋤ニ其强梗一。相欺也。爲ニ之符璽斗斛權衡一以信ニ之一。相奪也。爲ニ之城郭甲兵一以守ニ之一。害至而爲ニ之備一。患生而爲ニ之防一。今其言曰。聖人不ㇾ死。大盜不ㇾ止。剖ㇾ斗折ㇾ衡。而民不ㇾ爭。嗚呼。其亦不ㇾ思而已矣。如古

清沈德潛確士撰

之無聖人人之類滅久矣何也無羽毛鱗介以居寒熱也無爪牙以爭食也是故君者出令者也臣者行君之令而致之民者出粟米麻絲作器皿通貨財以事其上者也君不出令則失其所以爲君臣不行君之令而致之民則失其所以爲臣民不出粟米麻絲作器皿通貨財以事其上則誅今其法曰必棄而君臣去而父子禁而相生養之道以求其所謂清淨寂滅者嗚呼其亦幸而出於三代之後不見黜於禹湯文武周公孔子也其亦不幸而不出於三代之前不見正於禹湯文武周公孔子也帝之於王其號各殊其所以爲聖一也夏葛而冬裘渴飲而饑食其事殊其所以爲智一也今其言曰冬裘渴之易也責饑之食者曰曷不爲葛之易也責渴之易也曰古之欲明明德於天下者先治其國欲齊其家者先修其身欲修其身者先正心而誠意者將以有爲也今也欲治其心而外天下國家滅其天常子焉而不父其父臣焉而不君其君民焉而不事其事孔子之作春秋也諸侯用夷禮則夷之進於中國則中國之經曰夷狄之有君不如諸夏之亡詩曰戎狄是膺荆舒是懲今也舉夷狄之法而加之先王之教之上幾何其不胥而爲夷也夫所謂先王之教者何也博愛之謂仁行而宜之之謂義由是而之焉之謂道足乎己無待於外之謂德其文詩書易春秋其法禮樂刑政其民士農工賈其位君臣父子師友賓主昆弟夫婦其服麻絲其居宮室其食粟米果蔬魚肉其爲道易明而其爲教易行也是故以之爲己則順而祥以之爲人則愛而公以之爲心則和而平以之爲天下國家無所處而不當是故生則得其情死則盡其常郊焉而天神假廟焉而人鬼饗曰斯道也何道也曰斯吾所謂道也非向所謂老與佛之道也堯以是傳之舜舜以是傳之禹禹以是傳之湯湯以是傳之文武周公文武周公傳之孔子孔子傳之孟軻軻之死不得其傳焉荀與揚也擇焉而不精語焉而不詳由周而上上而爲君故其事行由周公而下下而爲臣故其說長然則如之何而可也曰不塞不流不止不行人其人火其書廬其居明先王之道以道之鰥寡孤獨癈疾者有養也其亦庶乎其可也

原性

性也者與生俱生也情也者接於物而生也性之品有三而其所以爲性者五情之品有三而其所以爲情者七曰何也曰性之品有上中下三上焉者善焉而已矣中焉者可導而上下也下焉者惡焉而已矣其所以爲性者五曰仁曰禮曰信曰義曰智上焉者之於五也主於一而行於四中焉者之於五

也一不少有焉則少反焉其於四也混下焉者之於五也反於一而悖於四性之於情視其品情之品有上中下三其所以爲情者七曰喜曰怒曰哀曰懼曰愛曰惡曰欲上焉者之於七也動而處其中者也中焉者之於七也有所甚有所亡然而求合其中者也下焉者之於七也亡與甚直情而行者也情之於性視其品孟子之言性曰人之性善荀子之言性曰人之性惡揚子之言性曰人之性善惡混夫始善而進惡與始惡而進善與始也混而今也善惡皆舉其中而遺其上下者也得其一而失其二者也叔魚之生也其母視之知其必以賄死楊食我之生也子文以爲大戚知若敖氏之鬼不食也人之性果善乎后稷之生也其母無災其始匍匐也則岐岐然嶷嶷然文王之在母也母不憂既生也傅不勤既學也師不煩人之性果惡乎堯之朱舜之均文王之管蔡習非不善也而卒爲奸瞽瞍之舜鯀之禹習非不惡也而卒爲聖人人之性善惡果混乎故曰三子之言性也舉其中而遺其上下者也得其一而失其二者也叔向之母聞其號也知必滅其宗越椒之生也子善乎后稷之生也其母無災其始匍匐也則岐岐然嶷嶷然文王之在母也母不憂既生也傅不勤既學也師不煩人之性果惡乎堯之朱舜之均文王之管蔡習非不惡也而卒爲聖人人之性善惡果混乎故曰三子之言性也舉其中而遺其上下者也得其一而失其二者也叔向之母聞其號也知必滅其宗越椒之生也子之性就學而愈明下之性畏威而寡罪是故上者可教而下者可制也其品則孔子謂不移也曰今之言性者異於此何也曰今之言者雜佛老而言也者奚言而不異

原人

形於上者謂之天形於下者謂之地命於其兩閒者謂之人形於上日月星辰皆天也形於下草木山川皆地也命於其兩閒夷狄禽獸皆人也曰然則謂禽獸人可乎曰非也指山而問焉曰山乎曰山可也山有草木禽獸皆舉之矣指山之一草而問焉曰山乎曰山可行地道亂而草木山川不得其平人道亂而夷狄禽獸不得其情天者日月星辰之主也地者草木山川之主也人者夷狄禽獸之主也主而暴之不得其爲主之道矣是故聖人一視而同仁篤近而舉遠

原鬼

有嚮於梁從而燭之無見也斯鬼乎曰非也鬼無聲有立於堂從而視之無見也斯鬼乎曰非也鬼無形有觸吾躬從而執之無得也斯鬼乎曰非也鬼無聲與形安有氣曰鬼無聲也無形也無氣也果無鬼乎曰有形而無聲者物有之矣風霆是也有聲與形者物有之矣人獸是也無聲與形者物有之矣土石是也有聲而無形者物有之矣鬼神是也曰然則有怪而與民物接者何也曰是有二有鬼有物

漠然無形與聲者。鬼之常也。民有忤於天。有違於民。有爽於物。逆於倫。而感於氣。於是乎。鬼有形於形。有憑於聲。以應之而下殃禍焉。皆民之爲之也。其既也。又反乎其常。曰。何謂物。曰。成於形與聲者。土石風霆人獸是也。反乎無聲與形者。鬼神是也。不能有形與聲。不能無形與聲者。物怪是也。故其作而接於民也無恆。故有動於民而爲禍。亦有動於民而爲福。亦有動於民而莫之爲禍福。適丁民之有是時也。作原鬼。

原毀

古之君子。其責己也重以周。其待人也輕以約。重以周。故不怠。輕以約。故人樂爲善。聞古之人有舜者。其爲人也。仁義人也。求其所以爲舜者。責於己曰。彼人也。予人也。彼能是。而我乃不能是。早夜以思。去其不如舜者。就其如舜者。聞古之人有周公者。其爲人也。多才與藝人也。求其所以爲周公者。責於己曰。彼人也。予人也。彼能是。而我乃不能是。早夜以思。去其不如周公者。就其如周公者。舜大聖人也。後世無及焉。周公大聖人也。後世無及焉。是人也乃曰。不如舜。不如周公。吾之病也。是不亦責於身者重以周乎。其於人也。曰。彼人也。能有是。是足爲良人矣。能善是。是足爲藝人矣。取其一。不責其二。卽其新。不究其舊。恐恐然。惟懼其人之不得爲善之利。一善易修也。一藝易能也。其於人也。乃曰。能有是。是亦足矣。曰。能善是。是亦足矣。不亦待於人者輕以約乎。今之君子則不然。其責人也詳。其待己也廉。詳故人難於爲善。廉故自取也少。己未有善。曰。我善是。是亦足矣。己未有能。曰。我能是。是亦足矣。外以欺於人。內以欺於心。未少有得而止矣。不亦待其身者已廉乎。其於人也。曰。彼雖能是。其人不足稱也。彼雖善是。其用不足稱也。擧其一。不計其十。究其舊。不圖其新。恐恐然。惟懼其人之有聞也。是不亦責於人者已詳乎。夫是之謂不以衆人待其身。而以聖人望於人。吾未見其尊己也。雖然。爲是者有本有原。怠與忌之謂也。怠者不能修。而忌者畏人修。吾嘗試之矣。嘗試語於衆曰。某良士。某良士。其應者必其人之與也。不然則其所疎遠不與同其利者也。不然則其畏也。不若是。强者必怒於言。懦者必怒於色矣。又嘗語於衆曰。某非良士。某非良士。其不應者必其人之與也。不然則其所疎遠不與同其利者也。不然則其畏也。不若是。强者必說於言。懦者必說於色矣。是故。事修而謗興。德高而毀來。嗚呼。士之處此世。而望名譽之光。道德之行。難已。將有作於上者。得吾說而存之。其國家可幾而理歟。

對禹問

或問曰。堯舜傳之賢。禹傳之子。信乎。曰然。然則禹之賢不及於堯與舜也歟。曰不然。堯舜之傳賢也。欲天下之得其所也。禹之傳子也。憂後世爭之之亂也。堯舜之利民也大。禹之慮民也深。曰。然則堯舜何以不憂後世。曰。舜如堯。堯傳之。禹如舜。舜傳之。得其人而傳之。堯舜也。無其人。慮其患而不傳者禹也。舜不能以傳禹。堯爲不知人。禹不能以傳子。舜爲不知人。堯以傳舜。爲憂後世。禹以傳子。爲慮後世。曰。禹之慮也則深矣。傳之子而當不淑則奈何。曰。時益以難理。傳之人則爭。未前定也。傳之子則不爭。前定也。前定。雖不當賢。猶可以守法。不前定而不遇賢。則爭且亂。天之生大聖也不數。其生大惡也。亦不數。傳諸人。得大聖。然後人莫敢爭。傳諸子。得大惡。然後人受其亂。禹之後四百年。然後得桀。亦四百年。然後得湯與伊尹。湯與伊尹。不可待而傳也。與其傳不得聖人而爭且亂。孰若傳諸子。雖不得賢猶可守法。曰。孟子之所謂天與賢則與賢。天與子則與子者。何也。曰。孟子之心。以爲聖人不苟私於其子。以害天下。求其說而不得。從而爲之辭。

伯夷頌

士之特立獨行。適於義而已。不顧人之是非。皆豪傑之士。信道篤而自知明者也。一家非之。力行而不惑者寡矣。至於一國一州非之。力行而不惑者。蓋天下一人而已矣。若至於擧世非之。力行而不惑者。則千百年乃一人而已耳。若伯夷者。窮天地。亙萬世。而不顧者也。昭乎日月不足爲明。崒乎泰山不足爲高。巍乎天地不足爲容也。當殷之亡。周之興。微子賢也。抱祭器而去之。武王周公聖也。從天下之賢士與天下之諸侯。而往攻之。未嘗聞有非之者也。彼伯夷叔齊者。乃獨以爲不可。殷既滅矣。天下宗周。彼二子乃獨恥食其粟。餓死而不顧。由是而言。夫豈有求而爲哉。信道篤而自知明也。今世之所謂士者。一凡人譽之。則自以爲有餘。一凡人沮之。則自以爲不足。彼獨非聖人。而自是如此。夫聖人乃萬世之標準也。予故曰。若伯夷者。特立獨行。窮天地。亙萬世。而不顧者也。雖然。微二子。亂臣賊子。接迹於後世矣。

師說

古之學者必有師。師者所以傳道受業解惑也。人非生而知之者。孰能無惑。惑而不從師。其爲惑也。終不解矣。生乎吾前。其聞道也。固先乎吾。吾從而師之。生乎吾後。其聞道也。亦先乎吾。吾從而師之。吾師道也。夫庸知其年之先後生於吾乎。是故。無貴無賤。無長無少。道之所存。師之所存也。嗟乎。師道之不傳也久矣。欲人之無惑也難矣。古之聖人。其出人也遠矣。猶且從師而問焉。今之衆人。其下聖人也亦遠矣。而恥學於師。是故。聖益聖。愚益愚。聖人之所以爲聖。愚人之所以爲愚。其皆出於此乎。愛其子。擇師而敎之。於其身也。則恥師焉。惑矣。彼童子之師。授之書而習其句讀者。非吾所謂傳其道解其惑者也。句讀之不知。惑之不解。或師焉。或不焉。小學而大遺。吾未見其明也。巫醫樂師百工之人。不恥相師。士大夫之族。曰師曰弟子云者。則羣聚而笑之。問之則曰。彼與彼年相若也。道相似也。位卑則足羞。官盛則近諛。嗚呼。師道之不復可知矣。巫醫樂師百工之人。君子不齒。今其智。乃反不能及。其可怪也歟。聖人無常師。孔子師郯子。萇弘。師襄。老聃。郯子之徒。其賢不及孔子。孔子曰。三人行則必有我師。是故。弟子不必不如師。師不必賢於弟子。聞道有先後。術業有專攻。如是而已。李氏子蟠。年十七。好古文。六藝經傳。皆通習之。不拘於時。學於余。余嘉其能行古道。作師說以貽之。

讀荀子

始吾讀孟軻書。然後知孔子之道尊。聖人之道易行。王易王。霸易霸也。以爲孔子之徒沒。尊聖人者。孟氏而已。晩得揚雄書。益尊信孟氏。因雄書而孟氏益尊。則雄者亦聖人之徒歟。聖人之道。不傳於世。周之衰。好事者各以其說干時君。紛紛籍籍相亂。六經與百家之說錯雜。然老師大儒猶在。火於秦。黃老於漢。其存而醇者。孟軻氏而止耳。揚雄氏而止耳。及得荀氏書。於是又知有荀氏者也。考其辭。時若不粹。要其歸。與孔子異者鮮矣。抑猶在軻雄之閒乎。孔子刪詩書。筆削春秋。合於道者著之。離於道者黜之。故詩書春秋無疵。余欲削荀氏之不合者。附於聖人之籍。亦孔子之志歟。孟氏醇乎醇者也。荀與揚大醇而小疵。

雜說一

龍噓氣成雲。雲固弗靈於龍也。然龍乘是氣。茫洋窮乎玄閒。薄日月。伏光景。感震電。神變化。水下土。汩陵谷。雲亦靈怪矣哉。雲龍之所能使爲靈也。若龍之靈。則非雲之所能使爲靈也。然龍弗得雲。無以神其靈矣。失其所憑依。信不可歟。異哉。其所憑依。乃其所自爲也。易曰。雲從龍。既曰龍雲從之矣。

雜說四

世有伯樂。然後有千里馬。千里馬常有。而伯樂不常有。故雖有名馬。祗辱於奴隸人之手。駢死於槽櫪之閒。不以千里稱也。馬之千里者。一食或盡粟一石。食馬者。不知其能千里而食也。是馬也。雖有千里之能。食不飽。力不足。才美不外見。且欲與常馬等。不可得。安求其能千里也。策之不以其道。食之不能盡其材。鳴之不能通其意。執策而臨之曰。天下無馬。嗚呼。其眞無馬耶。其眞不知馬也。

獲麟解

麟之爲靈。昭昭也。詠於詩。書於春秋。雜出於傳記百家之書。雖婦人小子。皆知其爲祥也。然麟之爲物。不畜於家。不恆有於天下。其爲形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。然則雖有麟。不可知其爲麟也。角者吾知其爲牛。鬣者吾知其爲馬。犬豕豺狼麋鹿。惟麟也不可知。不可知。則其謂之不祥也亦宜。雖然。麟之出。必有聖人在乎位。麟爲聖人出也。聖人者必知麟。麟之果不爲不祥也。又曰。麟之所以爲麟者。以德不以形。若麟之出不待聖人。則謂之不祥也亦宜。

進學解

國子先生晨入太學。招諸生立館下。誨之曰。業精於勤。荒於嬉。行成於思。毀於隨。方今聖賢相逢。治具畢張。拔去兇邪。登崇俊良。占小善者。率以錄。名一藝者。無不庸。爬羅剔抉。刮垢磨光。蓋有幸而獲選。孰云多而不揚。諸生業患不能精。無患有司之不明。行患不能成。無患有司之不公。言未既。有笑於列者。曰。先生欺予哉。弟子事先生。於茲有年矣。先生口不絕吟於六藝之文。手不停披於百家之編。記事者必提其要。纂言者必鉤其玄。貪多務得。細大不捐。焚膏油以繼晷。恆兀兀以窮年。先生之業可謂勤矣。抵排異端。攘斥佛老。補苴罅漏。張皇幽眇。尋墜緒之茫茫。獨旁搜而遠紹。障百川而東之。廻狂瀾於既倒。先生之於儒。可謂勞矣。沈浸醲郁。含英咀華。作爲文章。其書滿家。上規姚姒。渾渾無涯。周誥殷盤。佶屈聱牙。春秋謹嚴。左氏浮誇。易奇而法。詩正而葩。下逮莊騷。太史所錄。子雲相如。同工異曲。先生之於文。可謂閎其中而肆其外矣。少始知學。勇於敢爲。長通於方。左右具宜。先生之於爲人。可謂成矣。然而

公不ㇾ見ㇾ信ニ於人ㅣ私不ㇾ見ㇾ助ニ於友ㅣ跋ㇾ前躓ㇾ後動輒得ㇾ咎暫爲ニ御史ㅣ遂竄ニ南夷ㅣ三爲ニ博士ㅣ冗不ㇾ見ㇾ治命與ㇾ仇謀取ㇾ敗幾時冬暖而兒號ㇾ寒年豐而妻啼饑頭童齒豁竟死何裨不知慮此而反教人爲ニ先生ㅣ曰吁子來前夫大木爲ニ宋細木爲ニ桷樽櫨侏儒闌店楔各得ニ其宜ㅣ施以成ニ室者匠氏之工也玉札丹砂赤箭青芝牛溲馬勃敗鼓之皮俱收並蓄待用無ㇾ遺者醫師之良也登明選公雜進巧拙紆餘爲ニ妍卓犖爲ニ傑ㅣ較ニ短量ㇾ長惟器是適者宰相之方也昔者孟軻好ㇾ辯孔道以明轍環ニ天下ㅣ卒老ニ於行ㇾ荀卿守ニ正大論是弘逃ニ讒於楚ㇾ廢死蘭陵是二儒者吐辭爲ニ經舉足爲ニ法絕ニ類離ニ倫優入ニ聖域ㅣ其遇ニ於世ㅣ何如也今先生學雖ㇾ勤而不ㇾ繇ニ其統ㅣ言雖ㇾ多而不ㇾ要ニ其中ㅣ文雖ㇾ奇而不ㇾ濟ニ於用ㅣ行雖ㇾ修而不ㇾ顯ニ於衆ㅣ猶且月費ニ俸錢ㅣ歲糜ニ廩粟ㅣ子不ㇾ知ㇾ畊婦不ㇾ知ㇾ織乘ㇾ馬從徒安坐而食踵ニ常途之促促窺ニ陳編以盜竊然而聖主不ㇾ加ㇾ誅宰臣不ㇾ見ㇾ斥茲非ニ其幸ㇾ歟動而得ㇾ謗名亦隨之投閑置散乃分之宜若夫商ニ財賄之有亡ㅣ計ニ班資之崇庳ㅣ忘ニ己量之所ㇾ稱指ニ前人之瑕疵ㅣ是所ㇾ謂詰ニ匠氏之不ㇾ以ニ杙爲ㇾ楹而訾ニ醫師以ニ昌陽引ㇾ年欲ニ進其稊荄ㅣ也

愛ㇾ直贈ニ李君房別ㅣ

左右前後皆正人也欲ニ其身之不ㇾ正烏可ㇾ得邪吾觀ニ李生在ニ南陽公之側ㅣ有ㇾ所ㇾ不ㇾ知知之未ㇾ嘗不ㇾ爲ㇾ之思有ㇾ所ㇾ不ㇾ疑疑之未ㇾ嘗不ㇾ爲ㇾ之言勇不ㇾ動於氣義不ㇾ陳乎色南陽公舉措施爲不ㇾ失ニ其宜ㅣ天下之所ニ觀觀稱ニ道洋洋者抑亦左右前後有ニ其人ㅣ乎凡在ニ此趨ニ公之庭議ニ公之事ㇾ者吾既從而遊矣言而公信之者謀而公從之者四方之人則既聞而知之矣李生南陽公之甥也人不ㇾ知者將曰李生之託ニ婚於貴富之家ㅣ將以充ニ其所ㇾ求而止耳故吾樂ㇾ爲ニ天下ㅣ道ニ其爲ニ人焉今之從ニ事於彼ㇾ也吾爲ニ南陽公ㅣ愛之又未ㇾ知ニ人之舉ニ李生於彼ㇾ者何辭彼之所ㇾ以待ニ李生ㇾ者何道舉不ㇾ失ㇾ辭待不ㇾ失ㇾ道雖ㇾ失ニ之此足ニ愛惜ㅣ而得ニ之彼爲ニ歡忻ニ於李生ニ道猶若ㇾ也舉之不ㇾ以ニ吾所ㇾ稱待之不ㇾ以ニ吾所ㇾ期李生之言不ㇾ可ㇾ出ニ諸其口ㇾ矣吾重爲ニ天下ㅣ惜之

唐宋八家文卷一　終

唐宋八家文卷二

韓愈退之著

論ニ佛骨ㅣ表

臣某言伏以佛者夷狄之一法耳自ニ後漢時ㅣ流ニ入中國ㅣ上古未ㇾ嘗有ㇾ也昔者黃帝在ㇾ位百年年百一十歲少昊在ㇾ位八十年年百歲顓頊在ㇾ位七十九年年九十八年年百一十八歲帝嚳在ㇾ位七十年年百五歲帝堯在ㇾ位九十八年年百一十八歲帝舜及禹年皆百歲此時天下太平百姓安樂壽考然而中國未ㇾ有ㇾ佛也其後殷湯亦年百歲湯孫太戊在ㇾ位七十五年武丁在ㇾ位五十九年書史不ㇾ言其年壽所ㇾ極推ニ其年數ㅣ蓋亦俱不ㇾ減ニ百歲ㅣ周文王年九十七歲武王年九十三歲穆王在ㇾ位百年此時佛法亦未ㇾ入ニ中國ㅣ非ニ因事佛而致ㇾ然也漢明帝時始有ニ佛法ㅣ明帝在ㇾ位纔十八年耳其後亂亡相繼運祚不ㇾ長宋齊梁陳元魏以下事ニ佛漸謹年代尤促惟梁武帝在ㇾ位四十八年前後三度捨ニ身施佛ㅣ宗廟之祭不ㇾ用ニ牲牢ㅣ晝日一食止ニ於菜果ㅣ其後竟爲ニ侯景所ㇾ逼餓ニ死臺城ㅣ國亦尋滅事佛求ㇾ福乃更得ㇾ禍由ニ此觀ㇾ之佛不ㇾ足ニ事亦可ㇾ知矣高祖始受ニ隋禪ㅣ則議除ニ之當時羣臣材識不ㇾ遠不ㇾ能ㇾ深知ニ先王之道ㅣ古今之宜ㅣ推ニ闡聖明ㅣ以救ニ斯弊ㅣ其事遂止臣常恨焉伏惟睿聖文武皇帝陛下神聖英武數千百年已來未ㇾ有ニ倫比ㅣ即位之初即不ㇾ許ニ度人爲ニ僧尼道士ㅣ又不ㇾ許ニ創立寺觀ㅣ臣常以爲高祖之志必行ニ於陛下之手ㅣ今縱未ㇾ能ㇾ即行豈可ニ恣之轉令ニ盛也今聞陛下令ニ羣僧迎ニ佛骨於鳳翔ㅣ御ニ樓以觀ㅣ臣雖ニ至愚ㅣ必知陛下不ニ惑於佛ㅣ作ニ此崇奉ㅣ以祈ニ福祥ㅣ也直以ニ年豐人樂ㅣ百姓ニ之心ㅣ爲ニ京都士庶ㅣ設ニ詭異之觀ㅣ戲玩之具ㅣ豈ニ宜ㇾ自我興ㇾ之以傳ニ後代ㅣ耳安有ニ聖明若ㇾ此而肯信ニ此等事ㅣ哉然百姓愚冥易ニ惑難ㇾ曉苟見ニ陛下如ㇾ此將謂ニ眞心事ㇾ佛皆云ニ天子大聖猶一心敬信百姓何人豈合ニ更惜ㇾ身命ㇾ焚ニ頂燒ㇾ指百十爲ニ羣解ㇾ衣散ㇾ錢自朝至暮轉相倣效惟恐後時老少奔波棄ニ其業次ㇾ若不ㇾ即加ニ禁遏ㅣ更歷ニ諸寺ㅣ必有ニ斷ㇾ臂臠ㇾ身以爲ニ供養ㅣ者傷風敗俗傳笑四方非ニ細事ㅣ也夫佛本夷狄之人與ニ中國ㅣ言語不ㇾ通衣服殊ㇾ製口不ㇾ言ニ先王之法言ㅣ身不ㇾ服ニ先王之法服ㅣ不

知君臣之義。父子之情。假如其身至今尚在。奉其國命。來朝京師。陛下容而接之。不過宣政一見。禮賓一設。賜衣一襲。衛而出之於境。不令惑衆也。況其身死已久。枯朽之骨。凶穢之餘。豈宜令入宮禁。孔子曰。敬鬼神而遠之。古之諸侯。行弔於其國。尚令巫祝。先以桃茢祓除不祥。然後進弔。今無故取朽穢之物。親臨觀之。巫祝不先。桃茢不用。羣臣不言其非。御史不舉其失。臣實恥之。乞以此骨。付之有司。投諸水火。永絕根本。斷天下之疑。絕後代之惑。使天下之人。知大聖人之所作爲。出於尋常萬萬也。豈不盛哉。豈不快哉。佛如有靈。能作禍祟。凡有殃咎。宜加臣身。上天鑒臨。臣不怨悔。無任感激懇悃之至。謹奉表以聞。

潮州刺史謝上表

臣以狂妄戇愚。不識禮度。上表陳佛骨事。言涉不敬。正名定罪。萬死猶輕。陛下哀臣愚忠。恕臣狂直。謂臣言雖可罪。心亦無他。特屈刑章。以臣爲潮州刺史。既免刑誅。又獲祿食。聖恩弘大。天地莫量。破腦刳心。豈足爲謝。臣某誠惶誠恐。頓首頓首。臣以正月十四日。蒙恩除潮州刺史。卽日奔馳上道。經涉嶺海。水陸萬里。以今月二十五日。到州上訖。與官吏百姓等相見。具言。朝廷治平。天子神聖。威武慈仁。子養億兆人庶。無有親疎遠邇。雖在萬里之外。嶺海之陬。待之一如畿甸之閒。羣轂之下。有善必聞。有惡必見。早朝晚罷。兢兢業業。惟恐四海之內。天地之中。一物不得其所。故遣刺史。面問百姓疾苦。苟有不便。得以上陳。國家憲章完具。爲治日久。守令承奉詔條。違犯者鮮。雖在蠻荒。無不安泰。聞臣所稱聖德。惟知鼓舞讙呼。不勞施爲。坐以無事。臣某誠惶誠恐。頓首頓首。臣所領州。在廣府極東界上。去廣府雖云纔二千里。然來往動皆經月。過海口下惡水。濤瀧壯猛。難計程期。颶風鰐魚。患禍不測。州南近界。漲海連天。毒霧瘴氛。日夕發作。臣少多病。年纔五十。髮白齒落。理不久長。加以罪犯至重。所處又極遠惡。憂惶慚悸。死亡無日。單立一身。朝無親黨。居蠻夷之地。與魑魅爲羣。苟非陛下哀而念之。誰肯爲臣言者。臣受性愚陋。人事多所不通。惟酷好學問文章。未嘗一日暫廢。實爲時輩所見推許。臣於當時之文。亦未有過人者。至於論述陛下功德。與詩書相表裏。作爲詩歌。薦之郊廟。紀泰山之封。鏤白玉之牒。鋪張對天之閔休。揚厲無前之偉績。編之乎詩書之策。而無愧辭。雖使古人復生。臣亦未肯多讓。伏以大唐受命。有天下。四海之內。莫不臣妾。南北東西。地各萬里。自天寶之後。政治少懈。文致未優。武尅不剛。擘臣姦隸。蠭居碁處。搖毒自防。外順內悖。父死子代。以祖以孫。如古諸侯。自擅其

地。不貢不朝。六七十年。四聖傳序。以至陛下。陛下卽位以來。躬親聽斷。旋乾轉坤。闢機闔開。雷厲風飛。日月清照。天戈所麾。莫不寧順。大宇之下。生息理極。高祖創制天下。其功大矣。而治未太平也。太宗太平矣。而大功所立。咸在高祖之代。非如陛下承天寶之後。接因循之餘。六七十年之外。赫然興起。南面指麾而致此巍巍之治功也。宜定樂章。以告神明。東巡泰山。奏功皇天。具著顯庸。明示得意。使永永年代。服我成烈。當此之時。所謂千載一時。不可逢之嘉會。而臣負罪嬰釁。自拘海島。戚戚嗟嗟。日與死迫。曾不得奏薄技於從官之內。隸御之閒。窮思畢精。以贖罪過。懷痛窮天。死不閉目。瞻望宸極。魂神飛去。伏惟皇帝陛下。天地父母。哀而憐之。無任感恩戀闕。慚惶懇迫之至。謹附表陳謝以聞。

爲裴相公讓官表

臣某言。伏奉今日制書。以臣爲朝議大夫守中書侍郎同中書門下平章事。承命驚惶。魂爽飛越。俯仰天地。若無所容。臣某誠惶誠恐。頓首頓首。臣少涉經史。粗知古今。天與朴忠。性惟愚直。知事君以道。無憚殺身。慕當官而行。不求利己。人以爲拙。臣行不疑。元和之初。始拜御史。旋以論事過切。爲宰臣所非。移官府廷。因佐戎幕。陛下恕臣之罪。憐臣之心。拔居侍從之中。遂掌絲綸之重。受恩益大。願已益輕。苟耳目所聞。知心力所及。少關政理。輒以陳聞。於神補無涓埃之微。而讒謗有邱山之積。陛下知其孤立。賞其微誠。獨斷不謀。奬待踰量。臣誠見。陛下具文武之德。有神聖之姿。啓中興之宏圖。當太平之昌曆。勤身以儉。與物無私。威怒如雷霆。容覆如天地。實羣臣盡節之日。才智效能之時。聖君難逢。重德宜報。苦心焦思。以日繼夜。苟利於國。知無不爲。徒欲竭愚。未免妄作。陛下不加罪責。更極寵光。既領臺綱。又毗邦憲。聖君所厚。兇逆所讐。缺於防虞。幾至斃踣。恩私所被。性命獲全。忝累祖先。玷塵班列。未知所措。祇自內慙。豈意陛下擢臣於傷殘之餘。委臣以變和之任。忘其陋汙。使佐聖明。此雖成湯舉伊尹於庖廚。高宗舉傅說於版築。周文用呂望於屠釣。齊桓起甯戚於飯牛。雪恥蒙光。去辱居貴。以今準古。擬議非倫。陛下有四君之明。行四君之事。微臣無四子之美。獲四子之榮。豈可叨居以彰非據。方今干戈未盡戢。夷狄未盡賓。麟鳳龜龍。未盡游於郊藪。草木魚鼈。未盡被於雍熙。當大有爲之時。得非常人之佐。然後能上宣聖德。以代天工。如臣等類。實不克堪。伏願博選周行。旁及巖穴。天生聖主。必有賢臣。得而授之。乃可致理。乞廻所授。以叶羣情。無任懇款之至。

論今年停舉選狀

右臣伏見今月十日勅今年諸色舉選宜權停者道路相傳皆云以歲之旱陛下憐憫京師之人慮其乏食故權停舉選以絕其來者所以省費而足食也臣伏思之竊以爲十口之家儲以一二人於食未有所費今京師之人不啻百萬都計舉者不過五七千人幷其僮僕畜馬不當京師百萬分之一以十口之家計之誠未爲有所損益又今年雖旱去歲大豐商賈之家必有儲蓄舉選者皆齎持資用以有易無未見其弊今若暫停舉選或恐所害實深一則遠近驚惶二則人士失業臣聞古之求雨之詞曰人失職與然則人之失職足以致旱今緣旱而停舉選是使人失職而召災也臣又聞君者陽也臣者陰也獨陽爲旱獨陰爲水今者陛下聖明在上雖堯舜無以加之而羣臣之賢不及於古又不能盡心於國與陛下同心助陛下爲理有君無臣是以久旱以臣之愚以爲宜求純信之士骨鯁之臣憂國如家忘身奉上者超其爵位置在左右如殷高宗之用傅說周文王之舉太公齊桓公之拔甯戚漢武帝之取公孫弘清閒之餘時賜召問必能輔宣王化銷殄旱災臣雖非朝官月受俸錢歲受祿粟苟有所知不敢不言

復讐狀

右伏奉今月五日敕復讐據禮經則義不同天徵法令則殺人者死禮法二事皆王教之端有此異同必資論辯宜令都省集議聞奏者朝議郎行尚書職方員外郎上騎都尉韓愈議曰伏以子復父讐見於春秋見於禮記又見周官史不可勝數求有非而罪之者也最宜詳於律而律無其條非闕文也蓋以爲不許復讐則傷孝子之心而乖先王之訓許復讐則人將倚法專殺無以禁止其端矣夫律雖本於聖人然執而行之者有司也經之所明者制有司者也丁寧其義於經而深沒其文於律引經而議也周官曰凡殺人而義者令勿讐讐之則死義宜也則殺人而不得其宜者子得復讐也此百姓之相讐者也公羊傳曰父不受誅子復讐可也不受誅者罪不當誅也誅者上施於下之辭非百姓之相殺者也又周官曰凡報仇讐者書於士殺之無罪言將復讐於官則無罪也今陛下垂意典章思立定制惜有司之守憐孝子之心示不自專訪議群下臣愚以爲復讐之名雖同而其事各異或百姓相讐如周官所稱可議於今者或爲官所誅如公羊所稱不可行於今者又周官所稱將復讐先告於士則無罪者若孤稚羸弱抱微志而伺敵人之便恐不能自言於官未可以爲斷於今也然則殺之與赦不可一例宜定其制曰凡有復父讐者事發具其事申尚書省尚書省集議奏聞酌其宜而處之則經律無失其指矣

禘祫議

右今月十六日勅旨宜令百僚議限五日內聞奏者將仕郎守國子監四門博士臣韓愈謹獻議曰伏以陛下追孝祖宗肅敬祀事凡在擬議不敢自專聿求厥中延訪羣下然而禮文繁漫所執各殊自建中之初迄至今歲屢經禘祫未合適從臣生遭聖明涵泳恩澤雖賤不及議而志切效忠今輒先舉衆議之非然後申明其說一曰獻懿廟主宜永藏之夾室至禘祫之時豈得不食於太廟乎名曰合祭而二祖不得祭焉不可謂之合矣二曰獻懿廟主宜毀之瘞之臣又以爲不可謹按禮記天子立七廟一壇一墠其毀廟之主皆藏於祧廟雖百代不毀祫則陳於太廟而饗焉自魏晉已降始有毀瘞之議事非經據竟不可施行今國家德厚流光創立九廟以周制推之獻懿二祖猶在壇墠之位況於毀瘞而不禘祫乎三曰獻懿廟主宜各遷於其陵所臣又以爲不可二祖之祭於京師列於太廟也二百年矣今年一朝遷之豈惟人聽疑惑抑恐二祖之靈眷顧依遲不即饗於下國也四曰獻懿廟主宜附於興聖廟而不禘祫臣又以爲不可興聖雖太祖其於屬乃獻懿之子孫也今欲正其子東向之位廢其父之大祭固不可可爲典矣五曰獻懿二祖宜別立廟於京師臣又以爲不可夫禮有所降情有所殺是故去廟爲祧去祧爲壇去壇爲墠去墠爲鬼漸而之遠其祭益稀昔者魯立煬宮春秋非之以爲不當取已毀之廟既藏之主而復築宮以祭今之所議與此正同又雖違禮立廟至於禘祫也合食則禘無其所廢祭則於義不通此五說者皆所不可故臣博采前聞求其折中以爲殷祖玄王周祖后稷太祖之上皆自爲帝又其代數已遠不復祭之故以紀一時之宜非傳於後代之法也傳曰子雖齊聖不先父食蓋言子爲父屈也景皇帝雖太祖也其於獻懿則子孫也當禘祫之時獻祖宜居東向之位景皇帝宜從昭穆之列祖以孫尊孫以祖屈求之神道豈遠人情又常祭甚衆合祭甚寡則是太祖所屈之祭至少所伸之祭至多比於伸孫之尊廢祖之祭不亦順乎事異殷周禮從而變非所失禮也臣伏以制禮作樂者天子之職也陛下以臣議有可

采。粗合天心。斷而行之。是則爲禮。如以爲猶或可疑。乞召臣對面陳得失。庶有發明。謹議。

爭臣論

或問諫議大夫陽城於愈。可以爲有道之士乎哉。學廣而聞多。不求聞於人也。行古人之道。居於晉之鄙。晉之鄙人。薰其德。而善良者幾千人。大臣聞而薦之。天子以爲諫議大夫。人皆以爲華。陽子不色喜。居於位五年矣。視其德。如在野。彼豈以富貴移易其心哉。愈應之曰。是易所謂恆其德貞。而夫子凶者也。惡得爲有道之士乎哉。在易蠱之上九云。不事王侯。高尚其事。蹇之六二則曰。王臣蹇蹇。匪躬之故。夫不以所居之時不一。而所蹈之德不同也。若蠱之上九。居無用之地。而致匪躬之節。以蹇之六二。在王臣之位。而高不事之心。則冒進之患生。曠官之刺興。志不可則。而尤不終无也。今陽子在位。不爲不久矣。聞天下之得失。不爲不熟矣。天子待之。不爲不加矣。而未嘗一言及於政。視政之得失。若越人視秦人之肥瘠。忽焉不加喜戚於其心。問其官則曰諫議也。問其祿則曰下大夫之秩也。問其政則曰我不知也。有道之士固如是乎哉。且吾聞之。有官守者。不得其職則去。有言責者。不得其言則去。今陽子不以爲得其言乎哉。得其言而不言。與不得其言而不去。無一可者也。陽子將爲祿仕乎。古之人有云。仕不爲貧。而有時乎爲貧。謂祿仕者也。宜乎辭尊而居卑。辭富而居貧。若抱關擊柝者可也。蓋孔子嘗爲委吏矣。曾爲乘田矣。亦不敢曠其職。必曰。會計當而已矣。必曰。牛羊遂而已矣。若陽子之秩祿。不爲卑且貧。章章明矣。而如此。其可乎哉。或曰。否。非若此也。夫陽子惡訕上者。惡爲人臣招其君之過。而以爲名者。故雖諫且議。使人不得而知焉。書曰。爾有嘉謀嘉猷。則入告爾后於內。爾乃順之於外。曰。斯謀斯猷。惟我后之德。夫陽子之用心。如此。滋所謂惑者矣。入則諫其君。出不使人知。者大臣宰相者之事。非陽子之所宜行也。夫陽子本以布衣。隱於蓬蒿之下。主上嘉其行誼。擢在此位。官以諫爲名。誠宜有以奉其職。使四方後代。知朝廷有直言骨鯁之臣。天子有不僭賞。從諫如流之美。庶巖穴之士。聞而慕之。束帶結髮。願進於闕下。而伸其辭說。致吾君於堯舜。熙鴻號於無窮也。若書所謂則大臣宰相者之事。非陽子之所宜行也。且陽子之心。將使君人者惡聞其過乎。是啓之也。或曰。陽子之不求聞。而人聞之。不求用。而君用之。不得已而起。守其道而不變。何子過之深也。愈曰。自古聖人賢士。皆非有求於聞用也。閔其時之不平。人之不又。得其道。不敢獨善其身。而必以兼濟天下也。孜孜矻矻。死而後已。故再過家門而不入。孔席不暇暖。而墨突不得黔。彼二聖一賢者。豈不知自安逸之爲樂哉。誠畏天命。而悲人窮也。夫天授人以賢聖才能。豈使自有餘而已。誠欲以補其不足者也。耳目之於身也。耳司聞。而目司見。聽其是非。視其險易。然後身得安焉。聖賢者時人之耳目也。時人者聖賢之身也。且陽子之不賢。則將役於賢以奉其上矣。若果賢。則固畏天命。而閔人窮也。惡得以自暇逸乎哉。或曰。吾聞君子不欲加諸人。而惡訐以爲直。若吾子之論。直則直矣。無乃傷於德。而費於辭乎。好盡言以招人過。國武子之所以見殺於齊也。吾子其亦聞乎。愈曰。君子居其位。則思死其官。未得位。則思修其辭。以明其道。我將以明道也。非以爲直而加人也。且國武子。不能得善人。而好盡言於亂國。是以見殺。傳曰。惟善人能受盡言。謂其聞而能改之也。子告我曰。陽子可以爲有道之士也。今雖不能及已。陽子將不得爲善人乎哉。

諱辯

愈與李賀書。勸賀舉進士。舉進士。有名。與賀爭名者毀之曰。賀父名晉肅。賀不舉進士。爲是。勸之舉者爲非。聽者不察也。和而唱之。同然一辭。皇甫湜曰。若不明白。子與賀且得罪。愈曰。然。律曰。二名不偏諱。釋之者曰。謂若言徵不稱在。言在不稱徵是也。律曰。不諱嫌名。律乎。父名晉肅。賀舉進士。爲犯二名。律乎。爲犯嫌名。律乎。父名仁。子不得爲人乎。夫諱始於何時。作法制以教天下者。非周公孔子歟。周公作詩不諱。孔子不偏諱二名。春秋非周公孔子。不諱嫌名。康王釗之孫。實爲昭王。曾參之父名晳。曾子不諱。昔周之時。有騏期。漢之時。有杜度。此其子宜如何諱。將諱其嫌。遂諱其姓乎。將不諱其嫌者乎。漢諱武帝名。徹爲通。不聞又諱車轍之轍爲某字也。諱呂后名。雉爲野鷄。不聞又諱治天下之官宮妾。乃不敢言。諭及機。以爲觸犯。士君子言語行事。宜何所法守也。今考之於經。質之於律。稽之以國家之典。賀舉進士。爲可。邪。爲不可。邪。凡事父母。得如曾參。可以無譏矣。作人得如周公孔子。亦可以止矣。今世之士。不務行曾參周公孔子之行。而諱親之名。則務勝於曾參周公。孔子亦見其惑也。夫周公孔子。曾參卒不可勝。勝周公孔子。曾參者耶。

張中丞傳後序

元和二年四月十三日夜。愈與吳郡張籍。閎家中舊書。得李翰所爲張巡傳。翰以文章自名。爲此傳頗詳密。然尙恨有闕者。不爲許遠立傳。又不載雷萬春事首尾。遠雖材若不及巡者。開門納巡。位本在巡上。授之柄。而處其下。無所疑忌。竟與巡俱守死。成功名。城陷而虜。與巡死先後異耳。兩家子弟。材智下。不能通知二父志。以爲巡死而遠就虜。疑畏死而辭服於賊。遠誠畏死何苦守尺寸之地。食其所愛之肉。以與賊抗而不降乎。當其圍守時。外無蚍蜉蟻子之援。所欲忠者。國與主耳。而賊語以國亡主滅。遠見救援不至。而賊來益衆。必以其言爲信。外無待。而猶死守。人相食且盡。雖愚人亦能數日而知死處。矣。遠之不畏死亦明矣。烏有城壞。其徒俱死。獨蒙詬恥求活。雖至愚者不忍爲。嗚呼。而謂遠之賢而爲之耶。說者又謂。遠與巡分城而守。城之陷。自遠所始。以此訴遠。此而與兒童之見無異。人之將死。其臟腑必有先受其病者。引繩而絕之。其絕必有處。觀者見其然。從而尤之。其亦不達於理矣。小人之好議論。不樂成人之美。如是哉。如巡遠之所成就。如此卓卓。猶不得免。其他則又何說。當二公之初守也。寧能知人之卒不救。棄城而逆遁。苟此不能守。雖避之他處。何益。及其無救而且窮也。將其創殘餓羸之餘。雖欲去。必不達。二公之賢。其講之精矣。守一城。捍天下。以千百就盡之卒。戰百萬日滋之師。蔽遮江淮。沮遏其勢。天下之不亡。其誰之功也。當是時。棄城而圖存者。不可一二數。擅强兵。坐而觀者相環也。不追議此。而責二公以死守。亦見其自比於逆亂。設淫辭而助之攻也。愈嘗從事於汴徐二府。屢道於兩府閒。親祭於其所謂雙廟者。其老人往往說巡遠時事。云南霽雲之乞救於賀蘭也。賀蘭嫉巡遠之勇且壯。不聽。其語强留之。具食與樂。延霽雲坐。霽雲慷慨語曰。雲來時。睢陽之人不食月餘日矣。雲雖欲獨食。義不忍。雖食且不下咽。因拔所佩刀。斷一指。血淋漓。以示賀蘭。一座大驚。皆感激爲雲泣下。雲知賀蘭終無爲雲出師意。卽馳去。將出城。抽矢射佛寺浮圖。矢著其上甎半箭。曰。吾歸破賊。必滅賀蘭。此矢所以志也。愈貞元中。過泗州。船上人猶指以相語。城陷。賊以刃脅降。巡巡不屈。卽牽去。將斬之。又降。霽雲笑曰。欲將以有爲也。公有言。雲敢不死。卽不屈。張籍曰。有于嵩者。少依於巡。及巡起事。嵩常在圍中。不屈。張籍曰。有于嵩者。少依於巡。及巡起事。嵩常在圍中。餘矣。以巡初嘗得臨渙縣尉。好學。無所不讀。籍時尙小。粗問巡遠事。不能細也。云。巡長七尺餘。鬚髯若神。嘗見嵩讀漢書。謂嵩曰。何爲久讀此。嵩曰。未熟也。巡曰。吾於書讀不過三遍。終身不忘也。因誦嵩所讀書。盡卷不錯一字。嵩驚以爲巡偶熟此卷。因亂抽他帙。以試。無不盡然。嵩又取架上諸書。試以問巡。巡應口誦無疑。嵩從巡久。亦不見巡常讀書也。爲文章。操

紙筆立書。未嘗起草。初守睢陽時。士卒僅萬人。城中居人。戶亦且數萬。巡因一見問姓名。其後無不識者。巡怒。鬚髯輒張。及城陷。賊縛巡等數十人坐。且將戮。巡起旋。其衆見巡起。或起或泣。巡曰。汝勿怖。死命也。衆泣不能仰視。巡就戮時。顏色不亂。陽陽如平常。遠寬厚長者。貌如其心。與巡同年生。月日後於巡。呼巡爲兄。死時年四十九。嵩貞元初死於亳宋閒。或傳。嵩有田在亳宋閒。武人奪而有之。嵩將詣州訟理。爲所殺。嵩無子。張籍云。

釋言

元和元年六月十日。愈自江陵法曹詔拜國子博士。始進見今相國鄭公。公賜之坐。且曰。吾見子某詩。吾時在翰林。職親而地禁。不敢相聞。今爲我寫子詩書。爲一通以來。愈再拜謝。退錄詩書若干篇。擇日時以獻於後之數月。有來謂愈者。曰。子獻相國詩書乎。曰然。曰。有爲讒於相國之座者。曰。韓愈曰。相國徵余文。余不敢匿。相國豈知我哉。子其愼之。愈應之曰。愈爲御史。得罪德宗朝。同遷於南者凡三人。獨愈爲先收用。相國之賜大矣。百官之進見相國者。或立語以退。而愈辱賜坐語。相國之禮過矣。四海九州之人。自百官以下。欲以其業徹相國左右者多矣。皆憚而莫之敢。獨愈辱先索。相國之知至矣。賜之大。禮之過。知之至。是三者於敵以下受之。宜以何報。況在天子之宰乎。人莫不自知。凡適於用之謂才。堪其事之謂力。愈於二者雖日勉焉而不迨。束帶執笏。立士大夫之行。不見斥以不肖。幸矣。其何敢教於言乎。夫教雖凶德。必有恃而敢行。愈之族親鮮少。無扳聯之勢。於今不善交人。無相先相死之友。於朝無宿資蓄貨以鈞聲勢。弱於才而腐於力。不能奔走乘機。抵巇以要權利。夫何恃而敖。若夫狂惑喪心之人。蹈河而入火。妄言而罵詈者。則有之矣。而愈人知其無是疾也。雖有讒者百人。相國將不信之矣。愈何懼而愼歟。旣累月。又有來謂愈。曰。有讒子於翰林舍人李公與裴公者。子其愼歟。愈曰。二公者吾君朝夕訪焉。以爲政於天下。而階太平之治。居則與天子爲心膂。出則與天子爲股肱。四海九州之人。自百官以下。其孰不願忠而望賜。愈也不狂不愚。不蹈河而入火。病風而妄罵。不當有如讒者之說也。雖有讒者百人。二公將不信之矣。愈何懼而愼歟。旣以語應客。夜歸。私自尤曰。咄。市有虎。而曾參殺人。讒者之效也。詩曰。取彼讒人。投畀豺虎。豺虎不食。投畀有北。有北不受。投畀有昊。傷於讒。疾而甚之之辭也。又曰。亂之初生。僭始旣涵。亂之又生。君子信讒。始疑而終信之之謂也。孔子曰。遠佞人。夫佞人不能遠。則有時而信之矣。今我恃直而不戒。禍其至哉。徐又自解之曰。市有虎。聽者庸也。曾參殺人。以愛

惑聽也。卷伯之傷。亂世是逢也。今三賢。方與天子謀所以施政於天下。而階太平之治。聽聰而視明。公正而敦大。夫聽明則聽視不惑。公正則不邇讒邪。敦大則有以容而思。彼讒人者。孰敢進而爲讒哉。雖進而爲之。亦莫之聽矣。我何懼而愼。既累月。上命李公相。客謂愈曰。子前被言於一相。今李公又相。子其危哉。愈曰。前之謗我於宰相者。翰林不知也。後之謗我於翰林者。宰相不知也。今二公合處而會言若及愈。必曰。韓愈亦人耳。彼敎宰相。又敎翰林。其將何求。必不然。吾乃今知免矣。既而讒言果不行。

唐宋八家文卷二終

唐宋八家文卷三

韓愈退之著

上宰相書

正月二十七日。前鄉貢進士韓愈。謹伏光範門下。再拜獻書相公閣下。詩之序曰。菁菁者莪。樂育材也。君子能長育人材。則天下喜樂之矣。其詩曰。菁菁者莪。在彼中阿。既見君子。樂且有儀。說者曰。菁菁者盛也。莪微草也。阿大陵也。言君子之長育人材。若大陵之長育微草。能使之菁菁然盛也。既見君子。樂且有儀云者。天下美之之辭也。其三章曰。既見君子。錫我百朋。說者曰。百朋多之之辭也。言君子既長育人材。又當爵命之。賜之厚祿。以寵貴之云爾。其卒章曰。汎汎楊舟。載沉載浮。既見君子。我心則休。說者曰。載載也。沉浮者物也。言君子之於人材。無所不取。若舟之於物。浮沉皆載之云爾。既見君子。我心則休云者。言若此。則天下之心美之也。君子之於人也。既長育之。又當爵命寵貴之。而於其才無所遺焉。孟子曰。君子有三樂。王天下不與存焉。其一曰。樂得天下之英才而敎育之。此皆聖人賢士之所極言至論古今之所宜法者也。然則孰能長育天下之人材。將非吾君與吾相乎。孰能敎育天下之英才。將非吾君與吾相乎。幸今天下無事。小大之官。各守其職。錢穀甲兵之問。不至於廟堂。論道經邦之暇。捨此宜無大者焉。今有人。生二十八年矣。名不著於農工商賈之版。其業則讀書著文。歌頌堯舜之道。雞鳴而起。孜孜焉亦不爲利。其所讀皆聖人之書。楊墨釋老之學。無所入於其心。其所著皆約六經之旨而成文。抑邪與正。辨時俗之所惑。居窮守約。亦時有感激怨懟奇怪之辭。以求知於天下。亦不悖於教化。妖淫諛佞譎張之說。無所出於其中。四舉於禮部。乃一得。三選於吏部。卒無成。九品之位。其可望。一敗之宮。其可懷。遑遑乎四海無所歸。恤恤乎饑不得食。寒不得衣。濱於死而益固。得其所者爭笑之。忽將棄其舊而新是圖。求老農老圃而爲師。悼中志之變化。中夜涕泗交頤。雖不足當詩人孟子之謂。抑長育之使成材。其亦可矣。抑又聞古之君子相其君也。一夫不獲。其所若

己推而內之溝中。今有人。生七年而學聖人之道。以修其身。積二十年。不得已一朝而毀之。是亦不獲其所矣。伏念。今有仁人在上位。若不往告之。而遂行。是果於自棄。而不以古之君子之道待吾相也。其可乎。寧往告焉。若不得志。則命也。其亦行矣。洪範曰。凡厥庶民。有猷有爲有守。汝則念之。不協於極。不罹於咎。皇則受之。而康而色。曰予攸好德。汝則錫之福。是皆與善之辭也。抑又聞。古之人有自進者。而君子不逆之矣。曰予攸好德。汝則錫之福之謂也。抑又聞。上之設官制祿。必求其人。而授之者。非苟慕其才。而富貴其身也。蓋將用其能理。不能用其明理。不明者耳。然則上之於求人。下之於求位。交相求而苟沒於利。而榮於名也。蓋將推己之所餘。以濟其不足者耳。然則上之於求人。下之於求位。交相求而一其致焉耳。苟以是而爲心。則上之道不必難。其下。下之道不必難。其上。可舉而舉焉。不必讓。其自舉也。可進而進焉。不必廉於自進也。抑又聞。上之化下。得其道。則勸賞不必徧加乎天下。而天下從焉。因人之所欲爲。而遂推之之謂也。今天下不由吏部而仕進者幾希矣。主上感傷山林之士。有逸遺者。屢詔內外之臣。旁求於四海。而其至者蓋闕焉。豈其無人乎哉。亦見國家不以非常之道禮之。而不來耳。彼之處隱就閑者。亦人耳。其耳目鼻口之所欲。其衣食。窮體膚。麋鹿之與處。猨狖之與居。固自以其身不能與時從順俯仰。故甘心自絕而不悔焉。而方聞。國家之仕進者。必舉於州縣。然後升於禮部吏部。試之以繡繪雕琢之文。考之以聲勢之逆順。章句之短長。中其程式者。然後得從下士之列。雖有化俗之方。安邊之策。不由是而稍進。萬不有一得焉。彼惟恐聞於人也。今若聞有以書進宰相。而求仕者。而宰相不辱焉。而薦之天子。而爵命之。而布其書於四方。枯槁沉溺。魁閎通達之士。必且洋洋焉動其心。戮戮焉纓其冠。于于焉而來矣。此所謂勸賞不必徧加乎天下。而天下從焉者也。因人之所欲爲。而遂推之之謂者也。伏惟覽詩書孟子之所指。念育才錫福之所以。考古之君子相其君之道。而忘自進自舉之罪。思設官制祿之故。以誘致山林逸遺之士。庶天下之行道者。知所歸焉。小子不敢自幸。其嘗所著文。輒采其可者若干首。錄在冀卷。冀辱賜觀焉。于瀆尊嚴。伏地待罪。愈再拜。

應科目時與人書

月日愈再拜。天地之濱。大江之濱。曰有怪物焉。蓋非常鱗凡介之品彙匹儔也。其得水。變化風雨。上下於天。不難也。其不及水。蓋尋常尺寸之閒耳。無高山大陵曠途絕險。爲之關隔也。然其窮涸不能自致

乎水。爲獺獺之笑者。蓋十八九矣。如有力者。哀其窮而運轉之。蓋一舉手一投足之勞也。然是物也。負其異於衆也。且曰。爛死於沙泥。吾寧樂之。若俛首帖耳。搖尾而乞憐者。非我之志也。是以有力者遇之。熟視之。若無覩也。其死其生。固不可知也。今又有有力者不哀其窮。而忘一舉手一投足之勞。而轉之清波乎。其哀之命也。其不哀之命也。知其在命。而且鳴號之者亦命也。愈今者實有類於是。是以忘其疎愚之罪。而有是說焉。閣下其亦憐察之。

上兵部李侍郎書

十二月九日。將仕郎守江陵府法曹參軍韓愈。謹上書侍郎閣下。愈少鄙鈍。於時事都不通曉。家貧不足以自活。應舉覓官。凡二十年矣。薄命不幸。動遭讒謗。進寸退尺。卒無所成。性本好文學。因困厄悲愁無所告語。遂得究窮於經傳史記百家之說。沈潛乎訓義。反復乎句讀。礱磨乎事業。而奮發乎文章。凡自唐虞已來。編簡所存。大之爲河海。高之爲山嶽。明之爲日月。幽之爲鬼神。纖之爲珠璣華實。變之爲雷霆風雨。奇辭奧旨。靡不通達。惟是鄙鈍。不通曉於時事。學成而道益窮。年老而智益困。私自憐悼。悔其初心。髮禿齒豁。不見知己。夫牛角之歌。辭鄙而義拙。堂下之言。不書於傳記。齊桓舉以相國。叔向攜手以上。然則非言之難。爲聽而識之者難遇也。伏以閣下內仁而外義。行高而德鉅。尚賢而舉能。哀窮而悼屈。自江而西。既化而行矣。今者入守內職。爲朝廷大臣。當天子新卽位。汲汲於理化之日。出言舉事。宜必施設。既有聽之之明。又有振之之力。寧戚之歌。讙明之言。不發於左右。則後而失其時矣。謹獻舊文一卷。扶樹教道。有所明白。南行詩一卷。舒憂娛悲。雜以謔怪之言。時俗之好。所以諷於口而聽於耳也。如賜覽觀。亦有可采。干黷尊嚴。伏增惶恐。愈再拜。

與少室李拾遺書

十二月某日。愈頓首。伏承天恩詔河南。敦諭拾遺公。朝廷之士。引頸東望。若景星鳳皇之始見也。爭先親之爲快。方今天子仁聖。小大之事。皆出宰相。樂善言。如不久聞。自卽大位。以來。於今四年。凡所施者。無不得宜。勤儉之聲。寬大之政。幽閨婦女。草野小人。皆飽聞而厭道之。愈不通於古。請問先生。世非太平之運。與加又有非人力而至者。年穀熟衍。符貺委至。若干紀之姦。不戰而拘蘗。强梁之兇。銷鑠縮栗。迎風而委伏。其有一事未就正。自視若不成人。四海之所環。無一夫甲而兵者。若此時也。拾遺公不疾

起。與天下之士君子。樂成而享之。斯無時矣。昔者孔子知不可爲之不已。足跡接於諸侯之國。卽可爲之時。自藏深山。牢關而固距。卽與仁義者異守矣。想拾遺公。冠帶就車。惠然肯來。舒所蓄積。以補綴盛德之有闕遺。利加於時。名垂於將來。踴躍悚企。頃刻以冀。又竊聞。朝廷之議。必起拾遺公。使者往若不許。卽河南必繼以行。拾遺徵君若不至。必加高秩。如是則辭少就多。傷於廉而害於義。拾遺公必不爲也。善人斯進。其類皆有望於拾遺公。拾遺公倘不爲起。使衆善人不與斯人施也。由拾遺公而使天子不盡得良臣。君子不盡得顯位。人庶不盡被惠利。其害不爲細。必望審察而遠思之。務使合於孔子之道。幸甚。愈再拜。

答元侍御書

徵之足下。前歲辱書。論甄逢父濟。識安祿山必反。卽詐爲喑棄去。祿山反。有名號。又逼致之。濟死執不起。卒不汙祿山父子事。又論逢知讀書。刻身立行。勤己取足。不干州縣。斥其餘以救人之急。足下由是與之交。欲令逢父子名迹存諸史氏。足下以抗直喜立事。斥不得立朝。失所不自悔。喜事益堅。徵之乎。子眞安而樂之者。謹詳足下所論載。校之史法。若濟者固當得附書。今逢又能行身。幸於方州大臣。以標白其先人事。載之天下耳目。徵之天子。追爵其父第四品。赫然驚人。逢與其父俱當得書矣。濟逢父子自吾人發。春秋美君子樂道人之善。夫苟能樂道人之善。則天下皆去惡爲善。善人得其所。其功實大。足下與濟父子俱宜牽連得書。足下勉逢令終始其窮。而足下年尙彊。嗣德有繼。將大書特書屢書。不一書而已也。愈旣承命。又執筆以竢。

與孟尙書書

愈白。行官自南廻。過吉州。得吾兄二十四日手書。數番。忻悚兼至。未審入秋來。眠食何似。伏惟萬福。來示云。有人傳愈近少信奉釋氏。此傳之者妄也。潮州時。有一老僧。號大顚。頗聰明。識道理。遠地無可與語者。故自山召至州郭。留十數日。實能外形骸。以理自勝。不爲事物侵亂。與之語。雖不盡解。要自胸中無滯礙。以爲難得。因與來往。及祭神至海上。遂造其廬。及來袁州。留衣服爲別。乃人之情。非崇信其法。求福田利益也。孔子云。丘之禱久矣。凡君子行己立身。自有法度。聖賢事業。具在方冊。可效可師。仰不愧天。俯不愧人。內不愧心。積善積惡。殃慶各自以其類至。何有去聖人之道。舍先王之法。而從夷狄之

教。以求福利也。詩不云乎。愷悌君子。求福不回。傳又曰。不爲威惕。不爲利疚。假如釋氏能與人爲禍祟。非守道君子之所懼也。況萬萬無此理。且彼佛者果何人哉。其行事類君子耶。小人耶。若君子也。必不妄加禍於守道之人。如小人也。其身已死。其鬼不靈。天地神祇。昭布森列。非可誣也。又肯令其鬼行胸臆。作威福於其閒哉。進退無所據而信奉之。亦且惑矣。且愈不助釋氏而排之者。其亦有說。孟子云。今天下。不之楊則之墨。楊墨交亂。而聖賢之道不明。則三綱淪而九法斁。禮樂崩而夷狄橫。幾何其不爲禽獸也。故曰。能言距楊墨者。皆聖人之徒也。揚子雲云。古者楊墨塞路。孟子辭而闢之。廓如也。夫楊墨行。正道廢。且將數百年。以至於秦。卒滅先王之法。燒除其經。坑殺學士。天下遂大亂。及秦滅漢興。且百年。尙未知修明先王之道。其後始除挾書之律。稍求亡書。招學士。經雖少得。尙皆殘缺。十亡二三。故學士多老死。新者不見全經。不能盡知先王之事。各以所見爲守。分離乖隔。不合不公。二帝三王羣聖人之道。於是大壞。後之學者。無所尋逐。以至於今。泯泯也。其禍出於楊墨肆行而莫之禁。故也。孟子雖賢聖。不得位。空言無施。雖切何補。然賴其言。而今學者尙知宗孔氏。崇仁義。貴王賤霸而已。其大經大法。皆亡滅而不救。壞亂而不收。所謂存十一於千百。安在其能廓如也。然向無孟氏。則皆服左衽。而言侏儒矣。故愈嘗推尊孟氏。以爲功不在禹下。者爲此也。漢氏已來。羣儒區區修補。百孔千瘡。隨亂隨失。其危如一髮引千鈞。綿綿延延。寖以微滅。於是時也。而唱釋老於其閒。鼓天下之衆而從之。嗚呼。其亦不仁甚矣。釋老之害過於楊墨。韓愈之賢不及孟子。孟子不能救之於未亡之前。而韓愈乃欲全之於已壞之後。嗚呼。其亦不量其力。且見其身之危。莫之救。以死也。雖然。使其道由愈而粗傳。雖滅死萬萬無恨。天地鬼神。臨之在上。質之在傍。又安得因一摧折。自毀其道。以從於邪也。籍湜輩。雖屢指教。不知果能不叛去。否。辱吾兄眷厚。而不獲承命。惟增慚懼。死罪死罪。愈再拜。

與鄂州柳中丞書

淮右殘孽。尙守巢窟。環寇之師。殆且十萬。瞋目語難。自以爲武人不肯循法度。頡頏作氣勢。竊爵位。自尊大者。肩相摩。地相屬也。不聞有一人援桴鼓。誓衆而前者。但日令走馬來求賞給。助寇爲聲勢而已。閣下書生也。詩書禮樂是習。仁義是修。法度是束。一旦去文就武。鼓三軍而進之。陳師鞠旅。親與爲辛苦。慷慨感激。同食下卒。將二州之牧。以壯士氣。斬所乘馬。以祭。踶死之士。雖古名將。何以加茲。此由天資忠孝。鬱於中。而大作於外。動皆中於機會。以取勝於當世。而爲我臣師。豈常習於威暴之事。而樂其

戰鬪之危也哉。愈誠怯弱。不適於用。聽於下風。竊自增氣。誇於中朝稠人廣衆會集之中。所以羞武夫之顏。令議者知將國兵而爲人之司命者。不在彼而在此也。臨敵重愼。誠輕出入。良用自愛。以副見慕之徒之心。而果爲國立大功也。幸甚幸甚。

再與鄂州柳中丞書

愈愚。不能量事勢可否。比常念。淮右以靡弊困頓。三州之地。蚊蚋蟻蟲之聚。感兇豎煦濡飲食之惠。提童子之手。坐之堂上。奉以爲帥。出死力以抗逆明詔。戰天下之兵。乘機逐利。四出侵暴。屠燒縣邑。賊殺不辜。環其地數千里。莫不被其毒。洛。汝。襄。荊。許。潁。淮。江爲之騷然。丞相公卿士大夫勞於圖議。握兵之將。熊羆貙虎之士。畏懦蹴蹜。莫肯杖戈。爲士卒前行者。獨閣下。奮然率先。揚兵界上。將二州之守。親出入行閒。與士卒均辛苦。生其氣勢。見將軍之鋒穎。凜然有向敵之意。用儒雅文字章句之業。取先天下武夫。關其口而奪之氣。愚初聞時。方食。不覺棄七箸起立。豈以爲閣下眞能引孤軍單進。與死寇角逐。爭一旦僥倖之利哉。就令如是。亦不足貴。其所以服人心。在行事適機宜。而風采可畏愛故也。是以。前狀輒述鄙誠。眷惠手翰遠答。益增忻悚。夫一衆人心力耳目。使所至如時雨。三代用師。不出是道。閣下果能充其言。繼之以無倦。得形便之地。甲兵足用。雖國家故所失地。旬歲可坐而得。況此小寇。安足置齒牙閒。勉而卒之。以俟其至。幸甚。夫遠徵軍士。行者有羈旅離別之思。居者有怨曠騷動之憂。本軍有饋餉煩費之難。地主多姑息形迹之患。急之則怨。緩之則不用命。浮寄孤懸。形勢銷弱。又與賊不相諳委。臨敵恐駭。難以有功。若召募土人。必得豪勇。與賊相熟。知其氣力所極。無望風之驚。愛護鄉里。勇於自戰。徵兵滿萬。不如召募數千。閣下以爲何如。儻可上聞行之否。計已與裴中丞相見。行營事宜。不惜時賜示。幸甚。不宣。

與孟東野書

與足下別久矣。以吾心之思足下。知足下懸懸於吾也。各以事牽。不可合幷。其於人人。非足下之爲見。而日與之處。足下知吾心樂否也。吾言之。而聽者誰歟。吾唱之。而和者誰歟。言無聽也。唱無和也。獨行而無徒也。是非無所與同也。足下知吾心樂否也。足下才高氣淸。行古道。處今世。無田而衣食。事親左右無違。足下之用心勤矣。足下之處身勞且苦矣。混混與世相濁。獨其心追古人而從之。足下之道。其

使吾悲也。去年春。脫汴州之亂。幸不死。無所於歸。遂來於此。主人與吾有故。哀其窮。居吾於符離睢上。及秋。將辭去。因被留以職事。默默在此。行一年矣。到今年秋。聊復辭去江湖。余樂也。與足下終幸矣。李習之娶吾亡兄之女。期在後月。朝夕當來此。張籍在和州。居喪。家甚貧。恐足下不知。故具此白。冀足下一來相視也。自彼至此雖遠。要皆舟行可至。速圖之。吾之望也。

上襄陽于相公書

伏蒙示文武順聖樂辭。讀蔡琰胡笳辭詩。移族從竝與京兆書。自幕府至鄧之北境。凡五百餘里。自庚子至甲辰。凡五日。手批。目視。口詠其言。心惟其義。且恐且懼。忽若有亡。不知鞍馬之勤。道途之遠也。夫澗谷之水。深不過咫尺。邱垤之山。高不能踰尋丈。人則狎而翫之。及至臨太山之懸崖。窺巨海之驚瀾。莫不戰掉悼慄。眩惑而自失。所觀變於前。所守易於內。亦其理宜也。閣下負超卓之奇材。蓄雄剛之俊德。渾然天成。無有畔岸。而又貴窮乎公相。威動乎區極。天子之毗。諸侯之師。故其文章言語。與事相侔。憚赫若雷霆。浩汗若河漢。正聲諧韶濩。勁氣沮金石。盈而不餘一言。約而不失一辭。其事信。其理切。孔子之言曰。有德者必有言。信乎其有德且有言也。揚子雲曰。商書灝灝爾。周書噩噩爾。信乎其能灝灝而且噩噩也。昔者齊君行而失道。管子請釋老馬而隨之。樊遲請學稼。孔子使問之老農。夫馬之智不賢於夷吾。農之能不聖於尼父。然且云爾者。聖賢之能多。農馬之知專故也。今愈雖愚且賤。其從事於文。實專且久。則其贊王公之能。而稱大君子之美。不爲僭越也。伏惟詳察。愈恐懼再拜。

與衞中行書

大受足下。辱書。爲賜甚大。然所稱道過盛。豈所謂誘之而欲其至於是歟。不敢當。不敢當。其中擇其一二近似者。而竊取之。則於交友忠。而不反於背面者。少似近焉。亦其心之所好耳。行之不倦。則未敢自謂能爾也。不敢當。不敢當。至於汲汲於富貴。以救世爲事者。皆聖賢之事業。知其智能謀。力能任者也。如愈者。又焉能之。始相識時。方甚貧。衣食於人。其後相見於汴徐二州。僕皆爲之從事。日月有所入。比之前時。豐約百倍。足下視吾飲食衣服。亦有異乎。然則僕之心。或不爲此汲汲也。其所不忘於仕進者。亦將小行乎其志耳。此未易遽言也。凡禍福吉凶之來。似不在我。惟君子得禍爲不幸。而小人得禍爲恆。君子得福爲恆。而小人得福爲幸。以其所爲似有以取之也。必曰君子則吉。小人則凶者。不可也。賢

不肯存乎己。貴與賤禍與福存乎天。名聲之善惡存乎人。存乎己者。吾將勉之。存乎天存乎人者。吾將任彼而不用吾力焉。其所守者。豈不約而易行哉。足下曰。命之窮通。自我爲之。吾恐未合於道。足下徵之前世而言之則知矣。若曰以道德爲己任。窮通之來。不接吾心。則可也。窮居荒涼。草樹茂密。出無驢馬。因與人絕。一室之內。有以自娛。足下喜吾復脫禍亂。不當安安而居。遲遲而來也。

答崔立之書

斯立足下。僕見險不能止。動不得時。顚頓狼狽。失其所操持。困不知變。以至辱於再三。君子小人之所憫笑。天下之所背而馳者也。足下猶復以爲可教。貶損道德。乃至手筆以問之。扳援古昔。辭義高遠。且進且勸。足下之於故舊之道得矣。雖僕亦固望於吾子。不敢望於他人者耳。然尙有似不相曉者。非故欲發余乎。不然。何子之不以丈夫期我也。不能默默聊復自明。僕始年十六七時。未知人事。讀聖人之書。以爲人之仕者。皆爲人耳。非有利乎己也。及年二十時。苦家貧衣食不足。謀於所親。然後知仕之不唯爲人耳。及來京師。見有舉進士者。人多貴之。僕誠樂之。就求其術。或出禮部所試賦詩策等以相示。僕以爲可無學而能。因詣州縣求舉。有司者好惡出於其心。四舉而後有成。亦未即得仕。聞吏部有以博學宏辭選者。人尤謂之才。且得美仕。就求其術。或出所試文章。亦禮部之類。私怪其故。然猶樂其名。因又詣州府求舉。凡二試於吏部。一既得之。而又黜於中書。雖不得仕。人或謂之能焉。退自取所試讀之。乃類於俳優者之辭。顏忸怩而心不寧者數月。既已爲之。則欲有所成就。書所謂恥過作非者也。因復求舉。亦無幸焉。乃復自疑。以爲所試與得之者。不同其程度。及得觀之。余亦無甚愧焉。夫所謂博學者。豈今之所謂者乎。誠使古之豪傑之士若屈原孟軻司馬遷相如揚雄之徒。進於是選。必知其懷慙。乃不自進而已耳。設使與夫今之善進取者競於蒙昧之中。僕必知其辱焉。然彼五子者。且使生於今之世。其道雖不顯於天下。其自負何如哉。肯與夫斗筲者。決得失於一夫之目。而爲之憂樂哉。故凡僕之汲汲於進者。其小得。蓋欲以具裘葛養窮孤。其大得。蓋欲以同吾之所樂於人耳。其他可否。自計已熟。誠不待人而後知。今足下乃復比之獻玉者。以爲必竢工人之剖。然後見。知於天下。雖兩刖足不爲病。且無使勍者再剋。門哉。足下謂我必待是而後進者。尤非相悉之辭也。僕之玉。固未嘗獻。而足固未嘗刖。足下無爲爲我戚戚也。方今天下風俗。尙有未及於古者。邊境尙有被甲執兵者。主上不得怡。而宰相以爲憂。僕雖不賢。亦且潛究其得失。致之乎吾相。薦之乎吾君。上希卿大夫之位。下猶取一障而乘之。若都不可得。猶將畊於寬閑之野。釣於寂寞之濱。求國家之遺事。考賢人哲士之終始。作唐之一經。垂之於無窮。詵奸訣於既死。發潛德之幽光。二者將必有一可。足下以爲僕之玉凡幾獻。而足凡幾刖也。又所謂勍者。果誰哉。再剋之刑。信何如也。士固信於知己。徵足下無以發吾之狂言。

與崔羣書

自足下離東都。凡兩度枉問。尋承已達宣州。主人仁賢。同列皆君子。雖抱羈旅之念。亦且可以度日。無入而不自得。樂天知命者。固前修之所以禦外物者也。況足下度越此等百千輩。豈以出處近遠。累其靈臺耶。宣州雖稱清涼高爽。然皆大江之南。風土不竝以北。將息之道。當先理其心。心閑無事。然後外患不入。風氣所宜。可以審備。小小者亦當自不至矣。足下之賢。雖在窮約。猶能不改其樂。況地至近。官榮祿厚。親厚盡在左右者耶。所以如此云云者。以爲足下賢者。宜在上位。託於幕府。則不爲得其所。是以及之。乃相親重之爾。正非所以待足下者也。僕自少至今。從事於往還朋友閒。一十七年矣。日月不爲不久。所與交往相識者千百人。非不多。其相與如其一善。或以其久故。或初不甚知。而與之已密。其後無大惡。因不復決捨。或其人雖不皆入於善。而於己已厚。雖欲悔之不可。凡諸淺者固不足道。深者止如此。至於心所仰服。考之言行而無瑕尤。窺之閫奧而不見畛域。明白淳粹。輝光日新者。惟吾崔君一人。僕愚陋。無所知曉。然聖人之書。無所不讀。其精粗巨細。出入明晦。雖不盡識。然不可謂不涉其流者也。以此而推之。以此而度之。誠知足下出羣拔萃。無謂僕何從而得之也。與足下情義寧須言而後自明邪。所以言者。懼足下以爲吾所與深者多不置白黑於胸中耳。既謂能粗知足下。而復懼足下之不有可疑者。僕謂之曰。何疑。疑者曰。君子當有所好惡。好惡不可不明。如清河者。人無賢愚。無不說其善。服其爲人。以是而疑之耳。僕應之曰。鳳皇芝草。賢愚皆以爲美瑞。青天白日。奴隸亦知其清明。譬之食物。至於遐方異味。則有嗜者有不嗜者。至於稻也。粱也。膾也。炙也。豈聞有不嗜者哉。疑者乃解。解不解。於吾崔君無所損益也。自古賢者少。不肖者多。自省事已來。又見賢者恆不遇。不賢者比肩青紫。賢者恆無以自存。不賢者志滿氣得。賢者雖得卑位。則旋而死。不賢者或至眉壽。不知造物者意竟如何。無乃所好惡與人異心哉。又不知無乃都不省記。任其死生壽夭邪。未可知也。人固有薄卿相之官。千乘

之位。而甘陋巷榮羨者。同是人也。猶有好惡如此之異者。況天之與人。當必異其所好惡。無疑也。合乎天而乖於人。何害。況又時有兼得者耶。崔君崔君。無怠無怠。僕無以自全活者。從一官於此。轉困窮甚。思自放於伊潁之上。當亦終得之。近者尤衰憊。左車第二牙。無故動搖脫去。目視昏花。尋常閉便不分人顏色。兩鬢半白。頭髮五分亦白其一。鬚亦有一莖兩莖白者。僕家不幸。諸父諸兄。皆康强早世。如僕者。又可以圖於久長哉。以此忽忽。思與足下相見。一道其懷。小兒女滿前。能不顧念。足下何由得歸北來。僕不樂江南。官滿便終老嵩下。足下可相就。僕不可去矣。珍重自愛。愼飲食。少思慮。惟此之望。愈再拜。

答李翊書

六月二十六日。愈白。李生足下。生之書辭甚高。而其問何下而恭也。能如是。誰不欲告生以其道。道德之歸也。有日矣。況其外之文乎。抑愈所謂望孔子之門牆。而不入於其宮者。焉足以知是且非邪。雖然。不可不爲生言之。生所謂立言者是也。生所爲者。與所期者。甚似而幾矣。抑不知生之志。蘄勝於人而取於人邪。將蘄至於古之立言者邪。則固勝於人而可取於人矣。將蘄至於古之立言者。則無望其速成。無誘於勢利。養其根而竢其實。加其膏而希其光。根之茂者。其實遂。膏之沃者。其光曄。仁義之人。其言藹如也。抑又有難者。愈之所爲。不自知其至猶未也。雖然。學之二十餘年矣。始者非三代兩漢之書不敢觀。非聖人之志不敢存。處若忘。行若遺。儼乎其若思。茫乎其若迷。當其取於心而注於手也。惟陳言之務去。戛戛乎其難哉。其觀於人。不知其非笑之爲非笑也。如是者亦有年。猶不改。然後識古書之正僞。與夫正而不至焉者。昭昭然白黑分矣。而務去之。乃徐有得也。當其取於心而注於手也。汩汩然來矣。其觀於人也。笑之則以爲喜。譽之則以爲憂。以其猶有人之說者存也。如是者亦有年。然後浩乎其沛然矣。吾又懼其雜也。迎而距之。平心而察之。其皆醇也。然後肆焉。雖然。不可以不養也。行之乎仁義之途。游之乎詩書之源。無迷其途。無絕其源。終吾身而已矣。氣水也。言浮物也。水大而物之浮者大小畢浮。氣之與言。猶是也。氣盛。則言之短長。與聲之高下者皆宜。雖如是。其敢自謂幾於成乎。雖幾於成。其用於人也奚取焉。雖然。待用於人者。其肖於器耶。用與舍屬之人。君子則不然。處心有道。行己有方。用則施諸人。舍則傳諸其徒。垂諸文而爲後世法。如是者。其亦足樂乎。其無足樂而悲之。亟稱其人。所以勸之。非敢褒其可褒。而貶其可貶也。問於愈者多矣。念生之言不志乎利。聊相爲言之。

答劉正夫書

愈白。進士劉君足下。辱牋。教以所不及。既荷厚賜。且愧其誠然。幸甚幸甚。凡舉進士者。於先進之門。何所不往。先進之於後輩。苟見其至。寧可以不答。其意邪。來者則接之。舉城士大夫。莫不皆然。而愈不幸。獨有接後輩名。名之所存。謗之所歸也。有來問者。不敢不以誠答。或問。爲文宜何師。必謹對曰。宜師古聖賢人。曰。古聖賢人所爲書具存。辭皆不同。宜何師。必謹對曰。無難易。惟其是爾。如是而已。非固開其爲此而禁其爲彼也。夫百物朝夕所見者。人皆不注視也。及視其異者。則共觀而言之。夫文豈異於是乎。漢朝人莫不能爲文。獨司馬相如太史公。劉向揚雄爲之最。然則用功深者。其收名也遠。若皆與世沉浮。不自樹立。雖不爲當時所怪。亦必無後世之傳也。足下家中百物。皆賴而用也。然其所珍愛者。必非常物。夫君子之於文。豈異於是乎。今後進之爲文。能深探而力取之。以古聖賢人爲法者。雖未必皆是。要若有司馬相如太史公劉向揚雄之徒出。必自於此。不自於循常之徒也。若聖人之道。不用文則已。用則必尚其能者。能者非他。能自樹立。不因循者是也。有文字來。誰不爲文。然其存於今者。必其能者也。顧常以此爲說耳。愈於足下。忝同道而先進者。又嘗從遊於賢尊翁事。既辱厚賜。又安得不進其所有。以爲答也。足下以爲何如。愈白。

答尉遲生書

愈白。尉遲生足下。夫所謂文者。必有諸其中。是故君子愼其實。實之美惡。其發也不揜。本深而末茂。形大而聲宏。行峻而言厲。心醇而氣和。昭晰者無疑。優游者有餘。醴不備。不可以爲成人。辭不足。不可以爲成文。愈之所聞者如是。有問於愈者。亦以是對。今吾子所爲皆善矣。謙謙然若不足。而以徵於愈。愈又敢有愛於言乎。抑所能言者。皆古之道。古之道不足以取於今。吾子何其愛之異也。賢公卿大夫。在上比肩。始進之賢士。在下比肩。彼其得之。必有以取之也。子欲仕乎。其往問焉。皆可學也。若獨有愛於是。而非仕之謂。則愈也嘗學之矣。請繼今以言。

答呂毉山人書

愈白。惠書責以不能如信陵執轡者。夫信陵戰國公子。欲以取士聲勢傾天下。而然耳。如僕者。自度若世無孔子。不當在弟子之列。以吾子始自山出。有朴茂之美意。恐未磨礱以世事。又自周後文弊。百子爲書。各自名家。亂聖人之宗。後生習傳。雜而不貫。故設問以觀吾子。其已成熟乎。將以爲友也。其未成熟乎。將以講去其非而趨是耳。不如六國公子有市於道者也。方今天下入仕。惟以進士明經及卿大夫之世耳。其人率皆習熟時俗。工於語言。識形勢。善候人主意。故天下靡靡。日入於衰壞。恐不復振起。務欲進足下趨死不顧利害去就之人於朝。以爭救之耳。非謂當今公卿閒無足下輩文學知識也。不得以信陵比。然足下衣破衣。繫麻鞋。率然叩吾門。吾待足下。雖未盡賓主之道。不可謂無意者。足下行天下。得此於人。蓋寡。乃遂能責不足於我。此眞僕所汲汲求者。議雖未中節。其不肯阿曲以事人者。灼灼明矣。方將坐足下三浴而三熏之。聽僕之所爲。少安無躁。

與汝州盧郎中論薦侯喜狀

右其人爲文甚古。立志甚堅。行止取捨。有士君子之操。家貧親老。無援於朝。在舉場十餘年。竟無知遇。愈常慕其才。而恨其屈。與之還往。歲月已多。嘗欲薦之於主司。言之於上位。名卑官賤。其路無由。觀其所爲文。未嘗不掩卷長歎。去年愈從調選。本欲攜持同行。適遇其人自有家事。迍邅坎坷。又廢一年。及春末。自京還。怪其久絕消息。五月初至此。自言爲閣下所知。辭氣激揚。面有矜色。曰。侯喜死不恨矣。喜辭親入關。羈旅道路。見王公數百。未嘗有如盧公之知我也。比者分將委棄泥塗。老死草野。今胸中之氣勃勃然。復有仕進之路矣。愈感其言。賀之以酒。謂之曰。盧公天下之賢刺史也。未嘗有所推引。蓋難其人。而重其事。今子鬱爲選首。其言死不恨。固宜也。古所謂知己者。正如此耳。身在貧賤。爲天下所不知。獨見遇於大賢。乃可貴耳。若自有名聲。又託形勢。此乃市道之事。又何足貴乎。子之遇知於盧公。眞所謂知己者也。士之修身立節。而竟不遇知己。前古已來不可勝數。或日接膝而不相知。或異世而相慕。以其遭逢之難。故曰。士爲知己者死。不其然乎。不其然乎。閣下既已知侯生而愈復以侯生言於閣下者。非爲侯生謀也。感知己之難遇。大閣下之德。而憐侯生之心。故因其行而獻於左右焉。謹狀。

唐宋八家文卷四

韓愈退之著

送鄭尚書序

嶺之南。其州七十。其二十二隸嶺南節度府。其四十餘分四府。府各置帥。然獨嶺南節度爲大府。大府始至。四府必使其佐啓問起居。謝守地不得即賀。以爲禮。歲時必遣賀問。致水土物。大府帥。或道過其府。府帥必戒服。左握刀。右屬弓矢。帕首袴韤迎郊。及既至。大府帥先入據館。帥守屛。若將趨入拜庭之爲者。大府與之爲讓至一再。乃敢改服。以賓主見。適位執爵。皆興拜。不許乃止。處若小侯之事大國。有大事。諮而後行。隸府之州。離府遠者至三千里。懸隔山海。使必數月而後能至。蠻夷悍輕易怨。以變。其南州皆岸大海。多洲島。颶風一日踔數千里。漫瀾不見蹤跡。控御失所。依險阻。結黨仇。機毒矢。以待將吏。撞搪呼號。以相和應。蜂屯蟻雜。不可爬梳。好則人。怒則獸。故常薄其征入。簡節而疎目。時有所遺漏。不究切之。長養以兒子。至紛不可治。乃草薙而禽獮之。盡根株。痛斷乃止。其海外雜國。若躭浮羅。流求。毛人。夷亶之州。林邑。扶南。眞臘。于陀利之屬。東南際天地。以萬數。或時候風潮。朝貢蠻胡賈人。舶交海中。若嶺南帥得其人。則一邊盡治。不相寇盜賊殺。無風魚之災。水旱癘毒之患。外國之貨日至。珠香象犀玳瑁奇物溢於中國。不可勝用。故選帥常重于他鎭。非有文武威風。知大體。可畏信者。則不幸往往有事。長慶三年四月。以工部尚書鄭公爲刑部尚書。家屬百餘人。無數畝之宅。僦屋以居。可謂貴而能貧。爲仁者不富之效也。及是命。朝廷莫不悅。將行。公卿大夫士。苟能詩者。咸相率爲詩。以美朝政。以懽公南行之思。韻必以來字者。所以祝公成政而來歸疾也。

送幽州李端公序

元年。今相國李公爲吏部員外郎。愈嘗與偕朝。道語幽州司徒公之賢曰。某前年被詔。告禮幽州。入其地。迓勞之使里至。每進益恭。及郊。司徒公紅帓首。韡袴握刀。左右雜佩。弓韔服。矢插房。俯立迎道左。某禮辭曰。公天子之宰。禮不可如是。及府。又以其服卽事。某又曰。公三公。不可以將服承命。卒不得辭。上堂卽客階。座必東向。愈曰。國家失太平。于今六十年。夫十日十二子相配。數窮六十。其將復平。平必自幽州始。亂之所出也。今天子大聖。司徒公勤於禮。庶幾帥先河南北之將。來覲奉職。如開元時乎。李公曰。然。今李公既朝夕左右。必數數焉爲上言。元年之言殆合矣。端公歲時來壽其親東都。東都之大夫士。莫不拜于門。其爲人佐甚忠。意欲司徒公功名流千萬歲。請以愈言爲使歸之獻。

送水陸運使韓侍御歸治所序

六年冬。振武軍吏走驛馬。詣闕告饑。公卿廷議。以轉運使不得其人。宜選才幹之士往換之。吾族子重華。適當其任。至則出贓罪吏九百餘人。脫其桎梏。給耒耜與牛。使耕其傍便近地。以償所負。釋其粟之在吏者四十萬斛。不徵。吏得去罪死。假耕種。齒平人。有以自效。莫不涕泣感奮。相率盡力。以奉其令。而又爲之奔走經營。相原隰之宜。指授方法。故連二歲大熟。吏得盡償其所亡失四十萬斛。而私其贏餘。得以蘇息。軍不復飢。君曰。此未足爲天子言。請益募人。爲十五屯。屯置百三十人。而種百頃。令各就高爲堡。東起振武。轉而西。過雲州界。極於中受降城。出入河山之際。六百餘里。屯堡相望。寇來不能爲暴。人得肆耕其中。少可以罷漕輓之費。朝廷從其議。秋果倍收。歲省度支錢千三百萬。八年。詔拜殿中侍御史。錫服朱銀。其冬來朝。奏曰。得益開田四千頃。則盡可以給塞下五城矣。田五千頃。法當用人七千。臣令吏於無事時。督習弓矢。爲戰守備。因可以制虜。庶幾所謂兵農兼事。務一而兩得者也。大臣方持其議。吾以爲邊兵皆不知耕作。開口望哺。有司常僦人。以車船自他郡往輸。乘沙逆河。遠者數千里。人畜死。蹄踵交道。費不可勝計。中國坐耗。而邊吏恆苦食不繼。今君所請田。皆故秦漢時郡縣地。其課績又已驗白。若從其言。其利未可遽以一二數也。今天子方擧羣策。以收太平之功。寧使士有不盡用之歎。懷奇見而不得施設也。君又何憂。而中臺士大夫。亦同言。侍御韓君。前領三縣。紀綱二州。奏課常爲天下第一。行其計於邊。其功烈又赫赫如此。使盡用其策。西北邊故所沒地。可指期而有也。聞其歸。皆相勉爲詩。以推大之。而屬余爲序。

送殷員外序

唐受天命爲天子。凡四方萬國。不問海內外。無小大。咸臣順於朝。時節貢水土百物。大者特來。小者附集。元和睿聖文武皇帝。既嗣位。悉治方內。就法度。十二年。詔曰。四方萬國。惟回鶻於唐最親。奉職尤謹。丞相其選宗室四品一人。持節往賜君長。告之朕意。又選學有經法。通知時事者一人。與之爲貳。由是。殷侯侑自太常博士。遷尚書虞部員外郎兼侍御史。朱衣象笏。承命以行。朝之大夫。莫不出餞。酒半。右庶子韓愈。執盞言曰。殷大夫。今人適數百里。出門。惘惘有離別可憐之色。持被入直三省。丁寧顧婢子。語刺刺不能休。今子使萬里外國。獨無幾微出於言面。豈不眞知輕重大丈夫哉。丞相以子應詔。眞誠知人。士不通經。果不足用。於是相屬爲詩。以道其行云。

送區冊序

陽山天下之窮處也。陸有邱陵之險。虎豹之虞。江流悍急。橫波之石。廉利侔劍戟。舟上下失勢。破碎淪溺者往往有之。縣郭無居民。官無丞尉。夾江荒茅篁竹之閒。小吏十餘家。皆鳥言夷面。始至。言語不通。畫地爲字。然後可告以出租賦。奉期約。是以賓客遊從之士。無所爲而至。愈待罪於斯。且半歲矣。有區生者。誓言相好。自南海挐舟而來。升自賓階。儀觀甚偉。坐與之語。文義卓然。莊周云。逃空虛者。聞人足音跫然而喜矣。況如斯人者。豈易得哉。入吾室。聞詩書仁義之說。欣然喜。若有志於其閒也。與之翳嘉林。坐石磯。投竿而漁。陶然以樂。遺外聲利。而不厭乎貧賤也。歲之初吉。歸拜其親。酒壺既傾。序以識別。

送石處士序

河陽軍節度御史大夫烏公。爲節度之三月。求士於從事之賢者。有薦石先生者。公曰。先生何如。曰。先生居嵩邙瀍穀之閒。冬一裘。夏一葛。食朝夕飯一盂。蔬一盤。人與之錢則辭。請與出遊。未嘗以事免。勸之仕不應。坐一室。左右圖書。與之語道理。辯古今事當否。論人高下。事後當成敗。若河決下流而東注。若駟馬駕輕車。就熟路。而王良造父爲之先後也。若燭照數計而龜卜也。大夫曰。先生有以自老。無求於人。其肯爲某來耶。從事曰。大夫文武忠孝。求士爲國。不私於家。方今寇聚於恆。師環其疆。農不耕收。財粟殫亡。吾所處地。歸輸之塗。治法征謀。宜有所出。先生仁且勇。若以義請。而强委重焉。其何說之辭。

於是譔書詞。具馬幣。卜日以授使者。求先生之廬而請焉。先生不告於妻子。不謀於朋友。冠帶出見客。拜受書禮於門內。宵則沐浴戒行李。晨則畢至。張上東門外。酒三行。且起。有執辭而言者曰。大夫眞能以義取人。先生眞能以道自任。決去就。爲先生別。又酌而祝曰。凡去就出處何常。惟義之歸。遂以爲先生壽。又酌而祝曰。使大夫恆無變其初。無務富其家。而飢其師。無甘受佞人。而外敬正士。無味於諂言。惟先生是聽。以能有成功。保天子之寵命。又祝曰。使先生無嗣利於大夫。而私便其身。先生起拜祝辭曰。敢不敬蚤夜以求從祝規。於是東都之人士。咸知大夫與先生。果能相與以有成也。遂各爲歌詩六韻退。愈爲之序云。

送溫處士赴河陽軍序

伯樂一過冀北之野。而馬羣遂空。夫冀北馬多天下。伯樂雖善知馬。安能空其羣耶。解之者曰。吾所謂空。非無馬也。無良馬也。伯樂知馬。遇其良。輒取之。羣無良馬。雖謂無馬。不爲虛語矣。東都固士大夫之冀北也。恃才能。深藏而不市者。洛之北涯曰石生。其南涯曰溫生。大夫烏公。以鈇鉞鎭河陽。之三月。以石生爲才。以禮爲羅。羅而致之幕下。未數月也。以溫生爲才。於是以石生爲媒。以禮爲羅。又羅而致之幕下。東都雖信多才士。朝取一人焉拔其尤。暮取一人焉拔其尤。自居守河南尹。以及百司之執事。與吾輩二縣之大夫。政有所不通。事有所可疑。奚所諮而處焉。士大夫之去位而巷處者。誰與嬉遊。小子後生。於何考德而問業焉。縉紳之東西行。過是都者。無所禮於其廬。若是而稱曰。大夫烏公一鎭河陽。而東都處士之廬無人焉。豈不可也。夫南面而聽天下。其所託重而恃力者。惟相與將耳。相爲天子得人於朝廷。將爲天子得文武士於幕下。求內外無治。不可得也。愈縻於茲。不能自引去。資二生以待老。今皆爲有力者奪之。其何能無介然於懷耶。生既至。拜公於軍門。其爲吾以前所稱。爲天下賀。以後所稱。爲吾致私怨於盡取也。留守相公。首爲四韻詩。歌其事。愈因推其意而序之。

送楊少尹序

昔疏廣受二子。以年老。一朝辭位而去。於時公卿設供帳。祖道都門外。車數百兩。道傍觀者。多嘆息泣下。共言其賢。漢史既傳其事。而後世工畫者。又圖其迹。至今照人耳目。赫赫若前日事。國子司業楊君巨源。方以能詩訓後進。一旦以年滿七十。亦白丞相。去歸其鄉。世常說。古今人不相及。今楊與二疏。其

意豈異也。予忝在公卿後。遇病不能出。不知楊侯去時。城門外送者幾人。車幾兩。馬幾疋。道傍觀者。亦有嘆息知其爲賢與否。而太史氏又能張大其事。爲傳繼二疏蹤跡否。不落莫否。見今世無工畫者。而相有愛而惜之者。白以爲其都少尹。不絕其祿。又爲歌詩以勸之。京師之長於詩者。亦屬而和之。又不知當時二疏之去。有是事否。古今人同不同。未可知也。中世士大夫。以官爲家。罷則無所於歸。楊侯始冠舉於其鄉。歌鹿鳴而來也。今之歸。指其樹曰。某樹吾先人之所種也。某水某邱。吾童子時所釣遊也。鄉人莫不加敬。誡子孫。以楊侯不去其鄉爲法。古之所謂鄉先生。沒而可祭於社者。其在斯人歟。

送李愿歸盤谷序

大行之陽有盤谷。盤谷之間。泉甘而土肥。草木叢茂。居民鮮少。或曰。謂其環兩山之間。故曰盤。或曰。是谷也。宅幽而勢阻。隱者之所盤旋。友人李愿居之。愿之言曰。人之稱大丈夫者。我知之矣。利澤施於人。名聲昭於時。坐於廟朝。進退百官。而佐天子出令。其在外。則樹旄旗。羅弓矢。武夫前呵。從者塞途。供給之人。各執其物。夾道而疾馳。喜有賞。怒有刑。才俊滿前。道古今而譽盛德。入耳而不煩。曲眉豐頰。清聲而便體。秀外而惠中。飄輕裾。翳長袖。粉白黛綠者。列屋而閒居。妒寵而負恃。爭妍而取憐。大丈夫之遇。知於天子。用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。窮居而閒處。升高而望遠。坐茂樹以終日。濯清泉以自潔。採於山。美可茹。釣於水。鮮可食。起居無時。惟適之安。與其有譽於前。孰若無毀於其後。與其有樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫不遇於時。者之所爲也。我則行之。伺候於公卿之門。奔走於形勢之途。足將進而趦趄。口將言而囁嚅。處穢汚而不羞。觸刑辟而誅戮。徼倖於萬一。老死而後止者。其於爲人。賢不肖何如也。昌黎韓愈聞其言而壯之。與之酒而爲之歌曰。

盤之中。維子之宮。盤之土。可以稼。盤之泉。可以濯。可沿。盤之阻。誰爭子所。窈而深。廓其有容。繚而曲。如往而復。嗟盤之樂兮。樂且無央。虎豹遠跡兮。蛟龍遁藏。鬼神守護兮。呵禁不祥。飲且食兮。壽而康。無不足兮。奚所望。膏吾車兮。秣吾馬。從子於盤兮。終吾生以徜徉。

送王塤序

吾嘗以爲孔子之道大而能博門弟子不能徧觀而盡識也故學焉而皆得其性之所近其後離散分處諸侯之國又各以所能授弟子原遠而末益分蓋子夏之學其後有田子方子子方之後流而爲莊周故周之書喜稱子方之爲人荀卿之書語聖人必曰孔子子弓子弓之事業不傳惟太史公書弟子傳有姓名字曰孔子弓受易於商瞿孟軻師子思子思之學蓋出曾子自孔子沒羣弟子莫不有書獨孟軻氏之傳得其宗故吾少而樂觀焉太原王塤示予所爲文好舉孟子之所道者與之言信悅孟子而屢贊其文辭夫沿河而下苟不止雖有遲疾必至於海如不得其道也雖疾不止終莫至於海也故求觀聖人之道必自孟子始今塤之所由既幾於知道如又得其船與楫知沿而不止嗚呼其可量也哉

送王秀才序

吾少時讀醉鄉記私怪隱居者無所累於世而猶有是言豈誠旨於味耶及讀阮籍陶潛詩乃知彼雖偃蹇不欲與世接然猶未能平其心或爲事物是非相感發於是有託而逃焉者也若顏氏子操瓢與簞曾參歌聲若出金石彼得聖人而師之汲汲每若不可及於其外也固不暇尚何麴糵之託而昏冥之逃耶吾人以爲悲醉鄉之徒不遇也建中初天子嗣位有意貞觀開元之丕績在廷之臣爭言事當此時醉鄉之後世又以直廢吾既悲醉鄉之文辭而又嘉良臣之烈思識其子孫今子之來見我也無所挾吾猶將張之況文與行不失其世守渾然端且厚惜乎吾力不能振之而其言不見信於世也於其行姑與之飲酒

送許郢州序

愈嘗以書自通於于公累數百言其大要言先達之士得人而託之則事業顯而爵位通下有矜乎能上有矜乎可復書曰足下之言是也于公身居方伯之尊蓄不時之材而能與卑鄙庸陋相應答如影響是非忠乎君而樂乎善以國家之務爲己任者乎愈雖不敢私其大恩抑不可不謂之知己恆矜而誦之情已至而事不從小人之所不爲也故於使君之行道刺史之事以爲于公贈凡天下之事成於自同而敗於自異爲刺史者恆私於其民不以實應乎府爲觀察使者恆急於其賦不以情信乎州縣是刺史不安其官觀察使不得其政財已竭而歛愈急其不去爲盜也亦幸矣誠使刺史不私於其民觀察使不急於其賦刺史曰吾州之民天下之民也歛不可以獨急如是而政不均令不行者之言者其有不信乎縣之於州猶州之於府也有以事乎上有以臨乎下同則成異則敗者皆然也非使君之賢其誰能信之愈於使君非燕游一朝之好也故其贈行不以頌而以規

贈崔復州序

有地數百里趨走之吏自長史司馬以下數十人其祿足以仁其三族及其朋友故舊樂乎心則一境之人懼丈夫官至刺史亦榮矣雖然幽遠之小民其足跡未嘗至城邑苟有不得其所能自直於鄉閭之吏者鮮矣況能自辨於縣吏乎能自辨於縣吏鮮矣況能自辨於刺史之庭乎繇是刺史有所不聞小民有所不宣賦有常而令不以言連帥不以信民貧而歛愈急吾見刺史之足以蘇復人于公之賢足以庸崔君有刺史之榮而無其難爲者將在於此乎愈嘗辱于公之知而舊遊於崔君慶復人之將蒙其休澤也于是乎言

送孟東野序

大凡物不得其平則鳴草木之無聲風橈之鳴水之無聲風蕩之鳴其躍也或激之其趨也或梗之其沸也或炙之金石之無聲或擊之鳴人之於言也亦然有不得已者而後言其歌也有思其哭也有懷凡出乎口而爲聲者其皆有弗平者乎樂也者鬱于中而泄于外者也擇其善鳴者而假之鳴竹匏土革木八者物之善鳴者也維天之於時也亦然擇其善鳴者而假之鳴是故以鳥鳴春以雷鳴夏以蟲鳴秋以風鳴冬四時之相推奪其必有不得其平者乎其於人也亦然人聲之精者爲言文辭之於言又其精也尤擇其善鳴者而假之鳴其在唐虞咎陶禹其善鳴者也而假以鳴夔弗能以文辭鳴又自假於韶以鳴夏之時五子以其歌鳴伊尹鳴殷周公鳴周凡載於詩書六藝皆鳴之善者也周之衰孔子之徒鳴之其聲大而遠傳曰天將以夫子爲木鐸其弗信矣乎其末也莊周以其荒唐之辭鳴楚大國也其亡也以屈原鳴臧孫辰孟軻荀卿以道鳴者也楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓

非。愼到。田駢。鄒衍。尸佼。孫武。張儀。蘇泰之屬。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。漢之時。司馬遷。相如。揚雄。最其善鳴者也。其下魏晉氏。鳴者不及於古。然亦未嘗絕也。就其善鳴者。其聲淸以浮。其節數以急。其辭淫以哀。其志弛以肆。其爲言也。亂雜而無章。將天醜其德。莫之顧邪。何爲乎不鳴其善鳴者也。唐之有天下。陳子昂。蘇源明。元結。李白。杜甫。李觀。皆以其所能鳴。其存而在下者。孟郊東野始以其詩鳴。其高出魏晉。不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。從吾游者。李翺。張籍其尤也。三子者之鳴信善矣。抑不知天將和其聲。而使鳴國家之盛邪。抑將窮餓其身。思愁其心腸。而使自鳴其不幸邪。三子者之命。則懸乎天矣。其在上也。奚以喜。其在下也。奚以悲。東野之役於江南也。有若不釋然者。故吾道其命於天者。以解之。

送董邵南序

燕趙古稱多感慨悲歌之士。董生擧進士。連不得志於有司。懷抱利器。鬱鬱適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。夫以子之不遇時。苟慕義彊仁者皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。然吾嘗聞。風俗與化移易。吾惡知其今不異於古所云邪。聊以吾子之行卜之也。董生勉乎哉。吾因之有所感矣。爲我弔望諸君之墓。而觀於其市。復有昔時屠狗者乎。爲我謝曰。明天子在上。可以出而仕矣。

送齊皞下第序

古之所謂公無私者。其取舍進退。無擇於親疎遠邇。惟其宜可焉。其下之視上也。亦惟視其擧黜之當否。不以親疎遠邇疑乎其上之人。故上之人。行志擇誼。坦乎其無憂於下也。下之人。克己愼行。確乎其無惑於上也。是故。爲君不勞。而爲臣甚易。見一善焉。可得詳而擧也。見一不善焉。可得明而去也。及道之衰。上下交疑。於是乎擧讐擧子之事。載之傳中。而稱美之。而謂之忠。見一善焉。若親與邇不敢擧也。見一不善焉。若疎與遠不敢去也。衆之所同好焉。矯而黜之。乃公也。衆之所同惡焉。激而擧之。乃忠也。於是乎有違心之行。有怫志之言。有內愧之名。若然者。俗所謂良有司也。膚受之訴。不行於君。巧言之誣。不起於人矣。烏虖。今之君天下者。不亦勞乎。爲有司者。不亦難乎。爲人嚮道者。不亦勤乎。是故。端居而念焉。非君人者之過也。則曰有司焉。則非有司之過也。則曰今擧天下人焉。則非今擧天下人之過也。蓋其漸有因。其本有根。生於私其親。成於私其身。以己之不直。而謂人皆然。其植之也固久。其除之

也實難。非百年必世。不可得而化也。非知命不惑。不可得而改也。已矣乎。其終能復古乎。若高陽齊生者。其起予者乎。齊生之兄。爲時名相。出藩於南。朝之碩臣。皆其舊交。齊生擧進士。有司用是連枉齊生。齊生不以云。乃曰。我之未至也。有司其枉我哉。我將利吾器而俟其時耳。抱負其業。東歸於家。吾觀於人。有不得志。則非其上者衆矣。亦莫計其身之短長也。若齊生者。既至矣。而曰我未也。不以閔於有司。其不亦鮮乎哉。吾用是知齊生後日誠良有司也。能復古者也。公無私者也。知命不惑者也。

送浮屠文暢師序

人固有儒名而墨行者。問其名則是。校其行則非。可以與之遊乎。如有墨名而儒行者。問其名則非。校其行則是。可以與之遊乎。揚子雲稱。在門牆則揮之。在夷狄則進之。吾取以爲法焉。浮屠師文暢喜文章。其周遊天下。凡有行。必請於縉紳先生。以求詠歌其所志。貞元十九年春。將行東南。柳君宗元爲之請。解其裝。得所得敍詩累百餘篇。非至篤好。其何能致多如是邪。惜其無以聖人之道告之者。而徒擧浮屠之說贈焉。夫文暢浮屠也。如欲聞浮屠之說。當自就其師而問之。何故謁吾徒而來請也。彼見吾君臣父子之懿。文物事爲之盛。其心有慕焉。拘其法而未能入。故樂聞其說而請之。如吾徒者。宜當告之以二帝三王之道。日月星辰之行。天地之所以著。鬼神之所以幽。人物之所以蕃。江河之所以流。而語之。不當又爲浮屠之說而瀆告之也。民之初生。固若禽獸夷狄然。聖人者立。然後知宮居而粒食。親親而尊尊。生者養而死者藏。是故。道莫大乎仁義。敎莫正乎禮樂刑政。施之於天下。萬物得其宜。措之於其躬。體安而氣平。堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。禹以是傳之湯。湯以是傳之文武。文武以是傳之周公孔子。書之於冊。中國之人世守之。今浮屠者。孰爲而孰傳之耶。夫鳥俛而啄。仰而四顧。夫獸深居而簡出。懼物之爲己害也。猶且不脫焉。弱之肉彊之食。今吾與文暢。安居而暇食。優游以生死。與禽獸異者。寧可不知其所自耶。夫不知者。非其人之罪也。知而不爲者惑也。悅乎故。不能卽乎新者弱也。知而不以告人者不仁也。告而不以實者不信也。余既重柳請。又嘉浮屠能喜文辭。於是乎言。

送高閑上人序

苟可以寓其巧智。使機應於心。不挫於氣。則神完而守固。雖外物至。不膠於心。堯舜禹湯治天下。養叔治射。庖丁治牛。師曠治音聲。扁鵲治病。僚之於丸。秋之於奕。伯倫之於酒。樂之終身不厭。奚暇外慕。夫

外慕徒業者。皆不造其堂。不嚌其胾者也。往時張旭善草書。不治他技。喜怒窘窮。憂悲愉快。怨恨思慕。酣醉無聊。不平有動於心。必於草書焉發之。觀於物。見山水崖谷。鳥獸蟲魚。草木之花實。日月列星。風雨水火。雷霆霹靂。歌舞戰鬬。天地事物之變。可喜可愕。一寓於書。故旭之書變動。猶鬼神不可端倪。以此終其身。而名後世。今閑之於草書。有旭之心哉。不得其心。而逐其迹。未見其能旭也。爲旭有道。利害必明。無遺錙銖。情炎於中。利欲鬬進。有得有喪。勃然不釋。然後一決於書。而後旭可幾也。今閑師浮屠氏。一死生。解外膠。是其爲心。必泊然無所起。其於世。必淡然無所嗜。泊與淡相遭。頹墮委靡。潰敗不可收拾。則其於書。得無象之然乎。然吾聞。浮屠人善幻多技能。閑如通其術。則吾不能知矣。

送廖道士序

五岳於中州。衡山最遠。南方之山。巍然高而大者。以百數。獨衡爲宗。最遠而獨爲宗。其神必靈。衡之南八九百里。地益高。山益峻。水清而益駛。其最高而橫絕南北者嶺。郴之爲州。在嶺之上。測其高下。得三之二焉。中州清淑之氣。於是焉窮。氣之所窮。盛而不過。必蜿蟺扶輿。磅礴而鬱積。衡山之神既靈而郴之爲州。又當中州清淑之氣。於是焉窮。氣之所窮。盛而不過。必蜿蟺扶輿。磅礴而鬱積。其水土之所生。神氣之所感。白金。水銀。丹砂。石英。鍾乳。橘柚之包。竹箭之美。千尋之名材。不能獨當也。意必有魁奇忠信材德之民生其閒。吾又未見也。而學於衡山。氣專而容寂。多藝而善遊。豈吾所謂魁奇而迷溺者邪。廖師善知人。若不在其身。必在其所與遊。訪之而不吾告。何也。於其別。申以問之。

鄆州谿堂詩序

憲宗之十四年。始定東平。三分其地。以華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風馬公爲鄆曹濮節度觀察等使。鎮其地。既一年。褒其軍號。曰天平軍。上卽位之二年。召公入。且將用之。以其人之安公也。復歸之鎮。上之三年。公爲政於鄆曹濮也。適四年矣。治成制定。衆志大固。惡絕於心。仁形於色。尊心一力。以供國家之職。於時沂密始分而殘。其帥其後幽鎮魏不悅於政。相扇繼變。復歸於舊。徐亦乘勢。逐帥自置。同於三方。惟鄆也。截然中居。四鄰望之。若防之置水。恃以無恐。然而皆曰。鄆爲虜巢。且六十年。將彊卒武。曹濮於鄆。州大而近。軍所根柢。皆驕以易怨。而公承死亡之後。掇拾之餘。剝膚椎髓。公私掃地。赤立。新舊不相保持。萬目瞪瞪。公於此時。能安以治之。其功爲大。若幽鎮魏徐之亂。不扇而變。其功反小。

何也。公之始至。衆未熟化。以武則忿以憾。以恩則橫而肆。一以爲赤子。一以爲龍蛇。憊心罷精。磨以歲月。然後致之難也。乃敎之行。衆皆戴公爲親父母。夫叛父母從仇讐。非人之情。故曰易。於是天子以公爲尚書右僕射。封扶風縣開國伯。以褒嘉之。公亦樂衆之和。知人之悅。而侈上之賜也。於是爲堂於其居之西北隅。號曰谿堂。以饗士大夫。通上下之志。既饗其從事陳曾謂其衆言。公之斁此邦。其勤不亦至乎。此邦之人。纍公之化。惟所令之。不亦休乎。昔者人謂斯何。今者人謂斯何。雖然。斯堂之作。意其有謂而喑無詩歌。是不考引公德。而接邦人於道也。乃使來請其詩曰。

帝奠九壖。有棄有年。有荒不條。河岱之閒。及我憲考。一收正之。視邦選侯。以公來尸之。人始未信。公不飲食。以訓以徇。孰饑無食。孰吟孰歎。孰寃不問。不得分願。孰爲邦蠹。節根之蜮。羊狠狼貪。以口覆城。吹之煦之。摩手拊之。簸之石之。膊而磔之。凡公四封。既富以彊。謂公吾父。孰違公令。可以師征。不寧守邦。公作谿堂。播播流水。淺有蒲蓮。深有蒹葦。公以岸有集鳥。既歌以舞。其鼓考考。公在谿堂。公御琴瑟。公暨賓贊。稽經諏律。施用不差。人用不屈。谿有蘆菰。有龜有魚。公在中流。右詩左書。無我斁遺。此邦是庶。

荊潭唱和詩序

從事有示愈以荊潭酬和詩者。愈既受而卒業。因仰而言曰。夫和平之音淡薄。而愁思之聲要妙。懽愉之辭難工。而窮苦之言易好也。是故文章之作。恆發於羈旅草野。至若王公貴人。氣滿志得。非性能而好之。則不暇以爲。今僕射裴公。開鎮蠻荊。統郡惟九。常侍楊公。領湖之南。壤地二千里。德刑之政竝勸。爵祿之報兩崇。乃能存志乎詩書。寓辭乎詠歌。往復循環。有倡斯和。搜奇抉怪。雕鏤文字。與韋布里閭。樵悴專壹之士。較其毫釐分寸。鏗鏘發金石。幽渺感鬼神。信所謂材全而能鉅者也。兩府之從事。與部屬之吏。屬而和之。苟在編者。咸可觀也。宜乎施之樂章。紀諸冊書。從事曰。子之言是也。告於公。書以爲荊潭倡和詩序。

唐宋八家文卷五

韓愈退之著

河南府同官記

永貞元年。愈自陽山移江陵法曹參軍。獲事河東公。公嘗與其從事言。建中初。天子始紀年更元。命官司舉貞觀開元之烈。羣臣惕慄奉職。命材登良。不敢私達。當時自齒朝之士而上。以及下百職事。官闕一人。將補。必取其良。然而河南同時於天下稱多。獨得將相五人。故於府之參軍。則得我公。於河南主簿。則得故相國范陽盧公。於氾水主簿。則得故相國今太子賓客滎陽鄭公。於陸渾主簿。則得相國今書東都留守吳郡顧公。盧公去河南。爲右補闕。其後由工部侍郎至宰相。龍而又爲趙公去。由尚書左丞至宰相。鄭公去氾水。爲監察御史。佐山南軍。其後由工部侍郎至宰相。龍而又爲趙公去。陸渾。爲右拾遺。其後由給事中爲宰相。顧公去。登封。爲監察御史。其後由京兆尹至吏部尚書東都留守。我公去。府。爲長水尉。其後由膳部郎中爲荊南節度行軍司馬。遂爲節度使。自工部尚書至吏部尚書。三相國之勞在吏冊。顧吏部愼藏小心。於時有聲。我公愿潔而沈密。開亮而卓偉。行茂於家。事修於官。嗣紹家烈。不違其先。作帥南荊。厥聞休顯。武志既揚。文教亦熙。登槐贊元。其慶且至。故好語故事者。以爲五公之始迹也同。其後進而偕大也亦同。其稱名臣也又同。官職雖分。而功德有巨細。其有忠勞於國家也同。有若將同。其後而先同。其初也。有聞而問者。於是焉書。既五年。始立石。刻其語河南府參軍舍庭中。於時河東公爲左僕射宰相。出藩大邦。開府尚書。鎭江陵。漢南地連七州。戎士十萬。其官宰相也。留守之官。居禁省中。歲時出旌旗序。留司文武百官。於宮城門外而衙之。江陵故楚都也。戎士五萬。三公同時千里相望。可謂盛矣。河東公名均。姓裴氏。

新修滕王閣記

愈少時。侧聞江南多游觀之美。而滕王閣獨爲第一。有瑰偉絕特之稱。及得三王所爲序賦記等。壯其文辭。益欲往一觀而讀之。以忘吾憂。係官於朝。願莫之遂。十四年。以言事斥守揭陽。便道取疾。以至海上。又不得過南昌而觀所謂滕王閣者。其冬。以天子進大號。加恩區內。移刺袁州。袁於南昌爲屬邑。私及其無事且還。儻得一至其處。竊寄目償所願焉。至喜幸自語。以爲當得躬詣大府。受約束於下執事。及其無事。觀察江南西道。洪江饒虔吉信撫袁悉屬治所。八州之人。前所不便。及所願欲而不得者。公至之日。皆罷行之。大者釋聞。小者立變。春生秋殺。陽開陰閉。令修於庭戶。數日之閒。而人自得於湖山千里之外。吾雖欲出意見。論利害。聽命於幕下。而吾州乃無一事可假而行者。又安得捨己所事。以勤館人。則滕王閣又無因而至焉矣。其歲九月。人吏浹和。公與監軍使燕於此閣。文武賓士。皆與在席。酒半。合辭言曰。此屋不修且壞。前公爲從事此邦。適理新之。公所爲文。實書在壁。今三十年。而公來爲邦伯。適及期月。公又來燕於此。公烏得無情哉。公應曰諾。於是棟楹梁柎板檻之腐黑撓折者。蓋瓦級甎之破缺者。赤白之漫漶不鮮者。治之則已。無侈前人。無廢後觀。工既訖功。公以衆飲。而以書命愈曰。子其爲我記之。愈既以未得造觀。爲嘆竊喜。載名其上。詞列三王之次。有榮耀焉。乃不辭而承公命。其江山之好。登望之樂。雖老矣。如獲從公游。尚能爲公賦之。

燕喜亭記

太原王弘中在連州。與學佛人景常元慧游。異日從二人者。行於其居之後。荒邱之閒。上高而望。得異處焉。斬茅而嘉樹列。發石而清泉激。輦甕壤。燔櫓翳。卻立而視之。出者突然成邱。陷者呀然成谷。窪者爲池。而缺者爲洞。若有鬼神異物。陰來相之。自是弘中與二人者。晨往而夕忘歸焉。乃立屋以避風雨。顯於今。有竣之道也。其石谷曰謙受之谷。瀑曰振鷺寒暑。既成。愈請名之。其邱曰竣德之邱。蔽於古而顯於之瀑谷言德。瀑言容。瀑言德也。洞曰寒居之洞。志其入也。其土谷曰黃金之谷。瀑曰秩秩之源。曰天澤之泉。出高而施下也。合而名之以屋。時也。池曰君子之池。虛以鍾其美。盈以出其惡也。泉之老聞而相與觀焉。曰吾州之山水名天下。然而地凡天作而地藏之。以遺其人乎。弘中自吏部郎貶無與燕喜者比。經營於其側者相接也。而莫直其地。凡秩而來。次其道途所經。自藍田入商洛。涉浙湍。臨漢水。升峴首。以望方城。出荊門。下岷江。過洞庭。上湘水。行衡山之下。緜郴蹉嶺。猿狖所家。魚龍所宮。極幽遐瑰詭之觀。宜其於山水。飫聞而厭見也。今其意

乃若不足。傳曰。智者樂水。仁者樂山。弘中之德。與其所好。可謂協矣。智以謀之。仁以居之。吾知其去是而羽儀於天朝也不遠矣。遂刻石以記。

藍田縣丞廳壁記

丞之職。所以貳令。於一邑無所不當問。其下主簿尉。主簿尉乃有分職。丞位高而偪。例以嫌不可否事。文書行。吏抱成案詣丞。卷其前。鉗以左手。右手摘紙尾。鴈鶩行以進。平立睨丞曰。當署。丞涉筆。占位署。惟謹。目吏問可不可。吏曰得則退。不敢略省。漫不知何事。官雖尊。力勢反出主簿尉下。諺數慢必曰丞。至以相訾謷。丞之設。豈端使然哉。博陵崔斯立。種學績文。以蓄其有。泓涵演迤。日大以肆。貞元初。挾其能。戰藝於京師。再進再出於人。元和初。以前大理評事言得失。黜官。再轉而爲丞茲邑。始至。喟曰。官無卑。顧材不足塞責。既噤不得施用。又喟曰。丞哉丞哉。余不負丞。而丞負余。則盡枿去牙角。一躡故跡。破崖岸而爲之。丞廳故有記。壞漏朽不可讀。斯立易桷與瓦。墁治壁。悉書前任人名氏。庭有老槐四行。南牆鉅竹千梃。儼立若相持。水瀧瀧循除鳴。斯立痛掃溉。對樹二松。日哦其閒。有問者。輒對曰。余方有公事。子姑去。

畫記

雜古今人物小畫共一卷。騎而立者五人。騎而被甲載兵立者十人。一人騎執大旗前立。騎而被甲。載兵行且下牽者十人。騎而負者二人。騎執器者二人。騎擁田犬者一人。騎而牽者二人。騎而驅者三人。執羈靮立者二人。騎而下。倚馬臂隼而立者一人。騎而驅涉者二人。徒而驅牧者二人。坐而指使者一人。甲冑手弓矢。鈇鉞植者七人。甲冑執幟植者十人。負者七人。偃寢休者二人。甲冑坐睡者一人。方涉者一人。坐而脫足者一人。寒附火者一人。雜執器物役者八人。奉壺矢者一人。舍而具食者十有一人。挹且注者四人。牛牽者二人。驢驅者四人。一人杖而負者。婦人以孺子載。而可見者六人。載而上下者三人。孺子戲者九人。凡人之事三十有二。爲人大小百二十有三。而莫有同者焉。馬大者九匹。於馬之中。又有上者。下者。行者。牽者。涉者。陸者。翹者。顧者。鳴者。寢者。訛者。立者。人立者。齕者。飲者。溲者。陟者。降者。痒磨樹者。噓者。嗅者。喜相戲者。怒相踶齧者。秣者。騎者。驟者。走者。載服物者。載狐兔者。凡馬之事二十有七。爲馬大小八十有三。而莫有同者焉。牛大小十一頭。橐駝三頭。驢如橐駝之數。而加其一焉。隼

一。犬羊狐兔麋鹿共三十。旃車三兩。雜兵器。弓矢。旌旗。刀劍。矛楯。弓服。矢房。甲冑之屬。鉼盂。簦笠。筐筥。錡釜。飲食服用之器。壺矢博奕之具。二百五十有一。皆曲極其妙。貞元甲戌年。余在京師。甚無事。同居有獨孤生申叔者。始得此畫。而與余彈棊。余幸勝而獲焉。意甚惜之。以爲非一工人之所能運思。蓋蒙集衆工人之所長耳。雖百金不願易也。明年。出京師至河陽。與二三客論畫品格。因出而觀之。座有趙侍御者。君子人也。見之戚然。若有感然。少而進曰。噫余之手模也。亡之且二十年矣。余少時。常有志乎茲事。得國本。絕人事而模得之。遊閩中而喪焉。居閒處獨時。往來余懷也。以其始爲之勞。而夙好之篤也。今雖遇之。力不能爲矣。且命工人。存其大都焉。余既甚愛之。又感趙君之事。因以贈之。而記其人物之形狀與數。而時觀之以自釋焉。

太學生何蕃傳

太學生何蕃。入太學者廿餘年矣。歲舉進士。學成行尊。自太學諸生推頌。不敢與蕃齒。相與言於助教博士。助教博士以狀申於司業祭酒。司業祭酒撰次蕃之羣行焯焯者數十餘事。以之升於禮部。而以聞於天子。京師諸生。以薦蕃名文說者不可選紀。公卿大夫知蕃者比肩立。莫爲禮部。爲禮部者。率蕃所不合者。以是無成功。蕃淮南人。父母具全。初入太學。歲率一歸。父母止之。其後閒一二歲乃一歸。又止之。不歸者五歲矣。蕃純孝人也。閔親之老。不自克。一日。揖諸生。歸養於和州。諸生不能止。乃閉蕃空舍中。於是。太學六館之士百餘人。又以蕃之義行。言於司業陽先生城。請諭留蕃。於是。太學闕祭酒。會陽先生出道州。不果留。歐陽詹生言曰。蕃仁勇人也。或者曰。蕃居太學。諸生不爲非義。葬死者之無歸。哀其孤而字焉。惠之大小。必以力復。斯其所謂仁歟。蕃之力不任其體。其貌不任其心。吾不知其勇也。歐陽詹生曰。朱泚之亂。太學諸生舉將從之。來請起蕃。蕃正色叱之。六館之士不從亂。茲非其勇歟。惜乎蕃之居下。其可以施於人者不流也。譬之水。其爲澤不爲川乎。川者高。澤者卑。高者流。卑者止。是故蕃之仁義。充諸心。行諸太學。積者多。施者不遐也。天將雨。水氣上。無擇於川澤澗谿之高下。然則澤之道。其亦有施乎。抑有待於彼者歟。故凡貧賤之士。必有待然後能有所立。獨何蕃歟。吾是以言之。無亦使其無傳焉。

圬者王承福傳

圬之爲技。賤且勞者也。有業之。其色若自得者。聽其言。約而盡。問之。王其姓。承福其名。世爲京兆長安農夫。天寶之亂。發人爲兵。持弓矢十三年。有官勳。棄之來歸。喪其土田。手鏝衣食。餘三十年。舍於市之主人。而歸其屋食之當焉。視時屋食之貴賤。而上下其圬焉。又曰。粟稼而生者也。若布與帛。必蠶績而後成者也。其他所以養生之具。皆待人力而後完也。吾皆賴之。然人不可徧爲。宜乎各致其能。以相生也。故君者。理吾所以生者也。而百官者。承君之化者也。任有小大。惟其所能。若器皿焉。食焉而怠其事。必有天殃。故吾不敢一日舍鏝以嬉。夫鏝易能。可力焉。又誠有功。取其直。雖勞無愧。吾心安焉。夫力易強而有功也。心難強而有智也。用力者使於人。用心者使人。亦其宜也。吾特擇其易爲而無愧者取焉。嘻。吾操鏝以入貴富之家。有年矣。有一至者焉。又往過之則爲墟矣。問之其鄰。或曰。噫。刑戮也。或曰。身既死。而其子孫不能有也。或曰。死而歸之官也。吾以是觀之。非所謂食焉怠其事。而得天殃者邪。非強心以智而不足。不擇其才之稱否。而冒之者邪。將貴富難守。薄功而厚饗之者邪。抑豐悴有時。一去一來而不可常者邪。吾之心憫焉。是故擇其力之可能者。行焉。樂富貴而悲貧賤。我豈異於人哉。又曰。功大者。其所以自奉也博。妻與子。皆養於我者也。吾能薄而功小。不有之可也。又吾所謂勞力者。若立吾家而力不足。則心又勞也。一身而二任焉。雖聖者不可能也。愈始聞而惑之。又從而思之。蓋賢者也。蓋所謂獨善其身者也。然吾有讒焉。謂其自爲也過多。其爲人也過少。其學楊朱之道者邪。楊之道。不肯拔我一毛而利天下。而夫人以有家爲勞心。不肯一動其心以畜其妻子。其肯勞其心以爲人乎哉。雖然。其賢於世之患不得之。而患失之者。以濟其生之欲。貪邪而亡道。以喪其身者。其亦遠矣。又其言有可以警余者。故余爲之傳而自鑒焉。

毛穎傳

毛穎者。中山人也。其先明眎。佐禹治東方土。養萬物有功。因封於卯地。死爲十二神。嘗曰。吾子孫神明之後。不可與物同。當吐而生。已而果然。明眎八世孫翻。世傳。當殷時居中山。得神仙之術。能匿光使物。竊姮娥。騎蟾蜍入月。其後代遂隱不仕云。居東郭者曰翻。狡而善走。與韓盧爭能。盧不及。盧怒。與宋鵲謀而殺之。醢其家。秦始皇時。蒙將軍恬南伐楚。次中山。將大獵以懼楚。召左右庶長與軍尉。以連山筮之。得天與人文之兆。筮者賀曰。今日之獲。不角不牙。衣褐之徒。缺口而長鬚。八竅而趺居。獨取其髦。簡

牘是資。天下其同書。秦其遂兼諸侯乎。遂獵。圍毛氏之族。拔其豪。載穎而歸。獻俘於章臺宮。聚其族而加束縛焉。秦皇帝使恬賜之湯沐而封之管城。號曰管城子。日見親寵。任事。穎爲人。強記而便敏。自結繩之代。以及秦事。無不纂錄。陰陽卜筮。占相。醫方族氏。山經地志。字書圖畫。九流百家。天人之書。及至浮圖老子外國之說。皆所詳悉。又通於當代之務。官府簿書。市井貨錢注記。惟上所使。自秦皇帝。及太子扶蘇。胡亥。丞相斯。中車府令高。下及國人。無不愛重。又善隨人意。正直邪曲巧拙。一隨其人。雖見廢棄。終默不洩。惟不喜武士。然見請亦時往。累拜中書令。與上益狎。上嘗呼爲中書君。上親決事。以衡石自程。雖官人不得立左右。獨穎與絳人陳玄。弘農陶泓。及會稽褚先生友善。相推致。其出處必偕。上召穎。三人者不待詔。輒俱往。上未嘗怪焉。後因進見。上將有任使。拂拭之。因免冠謝。上見其髮禿。又所摹畫。不能稱上意。上嘻笑曰。中書君老而禿。不任吾用。吾嘗謂君中書。君今不中書耶。對曰。臣所謂盡心者。因不復召。歸封邑。終於管城。惟居中山者。能繼父祖業。太史公曰。毛氏有兩族。其一姬姓。文王之子。封於毛。所謂魯衞毛聃者也。戰國時。有毛公毛遂。獨中山之族。不知其本所出。子孫最爲蕃昌。春秋之成。見絕於孔子。而非其罪。及蒙將軍拔中山之豪。始皇封之管城。世遂有名。而姬姓之毛無聞。穎始以俘見。卒見任使。秦之滅諸侯。穎與有功。賞不酬勞。以老見疎。秦眞少恩哉。

平淮西碑

天以唐克肖其德。聖子神孫。繼繼承承。於千萬年。敬戒不怠。全付所覆四海九州。罔有內外。悉主悉臣。高祖太宗。既除既治。高宗中睿。休養生息。至於玄宗。受報收功。極熾而豐。物衆地大。孽牙其閒。肅宗代宗。德祖順考。以勤以容。大慝適去。稂莠不薿。相臣將臣。既受羣臣朝。乃考圖數貢曰。嗚呼。天既全付予有家。今傳次在予。予不能事事。其何以見於郊廟。羣臣震讋。奔走率職。明年平夏。又明年平蜀。又明年平江東。又明年平澤潞。遂定易定。致魏博貝衞澶相。無不從志。皇帝曰。不可究。武。予其少息。九年蔡將死。蔡人立其子元濟。以請。不許。遂燒舞陽。犯葉襄城。以動東都。放兵四劫。皇帝歷問於朝。一二臣外。皆曰。蔡帥之不廷授。於今五十年。傳三姓四將。其樹本堅。兵利卒頑。不與他等。因撫而有。順且無事。大官廳決唱聲。萬口和附。幷爲一談。牢不可破。皇帝曰。惟天惟祖宗。所以付任予者。庶其在此。予何敢不力。況一二臣同。不爲無助。曰。光顏。汝爲陳許帥。維是河東

魏博部陽三軍之在行者汝皆將之曰重胤汝故有河陽懷今益以汝維是朔方義成陝益鳳翔延慶七軍之在行者汝皆將之曰弘汝以卒萬二千屬而子公武往討之曰文通汝守壽維是宣武淮南宣歙浙西四軍之行於壽者汝皆將之曰道古汝其觀察鄂岳曰愬汝帥唐鄧隨各以其兵進戰曰度汝長御史其往視師曰度惟汝予同汝遂相予予以賞罰用命不用命曰弘汝以其節都統諸軍曰守謙汝出入左右汝惟近臣其往撫師曰度汝其往衣服飲食予士無寒無飢以既厥事遂生蔡人賜汝節斧通天御帶衛卒三百凡茲廷臣汝擇自從惟其賢能無憚大吏庚申予其臨門送汝曰御史予閱士大夫戰甚苦自今以往非郊廟祠祀其無用樂顏胤武合攻其北大戰十六得柵城縣二十三降人卒四萬道古攻其東南八戰降萬三千再入申破其外城文通戰其東十餘遇降萬二千愬入其西得賊將輒釋不殺用其策戰比有功十二年八月丞相弁其衆洄曲以備十月壬申愬用所得賊將自文城因天大雪疾馳百二十里用夜半到蔡破其門取元濟以獻盡得其屬人卒辛巳丞相度入蔡以皇帝命赦其人淮西平大饗賚功師還之日因以其食賜蔡人凡蔡卒三萬五千其不樂爲兵願歸爲農者十九悉縱之斬元濟京師冊功弘加侍中愬爲左僕射帥山南東道顏胤皆加司空公武以散騎常侍帥鄜坊丹延道古進大夫文通加散騎常侍丞相度朝京師道封晉國公進階金紫光祿大夫以舊官相而以其副總爲工部尚書領蔡任既還奏羣臣請紀聖功被之金石皇帝以命臣愈臣愈再拜稽首而獻文曰

唐承天命遂臣萬邦孰居近土襲盜以狂往往在玄宗崇極而圮河北悍驁河南附起四聖不寧屢興師征有不能克益戍以兵夫耕不食婦織不裳輸之以車爲卒賜糧外多失朝曠不嶽狩百隸怠官事亡其舊帝時繼位顧瞻咨嗟惟汝文武孰恤予家既斬吳蜀旋取山東魏將首義六州降從淮蔡不順自以爲强提兵叫讙欲事故常始命討之遂連奸鄰陰遣刺客來賊相臣方戰未利內驚京師羣公上言莫若惠來帝爲不聞與神爲謀乃相同德以訖天誅乃勅顏胤愬武古通咸統於弘各奏汝功三方分攻五萬其師大軍北乘厥數倍之常兵時曲軍士蠢蠢既翦陵雲蔡卒大窘勝之邵陵郾城來降自夏入秋復屯相望兵頓不勵告功不時帝哀征夫命相往釐士飽而歌馬騰於槽試之新城賊遇敗逃盡抽其有聚以防我西師躍入道無留者頴雒蔡城其疆千里既入而有莫不順俟帝有恩言相度來宣蔡之婦女迎門笑語蔡人告饑船粟往哺蔡人告寒賜以繒布始時蔡人禁不往來今相從戲里門夜開始時蔡人進戰退戮今旰而起左餐右粥爲之擇人以收

餘儻選吏賜牛斂而不稅蔡人有言天子明聖不順族誅順保性命汝不吾信視此蔡方孰爲不順往斧其吭凡叛有數聲勢相倚吾强不支汝弱奚恃其告而長而父而兄奔走偕來同我太平淮蔡爲亂天子伐之既伐而饑天子活之始議伐蔡卿士莫隨既伐四年小大並疑不赦不疑由天子明凡此蔡功惟斷乃成既定淮蔡四夷畢來遂開明堂坐以治之

南海神廟碑

海於天地閒爲物最鉅自三代聖王莫不祀事考於傳記而南海神次最貴在北東西三神河伯之上號爲祝融天寶中天子以爲古爵莫貴於公侯故海嶽之祝牲幣之數放而依之所以致崇極於大神今王亦爵也而禮海嶽尚循公侯之事虛王儀而不用非致崇極之意也由是冊尊南海神爲廣利王祝號祭式與次俱昇因其故廟易而新之在今廣州治之東南海道八十里扶胥之口黃木之灣常以立夏氣至命廣州刺史行事祠下事訖驛聞而刺史當節度五嶺諸軍仍觀察其郡邑於南方事無所不統地大以遠故常選用重人既貴而富且不習海事又當祀時海常多大風將往皆憂懼既進觀顧怖悸故常以疾爲解而委事於其副其來已久故明宮齋廬上雨旁風無所蓋障牲酒瘠酸取具臨時水陸之品狼籍籩豆薦祼興俯不中儀式吏滋不供神不顧享盲風怪雨發作無節人蒙其害元和十二年始詔用前尚書右國子祭酒魯國孔公爲廣州刺史兼御史大夫以殿南服公正直方嚴中心樂易祗愼所職治人以明事神以誠內外單盡不爲表襮至州之明年將夏祝冊自京師至吏以時告公乃齋祓視冊誓羣有司曰冊有皇帝名乃上所自署其文曰嗣天子某謹遣官某敬祭其恭且嚴如是敢有不承明日吾將宿廟下以供晨事明日吏以風雨白不聽於是州府文武吏士凡百數交謁更諫皆揖而退公遂陞舟風雨少弛檝夫奏功雲陰解駿日光穿漏伏波不興省牲之夕載暘載陰將事之夜天地開除月星明穊五鼓既作牽牛正中公乃盛服執笏以入即事文武賓屬俯首聽位各執其職牲肥酒香鐏罍靜潔降登有數神具醉飽海之百靈祕怪慌惚畢出蜿蜿蛇蛇來享飲食闔廟旋艫祥颶送颿旗纛旄麾飛揚晻藹鏘鼓嘲轟高管嗷譟武夫奮櫂工師唱和穹龜長魚踊躍後先乾端坤倪軒豁呈露祀之之歲風災熄滅人厭魚蟹五穀胥熟明年祀歸又度廟宮而大之治其庭壇改作東西兩序齋庖之房百用具脩明年某時公又固往不懈益虔歲仍大和鼇艾歌詠始公之至盡除他名之稅罷衣食於官之可去者四方之使不以資交以身爲帥燕享有時賞與以節公藏私蓄上下與足於

是免屬州負逋之緡錢二十有四萬。米三萬二千斛。賦金之州。耗金一歲八百。困不能償。皆以丐之。加西南守長之俸。誅其尤無良不聽令者。由是皆自重愼法。人士之落南不能歸者。與流徙之胄百二十八族。用其才良。而廩其無告者。其女子可嫁。與之錢財。令無失時。刑德並流。方地數千里。不識盜賊。山行海宿。不擇處所。事神治人。其可謂備至耳矣。咸願刻廟石。以著厥美。而繫以詩。乃作詩曰。南海陰墟。祝融之宅。卽祀於旁。帝命南伯。吏惰不躬。正自今公。明用享錫。右我家邦。惟明天子。惟愼厥使。我公在官。神人致喜。海嶺之陬。旣足旣濡。胡不均弘。俾執事樞。公行勿遲。公無遽歸。匪我私公。神人具依。

黃陵廟碑

湘旁有廟。曰黃陵。自前古以祠堯之二女舜二妃者。庭有石碑。斷裂分散在地。其文剝缺。考圖記。言漢荊州牧劉表景升之立。題曰湘夫人碑。今驗其文。乃晉太康九年。又其額曰虞帝二妃之碑。非景升立者。秦博士對始皇帝云。湘君者。堯之二女舜妃者也。劉向鄭玄。亦皆以二妃爲湘君。而離騷九歌。旣有湘君。又有湘夫人。王逸之解。以爲湘君者。自其水神而謂湘夫人。乃二妃也。從舜南征三苗。不及。道死沅湘之閒。山海經曰。洞庭之山。帝之二女居之。郭璞疑。二女者帝舜之后。不當降小水爲其夫人。因以二女爲天帝之女。以余考之。璞與王逸俱失也。堯之長女蛾皇。爲舜正妃。故曰君。其二女女英。自宜降曰夫人也。故九歌辭。謂娥皇爲君。謂女英帝子。各以其盛者推言之也。禮有小君君母。明其正自得稱君也。書曰。舜陟方乃死。傳謂。舜昇道南方以死。或又曰。舜死葬蒼梧。二妃從之。不及。溺死沅湘之閒。余謂。竹書紀年。帝王之沒皆曰陟。陟昇也。謂昇天也。書曰。殷禮。陟配天。言以道終。其德協天也。書紀舜之沒云陟者。與竹書周書同文也。其下言方乃死者。所以釋陟爲死也。地之勢東南下。如言舜南巡而死。宜言下方。不得言陟方也。以此謂舜死葬蒼梧。於時二妃從之。不及而溺者。皆不可信。二妃旣曰。以謀語舜。脫舜之厄。成舜之聖。堯死而舜有天下。爲天子。二妃之力。宜常爲神。食民之祭。今之渡湖江者。莫敢不進禮廟下。元和十四年春。余以言事得罪。黜爲潮州刺史。其地於漢南海之揭陽。厲毒所聚。懼不得脫死。過廟而禱之。其冬。移袁州刺史。明年九月。拜國子祭酒。使以私錢十萬抵岳州。願易廟之圮桷腐瓦於刺史王堪。長慶元年。刺史長愉自京師往。與予故善。謂曰。丐我一碑石。載二妃廟事。且令後世知有子名。愉曰諾。旣至州。報曰。碑謹具。遂篆其事。俾刻之。

柳州羅池廟碑

羅池廟者。故刺史柳侯廟也。柳侯爲州。不鄙夷其民。動以禮法。三年。民各自矜奮。茲土雖遠京師。吾等亦天氓。今天幸惠仁侯。若不化服。我則非人。於是老少相敎語。莫違侯令。凡有所爲於其鄉閭。及於其家。皆曰。吾侯聞之。得無不可於意否。莫不忖度而後從事。凡令之期。民勸趨之。無有後先。必以其時。於是民業有經。公無負租。流逋四歸。樂生興事。宅有新屋。步有新船。池園潔修。豬牛鴨雞。肥大蕃息。子嚴父詔。婦順夫指。嫁娶葬送。各有條法。出相弟長。入相慈孝。先時民貧。以男女相質。久不得贖。盡沒爲隸。我侯之至。按國之故。以傭除本。悉奪歸之。大修孔子廟。城郭巷道。皆治使端正。樹以名木。柳民旣皆悅喜。常與其部將魏忠。謝寧。歐陽翼。飮酒驛亭。謂曰。吾棄於時。而寄於此。與若等好也。明年吾將死。死而爲神。後三年。爲廟祀我。及期而死。三年孟秋辛卯。侯降於州之後堂。歐陽翼等見而拜之。其夕夢翼而告曰。館我於羅池。其月景辰。廟成。大祭。過客李儀醉酒。慢侮堂上。得疾。扶出廟門。卽死。明年春。魏忠。歐陽翼。使謝寧來京師。請書其事於石。余謂。柳侯生能澤其民。死能驚動福禍之。以食其土。可謂靈也已。作迎享送神詩。遺柳民。俾歌以祀焉。而幷刻之。柳侯。河東人。諱宗元。字子厚。賢而有文章。嘗位於朝。光顯矣。已而擯不用。其辭曰。荔子丹兮蕉黃。雜肴蔬兮進侯堂。侯之船兮兩旗。度中流兮風泊之。待侯不來兮不知我悲。侯乘駒兮入廟。慰我民兮不嚬以笑。鵝之山兮柳之水。桂樹團團兮白石齒齒。侯朝出游兮暮來歸。春與猨吟兮秋鶴與飛。北方之人兮爲侯是非。千秋萬歲兮侯無我違。福我兮壽我。驅厲鬼兮山之左。下無苦濕兮高無乾。秔稌充羨兮蛇蛟結蟠。我民報事兮無怠。其始自今兮欽於世世。

曹成王碑

王姓李氏。諱皐。字子蘭。謚曰成。其先王明。以太宗子國曹。絕復封。傳五王至成王。成王嗣封。在玄宗世。蓋於時年十七八。紹爵三年。而河南北兵作。天下震擾。王奉母太妃逃禍民伍。得閒走蜀。從天子。天子念之。自都水使者。拜左領軍衛將軍。轉貳國子祕書。王生十七而失先王。哭泣悲哀。弔客不忍聞。喪除。痛刮磨豪習。委己於學。稍長。重知人情。急世之要。恥一不通。侍太妃。從天子於蜀。旣孝旣忠。持官持身。內外斬斬。由是朝廷滋欲試之於民。上元元年。除溫州長史。行刺史事。江東新刳於兵。郡旱饑。民交走死無弔。王及州。不解衣。下令。掊鎖擴門。悉棄倉實與民。活數十萬人。奏報。升秩少府。與平袁賊。仍徙祕

書。兼州別駕。部告無事。遷眞於衡。法成令脩。治出張施。聲生勢長。觀察使噎媢不能出氣。誣以過犯。御史助之。貶潮州刺史。楊炎起道州。相德宗。還王於衡。以直前謾。王之遭誣在理。念太妃老將驚而戚。出則囚服就辯。入則擁笏垂魚。坦坦施施。卽貶於潮。以遷入賀。至是然後跪謝告實。初觀察使虐。使將國良往戍界。良以武岡叛。戍衆萬人。斂兵荊黔洪桂伐之。二年尤張。於是以王帥湖南。將五萬士。以討良爲事。王至。則屛兵。投良以書。中其忌諱。良羞畏乞降。狐鼠進退。王卽假爲使者。從一騎。踔五百里。抵良壁。鞭其門大呼。我曹王。來受良降。良今安在。良不得已。錯愕迎拜。盡降其軍。太妃薨。王棄部。隨喪之河南。葬。及荊。被詔責還。會梁崇義反。王遂不敢辭以還。升秩散騎常侍。明年。李希烈反。遷御史大夫。授節帥江西。以討希烈。命至。王出止外舍。禁無以家事關我。哀兵大選江洲。羣能著職。王親敎之搏力勾卒。嬴越之法。曹誅五畀。艦步二萬人。以與賊遷。嘬鋒蔡山。踣之。剜蘄之黃梅。大鞣長平。潑廣濟。掀蘄春。撇蘄水。掇黃岡。筴漢陽。行跐汊川。還大膊蘄水界中。披安山縣。拔其州。斬僞刺史。標光之北山。豬隨光化。梏其州。十抽一推。救兵州東北屬鄉。還開軍受降。大小之戰三十有二。取五州十九縣。民老幼婦女不驚。市賈不變。田之果穀。下無一跡。加銀青光祿大夫。工部尙書。改戶部。再換節臨荊及襄。眞食三百。王之在兵。天子西巡於梁。希烈北取汴鄭。東略宋圍陳。西取汝。薄東都。王坐南方。北向落其角距。賊死咋。不能入寸尺。亡將卒十萬。盡輸其南州。王始政於溫。終政於襄。恆平物估。賤斂貴出。民用有經。一吏軌民使令。家聽戶視。奸宄無所宿。府中不聞急步疾呼。治民用兵。各有條次。世傳爲法。任馬彝。將愼。將鍔。將潛。偕盡其力能。薨贈右僕射。元和初。以子道古在朝。更贈太子太師。道古進士。司門郎。刺利。隨唐。睦。徵爲少宗正。兼御史中丞。以節督黔中。朝京師。改命觀察鄂。岳。蘄。沔。安。黃。提其師以伐蔡。且行。泣曰。先王討蔡。實取蘄。沔。安。黃。寄惠未忘。今予亦受命有事於蔡。而四州適在吾封。庶其有集。先王薨於今二十五年。吾昆弟在。而墓碑不刻。無文。其實有待。子無用辭。乃序而詩之。辭曰。

太支十三。曹於第季。或亡或微。曹始就事。曹之祖王。畏塞絕遷。零王黎公。不聞僅存。子父易封。三王守名。延延百載。以有成王。成王之作。一自其躬。文被明章。武薦畯功。蘇枯弱强。齦其奸猖。以報於宗。以昭於王。王亦有子。處王之所。唯舊之視。蹶蹶陛陛。實取實似。刻詩其碑。爲示無止。

烏氏廟碑銘

元和五年。天子曰。盧從史始立議。用師於恆。乃陰與寇連。夸謾兇驕。出不遜言。其執以來。其四月中。貴

人承璀。卽誘而縛之。其下皆甲以出。操兵趨譁。牙門都將烏公重胤。當軍門叱曰。天子有命。從有賞。敢違者斬。於是士皆斂兵還營。卒致從史京師。壬辰。詔用烏公爲銀青光祿大夫。河陽軍節度使。兼御史大夫。封張掖郡開國公。居三年。河陽稱治。詔贈其父工部尙書。且曰。其以廟享。卽以其年營廟於京師崇化里。軍佐竊議曰。先公旣位常伯。而先夫人無加命。號名差卑。於配不宜。語聞。詔贈先夫人劉氏沛國太夫人。八年八月。廟成。三室同宇。祀自左領府君而下。作主於第。乙巳。升於廟。烏氏著於春秋。譜於世本。列於姓苑。在莒者存。在齊有餘枝鳴。皆爲大夫。秦有獲。爲大官。其後世之江南者家鄱陽。處北者家張掖。或入夷狄。爲君長。唐初。察爲左武衞大將軍。實張掖人。其子曰令望。爲左領軍衞大將軍。孫曰蒙。爲中郎將。是生贈尙書諱承玼字某。烏氏自莒齊秦大夫以來。皆以材力顯。及武德以來。始以武功爲名將家。開元中。尙書管平盧先鋒軍屬。破奚契丹。從戰捺祿。走可突干。渤海擾海上。至馬都山。吏民逃徙失業。尙書領所部兵。塞其道。壍原累石。緜四百里。深高皆三丈。寇不得進。民還其居。歲能運錢三千萬餘。黑水室韋。以騎五千。來屬麾下。邊威益張。其後與耿仁智謀。說史思明降。思明復叛。尙書與兄承恩謀殺之。事發族夷。尙書獨走免。李光弼以聞。詔拜冠軍將軍。守右威衞將軍。檢校殿中監。封昌化郡王。左嶺軍使。積粟厲兵。出入耕戰。以疾去職。貞元十一年二月丁巳。薨於華陰告平里。年若干。卽葬於其地。二子。大夫爲長。季曰重元。爲某官。銘曰。烏氏在唐。有家於初。左武左領。二祖紹居。中郎少卑。屬於尙書。不償其勞。乃相大夫。授我戎節。制有壇墟。數備禮登。以有宗廟。作廟天都。以致其孝。右祖左孫。爰饗其報。云誰無子。其有無孫。克對無羞。乃惟有人。念昔平盧。爲艱爲瘁。大夫承之。危不棄義。四方其平。士有怠息。來覲來齋。以饋黍稷。

魏博節度觀察使沂國公先廟碑銘

元和八年。十一月壬子。上命丞相元衡。丞相吉甫。丞相絳。召太史尙書比部郎中韓愈。至政事堂。傳詔曰。田弘正始有廟京師。朕惟弘正先祖父。厥心靡不嚮帝室。訖不得施。乃以敎付厥子。維弘正。銜訓嗣事。朝夕不怠。以能迎天之休。顯有丕功。維父子繼忠孝。予維寵嘉之。是以命汝愈銘。欽哉。維時臣愈。承命悸恐。明日。詣東上閤門。拜疏辭謝。不報。退伏念。昔者魯僖公能遵其祖伯禽之烈。周天子。實命其史臣克。作爲駉駜泮閟之詩。使聲於其廟。以假魯靈。今天子。嘉田侯服父訓不違。用康靖我國家。蓋寵銘之。所以休寧田氏之祖考。而臣適執筆隸太史。奉明命。其可以辭。謹案。魏博節度使。銀青光祿大夫。檢

校工部尚書。兼魏州大都督府長史。御史大夫沂國公田弘正。北平盧龍人。故爲魏博諸將。忠孝畏慎。田季安卒。其子幼弱。用故事代父。人吏不附。迎弘正於其家。使領軍事。弘正籍其軍之衆。與六州之人。還之朝廷。悉除河北故事。比諸州。故得用爲帥。已而復贈其父故滄州刺史兵部尚書。母夫人鄭氏梁國太夫人。得立廟祭三代。曾祖都水使者府君。祭初室。祖安東司馬。贈襄州刺史府君。祭二室。兵部府君。祭東室。其銘曰。

唐繼古帝。海外受制。狎於太寧。燕盜以驚。羣黨相維。河北失平。號登元和。大聖載營。風揮日舒。咸順指令。業業魏土。嬰兒戲兵。吏我愁毒。莫保腰頸。人曰田侯。其德可倚。叫譟奔趨。乘門請起。田侯攝事。奉我天明。東縛弓戈。考校度程。提壜簪戶。來復邦經。帝欽良臣。曰維錫予。嗟我六州。始復故初。告慶於宗。以降命書。旌節有韜。豹尾神旗。纛兜戟纛。以長魏師。田侯稽首。臣愚不肖。迨茲有成。祖考之教。帝曰俞哉。維汝忠孝。予思乃父。追秩夏卿。娩德娠賢。梁國是榮。田侯作廟。相方視阯。見於蓍龜。祖考咸喜。曁曁田侯。兩有文武。訖其外庸。可作承輔。咨汝田侯。勿亟勿遲。觀饗式時。爾祖爾思。

唐故相權公墓碑

上之元和六年。其相曰權公。諱德輿。字載之。其本出自殷帝武丁。武丁之子。降封於權。權江漢閒國也。周衰。入楚爲權氏。楚滅徙秦。而居天水略陽。苻秦之王中國。其臣有安邱公翼者。有大臣之言。後六世。至平涼公文誕。爲唐上庸太守。荊州大都督長史。焯有聲烈。平涼曾孫諱棰。贈尚書禮部郎中。以藝學王父。郎中生贈太子太保諱皐。以忠孝致大名。去官。累以官徵不起。追謚貞孝。是實生公。公在相位三年。其後以吏部尚書授節。鎮山南。年六十以薨。贈尚書左僕射。謚文公。公生三歲。知變四聲。四歲能爲詩。七歲而貞孝公卒。來弔哭者。見其顏色聲容。皆相謂。權氏世有其人。及長好學。孝敬祥順。貞元八年。以前江西府監察御史。徵拜博士。朝士以得人相慶。改左補闕。章奏不絕。譏排姦倖。與陽城爲助。轉起居舍人。遂知制誥。凡撰命詞九年。以類集爲五十卷。天下稱其能。十八年。以中書舍人典貢士。拜尚書禮部侍郎。薦士於公者。其言可信。不以其人布衣不用。卽不可信。雖大官勢人交言。一不以綴意。奏廣歲所取進士明經。在得人。不以員拘。轉戶兵吏三曹侍郎。太子賓客。復爲兵部。遷太常卿。天下愈推爲鉅人長德。時天子以爲宰相宜參用道德人。因拜禮部尚書同中書門下平章事。公既謝辭。不許。其所設張舉措。必本於寬大。以幾教化。多所助與。維臣調娛。

唐宋八家文卷五　終

不失其正。中於和節。不爲聲章。因善與賢。不矜主己。以吏部尚書留守東都。東方諸帥。有利病不能自請者。公常與疏陳。不以露布。復拜太常。轉刑部尚書。考定新舊令式。爲三十編。舉可長用。其在山南河南。勤於選付。治以和簡。人以寧便。以疾求還。十三年某月甲子。道薨於洋之白草。奏至。天子痛傷。爲之不御朝。郎官致贈錫。官居野處。上下弔哭。皆曰。善人死矣。其年某月日。葬河南北山。在貞孝東五里。公由陪屬升列。年除歲遷。以至公宰。人皆喜聞。若己與有。無忌嫉者。于頓坐子殺人。失位自囚。親戚莫敢過門省顧。朝莫敢言者。公將留守東都。爲上言曰。頓之罪。旣貫不覺。宜因賜寬詔。上曰。然。公爲吾行諭之。頓以不憂死。前後考第進士。及庭所策試士。踵相躡爲宰相達官。與公相先後。其餘布處臺閣外府。凡百餘人。自始學至疾未病。未嘗一日去書不觀。公旣以能爲文辭。擅聲於朝。多銘卿大夫功德。然其爲家不視簿書。未嘗問有亡。費不侍餘。公娶清河崔氏女。其父造。嘗相德宗。號爲名臣。旣葬。其子監察御史璩。纍然服喪。來有請。乃作銘文曰。

權在商周。世無不存。滅楚徙秦。嬴劉之閒。甘泉始侯。以及安邱。詆訶浮屠。皇極之扶。貞孝之生。鳳鳥不至。爵位豈多。半塗以稅。壽考豈多。四十而逝。惟其不有。以惠厥後。是生相君。爲朝德首。行世祖之。文世師之。流連六官。出入屏毗。無黨無讐。學世莫疵。人所憚爲。公勇爲之。人所競馳。公絕不窺。孰克知之。德將在斯。刻詩墓碑。以永厥垂。

唐宋八家文卷六

韓愈退之著

唐故江西觀察使韋公墓誌銘

公諱丹。字某。姓韋氏。六世祖孝寬。仕周有功。以公開號於鄖。鄖公之子孫。世爲大官。惟公之父玫。卒雒縣丞。贈虢州刺史。公既孤。以甥孫。從太師魯公眞卿學。太師愛之。舉明經第。選授陝州遠安令。以讓其庶兄入紫閣山。事從父熊。通五經。登科。歷校書郎。咸陽尉。佐邠寧軍。自監察御史爲殿中侍御史。徵拜太子舍人。益有名。遷起居郎。吳少誠襲許州。拜河陽行軍司馬。未行。少誠死。改駕部員外郎。新羅國君死。公以司封郎中兼御史中丞。紫衣金魚往弔。立其嗣。故事。使外國者。常賜州縣官十員。使以名上。以便其私。號私覿官。公將行。曰。吾天子吏。使海外國不足於資。宜上請。安有賣官以受錢耶。卽具疏所以。上以爲賢。命有司與其費。至鄆州。會新羅告所當立君死。還。拜容州刺史。容管經略招討使。始城容州。周十三里。置屯田二十四所。化大行。詔加太中大夫。順宗嗣位。拜河南少尹。行未至。拜鄭滑行軍司馬。始至襄陽。詔拜諫議大夫。旣至。日言事。不阿權臣。蹇然有直名。遂號爲才臣。劉闢反。圍梓州。詔以公爲東川節度使。御史大夫。公行至漢中。上疏言。梓州在圍閉。守方盡力。不可易將。徵還。入議蜀事。劉闢去梓州。因以梓州讓高崇文。拜晉慈隰等州觀察防禦使。自扶風縣男。進封武陽郡開國公。食邑二千戶。將行上言。臣所治三州。非要害地。不足張職。爲國家費。不如屬之河東。便。上以爲忠。一歲。拜洪州刺史。江南西道觀察使。以晉慈隰屬河東。公旣至。則計口受俸錢。委其餘於官。罷八州無事之食者。以聚其財。始教人爲瓦屋。取財於山。召陶工。教人陶。聚材瓦於場。度其費以爲估。不取贏利。凡取材瓦於官。業定而受其償。從令者免其賦之半。逃未復者。官與爲之貸。不能者畀之財。載食與漿。親往勸之。爲瓦屋萬三千七百。爲重屋四千七百。民無火憂。暑濕則乘。其高。別命置南北市。營諸軍歲旱種。不入土。募人就功。厚與之直。而給其食。業成。人不病飢。爲長衢。南北夾兩營。東西七里。人去溱汚。氣益蘇。復作南昌

縣。徙廐於高地。因其廢倉大屋。馬以不連死。明年。築隄捍江。長十二里。疏爲斗門。以走潦水。公去位之明年。江水平。隄老幼泣而思曰。無此隄。吾屍其流。入海矣。灌陂塘五百九十八。得田萬有二千頃。凡爲民去害興利。若嗜慾。居三年。於江西八州無遺便。其大如是。其細可略也。卒有違令當死者。公不果於誅。杖而遣之。去上書告公所爲不法若干條。朝廷方勇於治。且以爲公名才能臣。治功聞天下。不辨則受垢。詔罷官。留江西待辨。使未至。月餘。公以疾薨。使至。辨凡卒所告事若干條。皆無絲毫實。詔答卒百。流嶺南。公能益明。春秋五十八。薨於元和五年八月六日。公好施與。家無賸財。自校書郎。至爲觀察使。擁吏卒。前走七州刺史。與賓客。處如布衣時。自持卑一不易。娶清河崔氏。故支江令諷之女。某官某之孫。有子曰寘。年十五。明經及第。嗣其家業。後夫人蘭陵蕭氏。中書令華之孫。殿中侍御史恆之女。皆先公終。有女一人。凡公男若干人。女若干人。明年七月壬寅。後葬萬年縣少陵原。將葬。其從事東平呂宗禮。與其子寘。謀曰。我公宜得直而不華者銘。傳於後。固不朽矣。寘來請銘。銘曰。

武陽受業。始於太師。以官讓兄。自待不疑。勤於紫閣。取益以卑。可謂有源。卒用無玼。慊慊爲人。矯矯爲官。爰及江西。功德具完。名聲之下。獨處爲難。辨而益明。仇者所歎。碑於墓前。維昭美故。納銘墓中。以識公墓。

司徒兼侍中中書令贈太尉許國公神道碑銘

韓姬姓。以國氏。其先有自潁川徙陽夏者。其地於今爲陳之太康。太康之韓。其稱蓋久。然自公始大著。公諱弘。公之父曰海。爲人魁偉沈塞。以武勇游仕許汴之閒。寡言自可。不與人校。衆推以爲鉅人長者。官至游擊將軍。贈太師。娶鄉邑劉氏女。生公。是爲齊國太夫人。夫人之兄曰司徒玄佐。有功建中貞元之閒。爲宣武軍帥。有汴宋亳潁四州之地。兵士十萬人。公少依舅氏讀書。習騎射。事親孝謹。偏偏自將。不縱爲子弟華靡遨放事。出入敬恭。軍中皆目之。嘗一抵京師。就明經試。退曰。此不足發名成業。復去從舅氏學。將兵數百人。悉識其材鄙怯勇。指付必堪其事。司徒歎奇之。士卒屬心。諸老將皆自以爲不及。司徒卒。去爲宋南城將。比六七歲。汴軍連亂不定。貞元十五年。劉逸淮死。軍中皆曰。此軍司徒所樹。必擇其骨肉爲士卒所慕賴者付之。今見在人。莫如韓甥。且其功最大。而材又俊。卽柄授之。而請命於天子。天子以爲然。遂自大理評事。拜工部尚書。代逸淮爲宣武軍節度使。悉有其舅司徒之兵與地。當此時。陳許帥曲環死。而吳少誠反。自將圍許。求援於逸淮。啗之以陳歸汴。使數輩在館。公悉驅出斬之。

選卒三千人。會諸軍。擊少誠許下。少誠失勢以走。河南無事。公曰。自吾舅歿。五亂於汴者。吾苗嬾而髮櫛之。幾盡。然不一揃刈。不足令震駭。命劉鍇以其卒三百人。待命於門。數之以數與於亂。自以爲功。幷斬之以狗。血流波道。自是訖公之朝。京師二十有一年。莫敢有譁呶叫號於城郭者。李師道作言起事。屯兵於曹。以嚇滑帥。且告假道。公使謂曰。吾在此。公無恐。或告曰。翦棘夷道。兵且至矣。請備之。公曰。兵來不除道也。不爲應。師古詐窮變索。遷延旋軍。少誠以牛皮鞔材。遺師古。師古以鹽資少誠。潛過公界。覺。皆留輸之庫。曰。此於法不得以私相餽。田弘正之開魏博。李師道使來告曰。我代與田氏約。相保援。今弘正非其族。又首變兩河事。亦公之所惡。我將與成德合軍討之。敢告。公謂其使曰。我不知利害。知奉詔行事耳。若兵北過河。我卽東兵以取曹。師道懼不敢動。弘正以濟。誅吳元濟也。命公都統諸軍。曰。無自行。以遏北寇。公請使子公武以兵萬三千人會討蔡下。歸財與糧。以濟諸軍。卒擒蔡姦於是。以公爲侍中。而以公武爲鄜坊丹延節度使。師道之誅。公以兵東下。進圍考城。克之。遂進迫曹。曹寇乞降。鄆部既平。公曰。吾無事於此。其朝京師。天子曰。大臣不可以著行。其秋之待公曰。君爲仁。臣爲恭。可矣。遂行。既至。獻馬三千匹。絹五十萬匹。他錦紈綺繒又三萬。金銀器千。而汴之庫廐。錢以貫數者。尚餘百萬。絹亦合百餘萬匹。馬七千。糧三百萬斛。兵械多至不可數。初公有汴。承五亂之後。掠賞之餘。且斂且給。恆無宿儲。至是公私充塞。至於露積不垣。冊拜司徒兼中書令。進見上殿。拜跪給扶。贊元經體。不治細微。天子敬之。元和十五年。今天子卽位。公爲冢宰。又除河中節度使。在鎭三年。以疾乞歸。復拜司徒中書令。病不能朝。以長慶二年十二月三日。薨於永崇里第。年五十八。天子爲之罷朝三日。贈太尉。賜布粟。其葬物有司官給之。京兆尹監護。明年七月某日。葬於萬年縣少陵原。京城東南三十里。楚國夫人翟氏祔。子男二人。長曰肅元。某官。次曰公武。某官。蕭元早死。公之將薨。公武暴病先卒。公哀傷之。月餘。遂薨。無子。以公武子孫紹宗爲主後。汴之南則蔡。北則鄆。二寇患公居閒爲己不利。卑身佞辭。求與公好。薦女請昏。使日月至。既不可。得則飛謀釣謗。以閒染我。公先事候情。壞其機牙。姦不得發。王誅以成。最功定次。孰與高下。公子公武。與公一時俱授弓鉞。處藩爲將。疆土相望。公武以母憂去鎭。公母弟充。自金吾代將渭北。公以司徒中書令治蒲。於時弟充。自鄭滑節度平宣武之亂。以司空居汴。自唐以來。莫與爲比。公之爲治。嚴不爲煩。止除害本。不多教條。與人必信。吏得其職。賦入無所漏失。人安樂之。所在以富。公與人有畛域。不爲戲狎。人得一笑語。重於金帛之賜。其罪殺人。不發聲色。問法何如。不自爲輕重。故無敢犯者。其銘曰。

在貞元世。汴兵五猘。將得其人。衆乃一愒。其人爲誰。韓姓許公。磔其梟。狼養以雨風。桑穀奮張。厥壤大豐。貞元元孫。命正我宇。公爲臣宗。處得其所。河流兩壖。盜連爲羣。雄唱雌和。首尾一身。公居其閒。爲帝督姦。察其嘔呻。與其睨眴。左顧失視。右顧而踣。蔡先鄆鉏。三年而墟。槁乾四呼。終莫敢濡。常山幽都。孰如何。悠悠四方。旣廣旣長。無有外事。朝廷之治。許公來朝。車馬干戈。相乎將乎。威儀之多。將則是矣。相則三公。釋師十萬。歸居廟堂。上之宅憂。公讓太宰。養安蒲坂。萬邦絕等。有弟有子。提兵守藩。一時三侯。人莫敢扳。生莫與榮。歿莫與令。刻文此碑。以鴻厥慶。

唐正議大夫尚書左丞孔公墓誌銘

孔子之後。三十八世有孫。曰戣。字君嚴。事唐爲尚祿之終身。而不敢煩以政。吏部侍郎韓愈。常賢其能。謂曰。公尚壯。上三留。奚去之果。曰。吾敢要君。吾年至。一宜去。吾爲左丞。不能進退郎官。唯相之爲。二宅具在。親戚之不仕。與倦而歸者。不在東阡。在北陌。可杖屨來往也。今異於是。公誰與居。且公雖貴。而無留資。何恃而歸。曰。吾負二宜去。尚奚顧。子言愈面嘆曰。公於是乎賢遠於人。明日。奏疏曰。臣與孔戣同在南省。數與相見。戣爲人守節清苦。論議正平。年纔七十。筋力耳目。未覺衰老。憂國忘家。用意至到。如戣輩。在朝不過三數人。陛下不宜苟順其求。不留自助也。不報。明年。長慶四年。正月己未。公年七十四。告薨於家。贈兵部尚書。公始以進士佐三府。官至殿中侍御史。元和元年。以大理正徵。累遷江州刺史。諫議大夫。事有害於政者。無所不言。加皇太子侍讀。改給事中。言京兆尹阿縱罪人。詔奪京兆尹三月之俸。權知尚書右丞。明年。拜右丞。改華州刺史。明州歲貢海蟲。淡菜。蛤蚶可食之屬。自海抵京師。道路水陸遞夫積功。歲爲四十三萬六千人。奏疏罷之。下邽令笞外按小兒。繫御史獄。公上疏理之。詔釋下邽令。而以華州刺史爲大理卿。十二年。自國子祭酒。拜御史大夫。嶺南節度等使。約以取足。境內諸州。負錢至二百萬。悉放不收。蕃舶之至。泊步有下。下碇之稅。始至有閱貨之燕。犀珠磊落。賄及僕隸。公皆罷之。絕海之商。有死於吾地者。官藏其貨。滿三月。無妻子之請者。盡沒有之。公曰。海道以年計往復。何月之拘。苟有驗者。悉推與之。無算遠近。厚守宰俸。而嚴其法。嶺南以口爲貨。其荒阻處。父子相縛爲奴。公一禁之。有隨公吏。得無名兒。蓄不言官。有訟者。公召殺之。山谷諸黃。世自聚爲豪。觀吏厚薄緩急。或叛或從。容柱二管。利其擄掠。請合兵討之。冀一有功。有所指取。當是時。天子以武定淮西。河南北用事

者。以破諸黃爲類。向意助之。公屢言。遠人急之則自相怨恨而散。此禽獸耳。但可自計利害。不足與論是非。天子入先言。遂斂兵江西岳鄂湖南嶺南。會容桂之吏以討之。被霧露毒。相枕藉死。百無一還。安南乘勢。殺都護李象古。桂將裴行立。容將楊旻。皆無功。數月自死。嶺南囂然。祠部歲下廣州。祭南海廟。廟入海口。爲州者皆憚之。不自奉事。常稱疾。命從事自代。唯公歲常自行。官吏刻石。爲詩美之。十五年。遷尚書吏部侍郎。公之北歸。不載南物。奴婢之籍。不增一人。長慶元年。改右散騎常侍。二年而爲尚書左丞。曾祖諱務本。滄州東光令。祖諱如珪。海州司戶參軍。贈尚書工部郎中。皇考諱岑父。祕書省著作佐郎。贈尚書左僕射。公夫人京兆韋氏。父种。大理評事。有四子。長曰溫。質。四門博士。遵。孺。遵憲。溫。裕。皆明經。女子長嫁中書舍人平陽路隨。其季者幼。公之昆弟五人。載。戡。戢。戩。公於次爲第二。公之薨。戢自湖南入爲少府監。其年八月甲申。戢與公子葬公於河南河陰廣武原。先公僕射墓之左。銘曰。

孔世卅八。吾見其孫。白而長身。寡笑與言。其尚類也。莫與之倫。德則多有。請考於文。

故幽州節度判官贈給事中清河張君墓誌銘

張君名徹。字某。以進士累官至范陽府監察御史。長慶元年。今牛宰相爲御史中丞。奏君名迹中御史選。詔卽以爲御史。其府惜不敢留。遣之。而密奏。幽州將父子繼續。不廷選且久。今新收。臣又始至。孤怯。須强佐乃濟。發半道。有詔以君還之。仍遷殿中侍御史。加賜朱衣銀魚。至數日。軍亂。怨其府從事。盡殺之而囚其帥。且相約。張御史長者。毋侮辱。轢蹙我。事無庸殺。置之帥所。居月餘。聞有中貴人自京師至。君謂其帥。公無負此土人。上使至。可因請見自辨。幸得脫免歸。卽推門求出。守者以告其魁。魁與其徒皆駭曰。必張御史。張御史忠義。必爲其帥告。此餘人。不如還之別館。卽與衆出君。君出門。罵衆曰。汝何敢反。前日吳元濟斬東市。今日李師道斬於軍中。同惡者父母妻子皆屠死。肉餧狗鼠。鴟鵂。汝何敢反。行且罵。衆畏惡其言。不忍聞。且虞生變。卽擊君以死。君抵死口不絕。罵。衆皆曰。義士義士。或收瘞之。以俟事聞。天子壯之。贈給事中。其友侯雲長佐鄆使。請於其帥馬僕射。爲之選於軍中。得故與君相知張恭李元實者。使以幣請之范陽。范陽人義而歸之。以聞。詔所在給船舉傳歸其家。賜錢物以葬。長慶四年。四月某日。其妻子以君之喪。葬於某州某所。君弟復。亦進士。佐汴宋。得疾。變易喪心。驚惑不常。君得閒。卽自視衣褥厚薄。節時其飲食。而匕箸進養之。禁其家無敢高語出聲。醫餌之藥。其物多

空青雄黃。諸奇怪物。劑錢至數十萬。營治勤劇。皆自君手。不假之人。家貧。妻子常有飢色。祖某某官。父某某官。妻韓氏。禮部郎中某之孫。汴州開封尉某之女。於余爲叔父孫女。君常從余學。選於諸生而嫁。與之孝順祇修。羣女效其所爲。男若干人。曰某。曰某。女子曰某。銘曰。

爲生。子獨割也。爲彼不清。作玉雪也。仁義以爲兵。用不缺折也。知死不失名。得猛厲也。自申於明。闇莫之奪也。我銘以貞之。不肖者之咀也。

施先生墓銘

貞元十八年。十月十一日。太學博士施先生士丐卒。其寮太原郭伉。買石誌其墓。昌黎韓愈爲之辭曰。

先生明毛鄭詩。通春秋左氏傳。善講說。朝之賢士大夫。從而執經考疑者繼於門。太學生習毛鄭詩。春秋左氏傳者。皆其弟子。貴遊之子弟。時先生之說二經。來太學。帖帖坐諸生下。恐不得卒聞。先生死。二經生喪其師。仕於學者亡其朋。故自賓士大夫。老師宿儒。新進小生。聞先生之死。哭泣相弔。歸衣服貨財。先生年六十九。在太學者十九年。由四門助教爲太學助教。由助教爲博士。太學秩滿當去。諸生輒拜疏乞留。或留或遷。凡十九年。不離太學。祖曰旭。袁州宜春尉。父曰煦。豪州定遠丞。妻曰太原王氏。先先生卒。子曰友直。明州鄞縣主簿。曰友諒。太廟齋郎。系曰。

先生之祖。氏自施父。其後施常。事孔子。以彰鸞鳴呼徹也。世慕顧以行。子揭揭也。噎喑以爲生。其跡。先生之興。公車是召。纂序前聞。於光有曜。古聖人言。其旨密微。箋注紛羅。顚倒是非。聞先生講論。如客得歸。卑讓肫肫。出言孔揚。今其死矣。誰嗣爲宗。縣曰萬年。原曰神禾。高四尺者。先生墓邪。

貞曜先生墓誌銘

唐元和九年。歲在甲午。八月己亥。貞曜先生孟氏卒。無子。其配鄭氏以告。愈走位哭。且召張籍會哭。明日使以錢如東都。供葬事。諸嘗與往來者。咸來哭弔。韓氏遂以書告與元尹故相餘慶。閏月。樊宗師使來弔。告葬期。徵銘。愈哭曰。嗚呼。吾尚忍銘吾友也夫。與元八以幣如孟氏賻。且來商家事。樊子使來速銘。曰。不則無以掩諸幽。乃序而銘之。先生諱郊。字東野。父庭玢。娶裴氏女。而選爲崑山尉。生先生及二季。酆郢。而卒。先生生六七年。端序則見。長而愈騫。涵而揉之。內外完好。色夷氣清。可畏而親。及其爲詩。劌目鉥心。刃迎縷解。鉤章棘句。掐擢胃腎。神施鬼設。閉見層出。唯其大翫於詞。而與世抹撥。人皆劫劫。

我獨有餘。有以後時聞先生者曰。吾既擠而與之矣。其猶足存邪。年幾五十。始以尊夫人之命。來集京師。從進士試。既得卽去。閱四年。又命來選爲溧陽尉。迎侍溧上。去尉二年。而故相鄭公尹河南。奏爲水陸運從事。試協律郎。親拜其母於門內。母卒五年。而鄭公以節領興元軍。奏爲其軍參謀。試大理評事。挈其妻。行之興元。次於閿鄉。暴疾卒。年六十四。買棺以斂。以二人輿歸。斷郢皆在江南。十月庚申。樊子合凡贈賻。而葬之洛陽東。其先人墓左。以餘財附其家。而供祀。將葬。張籍曰。先生揭德振華。於古有光。賢者故事有易名。況士哉。如曰貞曜先生。則姓名字行有載。不待講說而明。皆曰然。遂用之。初先生所與俱學同姓簡。於世次爲叔父。由給事中。觀察浙東。曰。生吾不能舉。死吾知恤其家。銘曰。於戲貞曜。維執不猗。維出不訾。維卒不施。以昌其詩。

南陽樊紹述墓誌銘

樊紹述既卒。且葬。愈將銘之。從其家求書。得書號魁紀公者三十卷。曰樊子者又三十卷。春秋集傳十五卷。表牋狀策。書序傳記。紀誌說論。今文讚銘。凡二百九十一篇。道路所遇。及器物門里雜銘。二百二十。賦十。詩七百一十九。曰。多矣哉。古未嘗有也。然而必出於己。不襲蹈前人一言一句。又何其難也。必出入仁義。其富若生蓄。萬物必具。海含地負。放恣橫從。無所統紀。然而不煩於繩削。而自合也。嗚呼。紹述於斯術。其可謂至於斯極者矣。生而其家貴富。長而不有其藏。一錢妻子。告不足。顧且笑曰。我道蓋是也。皆應曰然。無不意滿。嘗以金部郎中。告哀南方。還。言某師不治。罷之。以此。出爲縣州刺史。一年。徵拜左司郎中。又出刺絳州。縣絳之人。至今皆曰。於我有德。以爲諫議大夫。命且下。遂病以卒。年若干。紹述諱宗師。父諱澤。嘗帥襄陽江陵。官至右僕射。贈某官。祖某官。諱泳。自祖及紹述三世。皆以軍謀堪將帥。策上第。以進。紹述無所不學。於辭於聲大得也。在衆若無能者。嘗與觀樂。問曰。何如。曰。復當然。已而果然。銘曰。

惟古於詞必己出。降而不能乃剽賊。後皆指前公相襲。從漢迄今用一律。寥寥久哉莫覺屬。神徂聖伏道絕塞。既極乃通發。紹述文從字順各識職。有欲求之此其躅。

柳子厚墓誌銘

子厚諱宗元。七世祖慶。爲拓跋魏侍中。封濟陰侯。曾伯祖奭。爲唐宰相。與褚遂良。韓瑗俱得罪武后。死

高宗朝。皇考諱鎭。以事母棄太常博士。求爲縣令江南。其後以不能媚權貴。失御史。權貴人死。乃復拜侍御史。號爲剛直。所與游皆當世名人。子厚少精敏。無不通達。逮其父時。雖少年。已自成人。能取進士第。嶄然見頭角。衆謂柳氏有子矣。其後以博學宏詞授集賢殿正字。儻傑廉悍。議論證據今古。出入經史。百子。踔厲風發。率常屈其座人。名聲大振。一時皆慕與之交。諸公要人。爭欲令出我門下。交口薦譽之。貞元十九年。由藍田尉拜監察御史。順宗卽位。拜禮部員外郎。遇用事者得罪。例出爲刺史。未至。又例貶永州司馬。居閑益自刻苦。務記覽。爲詞章。汎濫停蓄。爲深博無涯涘。而自肆於山水閒。元和中。嘗例召至京師。又偕出爲刺史。而子厚得柳州。既至。歎曰。是豈不足爲政邪。因其土俗。爲設教禁。州人順賴。其俗以男女質錢。約不時贖。子本相侔。則沒爲奴婢。子厚與設方計。悉令贖歸。其尤貧力不能者。令書其傭足相當。則使歸。其質。觀察使下其法於他州。比一歲。免而歸者且千人。衡湘以南。爲進士者。悉以子厚爲師。其經承子厚口講指畫。爲文詞者。悉有法度可觀。其召至京師。而復爲刺史也。中山劉夢得禹錫亦在遣中。當詣播州。子厚泣曰。播州非人所居。而夢得親在堂。吾不忍夢得之窮。無辭以白其大人。且萬無母子俱往理。請於朝。將拜疏願以柳易播。雖重得罪。死不恨。遇有以夢得事白上者。夢得於是改刺連州。嗚呼。士窮乃見節義。今夫平居里巷相慕悅。酒食游戲相徵逐。詡詡强笑語。以相取下。握手出肝肺相示。指天日涕泣。誓生死不相背負。眞若可信。一旦臨小利害。僅如毛髮比。反眼若不相識。落陷穽。不一引手救。反擠之。又下石焉者。皆是也。此宜禽獸夷狄所不忍爲。而其人自視以爲得計。聞子厚之風。亦可以少愧矣。子厚前時少年。勇於爲人。不自貴重。顧藉。謂功業可立就。故坐廢退。既退。又無相知有氣力得位者推挽。故卒死於窮裔。材不爲世用。道不行於時也。使子厚在臺省。時自持其身。已能如司馬刺史時。亦自不斥。斥時有人力能舉之。且必復用。不窮。然子厚斥不久。窮不極。雖有出於人。其文學辭章。必不能自力以致。必傳於後。如今無疑也。雖使子厚得所願。爲將相於一時。以彼易此。孰得孰失。必有能辨之者。子厚以元和十四年十一月八日卒。年四十七。以十五年七月十日歸葬於萬年之墓者。舅弟盧遵。遵涿人。性謹順。學問不厭。自子厚之斥。遵從而家焉。遂其死不去。旣往葬子厚。又將經紀其家。庶幾有始終者。銘曰。

萬年先人墓側。子厚有子男二人。長曰周六。始四歲。季曰周七。子厚卒乃生。女子二人。皆幼。其得歸葬也。費皆出觀察使河東裴君行立。行立有節槩。重然諾。與子厚結交。子厚亦爲之盡。竟賴其力。葬子厚於萬年之墓。遵。漢中人。

殿中少監馬君墓誌銘

君諱繼祖。司徒贈太師北平莊武王之孫。少府監贈太子少傅諱暢之子。年四歲。以門功拜太子舍人。積三十四年。五轉而至殿中少監。年三十七以卒。有男八人。女二人。始余初冠。應進士。貢在京師。窮不自存。以故人稚弟。拜北平王於馬前。王問而憐之。因得見於安邑里第。王軫其寒饑。賜食與衣。召二子使爲之主。其季遇我特厚。少府監贈太子少傅者也。姆抱幼子立側。眉眼如畫。髮漆黑。肌肉玉雪。可念殿中君也。當是時。見王於北亭。猶高山深林鉅谷。龍虎變化不測。傑魁人也。退見少傅。翠竹碧梧。鸞鵠停峙。能守其業者也。幼子娟好靜秀。瑤環瑜珥。蘭茁其芽。稱其家兒也。後四五年。吾成進士。去而東游。哭北平王於客舍。後十五六年。吾爲尚書都官郎。分司東都。而分府。少傅卒哭之。又十餘年。至今哭少監焉。嗚呼。吾未髦老。自始至今。未四十年。而哭其祖子孫三世。於人世何如也。人欲久不死。而觀居此世者何也。

河南少尹李公墓誌銘

元和七年二月一日。河南少尹李公卒。年五十八。斂之三月某甲子。葬河南伊闕鳴皐山下。前事之月。其子道敏。哭再拜。授使者公行狀。以幣走京師。乞銘於博士韓愈曰。少尹將以某月日葬。宜有銘。其不肖嗣道敏。杖而執事。不敢違次。不得跣以請。愈曰。公行應銘法。子又禮葬。敢不諾而銘諸。公諱素。字某。生七歲喪其父。貧不能家。母夫人提以歸。教育於其外氏。以明經選。主虢之弘農簿。又尉陝之芮城。李丞相泌觀察陝虢。以材署運使從事。以課遷尉京兆鄠。考滿。以書判出其倫。選主萬年簿。而母夫人固在。食其祿。母夫人卒三年。改尉長安。遷監察御史。奏貶九卿一人。改詹事丞。遷殿中侍御史。由度支員外郎。選令萬年。公主奪驛田。京兆尹符縣割畀之。公不與。改度支郎。中使侍郎介恃不禮其屬大夫士。擅喜怒賞罰。公獨入讓不受。劉闢平。上以蜀賞高崇文。尚書省以崇文幕府。爭鹽井因革便不便。命公使崇文。崇文命幕府。惟公命從。卽其日事已疏奏。侍郎外稱其能。竟坐前敢抗己。衢州饑。擇刺史。侍郎曰。莫如郎李某。遂刺衢州。至一月。遷蘇州。李錡前反。權將之戍諸州者。刺史至。斂手無敢與敵。公至十二日。錡反。公將左右。與賊戰州門。不勝。賊呼入。公端立責以義。皆斂兵立不逼。錡命械致公軍。將斬以狗。及境。錡適敗縛。公脫械還走州。賊急卒。不暇走死。民抱扶迎盡出。天子使貴人持紫衣金魚以賜。居

三年。州稱治。拜河南少尹。行大尹事。呂氏子炅。棄其妻。著道士衣冠。謝母曰。當學仙王屋山。去數月。復出。閒詣公。公立之府門外。使吏卒脫道士冠。給冠帶。送付其母。黜屬令二人以贓。減民賦錢。歲五千萬。請緩民輸期一月。詔天下。輸皆緩一月。公一斷治不收聲。事常出名上。曾祖弘泰。簡州刺史。祖乾秀。伊闕令。父燮。宣州長史。贈絳州刺史。母夫人燉煌張氏。其舅參。有大名。公之配曰彭城劉氏夫人。夫人先卒。其葬以夫人祔。夫人曾祖曰子伎。祖曰餗。皆有大名。公之子。男四人。長曰道敏。舉進士。其次曰道樞。其次曰道本。道易。皆好學而文。女一人。嫁蘇之海鹽尉韋潛。自簡州而下。皆葬鳴皐山下。銘曰。高其山。而坎其中。以爲公之宮。奈何乎公。

祭馬僕射文

維年月日。吏部侍郎韓愈。謹以清酌庶羞之奠。敬祭於故僕射馬公十二兄之靈。惟公弘大溫恭。全然德備。天故生之。其必有意。將明將昌。實艱初試。佐戎滑臺。斥由尹寺。適彼甌閩。毚兔跋躓。顚而不踒。乃得其地。於泉於虔。始執郡符。遂殿交州。抗節番禺。去其螟蠹。蠻越大蘇。擢亞秋官。朝得碩士。人謂其崇。我勢始起。東征淮蔡。相臣是使。公兼邦憲。以副經紀。殲彼大魁。厥勳孰似。丞相歸治。留長蔡師。茫茫黍稷。昔實棘茨。鳩鳴雀乳。不見梟鴟。惟蔡及許。舊爲血仇。命公幷侯。耕借之牛。束其弓矢。禮讓優優。始誅鄆戎。厥墟腥臊。公往滌之。茲惟樂郊。惟東有猘。惟西有虺。顚覆朋鄰。我餘有幾。嵂崒中居。斬其脊尾。岱定河安。惟公之韙。帝念厥功。還公於朝。陟於地官。且長百僚。度彼四方。孰樂可據。顧瞻衡鈞。將擧以付。惟公積勤。以疾以憂。及其歸時。當謝之秋。賀門未歸。弔廬已萃。未燕於堂。已哭於次。昔我及公。實同危事。且死且生。誓莫捐棄。歸來握手。曾不三四。曾不濡翰。酬酢文字。曾不醉飽。以勸酒胾。奠以敍哀。其何能致。嗚呼哀哉。尚饗。

祭柳子厚文

維年月日。韓愈謹以清酌庶羞之奠。祭於亡友柳子厚之靈。嗟嗟。子厚而至然耶。自古莫不然。我又何嗟。人之生世。如夢一覺。其閒利害。竟亦何校。當其夢時。有樂有悲。及其既覺。豈足追惟。凡物之生。不願爲材。犧尊青黃。乃木之災。子之中棄。天脫羣羈。玉珮瓊琚。大放厥辭。富貴無能。磨滅誰記。子之自著。表表愈偉。不善爲斲。血指汗顏。巧匠旁觀。縮手袖閒。子之文章。而不用世。乃令吾徒。掌帝之制。子之視人。

自以無前。一斥不復。羣飛刺天。嗟嗟子厚。今也則亡。臨絕之音。一何琅琅。徧告諸友。以寄厥子。不鄙謂余。亦託以死。凡今之交。觀勢厚薄。余豈可保。能承子託。非我知子。子實命我。猶有鬼神。寧敢遺墮。念子永歸。無復來期。設祭棺前。矢心以辭。嗚呼哀哉。尚饗。

祭河南張員外文

維年月日。彰義軍行軍司馬守太子右庶子兼御史中丞韓愈。謹遣某乙。以庶羞清酌之奠。祭於亡友故河南縣令張十二員外之靈。貞元十九。君爲御史。余以無能。同詔並時。君德渾剛。標高揭己。有不吾如。唾猶泥滓。余戇而狂。年未三紀。乘氣加人。無挾自恃。彼婉孌者。實憚吾曹。側肩帖耳。有舌如刀。我落陽山。以尹韶猱。君飄臨武。山林之牢。叢弊寒兇。雪虐風饕。顧於馬下。我泗君哭。夜息南山。同臥一席。守隸防夫。觚頂交跖。洞庭漫汗。粘天無壁。風濤相厭。中二妃行迷。淚蹤染林。山哀浦思。鳥獸叫音。余唱君和。百篇在吟。君上于縣。我又南踰。把饑相飲。後期有無。期宿界上。一又相語。自別幾時。遽變寒暑。枕臂欹眠。加余以股。僕來告言。虎入廄處。無敢驚逐。以我驥去。君云是物。不駿於乘。虎取而往。來寅其徵。我預在此。與君俱膺。猛獸果信。惡禱而憑。余出嶺中。君埃州下。偕掾江陵。非余望者。榊山奇變。其水清寫。泊砂倚石。有還無捨。衡陽放酒。熊咆虎嘻。不存令章。罰籌蝟毛。委舟湘流。往觀南嶽。雲壁潭潭。穹林攸擢。避風太湖。七日鹿角。鉤登大鮎。怒頰豕鬣。攀盤炙酒。羣奴餘啄。走官階下。首下尻高。下馬伏塗。從事是遭。余徵博士。君以使已。相見京師。過願之始。分教東生。君掾雍首。兩都相望。於別何有。解手背面。遂十一年。君出我入。如相避然。生闊死休。吞不復宣。刑官屬郎。引章訐奪。權臣不愛。南昌是斡。明條謹獄。戕獠戶歌。用遷澧浦。爲人受瘥。還家東都。起令河南。屈拜後生。憤所不堪。屢以正免。身伸事塞。竟死不昇。孰勸爲善。丞相南討。余辱司馬。議兵大梁。走出洛下。哭不遷棺。奠不親舉。不撫其子。葬不送野。望君傷懷。有隕如瀉。銘君之績。納石壙中。爰及祖考。紀德事功。外著後世。鬼神與通。君其奚憾。不余鑒衷。嗚呼哀哉。尚饗。

祭十二郎文

年月日。季父愈。聞汝喪之七日。乃能銜哀致誠。使建中。遠具時羞之奠。告汝十二郎之靈。嗚呼。吾少孤及長。不省所怙。惟兄嫂是依。中年。兄歿南方。吾與汝俱幼。從嫂歸葬河陽。既又與汝就食江南。零丁孤苦。未嘗一日相離也。吾上有三兄。皆不幸早世。承先人後者。在孫惟汝。在子惟吾。兩世一身。形單影隻。嫂常撫汝。指吾而言曰。韓氏兩世。惟此而已。汝時尤小。當不復記憶。吾時雖能記憶。亦未知其言之悲也。吾年十九。始來京城。其後四年。而歸視汝。又四年。吾佐董丞相於汴州。汝來省吾。止一歲。請歸取其孥。明年。丞相薨。吾去汴州。汝不果來。是年。吾佐戎徐州。使取汝者始行。吾又罷去。汝又不果來。吾念汝從於東。東亦客也。不可以久。圖久遠者。莫如西歸。將成家而致汝。嗚呼。孰謂汝遽去吾而歿乎。吾與汝俱少年。以爲雖暫相別。終當久與相處。故捨汝而旅食京師。以求斗斛之祿。誠知其如此。雖萬乘之公相。吾不以一日輟汝而就也。去年。孟東野往。吾書與汝曰。吾年未四十。而視茫茫。而髮蒼蒼。而齒牙動搖。念諸父與諸兄。皆康強而早世。如吾之衰者。其能久存乎。吾不可去。汝不肯來。恐旦暮死而汝抱無涯之戚也。孰謂少者歿而長者存。強者天而病者全乎。嗚呼。其信然邪。其夢邪。其傳之非其眞邪。信也。吾兄之盛德而天其嗣乎。汝之純明而不克蒙其澤乎。少者強者而天歿。長者衰者而存全乎。未可以爲信也。夢也。傳之非其眞也。東野之書。耿蘭之報。何爲而在吾側也。嗚呼。其信然矣。吾兄之盛德而天其嗣矣。汝之純明宜業其家者。不克蒙其澤矣。所謂天者誠難測。而神者誠難明矣。所謂理者不可推。而壽者不可知矣。雖然。吾自今年來。蒼蒼者或化而爲白。動搖者或脫而落矣。毛血日益衰。志氣日益微。幾何不從汝而死也。死而有知。其幾何離。其無知。悲不幾時。而不悲者無窮期矣。汝之子始十歲。吾之子始五歲。少而強者不可保。如此。孩提者又可冀其成立耶。嗚呼哀哉。嗚呼哀哉。汝去年書云。比得軟脚病。往往而劇。吾曰。是疾也。江南之人。常常有之。未始以爲憂也。嗚呼。其竟以此而殞其生乎。抑別有疾而至斯乎。汝之書。六月十七日也。東野云。汝歿以六月二日。耿蘭之報無月日。蓋東野之使者。不知問家人以月日。如耿蘭之報。不知當言月日。東野與吾書。乃問使者。使者妄稱以應之耳。其然乎。其不然乎。今吾使建中祭汝。弔汝之孤。與汝之乳母。彼有食可守以待終喪。則待終喪而取以來。如不能守以終喪。則遂取以來。其餘奴婢。並令守汝喪。吾力能改葬。終葬汝於先人之兆。然後惟其所願。嗚呼。汝病吾不知時。汝歿吾不知日。生不能相養以共居。歿不能撫汝以盡哀。斂不臨。葬不送。其生不能守以養。其歿不能守以葬。汝之子。吾不愛其孥。其形不與吾形相依。死而魂不與吾夢相接。吾實爲之。其又何尤。彼蒼者天。曷其有極。自今以往。吾其無意於人世矣。當求數頃之田於伊潁之上。以待餘年。教吾子與汝子。幸其成長。吾女與汝女待其嫁。如此而已。嗚呼。言有窮。而情不可終。汝其知也邪。其不知也邪。

嗚呼哀哉。尚饗。

鱷魚文

維年月日。潮州刺史韓愈。使軍事衙推秦濟。以羊一豬一。投惡谿之潭水。以與鱷魚食。而告之曰。昔先王既有天下。烈山澤。罔繩擉刃。以除蟲蛇惡物爲民害者。驅而出之四海之外。及後王德薄不能遠有。則江漢之閒。尚皆棄之。以與蠻夷楚越。況潮嶺海之閒。去京師萬里哉。鱷魚之涵淹卵育於此。亦固其所。今天子嗣唐位。神聖慈武。四海之外。六合之內。皆撫而有之。況禹跡所揜。揚州之近地。刺史縣令之所治。出貢賦。以供天地宗廟百神之祀之壤者哉。鱷魚其不可與刺史雜處此土也。刺史受天子命守此土。治此民。而鱷魚睅然。不安谿潭。據處食民畜熊豕鹿麞。以肥其身。以種其子孫。與刺史抗拒。爭爲長雄。刺史雖駑弱。亦安肯爲鱷魚低首下心。伈伈睍睍。爲民吏羞。以偸活於此邪。且承天子命。以來爲吏。固其勢不得不與鱷魚辯。鱷魚有知。其聽刺史言。潮之州。大海在其南。鯨鵬之大。蝦蟹之細。無不容歸以生以食。鱷魚朝發而夕至也。今與鱷魚約。盡三日。其率醜類。南徙於海。以避天子之命吏。三日不能。至五日。五日不能。至七日。七日不能。是終不肯徙也。是不有刺史聽從其言也。不然則是鱷魚冥頑不靈。刺史雖有言。不聞不知也。夫傲天子之命吏。不聽其言。不徙以避之。與冥頑不靈而爲民物害者。皆可殺。刺史則選材技吏民。操强弓毒矢。以與鱷魚從事。必盡殺乃止。其無悔。

唐宋八家文卷六終

唐宋八家文卷七

柳宗元子厚者

獻平淮夷雅表

臣宗元言。臣負罪竄伏。違尚書牋奏。十有四年。聖恩寬宥。命守遐壤。懷印曳紱。有社有人。臣宗元誠感誠荷。頓首頓首。伏惟睿聖文武皇帝陛下。天造神斷。克清大慈。金鼓一動。萬方畢臣。太平之功。中興之德。推校千古。無所與讓。因伏自忖度。有方剛之力。不得備戎行。致死命。況今已無事。思報國恩。獨惟文章。伏見周宣王時稱中興。其道彰大。於後罕及。然徵於詩大小雅。其選徒出狩。則車攻吉日。命官分土。則崧高韓奕烝人。南征北伐。則六月采芑。平淮夷。則江漢常武。鏗鍧炳耀。盪人耳目。故宣王之形容。與其輔佐。由今望之。若神人然。此無他。以雅故也。臣伏見陛下自卽位以來。平夏州。夷劍南。取江東。定河北。今又發自天衷。克翦淮右。而大雅不作。臣誠不佞。然不勝憤踊。伏以朝多文臣。不敢盡專數事。謹撰平淮夷雅二篇。雖不及尹吉甫召穆公等。庶施諸後代。有以佐唐之光明。謹昧死再拜以獻。臣宗元誠恐誠懼。頓首頓首。謹言。

皇武。命丞相度董師。集大功也。

皇耆其武。於潑於淮。既巾乃車。環蔡其來。狡衆昏囂。甚毒於酲。狂奔叫呶。以干大刑。皇咨於度。惟汝一德。曠誅四紀。其徯汝克。錫汝斧鉞。其往視師。師是蔡人。以宥以釐。度拜稽首。廟於元龜。既禡既類。於社是宜。金節煌煌。錫盾雕戈。犀甲熊旂。威命是荷。度拜稽首。出次於東。天子餞之。罍斝是崇。鼎臑俎胾。五獻百籩。凡百卿士。班以周旋。既涉於滻。乃翼乃前。孰圖厥猶。其佐多賢。宛宛周道。於山於川。遠揚邇昭。陟降連連。我旆我旂。於道於陌。訓於羣帥。拳勇來格。公曰徐之。無恃額額。式和爾容。惟義之宅。進次於郾。彼昏卒狂。哀兇鞠頑。鋒蝟斧螗。赤子匍匐。厥父是亢。怒其萌芽。以悖太陽。王旅渾渾。是佚是怙。既獲敵師。若饑得餔。蔡兇伊窘。悉起來聚。左擣其虛。靡愆厥虞。載闢載祓。丞相是臨。弛其武刑。諭我德心。其

危既安。有長如林。曾是讙譁。化爲謳吟。皇曰來歸。汝復相予。爵之成國。胙以夏墟。度拜稽首。天子聖神。度拜稽首。皇祐下人。淮夷既平。震是朔南。宜廟宜郊。以告德音。歸牛休馬。豐稼於野。我武惟皇。永保無疆。

方城。命懟守也。卒入蔡。得其大醜。以平淮右。

方城臨臨。王卒峙之。匪徹匪競。皇有正命。皇命於懟。往舒余仁。踣彼艱頑。桑惠是馴。懟拜卽命。於皇之訓。既礪既攻。以後厥刃。王師嶷嶷。熊羆是式。衝勇韜力。日思予殛。寇昏以狂。敢蹈懟疆。士獲厥心。大祖高皇。長載曾矛。棨其綏章。右剪左屠。聿禽其良。其良既宥。告以父母。恩柔於肌。卒貢爾有。維彼佽特。乃偵乃誘。維彼佽宅。乃發乃守。其恃爰獲。我功我多。陰諜厥圖。以究爾訛。雨雪洋洋。大風來加。於燠其寒。於邇其遐。汝陰之茫。懸瓠之裔。是震是拔。大殲厥家。狡虜既糜。輸於國都。示之市人。卽社行誅。乃諭乃止。蔡有厚喜。完其室家。仰父俯子。汝水沄沄。既清而瀾。蔡人行歌。我步逶遲。蔡人歌矣。蔡風和矣。孰類蔡初胡毚。爾居式慕。以康。爲愿有餘。是究是咨。皇德既舒。皇曰咨懟。裕乃父功。昔我文祖。惟西平是庸。內誨於家。外刑於邦。孰是蔡人。而不率從。蔡人率止。惟西平有子。西平有子。惟我有臣。嚚允大邦。俾惠我人。於廟告功。以顧萬方。

駁復讎議

臣伏見。天后時。有同州下邽人徐元慶者。父爽爲縣尉趙師韞所殺。卒能手刃父讎。束身歸罪。當時諫臣陳子昂。建議誅之。而旌其閭。且請編之於令。永爲縣尉趙師韞所殺。卒能手刃父讎。束身歸罪。當時諫臣陳子昂。建議誅之。而旌其閭。且請編之於令。永爲國典。臣竊獨過之。臣聞禮之大本。以防亂也。若曰無爲賊虐。凡爲子者。殺無赦。刑之大本。亦以防亂也。若曰無爲賊虐。凡爲子者。殺無赦。其本則合。其用則異。旌與誅。莫得而竝焉。誅其可旌。茲謂濫。黷刑甚矣。旌其可誅。茲謂僭。壞禮甚矣。果以是示於天下。傳於後代。趍義者不知所向。違害者不知所立。以是爲典。可乎。蓋聖人之制。窮理以定賞罰。本情以正曲直。原始而求其端。則刑禮之用。判然離矣。何者若元慶之父。不陷於公罪。師韞之誅。獨以其私怨。奮其吏氣。虐於非辜。州牧不知罪。刑官不知問。上下蒙冒。顓號不聞。而元慶能以戴天爲大恥。枕戈爲得禮。處心積慮。以衝讎人之胸。介然自克。卽死無憾。是守禮而行義也。執事者。宜有慚色。將謝之不暇。而又何誅焉。其或元慶之父。不免於罪。師韞之誅。不愆於法。是非死於吏也。法其可讎乎。讎天子之法。而戕奉法之吏。是悖懿而凌上也。執而誅之。

所以正邦典。而又何旌焉。且其議曰。人必有子。子必有親。親親相讎。其亂誰救。是惑於禮也甚矣。禮之所謂讎者。蓋其冤抑沉痛而號無告也。非謂抵罪觸法。陷於大戮。而曰彼殺之。我乃殺之。不議曲直。暴寡脇弱而已。其非經背聖。不亦甚哉。周禮。調人掌司萬人之讎。凡殺人而義者。令勿讎。讎之則死。有反殺者。邦國交讎之。又安得親親相讎也。春秋公羊傳曰。父不受誅。子復讎可也。父受誅。子復讎。此推刃之道。復讎不除害。今若取此。以斷兩下相殺。則合於於禮矣。且夫不忘讎孝也。不愛死義也。元慶能不越於禮。服孝死義。是必達理而聞道者也。夫達理聞道者。反以爲戮。黷刑壞禮。其不可以爲典明矣。請下臣議。附於令。有斷斯獄者。不宜以前議從事。謹議。

桐葉封弟辯

古之傳者有言。成王以桐葉與小弱弟。戲曰。以封汝。周公入賀。王曰。戲也。周公曰。天子不可以戲。乃封小弱弟於唐。吾意不然。王之弟當封耶。周公宜以時言於王。不待其戲而賀以成之也。不當封耶。周公乃成其不中之戲。以地以人。與小弱者。爲之主。其得爲聖乎。且周公以王之言不可苟焉而已。必從而成之耶。設有不幸王以桐葉戲婦寺。亦將舉而從之乎。凡王者之德。在行之。何若。設未得其當。雖十易之不爲病。要於其當。不可使易也。而況以其戲乎。若戲而必行之。是周公教王遂過也。吾意周公輔成王。宜以道。從容優樂。要歸之大中而已。必不逢其失而爲之辭。又不當束縛之。馳驟之。使若牛馬然。急則敗矣。且家人父子。尙不能以此自克。況號爲君臣者耶。是直小丈夫鞅鞅者之事。非周公所宜用。故不可信。或曰。封唐叔。史佚成之。

晉文公問守原議

晉文公既受原於王。難其守。問寺人勃鞮。以畀趙衰。余謂守原政之大者也。所以承天子。樹霸功。致命諸侯。不宜謀及嫌近。以忝王命。而晉君擇大任。不公議於朝。而私議於宮。不博謀於卿相。而獨謀於寺人。雖或衰之賢足以守國之政。不爲敗。而賊賢失政之端。由是滋矣。況當其時。不乏謀議之臣乎。狐偃爲謀臣。先軫將中軍。晉君疏而不咨。外而不求。乃卒定於內豎。其可以爲法乎。且晉君將襲齊桓之業。以翼天子。乃大志也。然而齊桓任管仲。以興。進豎刁。以敗。則獲原啓疆。適其始政。所以觀視諸侯也。而乃背其所以興。跡其所以敗。然而能霸諸侯者。以土則大。以力則疆。以義則天子之冊也。誠畏之矣。烏

能得其心服哉。其後景監得以相衞鞅。弘石得以殺望之。誤之者晉文公也。嗚呼得賢臣以守大邑。則問非失舉也。蓋失問也。然猶羞當時陷後代若此。況於問與舉又兩失者。其何以救之哉。余故著晉君之罪。以附春秋許世子止趙盾之義。

捕蛇者說

永州之野產異蛇。黑質而白章。觸草木盡死。以齧人無禦之者。然得而腊之以爲餌。可以已大風攣踠瘻。去死肌。殺三蟲。其始太醫以王命聚之。歲賦其二。募有能捕之者。當其租入。永之人爭奔走焉。有蔣氏者。專其利三世矣。問之則曰。吾祖死於是。吾父死於是。今吾嗣爲之十二年。幾死者數矣。言之貌若甚感者。余悲之曰。若毒之乎。余將告於莅事者。更若役。復若賦。則何如。蔣氏大戚。汪然出涕曰。君將哀而生之乎。則吾斯役之不幸。未若復吾賦不幸之甚也。嚮吾不爲斯役。則久已病矣。自吾氏三世居是鄉。積於今六十歲矣。而鄉隣之生日蹙。殫其地之出。竭其廬之入。號呼而轉徙。饑渴而頓踣。觸風雨。犯寒暑。呼噓毒癘。往往而死者相藉也。曩與吾祖居者。今其室十無一焉。與吾父居者。今其室十無四五焉。非死則徙爾。而吾以捕蛇獨存。悍吏之來吾鄉。叫囂乎東西。隳突乎南北。譁然而駭者。雖雞狗不得寧焉。吾悚悚而起。視其缶。而吾蛇尚存。則弛然而臥。謹食之。時而獻焉。退而甘食其土之有。以盡吾齒。蓋一歲之犯死者二焉。其餘則熙熙而樂。豈若吾鄉鄰之旦旦有是哉。今雖死乎此。比吾鄉鄰之死。則已後矣。又安敢毒耶。余聞而愈悲。孔子曰。苛政猛於虎也。吾嘗疑乎是。今以蔣氏觀之。猶信。嗚呼。孰知賦斂之毒有甚是蛇者乎。故爲之說。以俟夫觀人風者得焉。

觀八駿圖說

古之書有記周穆王馳八駿。升崑崙之墟者。後之好事者爲之圖。宋齊以下傳之。觀其狀甚怪。咸若騫若翔。若龍鳳麒麟。若螳螂然。其書尤不經。世多有。然不足采。世聞其駿也。因以異形求之。則其言聖人者亦類是矣。故傳伏犧曰牛首。女媧曰其形類蛇。孔子如供頭。若是乎甚衆。孟子曰。何以異於人哉。堯舜與人同耳。今夫馬者。駕而乘之。或一里而汗。或十里而汗。或千百里而不汗者。視之。毛物尾鬣四足而蹄。齕草飲水。一也。推是而至於駿。亦類也。今夫人。有不足爲負販者。有不足爲吏者。有不足爲士大夫者。有足爲者。視之圓首橫目。食穀而飽肉。絺而清。裘而燠。一也。推是而至於聖。亦類也。然則伏犧氏。女媧氏。孔子氏。是亦人而已矣。驊騮。白義。山子之類。若果有之。是亦馬而已矣。又烏得爲牛爲蛇。爲供頭。爲龍鳳麒麟螳螂然也哉。然而世之慕駿者。不求其人者。不求之馬。而必若牛若蛇若供頭之問。故終不能有得於聖人也。誠使天下有是圖者。舉而焚之。則駿馬與聖人出矣。

箕子碑

凡大人之道有三。一曰正蒙難。二曰法授聖。三曰化及民。殷有仁人曰箕子。實具茲道。以立於世。故孔子述六經之旨。尤殷勤焉。當紂之時。大道悖亂。天威之動不能戒。聖人之言無所用。進死以併命。誠仁矣。無益吾祀。故不爲。委身以存祀。誠仁矣。與亡吾國。故不忍。具是三道。有行之者矣。是用保其明哲。與之俯仰。晦是謨範。辱於囚奴。昏而無邪。隤而不息。故在易曰。箕子之明夷。正蒙難也。及天命既改。生人以正。乃出大法。用爲聖師。周人得以序彝倫。而立大典。故在書曰。以箕子歸。作洪範。法授聖也。及封朝鮮。推道訓俗。惟德無陋。惟人無遠。用廣殷祀。俾夷爲華。化及民也。率是大道。聚於厥躬。天地變化。我得其正。其大人歟。於虖。當其周時未至。殷祀未殄。比干已死。微子已去。向使紂惡未稔而自斃。武唐念亂以圖存。國無其人。誰與共理。是固人事之或然者也。然則先生隱忍而爲此。其有志於斯乎。唐某年。作廟汲郡。歲時致祀。嘉先生獨列於易象。作是頌云。

蒙難以正。授聖以謨。宗祀用繁。夷民其蘇。憲憲大人。顯晦不渝。聖人之仁。道合隆汙。明哲在躬。不陋爲奴。冲讓居禮。不盈稱孤。高而無危。卑不可踰。非死非去。有懷故都。時詘而伸。卒爲世模。易象是列。文王爲徒。大明宣昭。崇祠式孚。古闕頌辭。繼在後儒。

封建論

天地果無初乎。吾不得而知之也。然則孰爲近。曰有初爲近。孰明之。由封建而明之也。彼封建者。更古聖王堯舜禹湯文武。而莫能去之。蓋非不欲去之也。勢不可也。勢之來。其生人之初乎。不初無以有封建。封建非聖人意也。彼其初與萬物皆生。草木榛榛。鹿豕狉狉。人不能搏噬。而且無毛羽。莫克自奉自衞。荀卿有言。必將假物以爲用者也。夫假物者必爭。爭而不已。必就其能斷曲直者而聽命焉。其智而明者。所伏必衆。告之以直而不改。必痛之而後畏。由是君長刑政生

焉。故近者聚而爲羣。羣之分。其爭必大。大而後有兵有德。又有大者。衆羣之長。又就而聽命焉。以安其屬。於是有諸侯之列。則其爭又有大者焉。德又大者。諸侯之列。又就而聽命焉。以安其封。於是有方伯連帥之類。則其爭又有大者焉。德又大者。方伯連帥之類。又就而聽命。以安其人。然後天下會於一。是故有里胥而後有縣大夫。有縣大夫而後有諸侯。有諸侯而後有方伯連帥。有方伯連帥而後有天子。自天子至於里胥。其德在人者死。必求其嗣而奉之。故封建非聖人意也。勢也。夫堯舜禹湯之事遠矣。及有周而甚詳。周有天下。裂土田而瓜分之。設五等邦羣后。布履星羅。四周於天下。輪運而輻集。合爲朝覲會同。離爲守臣扞城。然而降於夷王。害禮傷尊。下堂而迎覲者。歷於宣王。挾中興復古之德。雄南征北伐之威。卒不能定魯侯之嗣。陵夷迄於幽厲。王室東徙。而自列爲諸侯。厥後問鼎之輕重者有之。射王中肩者有之。伐凡伯誅萇弘者有之。天下乖盭。無君君之心。余以爲周之喪久矣。徒建空名於公侯之上耳。得非諸侯之盛强。末大不掉之咎歟。遂判爲十二。合爲七國。威分於陪臣之邦。國殄於後封之秦。則周之敗端。其在乎此矣。秦有天下。裂都會而爲之郡邑。廢侯衞而爲之守宰。據天下之雄圖。都六合之上游。攝制四海。運於掌握之內。此其所以爲得也。不數載而天下大壞。其有由矣。亟役萬人。暴其威刑。竭其貨賄。負鋤梃謫戍之徒。圜視而合從。大呼而成羣。時則有叛人而無叛吏。人恐於下。而吏畏於上。天下相合。殺守劫令而並起。咎在人怨。非郡邑之制失也。漢有天下。矯秦之枉。徇周之制。剖海內而立宗子。封功臣。數年之閒。奔命扶傷而不暇。困平城。病流矢。陵遲不救者三代。後乃謀臣獻畫。而離削自守矣。然而封建之始。郡國居半。時則有叛國而無判郡。秦制之得。亦以明矣。繼漢而帝者。雖百代可知也。唐興制州邑。立守宰。此其所以爲宜也。然猶桀猾時起。虐害方域者。失不在於州。而在於兵。時則有叛將而無叛州。州縣之設。固不可革也。或者曰。封建者。必私其土。子其人。適其俗。修其理。施化易也。守宰者。苟其心思遷其秩而已。何能理乎。余又非之。周之事跡。斷可見矣。列侯驕盈。黷貨事戎。大凡亂國多。理國寡。侯伯不得變其政。天子不得變其君。私土子人者。百不有一。失在於制。不在於政。周事然也。秦之事跡。亦斷可見矣。有理人之制。而不委郡邑是矣。有理人之臣。而不使守宰是矣。郡邑不得正其制。守宰不得行其理。酷刑苦役。而萬人側目。失在於政。不在於制。秦事然也。漢興。天子之政。行於郡。不行於國。制其守宰。不制其侯王。侯王雖亂。不可變也。國人雖病。不可除也。及夫大逆不道。然後掩捕而遷之。勒兵而夷之耳。大逆未彰。姦利浚財。怙勢作威。大刻於民者。無如之何。及夫郡邑。可謂理且安矣。何以言之。且漢知孟舒於田叔。得魏尙於馮唐。聞黃霸之明審。覩汲黯之簡靖。拜之可也。復其

位可也。臥而委之。以輯一方可也。有罪得以黜。有能得以賞。朝拜而不道。夕斥之矣。夕受而不法。朝斥之矣。設使漢室盡城邑而侯王之。縱令其亂人戚之而已。孟舒魏尙之術。莫得而施。黃霸汲黯之化。莫得而行。明譴而導之。拜受而退已違矣。下令而削之。締交合從之謀。周於同列。則相顧裂眦。勃然而起。幸而不起。則削其半。削其半。民猶瘁矣。曷若擧而移之。以全其人乎。漢事然也。今國家盡制郡邑。連置守宰。其不可變也固矣。善制兵。謹擇守。則理平矣。或者又曰。夏商周漢。封建而延。秦。郡邑而促。尤非所謂知理者也。魏之承漢也。封爵猶建。晉之承魏也。因循不革。而二姓陵替。不聞延祚。今矯而變之。垂二百祀。大業彌固。何繫於諸侯哉。或者又以爲殷周聖王也。而不革其制。固不當復議也。是大不然。夫殷周之不革者。是不得已也。蓋以諸侯歸殷者三千焉。資以黜夏。湯不得而廢。歸周者八百焉。資以勝殷。武王不得而易。徇之以爲安。仍之以爲俗。湯武之所不得已也。夫不得已。非公之大者也。私其力於己也。私其衞於子孫也。秦之所以革之者。其爲制。公之大者也。其情私也。私其一己之威也。私其盡臣畜於我也。然而公天下之端。自秦始。夫天下之道。理安斯得人者也。使賢者居上。不肖者居下。而後可以理安。今夫封建者。繼世而理。繼世而理者。上果賢乎。上果不肖乎。則生人之理亂未可知也。將欲利其社稷。以一其人之視聽。則又有世大夫世食祿邑。以盡其封略。聖賢生於其時。亦無以立於天下。封建者爲之也。豈聖人之制使至於是乎。吾固曰。非聖人之意也。勢也。

劍門銘

惟蜀都重險多貨。混同戎蠻。人尨俗剽。嗜爲寇亂。皇帝元年八月。帥喪衆暴。羣疑不制。妖孽搧行。怙恃富强。滔天阻兵。攻陷他部。北包劍門。憑負邱陵。以張鷙猛。堅利鋒鏑。以拒大順。謂雷霆之誅莫己加也。惟梁守臣禮部尙書嚴公。以國害爲私讎。以天討爲己任。推仁仗信。不待司死。而人致其命。立義抗憤。不待喋血。而士一其心。悉師出次。祗俟明詔。凡諸侯之師。必出於是。儲峙饗賚。取其豐穰。乃遣前軍嚴秦。奉揚王誅。延告南土。十一月。右師逾利州。蹈寇地。乘山斬虜。以遏奔衝。左師出於劍門。大攘頑嚚。諭引刼脅。蟻潰鼠駭。險無以固。收奪利地。以須王師。刲刳腎腸。振拔根柢。俾無以肆毒。用集我勳力。鼙鼓一振。元戎啓行。取其渠魁。以爲大戮。由公忠勇憤悱。授任堅明。謀猷弘長。用能啓闢險阨。夷爲大途。衰沮害氣。對乎天意。帝用休嘉。議功居首。增秩師長。進爲大藩。宅是南服。將校羣吏。願刊山石。昭著公之功。垂號無窮。銘曰。

井絡坤垠。時惟外區。介山爲門。環於蜀都。叢險積貨。混幷羌髳。狂猾窺隙。狺狺嘯呼。憑據勢勝。厚其兇徒。皇帝之仁。宥而不誅。暴非德馴。害及巴渝。乃出王旅。乃司列岳。牧臣司梁。當其要束。器備攸積。糗糧是蓄。人無增賦。師以饒足。喋血誓士。玄機在握。分命貔貅。陳爲掎角。右逾岷山。左直劍門。攻出九地。上披重雲。攀天蹈空。夷視阻艱。破裂層壘。殄殲羣頑。內獲固圉。外臨平原。天兵徐驅。卒乘嘽嘽。大憝囚戮。戎夏咸歡。帝圖厥功。惟良是先。開國進位。南服於藩。邦之清夷。人以完安。銘功鑒亂。永代是觀。

寄許京兆孟容書

宗元再拜。五丈座前。伏蒙賜書誨諭。微悉重厚。欣踊恍惚。疑若夢寐。捧書叩頭。悸不自定。伏念。得罪來五年。未嘗有故舊大臣肯以書見及者。何則罪謗交積。羣疑當道。誠可怪而畏也。是以兀兀忘行。尤負重憂。殘骸餘魂。百病所集。痞結伏積。不食自飽。或時寒熱。水火互至。內消肌骨。非獨瘴癘爲也。忽奉教命。乃知幸爲大君子所宥。欲使膏肓沉沒。復起爲人。夫何素望。敢以及此。宗元早歲與負罪者親善。始奇其能。謂可以共立仁義。裨教化。過不自料。懃懃勉勵。唯以中正信義爲志。以興堯舜孔子之道。利安元元爲務。不知愚陋不可力彊。其素意如此也。末路厄塞。臲卼。事既壅隔。狠忤貴近。狂疎繆戾。蹈不測之辜。羣言沸騰。鬼神交怒。加以素卑賤。暴起領事。人所不信。射利求進者。塡門排戶。百不一得。一旦快意。更造怨讟。以此大罪之外。詆訶萬端。旁午構扇。便爲敵讎。協心同攻。外連彊暴失職者。以致其事。此皆丈人所聞見。不敢爲他人道說。懷不能已。復載簡牘。此人雖萬被誅戮。不足塞責。而豈有賞哉。今其黨與幸獲寬貸。各得善地。無公事坐食俸祿。明德至渥也。尙何敢更俟除棄廢痼。以希望外之澤哉。年少氣銳。不識幾微。不知當否。但欲一心直遂。果陷刑法。皆自所求取得之。又何怪也。宗元於衆黨人中。罪狀最甚。神理降罰。又不能卽死。猶對人言語。求食自活。迷不知恥。日復一日。然亦有大故。自以得姓來。二千五百年。代爲家嗣。今抱非常之罪。居夷獠之鄉。卑濕昏霧。恐一日塡委溝壑。曠墜先緒。以是怛然痛恨。心骨沸熱。煢煢孤立。未有子息。荒陬中少士人女子。無與爲婚。世亦不肯與罪人親昵。以是嗣續之重。不絕如縷。每常春秋時饗。孑立捧奠。顧盼無後繼者。懍懍然欷歔惴惕。恐此事便已。推心傷骨。若受鋒刃。此誠丈人所共憫惜也。先墓在城南。無異子弟爲主。獨託村鄰。自譴逐來。消息存亡。不一至鄉閭。主守者。固以益怠。晝夜哀憤。懼便毀傷松柏。芻牧不禁。以成大戾。近世禮重拜掃。今已闕者四年矣。每遇寒食。則北向長號。以首頓地。想田野道路。士女遍滿。皁隸庸丐。皆得上父母邱墓。馬醫夏畦之

鬼。無不受子孫追養者。然此已息望。又何以云哉。城西有數頃田。樹果數百株。多先人手自封植。今已荒穢。恐便斬伐。無復愛惜。家有賜書三千卷。尙在善和里舊宅。宅今已三易主。書存亡不可知。皆付受所重。常繫心腑。然無可爲者。立身一敗。萬事瓦裂。身歿家破。爲世大僇。復何敢更望大君子撫慰收卹。尙置人數中耶。是以當食不知辛醎節適。洗沐盥漱。動逾歲時。一搔皮膚。塵垢滿爪。誠憂恐悲傷。無所告愬。以至此也。自古賢人才士。秉志遵分。被謗議不能自明者。僅以百數。故有無兄盜嫂。娶孤女云撾婦翁者。然賴當世豪傑。分明辯別。卒光史籍。管仲遇盜。升爲功臣。匡章被不孝之名。孟子禮之。今已無古人之實爲而有訴。欲望世人之明已。不可得也。直不疑買金以償同舍。劉寬下車。歸牛鄉人。此誠知疑似之不可辯。非口舌所能勝也。鄭詹束縛於晉。終以無死。鍾儀南音。卒獲返國。叔向囚虜。自期必免。范痤騎危。以生易死。蒯通據鼎耳。爲齊上客。張蒼韓信伏斧鑕。終取將相。鄒陽獄中以書自活。賈生斥逐。復召宣室。倪寬擯死。後至御史大夫。董仲舒劉向下獄當誅。爲漢儒宗。此皆瓌偉博辯奇壯之士。能自解脫。今以恇怯澳涊下才末伎。又嬰恐懼痼病。雖欲慷慨攘臂。自同昔人。愈疎闊矣。賢者不得志於今。必取貴於後。古之著書者。皆是也。宗元近欲務此。然力薄才劣。無異能解。雖欲秉筆覼縷。神志荒耗。前後遺忘。終不能成章。往時讀書。自以不至觝滯。今皆頑然無復省錄。每讀古人一傳。數紙以後。則再三伸卷。復觀姓氏。旋又廢失。假令萬一除刑部囚籍。復爲士列。亦不堪當世用矣。伏惟興哀於無用之地。垂德於不報之所。但以通家宗祀爲念。有可動心者。操之勿失。不敢望歸掃塋域。退託先人之廬。以盡餘齒。姑遂少北。益輕瘴癘。就婚娶。求胤嗣。有可付託。卽冥然長辭。如得甘寢。無復恨矣。書辭繁委。無以自道。然卽文以求其志。君子固得其肺肝焉。無任懇戀之至。不宣。

與蕭翰林俛書

思謙兄足下。昨祁縣王師範過永州。爲僕言。得張左司書。道思謙蹇然有當官之心。乃誠助太平者也。僕聞之喜甚。然微王生之說。僕豈不素知耶。所喜者。耳與心叶。果於不謬焉耳。僕不幸。嚮者進當臲卼不安之勢。平居閉門。口舌無數。況又有久與游者。乃岌岌而操其閒。其求進而退者。皆聚爲仇怨。造作粉飾。蔓延益肆。非的然昭晰。自斷於內。則孰能了僕於冥冥之閒哉。然僕當時年三十三。甚少。自御史裏行。得禮部員外郎。超取顯美。欲免世之求進者怪怒媢嫉。其可得乎。凡人皆欲自達。僕先得顯處。才不能踰同列。名不能壓當世。世之怒僕宜也。與罪人交十年。官又以是進。辱在附會。聖朝弘大。貶黜甚

薄。不能塞衆人之怒。謗語轉移。囂囂嗷嗷。漸成怪民。飾智求仕者。更言僕以悅仇人之心。目爲新奇。務相喜可。自以速援引之路。而僕輩坐益困辱。萬罪橫生。不知其端。伏自思念。過大咎甚。乃以致此。悲夫。人生少得六七十者。今已三十七矣。長來覺日月益促。歲歲更甚。大都不過數十寒暑。則無此身矣。是非榮辱。又何足道。云云不已。秖益爲罪。兄知之。勿爲他人言也。居蠻夷中久。慣習炎毒。昏眊重腳。意以爲常。忽遇北風晨起。薄寒中體。則肌革慘懍。毛髮蕭條。瞿然注視。怵惕以爲異候。意緒殆非中國人。楚越閒聲音特異。鴃舌啅譟。今聽之。怡然不怪。已與爲類矣。家生小童。皆自然嘵嘵。晝夜滿耳。聞北人言。則啼呼走匿。雖病夫。亦怛然駭之。出門見適州閭市井者。其十有八九杖而後興。自料居此。尙復幾何。豈可更不知止。言說長短。重爲一世非笑哉。讀周易困卦。至有言不信。尙口乃窮也。往復益喜曰。嗟乎。余雖家置一喙。以自稱道。詬益甚耳。用是更樂瘖默。思與木石爲徒。不復致意。今天子興教化。定邪正。海內皆欣欣怡愉。而僕與四五子者。獨淪陷如此。豈非命歟。命乃天也。非云云者所制。余又何恨。獨喜思謙之徒。遭時言道。道之行。物得其利。僕誠有罪。然豈不在一物之數耶。身被之目覩之足矣。何必攘袂用力。而矜自我出耶。果矜之。又非道也。事誠如此。然居理平之世。終身爲頑人之類。猶有少恥。未能盡忘。儻因賊平慶賞之際。得以見白。使受天澤餘潤。雖朽枿敗腐。不能生植。猶足蒸出芝菌。以爲瑞物。一釋廢錮。移數縣之地。則世必曰。罪稍解矣。然後收召魂魄。置土一鄽。爲耕甿。朝夕詞謠。使成文章。庶木鐸者采取。獻之法宮。增聖唐大雅之什。雖不得位。亦不虛爲太平之人矣。此在望外。然終欲爲兄一言焉。宗元再拜。

與韓愈論史官書

正月二十一日。某頓首。十八丈退之侍者。前獲書言史事。云具與劉秀才書。及今乃見書藁。私心甚不喜。與退之往年言史事甚大謬。若書中言。退之不宜一日在館下。安有探宰相意。以爲苟以史榮之。一韓退之耶。若果爾。退之豈宜虛受宰相榮己。而冒居館下。近密地。食奉養。役使掌故。利紙筆爲私書。取以爲紀錄者。有刑禍。避不肯就。尤非也。史以名爲褒貶。猶臺府。美食安坐。行呼唱於朝廷。而已耶。在御史猶爾。設使退之爲宰相。生殺出入升黜天下士。其敵益衆。則又將揚揚入政事堂。美食安坐。行呼唱於內庭外衢。而已耶。何以異不爲史而榮。其號利其祿者。

也。又言不有人禍。則有天刑。若以罪夫前古之爲史者。然亦甚惑。凡居其位。思直其道。道苟直。雖死不可回也。如回之。莫若亟去其位。孔子之困於魯衛陳蔡宋齊楚者。其時暗。諸侯不能以也。其不遇而死。不以作春秋故也。當其時。雖不作春秋。孔子猶不遇而死也。若周公史佚。雖紀言書事。猶遇且顯也。又不得以春秋爲孔子累。范曄悖亂。雖不爲史。其族亦赤。司馬遷觸天子喜怒。班固不檢下。崔浩沽其直。以鬬暴虐。皆非中道。左邱明以疾盲。出於不幸。子夏不爲史亦盲。不可以是爲戒。其餘皆不出此。是退之宜守中道。不忘其直。無以他事自恐。退之之恐。唯在不直。不得中道。刑禍非所恐也。凡言二百年文武士多。有誠如此者。今退之曰。我一人也。何能明。則同職者。又所云若是。後來繼今者。又所云若是。人人皆曰。我一人。則卒誰能紀傳之耶。如退之但以所聞知。孜孜不敢怠。同職者。後來繼今者。亦各以所聞知。孜孜不敢怠。則庶幾不墜。使卒有明也。不然。徒信人口語。每每異辭。日以滋久。則所云磊磊軒天地者。決未必不沈沒。且亂雜無可攷。非有志者所忍恣也。果有志。豈當待人督責迫蹙。然後爲官守耶。又凡鬼神事。眇茫荒惑。無可準。明者所不道。退之之智。而猶懼於此。今學如退之。辭如退之。好言論如退之。慷慨自爲正直。行行焉如退之。猶所云如是。則唐之史述。其卒無可託乎。明天子賢宰相。得史才如此。而又不果。甚可痛哉。退之宜更思。可爲速爲。果卒以爲恐懼不敢。則一日可引去。又何以云行且謀也。今當爲而不爲。又誘館中他人及後生者。此大惑已。不勉已而欲勉人。難矣哉。

答韋中立論師道書

二十一日。宗元白。辱書云。欲相師。僕道不篤。業甚淺近。環顧其中。未見可師者。雖嘗好言論爲文章。甚不自是也。不意吾子自京師來。蠻夷閒。乃幸見取。僕自卜。固無取。假令有取。亦不敢爲人師。爲衆人師。且不敢。況敢爲吾子師乎。孟子稱人之患。在好爲人師。由魏晉氏以下。人益不事師。今之世。不聞有師。有輒譁笑之。以爲狂人。獨韓愈奮不顧流俗。犯笑侮。收召後學。作師說。因抗顏而爲師。世果羣怪聚罵。指目牽引。而增與爲言詞。愈以是得狂名。居長安。炊不暇熟。又挈挈而東。如是者數矣。屈子賦曰。邑犬羣吠。吠所怪也。僕往聞。庸蜀之南。恆雨少日。日出則犬吠。予以爲過言。前六七年。僕來南。二年冬。幸大雪。踰嶺被南越中數州。數州之犬。皆蒼黃吠噬狂走者。累日。至無雪乃已。然後始信前所聞者。今韓愈既自以爲蜀之日。而吾子又欲使吾爲越之雪。不以病乎。非獨見病。亦以病吾子。然雪與日豈有過哉。願吠者犬耳。度今天下不吠者幾人。而誰敢銜怪於羣目。以召鬧取怒乎。僕自謫過以來。益少志慮。居

南中九年。增脚氣病。漸不喜鬧。豈可使呶呶者。早暮咈吾耳。騷吾心。則固僵仆煩憒。愈不可過矣。平居望外遭齒舌不少。獨欠爲人師耳。抑又聞之。古者重冠禮。將以責成人之道。是聖人所尤用心者也。數百年來。人不復行。近有孫昌胤者。獨發憤行之。既成禮。明日造朝。至外廷。薦笏言於卿士曰。某子冠畢。應之者咸憮然。京兆尹鄭叔則。怫然曳笏卻立曰。何預我耶。廷中皆大笑。天下不以非鄭尹。而快孫子。何哉。獨爲所不爲也。今之命師者大類此。吾子行厚而辭深。凡所作。皆恢恢然有古人形貌。雖僕敢爲師。亦何所增加也。假而以僕年先吾子。聞道著書之日不後。誠欲往來言所聞。則僕固願悉陳中所得者。吾子苟自擇之。取某事。去某事。則可矣。若定是非以教吾子。僕材不足。而又畏前所陳者。其爲不敢也決矣。吾子前所欲見吾文。既悉以陳之。非以耀明於子。聊欲以觀子氣色。誠好惡何如也。今書來。言者既大過。吾子誠非佞譽誣諛之徒。直見愛甚。故然耳。始吾幼且少。爲文章。以辭爲工。及長乃知文者以明道。是固不苟爲炳炳烺烺。務采色。夸聲音。而以爲能也。凡吾所陳。皆自謂近道。而不知道之果近乎遠乎。吾子好道而可吾文。或者其於道不遠矣。故吾每爲文章。未嘗敢以輕心掉之。懼其剽而不留也。未嘗敢以怠心易之。懼其弛而不嚴也。未嘗敢以昏氣出之。懼其昧沒而雜也。未嘗敢以矜氣作之。懼其偃蹇而驕也。抑之欲其奧。揚之欲其明。疎之欲其通。廉之欲其節。激而發之。欲其清。固而存之。欲其重。此吾所以羽翼夫道也。本之書。以求其質。本之詩。以求其恆。本之禮。以求其宜。本之春秋。以求其斷。本之易。以求其動。此吾所以取道之原也。參之穀梁氏。以厲其氣。參之孟荀。以暢其支。參之莊老。以肆其端。參之國語。以博其趣。參之離騷。以致其幽。參之太史。以著其潔。此吾所以旁推交通。而以爲之文也。凡若此者。果是耶非耶。有取乎。抑其無取乎。吾子幸觀焉擇焉。有餘以告焉。苟亟來以廣是道。子不有得焉。則我得矣。又何以師云爾哉。取其實而去其名。無招越蜀吠怪。而爲外庭所笑則幸矣。宗元復白。

唐宋八家文卷七　終

唐宋八家文卷八

柳子厚　宗元　著

送澥序

人咸言。吾宗宜碩大。有積德焉。在高宗時。並居尚書省。二十二人。遭諸武。以故衰耗。武氏敗。猶不能興。爲尚書吏者。閒十數歲乃一人。永貞年。吾與族兄登。並爲禮部屬。吾黜。而季父公綽。更爲刑部郎。則加稠焉。又觀宗中爲文雅者。炳炳然以十數。仁義固其素也。意者復興乎。自吾爲僇人。居南鄉。後之穎然出者。吾不見之也。其在道路。幸而過余者。獨得澥。澥質厚不諂。敦朴有裕。若器焉必隆然大。而後可以有受。擇所以入之者而已矣。其文蓄積甚富。好慕甚正。若牆焉必基之廣。而後可以有蔽。擇其所以出之者而已矣。勤聖人之道。輔以孝悌。復嚮時之美。吾於澥焉是望。汝往哉。見諸宗人。爲我謝而勉焉。無若大山之麓止。而不得升也。其唯川之不已乎。吾去子。終老於夷矣。

送婁圖南秀才遊淮南將入道序

僕未冠。求進士。聞婁君名甚熟。其所爲歌詩。傳詠都中。通數經及羣書。當時爲文章。若崔比部于衞尉。相與稱其文。衆皆曰。納言曾孫也。而又有是。咸推讓爲先登。後十餘年。僕自尚書郎謫來零陵。覯婁君猶爲白衣。居無室宇。出無僮御。僕深異而訊之。乃曰。今夫取科名者。交貴勢。倚親戚。合則揷羽翮。生風濤。沛焉而有餘。吾無有也。不則饜飲食。馳堅良。以歡於朋徒。相貿爲資。相易爲名。有不諾者。以氣排之。吾無有也。不則多筋力。善造請。朝夕屈折於恆人之前。走高門。邀大車。矯笑而僞言。卑陬而姁媮。偸一旦之容。以售其伎。吾無有也。自度。卒不能堪其勞。故舍之而遊。逾湖江。出豫章。至南海。復由桂而下也。少好道士言。餌藥爲壽。未盡其術。故行且求之。僕聞而愈疑。往時觀得進士者。不必若婁君之言。又不能類婁君之文學。又無納言之大德以爲之祖。無比部衞尉以爲之知。而升名者百數十人。今婁君非

不足也。顧不樂而遁耳。因爲余留三年。他日又曰。吾所以求於心者未克。今其行也。余既異其遁於名。而又德其久留於我也。故爲之言。夫君子之出。以行道也。其處。以獨善其身也。今天下理平。主上亟下求士之詔。婁君智可以任職用事。文可以宣風歌德。行於世。必有令其道而進薦之者。遽而爲處士。吾以爲非時。將曰老而就休耶。則甚少且銳。贏而自養耶。則甚碩且武。問其所以處。咸無名焉。若苟焉以圖壽爲道。又非吾之所謂道也。夫形軀之寓於土。非吾能私之。幸而好求堯舜孔子之志。唯恐不得。幸而遇行堯舜孔子之道。唯恐不慊。若是而壽可也。求之而得。行之而慊。雖天其誰悲。今將以呼噓爲食。咀嚼爲神。無事爲閑。不死爲生。則深山之木石。大澤之龜蛇。皆老而久。其於道何如也。僕嘗學於儒。持之不得。陷於是。以出則窮。以處則乖。其不宜言道也審矣。以吾子見私於僕。而又重其去。故竊言。而書之。而密授焉。

同吳武陵贈李睦州詩序

潤之盜錡。竊貨財。聚徒黨。爲反謀十年。今天子中興。守不爲己用者。誣陷去之。睦州由是得罪。天子之衛不得搖手。辭卒致具。有閒盜遂作。而廷臣猶用其文。斥睦州南海上。既上道。盜以徒百人。遮於楚越之郊。戰且走。乃得完。爲左官吏。無幾。盜就禽。斬之於社垣之外。論者謂宜還睦州。以明其誣。既更大赦。始移永州。去長安尚四千里。睦州未嘗自言。吳武陵剛健士也。懷不能忍。於是踴躍其誠。鏗鏘其聲。出而爲之詩。然後慊於內。余固知睦州之道也熟。銜匿而未發。且聞吳之先焉者。激於心。若鐘鼓之考。不知聲之發也。遂繫之而重以序。

送薛存義之任序

河東薛存義將行。柳子載肉於俎。崇酒於觴。追而送之江滸。飲食之。且告曰。凡吏於土者。若知其職乎。蓋民之役。非以役民而已也。凡民之食於土者。出其什一。傭乎吏。使司平於我也。今我受其直。怠其事者。天下皆然。豈唯怠之。又從而盜之。向使傭一夫於家。受若直。怠若事。又盜若貨器。則必甚怒而黜罰之矣。以今天下多類此。而民莫敢肆其怒。而黜罰者。得不恐而畏乎。存義假令零陵二年矣。蚤作而夜思。勤力而勞心。訟者平。賦者均。老弱無懷。詐暴憎。

其爲不虛取直也的矣。其知恐而畏也審矣。吾賤且辱。不得與考績幽明之說。於其往也。故賞以酒肉。而重之以辭。

愚溪詩序

灌水之陽有溪焉。東流入於瀟水。或曰冉氏嘗居也。故姓是溪曰冉溪。或曰可以染也。名之以其能。故謂之染溪。余以愚觸罪。謫瀟水上。愛是溪。入二三里。得其尤絕者。家焉。古有愚公谷。今余家是溪。而名莫能定。土之居者。猶斷斷然。不可以不更也。故更之爲愚溪。愚溪之上。買小邱。爲愚邱。自愚邱東北行六十步。得泉焉。又買居之。爲愚泉。愚泉凡六穴。皆出山下平地。蓋上出也。合流屈曲而南。爲愚溝。遂負土累石。塞其隘。爲愚池。愚池之東。爲愚堂。其南爲亭。曰愚亭。池之中爲愚島。嘉木異石錯置。皆山水之奇者。溪獨見辱於愚。何哉。蓋其流甚下。不可以灌溉。又峻急多坻石。大舟不可入也。幽邃淺狹。蛟龍不屑。不能興雲雨。無以利世。而適類於余。然則雖辱而愚之可也。窮武子邦無道則愚。智而爲愚者也。顏子終日不違。如愚。睿而爲愚者也。皆不得爲眞愚。今余遭有道。而違於理。悖於事。故凡爲愚者。莫我若也。夫然則天下莫能爭是溪。余得專而名焉。溪雖莫利於世。而善鑒萬類。清瑩秀徹。鏘鳴金石。能使愚者喜笑眷慕。樂而不能去也。余雖不合於俗。亦頗以文墨自慰。漱滌萬物。牢籠百態。而無所避之。以愚辭歌愚溪。則茫然而不違。昏然而同歸。超鴻蒙。混希夷。寂寥而莫我知也。於是作八愚詩。紀於溪石上。

飲序

買小邱。一日鋤理。二日洗滌。遂置酒溪石上。嚮之爲記。所謂牛馬之飲者。離坐其背。實觴而流之。接取以飲。乃置監史而令曰。當飲者。舉籌之十寸者三。逆而投之。能不洄於泝。不止於坻。不沈於底者。過不飲。而洄而止而沈者。飲如籌之數。既或投之。則旋眩滑汨。若舞若躍。速者遲者。去者住者。衆皆據石注視。歡忭以助其勢。突然而逝。乃得無事。於是或一飲。或再飲。客有婁生。圖南者。其投之也。一洄一止。一沈。獨三飲。衆乃大笑。讙甚。余病痟。不能食酒。至是醉焉。遂損益其令。以窮日夜。而不知歸。吾聞昔之飲酒者。有揖讓酬酢。百拜以爲禮者。有叫號屢舞。如沸如羹。以爲極者。有裸裎袒裼。以爲達者。有資絲竹金石之樂。以爲和者。有以促數糺逖而爲密者。今則舉異。是焉。故捨百拜而禮。無叫號而極。不袒裼而

達。非金石而和。去糺逖而密。簡而同。肆而恭。衎衎而從容。於以合山水之樂。成君子之心。宜也。作序飲以貽後之人。

陪永州崔使君遊讌南池序

零陵城南。環以羣山。延以林麓。其崖谷之委會。則泓然爲池。灣然爲溪。其上多楓柟竹箭哀鳴之禽。其下多芡芰蒲蕖騰波之魚。韜涵太虛。澹灔里閭。誠游觀之佳麗者已。崔公既來。其政宅以肆。其風和以廉。既樂其人。又樂其身。於暮之春。徵賢合姻。登舟於茲水之津。連山倒垂。萬象在下。浮空泛景。蕩若無外。橫碧落以中貫。陵太虛而徑度。羽觴飛翔。匏竹激越。熙然而歌。婆然而舞。持頤而笑。瞪目而倨。不知日之將暮。則於向之物者。可謂無負矣。昔之人。知樂之不可常。會之不可必也。當歡而戚者有之。況公之理。行宜去受厚錫。而席之賢者。率皆在官蒙澤。方將脫鱗介生羽翮。夫豈趦趄湘中。爲顦顇客耶。余既委廢於世。恆得與是山水爲伍。而悼茲會不可再也。故爲文志之。

嶺南節度饗軍堂記

唐制。嶺南爲五府。府部州以十數。其大小之戎。號令之用。則聽於節度使焉。其外大海多蠻夷。由流求訶陵。西抵大夏康居。環水而國以百數。則統於押蕃舶使焉。內之幅員萬里。以執秩拱稽。時聽教命。外之羈屬數萬里。以譯言贄寶。歲帥貢職。合二使之重。以治於廣州。故賓軍之事。宜無與校大。且賓有牲牢饔餼。嘉樂好禮。以同遠合疏。軍有犒饋宴饗。勞旋勤歸。以羣力一心。於是治也。閈閎階序。不可與他邦類。必厚棟大梁。夷庭高門。然後可以上充於揖讓。下周於步武。今御史大夫扶風公。廉廣州。且專二使。增德以來遠人。申威以修戎政。大饗宴合樂。從其豐盈。先是爲堂於治城西北陬。其位。公北向。賓衆南向。奏部伎於其西。視泉池於其東。隅奧庳側。庭廡下陋。日未及晡。則赫炎當目。汗眩更起。而禮莫克終。故凡大宴饗。大賓旅。則寓於外壘。儀形不稱。公於是始斥其制。爲堂南面。橫八楹。從十楹。嚮之宴位。化爲東序。西又如之。其外更衣之次。膳食之宇。列觀以游目。偶亭以展聲。彌望極顧。莫究其往。泉池之舊。增濬益植。以暇以息。如在林壑。問工焉取。則師輿是供。問役焉取。則蠻隸是徵。問材焉取。則隙宇是遷。或益其闕。伐山浮海。農賈拱手。張目視具。乃十月甲子克成。公命饗於新堂。幢牙茸纛。金節析羽。旂旗旟旞。咸飾於下。鼓以鼗晉。金以鐸鐃。公與監軍使肅上賓。延羣僚。將校士吏咸次於位。卉裳罽衣。胡

夷蜑蠻。睢盱就列者。千人以上。鉶鼎體節。燔炮胾炙。羽鱗薶互之物。沈泛醍盎之齊。均飫於卒士。興王之舞。服夷之伎。揳擊吹鼓之音。飛騰幻怪之容。寰觀於遠邇。禮成樂遍。以敍而賀。且曰。是邦臨護之大。五人合之。非是堂之制。不可以備物。非公之德。不可以容衆。曠於往初。肇自今茲。大和有人。以觀遠方。古之戎政。其曷用如此。華元名大夫也。殺羊而御者不及。霍去病。良將軍也。餘肉而士有饑色。猶克稱能。以垂到今。矧茲具美。其道不廢。願刻於金石。以永示後祀。遂相與來告。且乞辭。其讓不獲。乃刻於茲石。

興州江運記

御史大夫嚴公。牧於梁五年。嗣天子用周漢進律增秩之典。以親諸侯。謂公有功德理行。就加禮部尚書。是年四月。使中謁者來錫公命。賓僚吏屬。將校卒士。黧老童孺。塡溢公門。舞躍歡呼。願建碑紀德垂億萬祀。公固不許。而相與怨咨。遑遑如不飲食。於是西鄙之人。密以刋山導江之事。願刻巖石。曰。維梁之西。其蔽曰某山。其守曰興州。興州之西爲戎居。歲備亭障。實以精卒。以道之險隘。兵困於食。守用不固。公患之曰。吾嘗爲興州。凡其土人之故。吾能知之。自長舉北至於青泥山。又西抵於成州。過栗亭川。踰寶井堡。崖谷峻隘。十里百折。負重而上。若蹈利刃。盛秋水潦。窮冬雨雪。深泥積水。相輔爲害。顚踣騰藉。血流棧道。糗糧芻藁。塡谷委山。牛馬羣畜。相藉物故。餫夫畢力。守卒延頸。嗷嗷之聲。其可哀也。若是者。綿三百里而餘。自長舉而西。可以導江而下。二百里而至。昔之人莫得知也。吾受命於君而育斯人。其可已乎。乃出軍府之幣。以備器用。卽山僦功。由是轉巨石。仆大木。焚以炎火。沃以食醯。摧其堅剛。化爲灰燼。畚鍤之下。易甚朽壤。乃闢乃墾。乃宣乃理。隨山之曲直。以休人力。順地之高下。以殺湍悍。其功既成。咸如其素。於是決去壅土。疏導江濤。萬夫呼抃。莫不如志。雷騰雲奔。百里一瞬。既會既遠。淡爲安流。烝徒謳歌。枕臥而至。戍人無虞。專力待寇。惟我公之功。疇可侔也。而無以酬德。致其大願。又不可得命。矧公之始來。屬當惡歲。府庾甚虛。器備甚殫。飢饉昏札。死徙充路。賴公節用愛人。克安而生。老窮有養。幼乳以遂。不問不使。咸得其志。公命鼓鑄。庫有利兵。公命屯田。師有餘糧。選徒練旅。有衆孔武。平刑議獄。有衆不黷。增石爲防。膏我稻粱。歲無凶菑。家有積倉。傳館是飾。旅忘其歸。杠梁已成。人不履危。若是者。皆以戎隙。帥士而爲之。不出四人之力。而百役已就。且我西鄙之職官。故不能具舉。惟公和恆直方。廉毅信讓。敦尙儒學。抑損貴位。率忠與仁。以厚其誠。有可以安利於人者。行之堅勇。不俟終日。其興

功濟物。宜如此其大也。昔之爲國者。惟水事爲重。故有障大澤。勤其官。而受封國者矣。西門遺利。史起興歎。白圭壑鄰。孟子不與。公能夷險休勞。以惠萬代。其功烈尤章章焉。不可蓋也。是用假辭謁工。勒而存之。用永憲於後祀。

四門助教廳壁記

周人置虞庠於四郊。以養國老。教胄子。祭統曰。天子設四學。蓋其制也。易傳太初篇曰。天子旦入東學。晝入南學。夕入西學。暮入北學。蔡邕引之以定明堂之位焉。大戴禮保傅篇曰。帝入東學以貴仁。入南學以貴德。入西學以貴義。入北學以尊爵。賈生述之。以明太子之教焉。故曰。爲大教之宮而四學具焉。參明堂之政。原大教之極。其建置之道弘也。後魏太和中。立學於四門。置助教二十人。隋氏始隸於國子。而降置五人。皇朝始合於太學。又省至三人。員位彌簡。其官尤難。非儒之通者不列也。四門學之制。掌國之上士。中士。下士凡三等。侯伯子男凡四等。其子孫之爲胄子者。及庶士庶人之子爲俊士者。使執其業而居其次。就師儒之官而考正焉。助教之職。佐博士以掌鼓篋榎楚之政令。分其人而教育之。其有通經力學者。必於歲之杪。升於禮部。聽簡試焉。課生徒之進退。必酌於中道。非博雅莊敬之流。固不得臨於是。故有去而升於朝者。賀祕書由是爲博士。歸散騎由是爲左拾遺。舊制以拾遺爲八品清官。故必以名實者居於其位。貞元中。王化既成。經籍少閒。有司命太學之官。頗以爲易。專名譽好文章者。咸恥爲學官。至是河東柳立。始以前進士求署茲職。天水武儒衡。閩中歐陽詹又繼之。是歲爲四門助教。凡三人。皆文士。京師以爲異。余與立同祖。與武功同升於禮部。與歐陽生同志於文。四門助教署。未嘗紀前人名氏。余故爲之記。見由夫三子者始。

道州毀鼻亭神記

鼻亭神。象祠也。不知何自始立。因而勿除。完而恆新。相傳且千歲。元和九年。河東薛公。由刑部郎中刺道州。除穢革邪。敷和於下。州之罷人。去亂即治。變呻爲謠。若痿而起。若矇而瞭。騰踴相視。讙言克順。既底於理。公乃考民風。披地圖。得是祠。駭曰。象之道。以爲子則傲。以爲弟則賊。君有鼻而天子之吏實理。以惡德而專世祀。殆非化吾人之意哉。命亟去之。於是撤其屋。墟其地。沈其主於江。公又懼楚俗之尚鬼而難諭也。乃徧告於人曰。吾聞。鬼神不歆非類。又曰。淫祀無福。凡天子命刺史於下。非以專土疆。督

貨賄而已也。蓋將教孝悌。去奇邪。俾斯人敦忠睦友。祗肅信讓。以順於道。吾之斥是祠也。以明教也。苟離於正。雖千載之違。吾得而更之。況今茲乎。苟有不善。雖異代之鬼。吾得而攘之。況斯人乎。州民既諭。相與歌曰。我有耇老。公燠其肌。我有病癃。公起其羸。髫童之嚚。公實智之。鰥孤孔艱。公實遂之。孰尊惡德。遠矣自古。孰羨淫昏。俾我斯瞽。千歲之冥。公闢其戶。我子洎孫。延世有慕。宗元時謫永州。邇公之邦。聞其歌詩。以爲古道罕用。賴公而存。斥一祠而二教興焉。明罰行於鬼神。愷悌達於蠻夷。不惟禁淫祠黜非類而已。願爲記以刻山石。俾知教之首。

零陵郡復乳穴記

石鍾乳。餌之最良者也。楚越之山多產焉。於連於韶者。獨名於世。連之人。告盡焉者五載矣。以貢則買諸他部。今刺史崔公至。逾月。穴人來。以乳復告。邦人悅是祥也。雜然謠曰。甿之熙熙。崔公之來。公化所徹。土石蒙烈。以爲不信。起視乳穴。穴人笑之曰。是惡知所謂祥耶。嚮吾以刺史之貪戾嗜利。徒吾役而不吾貨也。吾是以病而紿焉。今吾刺史。令明而志潔。先賴而後力。欺誣屏息。信順休洽。吾以是誠告焉。且夫乳穴。必在深山窮林。冰雪之所儲。豺虎之所廬。由而入者。觸昏霧。扞龍蛇。束火以知其物。縻繩以志其返。其勤若是。出又不得吾直。吾用是安得不以盡告。今令人而乃誠。吾告故也。何祥之爲。吾聞之曰。謠者之祥也。乃其所爲怪者也。笑者之非祥也。乃其所謂眞祥者也。君子之祥也。以政不以怪。誠乎物。而信乎道。人樂用命。熙熙然以效其有。斯其爲政也。而獨非祥也歟。

零陵三亭記

邑之有觀游。或者以爲非政。是大不然。夫氣煩則慮亂。視壅則志滯。君子必有游息之物。高明之具。使之清寧平夷。恆若有餘。然後理達而事成。零陵縣東有山麓。泉出石中。沮洳汚塗。羣畜食焉。牆藩以蔽之。爲縣者積數十人。莫知發視。河東薛存義。以吏能聞荊楚閒。潭部擧之。假湘源令。會零陵政尨賦擾。民訟於牧。推能濟弊。來蒞茲邑。遁逃復還。愁痛笑歌。逋租匿役。期月辨理。宿蠹藏奸。披露首服。民既卒稅。相與歡歸道途。迎賀里閭。門不施胥吏之席。耳不聞鼛鼓之召。雞豚糗醑。得及宗族。州睦尙焉。旁邑倣焉。然而未嘗以劇自撓。山水鳥魚之樂。澹然自若也。乃發牆藩。驅羣畜。決疏沮洳。搜剔山麓。萬石如林。積坳爲池。爰有嘉木美卉。垂水蒙峰。瓏瓏蕭條。清風自生。翠煙自畱。不植而遂。魚樂廣閑。鳥慕靜深。

別孕巢穴。沈浮嘯萃。不蕃而富。伐木墜江。流於邑門。陶土以塡。亦在署側。人無勞力。土得以利。乃作三亭。陟降晦明。高者冠山顚。下者俯清池。更衣膳饗。列置備具。賓以燕好。旅以館舍。高明游息之道。具於是邑。由薛爲首。在昔裨諶謀野而獲。蓍子彈琴而理。亂慮滯志。無所容入。則夫觀游者。果爲政之具歟。薛之志其果出於是歟。及其弊也。則以玩替政。以荒去理。使繼是者。咸有薛之志。則邑民之福。其可既乎。余愛其始而欲久其道。乃撰其事以書於石。薛拜曰。吾志也。遂刻之。

永州龍興寺東邱記

遊之適大率有二。曠如也。奧如也。如斯而已。其地之凌阻峭出幽鬱。寥廓悠長。則於曠宜。抵邱垤。伏灌莽。迫遽迴合。則於奧宜。因其曠。雖增以崇臺延閣。迴環日星。臨瞰風雨。不可病其敞也。因其奧。雖增以邃也。今所謂東邱者。奧之宜者也。其始龕之外棄地。今得而合焉。以屬於堂之北垂。凡坳窪塉岸之狀。無廢其故。屏以密竹。聯以曲梁。桂檜松杉楩柟之植。幾三百本。嘉卉美石。又經緯之。俛入綠縟。幽蔭蒼蔚。步武錯迕。不知所出。溫風不爍。清風自至。水亭陋室。曲有奧趣。然而至焉者。往往以邃爲病。噫。龍興。永之佳寺也。登高殿。可以望南極。闢大門。可以瞰湘流。若是其曠也。而於是小邱。又將披而攘之。則吾所謂游有二者。無乃闕焉而喪其地之宜乎。邱之幽幽。可以處休。邱之窅窅。可以觀妙。滌暑遁去。茲邱之下。太和不遷。茲邱之巔。奧乎茲邱。孰從我游。余無召公之德。懼剪伐之及也。故書以祈後君子。

永州新堂記

將爲宵谷巖澗池於郊邑之中。則必輦山石。溝澗壑。凌絕險阻。疲極人力。乃可以有爲也。然而求天作地生之狀。咸無得焉。逸其人。因其地。全其天。昔之所難。今於是乎在。永州實惟九嶷之麓。其始度土於土塗。蛇虺之所蟠。狸鼠之所游。茂樹惡木。嘉蔵毒卉。亂雜而爭植。號爲穢墟。韋公之來。既逾月。理甚無事。望其地。且異之。始命芟其蕪。行其塗。積之邱如。蠲之瀏如。既焚既釃。奇勢迭出。清濁辨質。美惡異位。視其植。則清秀敷舒。視其蓄。則溶漾紆餘。怪石森然。周於四隅。或列或跪。或立或仆。竅穴透邃。堆阜突怒。乃作棟宇。以爲觀游。凡其物類。無不合形輔勢。效伎於堂廡之下。外之連山高原。林麓之崖。閒厠隱顯。邇延野綠。遠混天碧。咸會於譙門之內。已乃延客入觀。

繼以宴娛。或贊且賀曰。見公之作。知公之志。公之因土而得勝。豈不欲因俗以成化。公之釋惡而取美。豈不欲除殘而佑仁。公之蠲濁而流清。豈不欲廢貪而立廉。公之居高以望遠。豈不欲家撫而戶曉。夫然則是堂也。豈獨草木土石。水泉之適歟。山原林麓之觀歟。將使繼公之理者。視其細。知其大也。宗元請志諸石。措諸壁。編以爲二千石楷法。

桂州訾家洲亭記

大凡以觀游名於代者。不過視於一方。其或傍達左右。則以爲特異。至若不騖遠。不陵危。環山洄江。四出如一。夸奇競秀。咸不相讓。徧行天下者。唯是得之。桂州多靈山。發地峭堅。林立四野。署之左曰灕水。水之中曰訾氏之洲。凡嶠南之山川。達於海上。於是畢出。而古今莫能知。元和十二年。御史中丞裴公來涖茲邦。都督二十七州諸軍州事。盜遁姦革。德惠敷施。期年政成。而當天子平淮夷。定河朔。告於諸侯。公既施慶於下。乃合僚吏。登茲以嬉。觀望攸長。悼前之遺於是。厚貨居貶。移於閒壤。伐惡木。剃奧草。前指後畫。心舒目行。忽焉若飄浮上騰。以臨雲氣。萬山面內。重江東險。聯嵐含輝。施視具宜。常所未覩。倏然互見。以爲飛舞奔走。與遊者偕來。乃經工庀材。考極相方。南爲燕亭。延宇垂阿。步簷更衣。周若一舍。北有崇軒。以臨千里。左浮飛閣。右列閒館。比舟爲梁。與波昇降。苞灘山。含龍宮。昔之所大。蓄在亭內。日出扶桑。雲飛蒼梧。海霞島霧。來助游物。其隙則抗月檻於廻溪。出風榭於簟中。晝極其美。又益以夜。列星下布。顥氣迴合。邃然萬變。若與安期羨門。接於物外。則凡名觀游於天下者。有不屈伏退讓。以推高是亭者乎。既成以燕。歡極而賀。咸曰。昔之遺跡。勝概者。必於深山窮谷。人罕能至。而好事者。後得以爲己功。未有直治城。挾闤闠。車輿步騎。朝過夕視。訖千百年。莫或異顧。一旦得之。遂出於他邦。雖博物辯口。莫能舉其上者。然則人之心目。其果有遼絕特殊。而不可至者耶。蓋非桂山之靈。不足以瓌觀。非是洲之曠。不足以極視。非公之鑒。不能以獨得。噫。造物者之設。是久矣。而盡之於今。余其可以無籍乎。

游黃溪記

北之晉。西適豳。東極吳。南至楚越之交。其閒名山水而州者。以百數。永最善。環永之治百里。北至於湘。西至於湘之源。南至於瀧泉。東至於黃溪。東南最善。黃溪拒州治七十里。由東屯而行六百步。至黃神祠。祠之上。兩山牆立。丹碧之華葉駢植。與山升降。其缺者爲崖峭

巖窪。水之中。皆小石平布。黃神之上。揭ㇾ水八十步。至二初潭一。最奇麗。殆不ㇾ可ㇾ狀。其略若ㇾ劑二大甕一。側立千尺。溪水即焉。黛蓄膏渟。來若二白虹一。沈沈無ㇾ聲。有二魚數百尾一。方來會二石下一。南去又行百步。至二第二潭一。石皆巍然臨二峻流一。若二頹頷斷齶一。其下大石離列。可二坐飲食一。有ㇾ鳥赤首烏翼。大如ㇾ鵲。方東嚮立。自ㇾ是又南數里。地皆一狀。樹益壯。石益瘦。水鳴皆鏘然。又南一里。至二大冥之川一。山舒水緩。有二土田一。始黃神爲ㇾ人時。居二其地一。傳者曰。黃神王姓。莽之世也。莽既死。神更二號黃氏一。逃來。擇二其深峭者一潛焉。始莽嘗曰。余黃虞之後也。故號二其女一曰二黃皇室主一。黃與ㇾ王聲相邇。而又有ㇾ本。其所二以傳言一者益驗。神既居。是民咸安焉。以爲有ㇾ道。死乃俎二豆之一。爲立ㇾ祠。後稍徙近二乎民一。今祠在二山陰溪水上一。元和八年五月十六日。既歸爲ㇾ記。以啓二後之好ㇾ游者一。

唐宋八家文卷八　終

唐宋八家文卷九

柳子厚宗元著

始得二西山一宴游記

自下余爲二僇人一。居是州。恆惴惴。其隙也。則施施而行。漫漫而游。日與二其徒一。上二高山一。入二深林一。窮二迴溪一。幽泉怪石。無遠不ㇾ到。到則披ㇾ草而坐。傾ㇾ壺而醉。醉則更相枕以臥。意有ㇾ所ㇾ極。夢亦同ㇾ趣。覺而起。起而歸。以爲凡是州之山有二異態一者。皆我有也。而未ㇾ始知二西山之怪特一。今年九月二十八日。因二坐法華西亭一。望二西山一。始指異ㇾ之。遂命ㇾ僕過二湘江一。緣二染溪一。斫二榛莽一。焚二茅茷一。窮二山之高一。而止。攀援而登。箕踞而遨。則凡數州之土壤。皆在二衽席之下一。其高下之勢。岈然洼然。若ㇾ垤若穴。尺寸千里。攢蹙累積。莫ㇾ得二遯隱一。縈青繚白。外與ㇾ天際。四望如一。然後知。是山之特出。不二與培塿一爲ㇾ類。悠悠乎與二灝氣一俱。而莫ㇾ得二其涯一。洋洋乎與二造物者一游。而不ㇾ知二其所一ㇾ窮。引ㇾ觴滿酌。頹然就ㇾ醉。不ㇾ知二日之入一。蒼然暮色。自ㇾ遠而至。至ㇾ無二所ㇾ見。而猶不ㇾ欲ㇾ歸。心凝形釋。與二萬化一冥合。然後知下吾嚮之未二始游一。游於是乎始上。故爲二之文一。以志。是歲元和四年也。

鈷鉧潭記

鈷鉧潭在二西山西一。其始蓋冉水自ㇾ南奔注。抵二山石一。屈折東流。其典委勢峻。盪擊益暴。齧二其涯一。故旁廣而中深。畢至ㇾ石乃止。流沫成ㇾ輪。然後徐行。其清而平者。且十畝。有ㇾ樹環焉。有ㇾ泉懸焉。其上有居者。以二予之亟游一也。一旦款門來告曰。不ㇾ勝二官租私券之委積一。既斥二山而更一ㇾ居。願以二潭上田一貿ㇾ財以緩ㇾ禍。予樂而如ㇾ其言。則崇二其臺一。延二其檻一。行二其泉於高者一。墜之潭。有ㇾ聲漼然。尤與二中秋觀一ㇾ月爲ㇾ宜。於以見二天之高一。氣之迥一。孰使二予樂一ㇾ居夷而忘二故土一者。非二茲潭一也歟。

鈷鉧潭西小邱記

得西山後八日。尋山口西北道二百步。又得鈷鉧潭西二十五步。當湍而浚者。爲魚梁。梁之上有邱焉。生竹樹。其石之突怒偃蹇。負土而出。爭爲奇狀者。殆不可數。其嶔然相累而下者。若牛馬之飲於溪。其衝然角列而上者。若熊羆之登於山。邱之小不能一畝。可以籠而有之。問其主。曰。唐氏之棄地。貨而不售。問其價。曰。止四百。余憐之。而售之。李深源。元克己。時同遊。皆大喜。出自意外。卽更取器用。剷刈穢草。伐去惡木。烈火而焚之。嘉木立。美竹露。奇石顯。由其中以望。則山之高。雲之浮。溪之流。鳥獸魚之遨遊。擧熙熙然廻巧獻伎。以效茲邱之下。枕席而臥。則淸泠之狀與目謀。瀯瀯之聲與耳謀。悠然而虛者與神謀。淵然而靜者與心謀。不匝旬而得異地者二。雖古好事之士。或未能至焉。噫。以茲邱之勝。致之灃鎬鄠杜。則貴游之士爭買者。日增千金。而愈不可得。今棄是州也。農夫漁父。過而陋之。賈四百。連歲不能售。而我與深源克己。獨喜得之。是其果有遭乎。書於石。所以賀茲邱之遭也。

至小邱西小石潭記

從小邱西行百二十步。隔篁竹。聞水聲。如鳴佩環。心樂之。伐竹取道。下見小潭。水尤淸洌。全石以爲底。近岸卷石。底以出。爲坻爲嶼。爲嵁爲巖。靑樹翠蔓。蒙絡搖綴。參差披拂。潭中魚可百許頭。皆若空遊無所依。日光下徹。影布石上。怡然不動。俶爾遠逝。往來翕忽。似與遊者相樂。潭西南而望。斗折蛇行。明滅可見。其岸勢犬牙差互。不可知其源。坐潭上。四面竹樹環合。寂寥無人。凄神寒骨。悄愴幽邃。以其境過淸。不可久居。乃記之而去。同遊者吳武陵龔古。余弟宗玄。隸而從者崔氏二小生。曰恕己。曰奉壹。

袁家渴記

由冉溪西南。水行十里。山水之可取者五。莫若鈷鉧潭。由溪口而西。陸行可取者八九。莫若西山。由朝陽巖東南。水行至蕪江。可取者三。莫若袁家渴。皆永中幽麗奇處也。楚越之閒方言。謂水之反流者爲渴。音若衣褐之褐。渴上與南館高嶂合。下與百家瀨合。其中重洲小溪。澄潭淺渚。間厠曲折。平者深黑。峻者沸白。舟行若窮。忽又無際。有小山出水中。山皆美石。上生靑叢。冬夏常蔚然。其旁多巖洞。其下多白礫。其樹多楓柟石楠楩櫧樟柚。草則蘭芷。又有異卉。類合歡而蔓生。轇轕水石。每風自四山而下。振動大木。掩苒衆草。紛紅駭綠。蓊勃香氣。衝濤旋瀨。退貯谿谷。搖颺葳蕤。與時推移。其大都如此。余無以窮其狀。永之人未嘗遊焉。余得之。不敢專也。出而傳於世。其地世主袁氏。故以名焉。

石渠記

自渴西南行不能百步。得石渠。民橋其上。有泉幽幽然。其鳴乍大乍細。渠之廣或咫尺。或倍尺。其長可十許步。其流抵大石。伏出其下。踰石而往。有石泓。菖蒲被之。靑鮮環周。又折西行。旁陷巖石下。北墮小潭。潭幅員減百步。淸深多鯈魚。又北曲行紆餘。睨若無窮。然卒入於渴。其側皆詭石怪木。奇卉美箭。可列坐而庥焉。風搖其巔。韻動崖谷。視之既靜。其聽始遠。予從州牧得之。攬去翳朽。決疏土石。既崇而焚。既釃而盈。惜其未始有傳焉者。故累記其所屬。遺之其人。書之其陽。俾後好事者求之得以易。元和七年正月八日。鐲渠至大石。十月十九日。踰石得石泓小潭。渠之美。於是始窮也。

石澗記

石渠之事既窮。上由橋西北。下土山之陰。民又橋焉。其水之大。倍石渠三之。亘石爲底。達于兩涯。若床若堂。若陳筵席。若限閫奧。水平布其上。流若織文。響若操琴。揭跣而往。折竹掃陳葉。排腐木。可羅胡床十八九居之。交絡之流。觸激之音。皆在床下。翠羽之木。龍鱗之石。均蔭其上。古之人。其有樂乎此耶。後之來者。有能追余之踐履耶。得意之日。與石渠同。由渴而來者。先石渠後石澗。由百家瀨上而來者。先石澗後石渠。澗之可窮者。皆出石城村東南。其閒可樂者數焉。其上深山幽林逾峭險。道狹不可窮也。

小石城山記

自西山道口徑北。踰黃茅嶺而下。有二道。其一西出。尋之無所得。其一少北而東。不過四十丈。土斷而川分。有積石橫當其垠。其上爲睥睨梁欐之形。其旁出堡塢。有若門焉。窺之正黑。投以小石。洞然有水聲。其響之激越。良久乃已。環之可上。望甚遠。無土壤而生嘉樹美箭。益奇而堅。其疏數偃仰。類智者所施設也。噫吾疑造物者之有無久矣。及是愈以爲誠有。又怪其不爲之於中州。而列是夷狄。更千百年不得一售其伎。是固勞而無用。神者儻不宜如是。則其果無乎。或曰。以慰夫賢而辱於此者。或曰。其氣之靈。不爲偉人。而獨爲是物。故楚之南。少人而多石。是二者。余未信之。

柳州山水近治可遊者記

古之州治。在潯水南。山石閒。今徙在水北。直平四十里。南北東西皆水滙。北有雙山。夾道嶄然。曰背石山。有支川。東流入於潯水。潯水因是北而東。盡大壁下。其壁曰龍壁。其下多秀石。可硯。南絕水有山。無麓。廣百尋。高五丈。下上若一。曰甑山。山之南皆大山。多奇。又南且西曰駕鶴山。壯聳環立。古州治負焉。有泉在坎下。常盈而不流。南有山。正方而崇。類屏者曰屏山。其西曰四姥山。皆獨立不倚。北流潯水瀨下。又西曰仙奕之山。山之西可上。其上有穴。穴有屏。有室。有宇。其宇下有流石。成形如肺肝。如茄房。或積於下。如人。如禽。如器物。甚衆。東西九十尺。南北少半。東登入小穴。常有四尺。則廓然甚大。無竅。正黑。燭之。高僅見其宇。皆流石怪狀。由屏南室中入小穴。倍常而上。始黑。已而大明。爲上室。自上室而上。有穴。北出之。乃臨大野。飛鳥皆視其背。其始登者。得石枰於上。黑肌而赤脈。十有八道。可奕。故以云。其山多檉。多櫧。多篔簹之竹。多橐吾。其鳥多秭歸。石魚之山。全石無大草木。山小而高。其形如立魚。在多秭歸西。有穴類仙奕。入其穴東。出其西北。靈泉在東趾下。有麓環之。泉大類轂。雷鳴西奔二十尺。有洄在石澗。因伏無所見。多綠青之魚及石鯽。多鯈。雷山兩崖皆東西。雷水出焉。蓄崖中曰雷塘。能出雲氣。作雷雨。變見有光。禱用俎魚豆彘修形。糈稌酒陰。虔則應。在立魚南。其閒多美山無名。而深峨山在野中。無麓。峨水出焉。東流入於潯水。

邕州馬退山茅亭記

冬十月。作新亭於馬退山之陽。因高邱之阻。以面勢。無欂櫨節梲之華。不斲椽。不翦茨。不列牆。以白雲爲藩籬。碧山爲屏風。昭其儉也。是山崒然起於莽蒼之中。馳奔雲矗。亙數十百里。尾蟠荒陬。首注大溪。諸山來朝。勢若星拱。蒼翠詭狀。綺綰繡錯。蓋天鍾秀於是。不限於遐裔也。然以壤接荒服。俗參夷徼。周王之馬迹不至。謝公之屐齒不及。巖徑蕭條。登探者以爲歎。歲在辛卯。我仲兄以方牧之命。試於是邦。夫其德及故信孚。信孚故人和。人和故政多暇。由是嘗徘徊北山。以寄勝概。乃塈乃塗。作我攸宇。於是不崇朝而木工告成。每風止雨收。煙霞澄鮮。輒角巾鹿裘。率昆弟友生。冠者五六人。步山極而登焉。於是手揮絲桐。目送還雲。西山爽氣。在我襟袖。以極萬類。攬不盈掌。夫美不自美。因人而彰。蘭亭也。不遭右軍。則清湍修竹。蕪沒於空山矣。是亭也。僻介閩嶺。佳境罕到。不書所作。使盛跡鬱湮。是貽林澗之媿。故志之。

唐故御史周君碣

有唐貞臣。汝南周氏。諱某。字某。以諫死。葬於某。貞元十二年。柳宗元立碣於其墓左。在天寶年。有以諂諛至相位。賢臣放退。公爲御史。抗言以白其事。得死於墀下。史臣書之。公之死。而佞者始畏公議。於呼。古之不得其死者衆矣。若公之死。志匡王國。氣震姦佞。動獲其所。斯蓋得其死者歟。公之德之才。洽於傳聞。卒以不試。而獨申其節。猶能奮百代之上。以爲世軌。第令生於定哀之閒。則孔子不曰未見剛者。出於秦楚之後。則漢祖不曰安得猛士。而存不及興王之用。沒不遭聖人之歎。誠立志者之所悼也。故爲之銘。銘曰。

忠爲美。道是履。諫而死。佞者止。史之志。石以紀。爲臣軌兮。

唐故萬年令裴府君墓碣

公諱墐。字封叔。河東聞喜人。太尉公諱行險。實高祖。侍中公諱光庭。實曾祖。刑部員外郎府君諱稹。實祖。大理卿府君諱儆。實父。公由進士上第。校書崇文館。飭館事。修整左春坊。由是立署局。後參京兆軍事。按覆校巡。大尹恆得以取直。爲太常主簿。搜逖疑互。探抉遯隱。宿工老師。不得伏匿。皆來會堂下。耆股肱。役喉喙。以集樂事。作坐立二部伎圖。卿奇其績。奏超以爲丞。司空杜公。聯奉崇陵豐陵禮儀。再以爲佐。離紛尨。導滯塞。關百執事。條直顯遂。司空拱手以成。自開元制禮。諱去國恤章。累聖陵寢。皆因事擥綴。取一切乃已。有司卒無所徵。公乃選二陵集禮。藏之南閣。轉殿中侍御史。仍拜尚書比部員外郎。會校成要。期歲畢具。刺金州。決高施隙。去人水禍。渚茭原茅。闢成稻粱。陟萬年令。叢劇辨肅。談宴終日。人視之。若居冗官然。會金州猾吏來。揚言恐喝。以煩褻事。曰不得三十萬。吾能爲禍。公大怒。召罵之。恣所爲。吏巧以聞。御史按章具獄。再謫道州循州。爲佐掾。會赦。量移吉州長史。元和十二年七月日。病痁泄卒。始公以唯諾聞長安中。奔人危急。輕出財力。如索水火。性開蕩。進交大官。不視齒類。挾同列。收下輩。細大畢觀。喜博奕。知聲音。飲酒甚少。而工於糺謫。謠舞擊咢。纖屑促密。皆曲中節度。而終身不以酒氣加人。晝接人事。夜讀書考禮。收捃策牘。未嘗釋手。以是重諸公閒。初娶范陽盧氏。無子。後夫人柳氏。德爲九族冠。生三男子。喪其二焉。貞元十六年某月日卒。祔於長安御宿之北原。冢子銑奉柩。以明年月日。克葬於墓。銑以文書來柳州。告其叔舅宗元。願碣於墓左。則涕爲之銘。其辭曰。

有鬱其聲。惟裴之卿。世服大僚。仍耀烈名。封叔申之。實惟其英。儻書宮闈。佐職於京。太常命吏。以能增秩。相儀考禮。大弁斯畢。鳩工展伎。爰備聲律。或圖或書。藏之府室。史於杜下。郎於會司。徽循以周。大比是宜。作牧於金。金人允懷。溝防漢隋。墊沃卒移。增我歲食。易於都百務敍成。談宴以娛。誰恤誰恃。不忍悍吏。胡巧其辭。按章以遂。由道斥循。施施三年。更赦進資。盧陵是遷。人曰世德。宜慶於延。又曰良能。宜力之宣。朝有大賚。期賜其還。鬼神不享。命隕在前。長原有墓。高曾祖父。淑靈是祔。封叔爰歸。左右惟具。孤銑磨石。祈辭海阪。遂升其趺。於道之周。

陸文通先生墓表

孔子作春秋。千五百年。以名爲傳者五家。今用其三焉。秉觚牘。焦思慮。以爲讀注疏說者。百千人矣。攻訐狠怒。以辭氣相擊排冒沒者。其爲書。處則充棟宇。出則汗牛馬。或合而隱。或乖而顯。後之學者。窮老盡氣。左視右顧。莫得其本。則專其所學。以訾其所異。黨枯竹。護朽骨。以至於父子傷夷。君臣詆悖者。前世多有之。甚矣聖人之難知也。有吳郡陸先生質。以其師友天水啖助洎趙匡。能知聖人之旨。故春秋之言。及是而光明。使庸人小童。皆可積學以入聖人之道。傳聖人之教。是其德豈不侈大矣哉。先生字某。既讀書。得制作之本。而獲其師友。於是合古今。散同異。聯之以言。纍之以文。蓋講道者二十年。書而志之者又十餘年。其事大備。爲春秋集注十編。辨疑七編。微指二編。明章大中。發露公器。其道以生人爲主。以堯舜爲的。苞羅旁魄。膠轕下上。而不出于正。其法以文武爲首。以周公爲翼。揖讓升降。好惡喜怒。而不過乎物。既成。以授世之聰明之士。使陳而明之。故其書出焉。而先生爲巨儒。用是爲天子爭臣。尚書郎。國子博士。給事中。皇太子侍讀。皆得其道。刺二州守。人知仁。永貞年。侍東宮。言其所學。爲古君臣圖。以獻。而道達乎上。是歲。嗣天子踐祚而理。尊優師儒。先生以疾聞。臨問加禮。某月日。終於京師。某月日。葬於某郡某里。嗚呼先生。道之存也。以書不及施於政。道之行也。以言不及覩其理。門人世儒。是以增慟。將葬。以先生爲能文。聖人之書。通於後世。遂相與謚曰文通先生。後若干祀。有學其書者過其墓。哀其道之所由。乃作石以表碣。

先侍御史府君神道表

嗚呼。先君之墓。仲父殿中君誌焉。孤宗元不敢稱道先德。然而無以昭於外者。用敢悉取仲父之所陳。

而繫其辭。刻茲石表。先君諱鎭。字某。六代祖諱旦。周中書侍郎濟陰公。後魏侍中平齊公。五代祖諱慶。後高祖諱楷。隋刺齊房蘭廊四州。曾伯祖諱子夏。徐州長史。祖諱從裕。滄州清池令。皇考諱察。躬湖州德清令。世德廉孝。颺於河濟。士之稱家風者歸焉。先君之道。得詩之羣。書之政。易之直方大。春秋之懲勸。以植於內。而文於外。垂聲當時。天寶末。經術高第。遇亂。奉德清君夫人。載家書。隱王屋山。閉行以求食。深處以修業。作避暑賦。令羣從弟子姓。講春秋左氏。易王氏。衍衍無倦。以忘其憂。德清君喜曰。茲謂遯世無悶矣。亂有閒。舉族如吳。無以爲食。先君獨乘驢。無僮御。以出求仁者。冀以給食。嘗經山澗。水卒至。流抵大壑。得以無苦。被濡塗以行。無慍容。觀者哀悼而致禮加焉。季王父六合君。忤貴臣。死於吏舍。猶鞠其狀。先君改服徒行。逾四千里。告於上。由是貸其問。既而以爲天子平大難。發大號。且致太平。入罹兵戎。農去未耕。宜以時興。太學勸耦耕。作三老五更議。籍田書。齋沐以獻。道不果用。授左衛率府兵曹參軍。尚父汾陽王居朔方。備禮延望。授左金吾衛倉曹參軍。爲節度推官。專掌書奏。進大理評事。以爲刑法者軍旅之楨幹。斥候者邊鄙之視聽。不可以不具。作晉文公三罪議。守邊論。議事確直。勢不能容。表爲晉州錄事參軍。晉之守。故將也。少文而悍。酬嗜殺戮。吏莫敢與之爭。先君獨抗以理。無辜將死。常以身扞答箠。拒不受命。守大怒。投几折簪。而無以奪焉。以爲自下繩上。其勢將殆。作泉竭木摧詩。終秉直以免於恥。調長安主簿。居德清君之喪。哀有過而禮不逾。爲士者咸服。服既除。吏部命爲太常博士。先君固曰。有尊老孤弱在吳。願爲宣城令。三辭而後獲。徙爲宣城。四年。作閿鄉令。考績皆最。吏人懷思。立石頌德。遷殿中侍御史。爲鄂岳沔都團練判官。元戎大攘狡虜。增地進律。作夏口破虜頌。後數年。登朝爲眞。會宰相與憲府比周。誣陷正士。以校私讐。有擊登聞鼓以聞於上。上命先君總三司以聽理。至則平反之。爲相者不敢恃威以濟欲。爲長者不敢懷私以請閒。羣冤獲宥。邪黨側目。封章密獻。歸命天子。遂莫敢言。逾年。卒中拜侍御史。制書曰。守正爲心。疾惡不懼。先君捧以流涕曰。吾惟一子。愛甚。方謫去至藍田訣曰。吾目無有司曰。得無以朝士子冒進者乎。有司以聞。上曰。是故抗奸臣竇參者耶。吾知其不爲子求舉矣。是歲五月十七日。終於親仁里第。享年五十五。七月某日。葬於萬年縣棲鳳原。後十一年。宗元由御史爲尚書郎。天子行慶於下。申命崇贈。而有司草創頗緩。會宗元得罪。遂寢不行。太夫人范陽盧氏。某官某之女。實有全德。爲九族宗師。用柔明勤儉。以行其志。用圖史箴誡。以施其教。故二女之歸他姓。咸爲表式。

太夫人既授封河東縣太君。會冊太上皇后於興慶宮。既乃宗元貶秩。爲永州司馬。奉侍溫淸。未嘗見憂。元和元年五月十五日。終於州之佛寺。享年六十八。嗚呼宗元。不謹先君之敎。以陷大禍。幸而緩於死。既不克成先君之寵贈。又無以寧太夫人之飮食。天殛薦酷。名在刑書。不得手開玄堂。以奉安祔。罪惡益大。世無所容。尙顧嗣續。不敢卽死。支綴氣息。以嚴邦刑。大懼祭祀之無主。以忝盛德。敢用特牲。昭告神道。號叫萬里。以畢其辭云。

段太尉逸事狀

太尉始爲涇州刺史。時汾陽王以副元師居蒲。王子晞爲尙書。領行營節度使。寓軍邠州。縱士卒無賴。邠人偸嗜暴惡者。率以貨竄名軍伍中。則肆志。吏不得問。日羣行丐取于市。不嗛輒奮擊。折人手足。椎釜鬲甕盎。盈道上。把臂徐去。至撞殺孕婦人。邠寧節度使白孝德。以王故。戚不敢言。太尉自州以狀白府。願計事。至則曰。天子以生人分公理。公見人被暴害。因恬然。且大亂。若何。孝德曰。願奉敎。太尉曰。某爲涇州。甚適少事。今不忍人無寇暴死。以亂天子邊事。公誠以都虞侯命某者。能爲公已亂。使公之人不得害。孝德曰。幸甚。如太尉請。既署一月。晞軍士十七人。入市取酒。又以刃刺酒翁。壞釀器。酒流溝中。太尉列卒取十七人。皆斷頭注槊上。植市門外。晞一營大譟。盡甲。孝德震恐。召太尉曰。將奈何。太尉曰。無傷也。請辭於軍。孝德使數十人從太尉。太尉盡辭去。解佩刀。選老躄者一人。持馬至晞門下。甲者出。太尉笑且入曰。殺一老卒。何甲也。吾戴吾頭來矣。甲者愕。因諭曰。尙書固負若屬耶。副元帥固負若屬耶。奈何欲以亂敗郭氏。爲白尙書。出聽我言。晞出見太尉。太尉曰。副元帥勳塞天地。當務始終。今尙書恣卒爲暴。暴且亂。亂天子邊。欲誰歸罪。罪且及副元帥。今邠人惡子弟。以貨竄名軍籍中。殺害人。如是不止。幾日不大亂。大亂由尙書出。人皆曰。尙書倚副元帥。不戢士。然則郭氏功名。其與存者幾何。言未畢。晞再拜曰。公幸敎晞以道。恩甚大。願奉軍以從。顧叱左右曰。皆解甲。散還火伍中。敢譁者死。太尉曰。吾未晡食。請假設草具。既食曰。吾疾作。願留宿門下。命持馬者去。旦日來。還臥軍中。晞不解衣。戒候卒。擊柝衞太尉。旦俱至孝德所。謝不能。請改過。邠州由是無禍。先是太尉在涇州。爲營田官。涇大將焦令諶。取人田。自占數十頃。給與農曰。且熟歸我半。是歲大旱。野無草。農以告諶。諶曰。我知入數而已。不知旱也。督責益急。且飢死。無以償。卽告太尉。太尉判狀辭甚巽。使人來諭諶。諶盛怒。召農者曰。我畏段某耶。何敢言我。取判鋪背上。以大杖擊二十。垂死。輿來庭中。太尉大泣曰。乃我困汝。卽自取水洗去血。裂

裳衣瘡。手注善藥。旦夕自哺農者。然後食。取騎馬賣。市穀代償。使勿知。淮西寓軍帥尹少榮。剛直士也。入見諶。大罵曰。汝誠人耶。涇州野如赭。人且飢死。而必得穀。又用大杖擊無罪者。段公仁信大人也。而汝不知敬。今段公唯一馬。賤賣市穀入汝。汝又取不恥。凡爲人。傲天災。犯大人。擊無罪者。又取仁者穀。使主人出無馬。汝將何以對天地。尙不媿奴隸耶。諶雖暴抗。然聞言則大媿。流汗不能食。曰。我終不可以見段公。一夕自恨死。及太尉自涇州以司農徵。戒其族。過岐。朱泚幸致貨幣。愼勿納。及過。泚固致大綾三百疋。太尉壻韋晤。堅拒不得命。至都。太尉怒曰。果不用吾言。晤謝曰。處賤無以拒也。太尉曰。然。終不以在吾第。以如司農治事堂。棲之梁木上。泚反。太尉終。吏以告泚。泚取視。其故封識具存。元和九年月日。永州司馬員外置同正員外宗元。謹上史館。今之稱太尉大節者。出入以爲武人。一時奮不慮死。以取名天下。不知太尉之所立如是。宗元嘗出入岐周邠鰲閒。過眞定。北上馬嶺。歷亭鄣堡戍。竊好問老校退卒。能言其事。太尉爲人。姁姁常低首。拱手行步。言氣卑弱。未嘗以色待物。人視之。儒者也。遇不可。必達其志。決非偶然者。會州刺史崔公來。言信行直。備得太尉遺事。覆校無疑。或恐尙逸墜。未集太史氏。敢以狀私於執事。謹狀。

梓人傳

裴封叔之第在光德里。有梓人款其門。願傭隙宇而處焉。所職尋引規矩繩墨。家不居礱斲之器。問其能。曰。吾善度材。視棟宇之制。高深圓方短長之宜。吾指使而羣工役焉。捨我。衆莫能就一宇。故食於官府。吾受祿三倍。作於私家。吾收其直。大半焉。他日入其室。其牀闕足。而不能理。曰。將求他工。余甚笑之。謂其無能而貪祿嗜貨者。其後京兆尹將飾官署。余往過焉。委羣材。會衆工。或執斧斤。或執刀鋸。皆環立嚮之。梓人左持引。右執杖而中處焉。量棟宇之任。視木之能。擧揮其杖曰斧。彼執斧者奔而右。顧而指曰鋸。彼執鋸者趨而左。俄而斤者斲。刀者削。皆視其色。俟其言。莫敢自斷者。其不勝任者。怒而退之。亦莫敢慍焉。畫宮於堵。盈尺而曲盡其制。計其毫釐而構大廈。無進退焉。既成。書於上棟曰。某年某月某日某建。則其姓氏也。凡執用之工不在列。余圜視大駭。然後知其術之工大矣。繼而歎曰。彼將捨其手藝。專其心智。而能知體要者歟。吾聞。勞心者役人。勞力者役於人。彼其勞心者歟。能者用。而智者謀。彼其智者歟。是足爲佐天子相天下法矣。物莫近乎此也。彼爲天下者。本於人。其執役者爲徒隸。爲鄉帥里胥。其上爲下士。又其上爲中士。爲上士。又其上爲大夫。爲卿。爲公。離而爲六職。判而爲百役。外薄

四海。有方伯連率。郡有守。邑有宰。皆有佐政。其下有胥吏。又其下皆有嗇夫版尹。以就役焉。猶衆工之各有執伎以食力也。彼佐天子相天下者。擧而加焉。指而使焉。條其綱紀而盈縮焉。齊其法制而整頓焉。猶梓人之有規矩繩墨。以定制也。撐天下之士。使稱其職。居天下之人。使安其業。視都知野。視野知國。視國知天下。其遠邇細大。可手據其圖而究焉。猶梓人畫宮於堵而績于成也。能者進而由之。使無所疑德。不能者退而休之。亦莫敢慍。不衒能。不矜名。不親小勞。不侵衆官。日與天下之英才。討論其大經。猶梓人之善運衆工。而不伐藝也。夫然後相道得。而萬國理矣。相道既得。萬國既理。天下擧首而望曰。吾相之功也。後之人循跡而慕曰。彼相之才也。士或談殷周之理者。曰伊傅周召。其百執事之勤勞。而不得紀焉。猶梓人自名其功。而執用者不列也。大哉相乎。通是道者。所謂相而已矣。其不知禮要者反此。以格勤爲公。以簿書爲尊。衒能矜名。親小勞。侵衆官。竊取六職百役之事。听听於府庭。而遺其大者遠者焉。所謂不通是道者也。猶梓人而不知繩墨之曲直。規矩之方圓。尋引之短長。姑奪衆工之斧斤刀鋸。以佐其藝。又不能備其工。以至敗績用而無所成也。不亦謬歟。或曰。彼主爲室者。倘或發其私智。牽制梓人之慮。奪其世守。而道謀是用。雖不能成功。豈其罪耶。亦在任之而已。余曰。不然。夫繩墨誠陳。規矩誠設。高者不可抑而下也。狹者不可張而廣也。由我則固。不由我則圮。彼將樂去固而就圮也。則卷其術。默其智。悠爾而去。不屈吾道。是誠良梓人耳。其或嗜其貨利。忍而不能捨也。喪其制量。屈而不能守也。棟橈屋壞。則曰非我罪也。可乎哉。可乎哉。余謂。梓人之道類於相。故書而藏之。梓人蓋古之審曲面勢者。今謂之都料匠云。余所遇者楊氏。潛其名。

種樹郭橐駝傳

郭橐駝。不知始何名。病僂。隆然伏行。有類橐駝者。故鄉人號之駝。駝聞之曰。甚善。名我固當。因捨其名。亦自謂橐駝云。其鄉曰豐樂鄉。在長安西。駝業種樹。凡長安豪富人爲觀游。及賣果者。皆爭迎取養視。駝所種樹。或移徙。無不活。且碩茂。蚤實以蕃。他植者。雖窺伺傚慕。莫能如也。有問之。對曰。橐駝非能使木壽且孳也。能順木之天。以致其性焉爾。凡植木之性。其本欲舒。其培欲平。其土欲故。其築欲密。既已。勿動勿慮。去不復顧。其蒔也若子。其置也若棄。則其天者全。而其性得矣。故吾不害其長而已。非有能碩茂之也。不抑耗其實而已。非有能蚤而蕃之也。他植者則不然。根拳而土易。其培之也。若不過焉。則不及。苟能反是者。則又愛之太恩。憂之太勤。旦視而暮撫。已去而復顧。甚者爪其膚。以驗其生枯。

搖其本。以觀其疎密。而木之性日以離矣。雖曰愛之。其實讎之。故不我若也。吾又何能爲哉。問者曰。以子之道。移之官理。可乎。駝曰。我知種樹而已。理非吾業也。然吾居鄉。見長人者。好煩其令。若甚憐焉。而卒以禍。旦暮吏來而呼曰。官命促爾耕。勗爾植。督爾穫。蚤繰而緒。蚤織而縷。字而幼孩。遂而雞豚。鳴鼓而聚之。擊木而召之。吾小人。輟飧饔以勞吏者。且不得暇。又何以蕃吾生。而安吾性耶。故病且怠。若是則與吾業者。其亦有類乎。問者嘻曰。不亦善夫。吾問養樹。得養人術。傳其事。以爲官戒也。

宋清傳

宋清。長安西部藥市人也。居善藥。有自山澤來者。必歸宋清氏。清優主之。長安醫工。得清藥。輔其方。輒易。雠咸譽清。疾病疕瘍者。亦皆樂就清求藥。冀速已。清皆樂然。響應雖不持錢者。皆與善藥。積券如山。未嘗詣取直。或不識。遙與券。清不爲辭。歲終。度不能報。輒焚券。終不復言。市人以其異。皆笑之曰。清蚩妄人也。或曰。清其有道者歟。清聞之曰。清逐利以活妻子耳。非有道也。然謂我蚩妄者亦謬。清居藥四十年。所焚券者。百數十人。或至大官。或連數州。受捧博。其餽遺清者。相屬於戶。雖不能立報。而以賒死者千百。不害清之爲富也。清之取利遠。遠故大。豈若小市人哉。一不得直。則怫然怒。再則罵。而仇耳。彼之爲利。不亦翦翦乎。吾見蚩之有在也。清誠以是得大利。又不爲妄。執其道。不廢。卒以富。求者益衆。其應益廣。或斥棄沉廢。親與交視之。落然者。清不以怠遇。其人必與善藥。如故。一旦復柄用。益厚報。清其遠取利。皆類此。吾觀今之交乎人者。炎而附。寒而棄。鮮有能類清之爲者。世之言徒曰市道交。嗚呼。清市人也。今之交有能望報如清之遠者乎。幸而庶幾。則天下之窮困廢辱。得不死亡者衆矣。市道交。豈可少耶。或曰。清非市道人也。柳先生曰。清居市不爲市之道。然而居朝廷。居官府。居庠塾鄉黨。以士大夫自名者。反爭爲之不已。悲夫。然則清非獨異於市人也。

童區寄傳

柳先生曰。越人少恩。生男女。必貨視之。自沒齒已上。父兄鬻賣以覬其利。不足則盜取他室。束縛鉗梏之。至有鬚鬣者。力不勝。皆屈爲僮。當道相賊殺。以爲俗。幸得壯大。則縛取幺弱者。漢官因爲己利。苟得僮。恣所爲不問。以是越中戶口滋耗。少得自脫。惟童區寄。以十一歲勝。斯亦奇矣。桂部從事杜周士爲

余言之。童寄者柳州蠻牧兒也。行牧且蠻。二豪賊刦持反接。布囊其口。去逾四十里。之虛所賣之。寄僞兒啼恐慄。爲兒恆狀。賊易之。對飲酒醉。一人去爲市。一人臥。植刃道上。童微伺其睡。以縛背刃。力下上得絕。因取刃殺之。逃未及遠。市者還。得僮大駭。將殺。童遽曰。爲兩郎僮。孰若爲一郎僮耶。彼不我恩也。郎誠見完與恩。無所不可。市者良久計曰。與其殺是僮。孰若賣之。與其賣而分。孰若吾得專焉。幸而殺彼。甚善。卽藏其尸。持僮抵主人所。愈束縛牢甚。夜半童自轉。以縛卽爐火燒絕之。雖瘡手勿憚。復取刃殺市者。因大號。一虛皆驚。童曰。我區氏兒也。不當爲僮。賊二人得我。我幸皆殺之矣。願以聞於官。虛吏白州。州白大府。大府召視兒。幼愿耳。刺史顏證奇之。留爲小吏。不肯。與衣裳。吏護還之鄉。鄉之行刦縛者。側目莫敢過其門。皆曰。是兒少秦武陽二歲。而討殺二豪。豈可近耶。

唐宋八家文卷九　終

唐宋八家文卷十

歐陽修永叔著

論選皇子疏

臣聞。言天下之難言者。不敢冀必然之聽。知未必聽。而不可不言者。所以盡爲忠之心。況臣遭遇聖明。容納諫諍。言之未必不聽。其可默而不言。臣伏見自去歲以來。羣臣多言皇嗣之事。臣亦嘗因災異竊有奏陳。雖聖度包容。不加誅戮。而愚誠懇至。天聽未回。臣實不勝愛君之心。日夜區區。未嘗忘此。思欲再陳。狂瞽而未知所以爲言。今者伏見。兗國公主。近已出降。臣因竊思。人之常道。莫親於父子之親。人之常情。亦莫樂於父子之樂。雖在聖哲異於凡倫。其爲天性。於理則一。陛下嚮雖未有皇嗣。而尙有公主之愛。上慰聖顏。今旣出降。漸疎左右。則陛下萬幾之暇。處深宮之中。誰可與語言。誰可承顏色。臣愚以謂。宜因此時。出自聖意。於宗室之中。選材賢可喜者。錄以爲皇子。使其出入左右。問安侍膳。亦足以慰悅聖情。臣考於書史。竊見自古帝王。雖曰至尊。未嘗已。必有儒臣學士。講論於閒宴。又有左右侍從。顧問語言。其入而居內也。不止宦官宮妾在於左右。而已。其平居燕寢也。則有太子問安侍膳於朝夕。其優游宴樂也。多與宗室子弟。懽然相接。如家人。計其一日之中。未嘗一時獨處也。今陛下日御前後殿。百司奏事者。往往仰瞻天顏而退。其甚幸者。得承一二言之德音。君臣之情不通。上下之意不接。其餘在廷之臣。儒學侍從之列。未聞一人從容親近於左右。入而居內。則至於問安侍膳。亦闕於朝夕。是則陛下可親。居內則無一人得親。此臣所以區區而欲言也。伏惟陛下富有四海之廣。躬享萬乘之尊。居外則無一人降。儲位久虛。羣臣屢言。大議未決。臣前所奏陳。以謂未必立爲儲貳。而且養爲子。旣可以徐察其賢否。亦可以待皇子之降生。於今爲之。亦其時也。臣言狂計愚。伏俟斧鉞。

論議濮安懿王典禮劄子

臣伏見朝廷議濮安懿王典禮。兩制禮官。請稱皇伯。中書之議。以謂事體至大。理宜愼重。必合典故。方可施行。而皇伯之稱。考於經史。皆無所據。方欲下三省百官。博訪羣議。以求其當。陛下屈意手詔中罷。而衆論紛然。至今不已。臣以爲衆論雖多。其說不過有三。其一曰宜稱皇伯者。是無稽之臆說也。其二曰簡宗廟致水災者。是厚誣天人之言也。其三曰不當用漢宣哀爲法。以干亂統紀者。是不原本末之論也。臣請爲陛下條列而辨之。謹按儀禮喪服記。曰爲人後者。爲其父母報。報者齊衰期也。謂之降服。以明服可降。父母之名不可改也。又按開元開寶禮。國朝五服年月。喪服令。皆云爲人後者。爲其所生父齊衰不杖期。蓋以恩莫重於所生。故父母之名不可改。義莫重於所繼。故尊抑而降其服。此聖人所制之禮。著之六經。以爲萬世法者。是中書之議所據依也。若所謂稱皇伯者。考於六經無之。方今國朝見行典禮及律令皆無之。自三代之後。秦漢以來。諸帝由藩邸入繼大統者。亦皆無之。可謂無稽之臆說矣。夫儀禮者。聖人六經之文。開元禮者。有唐三百年所用之禮。開寶通禮者。聖宋百年所用之禮。五服年月及喪服令。亦皆祖宗累朝所定。方今天下共行之制。今議者皆棄而不用。直欲自用無稽之臆說。此所以不可施行也。其二曰簡宗廟致水災者。臣伏以上天降災。皆主人事。故自古聖王。逢災恐懼。多求闕政而修之。或自知過失而改悔之。庶幾以塞天譴。然皆須人事已著於下。則天譴爲形於上。今者濮王之議。本因兩制禮官。違經棄禮。用其無稽之臆說。欲定皇伯之稱。中書疑其未可施行。乃考古今典禮。雖有明據。亦未敢自信而自專。方更求下外廷博議。而陛下遽詔中罷。欲使有司徐求典禮。是則臣下愼重如此。人君謙畏如此。君臣不敢輕議妄舉。而天遽譴怒。殺人害物。此臣所謂厚誣天也。議猶未決。仍罷不議。而更謂兩統二父以致天災者。厚誣人也。其三引漢宣哀之事者。臣謹按漢書宣帝父曰悼皇考。初稱親。謚曰悼。置奉邑寢園而已。其後改稱皇考。而立廟京師。皇考者。親之異名爾。皆子稱其父之名也。漢儒初不以爲非也。自元帝以後。貢禹韋玄成等。始建毀廟之議。數十年閒。毀立不一。至哀帝時。大司徒平晏等。百四十七人奏議云。親謚曰悼。裁置奉邑。皆應經義。是不非宣帝稱史皇孫爲親也。所謂應經義者。卽儀禮云。爲人後者。爲其父母報。是也。惟其立廟京師。亂漢祖宗昭穆。故晏等以謂兩統二父。非禮。宜毀也。定陶恭王。初但號共皇。立廟本國。師丹亦無所議。至其後立廟京師。欲去定陶。不繫以國。有進干漢統之過。丹遂大非之。故丹議云。定陶恭皇謚號已前定議。不得復改。而但論立廟京師。爲不可爾。然則稱親置園。皆漢儒所許以爲應經義者。惟去其國號。立廟京師。則不可爾。今言事者。不究朝廷本議何事。不尋漢臣所非者何事。此臣所謂不原本末也。中書之議。本謂稱皇伯

無稽。而禮經有不改父名之義。方議名號。猶未定。故尊崇之禮。皆未及議。而言事者。便引漢去定陶國號。立廟京師之事。厚誣朝廷。以爲干亂大統。何其過論也。夫去國號而立廟京師。以亂祖宗昭穆。此誠可非之事。若果爲此議。宜乎指臣等爲姦邪之臣。而人主有過舉之失矣。其如陛下之意。未嘗及此。而中書亦初無此議。而言事者。不原本末。過引漢世。可乎非之事。以爲說。而外庭之臣。又不審知朝廷本議如何。但見言事者云云。遂以爲欲加非禮干亂統紀。信爲然矣。是以衆口一辭。紛然不止。而言事者。欲必遂其皇伯無稽之說。牽引天災。恐迫人主。而中書守經執禮之議。反指以爲姦邪之言。朝廷以言事之臣。禮當優容。不欲與之爭辨。而外庭羣論。又不可家至而戶曉。是非之禮不辨。上下之情不通。此所以呶呶而不止也。夫爲人後者。既以所後爲父矣。而聖人又存其所生父名者。非曲爲之意也。蓋自有天地以來。未有無父而生之子也。既有父而生。則不可諱其所生矣。夫無子者得以宗子爲後。是禮之所許也。然安得無父而生之子。以爲後乎。此聖人所以不諱無子者。立人之子。以爲後。亦不諱爲人後者。有父而生。蓋不欺天。不誣人也。故爲人後者。承其宗之重。任其子之事。而不得復歸於本宗。其所生父母。亦不得往與其事。至於喪服降而抑之。一切可以義斷。惟其父母之名不易者。理不可易也。易之則欺天而誣人矣。子爲父母服。謂之正服。出爲人後者。爲本生父母。齊衰期。謂之降服。又爲所後父斬衰三年。謂之義服。今若以本生父爲皇伯。則濮安懿王爲從祖父。反爲小功。而濮王夫人。是本生嫡母也。反爲義服。自宗懿以下。本生兄弟。於禮雖降。猶爲大功。是禮之齊衰期。今反爲小功。禮之正服。今反爲義服。上於濮王父也。反服大功。此自古所以不稱所生父爲伯父叔父者。稱之則禮制乖違。人倫錯亂。如此也。伏惟陛下聰明睿聖。理無不燭。今衆人之議如彼。中書之議如此。必將從衆乎。則衆議不見其可。欲違衆乎。則自古爲國未有違衆而能舉事者。願陛下霈然下詔。明告中外。以皇伯無稽決不可稱。而今所欲定者。正名號爾。至於立廟京師。干亂統紀之事。皆非朝廷本議。庶幾羣疑可釋。若知如此。而猶以謂必稱皇伯。則雖孔孟復生。不能復爲之辨矣。

論澧州瑞木乞不宣示外廷劄子

臣近聞。澧州進柿木成文。有太平之道四字。其知州馮載。本是武人。不識事體。便爲祥瑞。以媚朝廷。臣謂。前世號稱太平者。須是四海晏然。萬物得所。方今西羌叛逆。未平之患在前。北虜驕悖。藏伏之禍在後。一患未滅。一患已萌。加以西則瀘戎南則溻嶺。凡與四夷連接。無一處無事。而又內則百姓困弊。盜

賊縱橫。昨京西陝西出兵八九千人。捕數百之盜。不能一時翦滅。只是僅能潰散。然卻於別處結集。今張海雖死。而逢州軍賊。已近百人。又殺使臣。其勢不小。興州又奏八九十人。州縣皇皇。何以存濟。以臣觀之。乃是四海騷然。萬物失所。實未見太平之象。臣聞。天道貴信。示人不欺。臣不敢遠引他事。只以今年內事驗之。昨夏秋之閒。太白經天。累月不滅。金木相掩。近在端門。考於星占。皆是天下大兵將起之象。豈有纔出大兵之象。又出太平之道字。一歲之內。前後頓殊。豈非星象麗天。異不虛出。凡於戒懼常合修省。草木萬類。變化無常。不可信憑。便生懈怠。臣又思。若使木文不爲實。是天生。則亦有深意。蓋其文止曰太平之道者。其意可推也。夫自古帝王致太平。皆自有道。得其道則太平。失其道則危亂。臣視方今。但見其失。未見其得也。願陛下憂勤萬務。舉賢納善。常如近日不生逸豫。則三二歲閒。漸期修理。若以前賊張海等小衰。便謂後賊不足憂。以近京得雪。便謂天下大豐熟。見北虜未來。便謂必無事。見西賊通使。便謂可罷兵。指望太平。漸生安逸。則此瑞木。乃誤事之妖木耳。臣見今年曾進芝草者。今又進瑞木。竊慮四方相效。爭造妖妄。其所進瑞木。伏乞更不宣示臣寮。仍乞速詔天下州軍。告以興兵累年。四海困敝。方當責己憂勞之際。凡有奇禽異獸草木之類。並不得進獻。所以彰示聖德。感勵臣民。取進止。

論刪去九經正義中讖緯劄子

臣伏見國家近年以來。更定貢舉之科。以爲取士之法。建立學校。而勤養士之方。然士子文章未純。節行未篤。不稱朝廷勵賢興善之意。所以化民成俗之風。臣愚以謂。士之所本。在乎六經。而自暴秦焚書。聖道中絕。漢興收拾亡逸。所存無幾。或殘編斷簡。出於屋壁。而餘齡昏眊。得其口傳。去聖既遠。莫可考證。偏學異說。因自名家。然而授受相傳。尙有師法。暨晉宋而下。師道漸亡。章句之篇。家藏私畜。其後各爲箋傳。附著經文。其說存亡。以時好惡。學者芒昧。莫知所歸。至唐太宗時。始詔名儒。撰定九經之疏。號爲正義。凡數百篇。自爾以來。著爲定論。凡不本正義者。謂之異端。則學者之宗師。百世之取信也。然其所載既博。所擇不精。多引讖緯之書。以相雜亂。怪奇詭僻。所謂非聖之書。異乎正義之名也。臣欲乞特詔名儒學官。悉取九經之疏。刪去讖緯之文。使學者不爲怪異之言惑亂。然後經義純一。無所駁雜。其用功至少。其爲益則多。臣愚以爲欲使士子學古勵行。而不本六經。欲學六經。而不去其詭異駁雜。欲望功化之成。不可得也。伏望聖慈。下臣之言。付外詳議。今取進止。

論臺諫官唐介等宜早牽復劄子

臣材識庸暗。碌碌於衆人中。蒙陛下不次拔擢。置在樞府。其於報効。自宜如何。而自居職以來。已逾半歲。凡事關大體。必須衆議之協同。其餘日逐進呈。皆是有司之常務。至於謀猷啓沃。蔑爾無聞。上孤聖恩。下愧清議。人雖未責。臣豈自安。所以日夜思惟。願竭愚慮。苟有可採。冀彼萬一。臣近見諫官唐介。臺官范師道等。因言陳旭事得罪。或與小郡。或竄遠方。陛下自臨御以來。擢用諍臣。開廣言路。雖言者時有中否。而聖慈每賜優容。一旦臺諫聯翩被逐。四出。命下之日。中外驚疑。臣雖不知臺諫所言是非。但見唐介范師道。皆久在言職。其人立朝各有本末。前後補益甚多。豈於此時。頓然改節。故爲欺罔。上昧聖聰。在於人情不宜有此。臣竊以謂。自古人臣之進諫於其君者。有難有易。各因其時而已。若剛暴猜忌之君。不欲自聞其過。而樂聞臣下之過。人主好察多疑於上。大臣側足畏罪於下。於此之時。諫人主者難。而言大臣者易。若寬仁恭儉之主。動遵禮法。自聞其失。則從諫如流。聞臣下之過。則務爲優容。以保全之。而爲大臣者。外秉國權。內有左右之助。言事者未及見聽。而怨仇已結於其身。故於此時。諫人主者易。言大臣者難。此不可不察也。自古人主之聽言也。亦有難有易。在知其術而已。夫忠邪並進。於前而公論與私言交入於耳。此所以聽之難也。若知其人之忠邪。辨其言之公私。則聽之易也。凡言拙而直。逆耳違意。初聞若可惡者。此忠臣之言也。至於言事之官。各擧其職。或當朝正色。顯言於廷。或連章列署。共論其事。言一出。則萬口爭傳。衆目共視。雖欲爲私。其勢不可。故凡明言於外。不畏人知者。皆公言也。若非其言職。又不敢顯言。或密奏乞留中。或面言乞出自聖斷。不欲人知。言有主名者。蓋其言私之說也。自古人主能以此術知臣下之情。則聽言易也。伏惟陛下仁聖寬慈。躬履勤儉。樂聞諫諍。容納直言。其於大臣。尤所優禮。常欲保全終始。思與臣下愛惜名節。尤慎重於進退。故臣謂。方今言事者。規切人主則易。欲言大臣則難。臣自立朝。耳目所記。景祐中。范仲淹言宰相呂夷簡。貶知饒州。皇祐中。唐介言宰相文彥博。貶春州。別駕。至和初。吳中復。呂景初。馬遵。言宰相梁適。並罷職出外。其後趙抃。范師道。言宰相劉沆。亦罷職出外。前年韓絳言富弼。貶知蔡州。今又唐介等五人。言陳旭得罪。自范仲淹貶饒州後。至今凡二十年閒。居臺諫者多矣。未聞有規諫人主而得罪者。臣故謂方今諫人主則易。言大臣則難。陛下若推此以察介等所言。則可知其用心矣。昨所罷黜臺諫五人。惟呂誨入臺未久。其他

四人。出處本末。迹狀甚明。可以歷數也。唐介前因言文彥博。遠竄廣西煙瘴之地。賴陛下仁恕哀憐。移置湖南。得存性命。范師道。趙抃。並因言忤劉沆。罷臺職。守外郡。連延數年。然後復。今三人者。又以言樞臣罷黜。然則介不以中滯進用數年爲戒。遇事必言。得罪不悔。蓋所謂進退一節。始終不變之士也。至如王陶者。本出孤寒。只因韓絳薦舉。始得臺官。及絳爲中丞。陶不敢內顧私恩。與之諍議。絳終得罪。夫辜顧私恩。人之常情爾。斷恩以義。非知義之士。不能也。以此言之。陶可謂狗公滅私之臣矣。此四人者。出處本末之迹如此。可以知其爲人也。就使言雖不中。而其情必無他。議者或謂言事之臣。好相朋黨。動搖大臣。以作威勢。臣竊以謂不然。介與師道。不與絳爲黨。乃與諸臺諫共論絳爲非。然則非相朋黨。非欲動搖大臣。可明矣。固謂未可以此疑言事之臣也。況介等比者雖未謫官。幸蒙陛下寬恩。各得爲郡。未至失所。其可惜者。斥逐諫臣。非朝廷美事。阻塞言路。不爲國家之利。而介等盡忠守節。未蒙憐察也。欲望聖慈特賜召還介等。置之朝廷。以勸守節敢言之士。則天下幸甚。今取進止。

論杜衍范仲淹等罷政事狀

臣聞。士不忘身。不爲忠。言不逆耳。不爲諫。故臣不避羣邪切齒之禍。敢干一人難犯之顏。惟賴聖明。幸加省察。臣伏見。杜衍。韓琦。范仲淹。富弼等。皆是陛下素所委任之臣。一旦相繼罷黜。天下之士。皆素知其可用之賢。而不聞其可罷之罪。臣雖供職在外。事不盡知。然臣竊見。自古小人讒害忠賢。其說不遠。欲廣陷良善。則不過指爲朋黨。欲動搖大臣。則必須誣以專權。其故何也。夫去一善人。而衆善人尚在。則未爲小人之利。欲盡去之。則善人少。過難以爲一二。求瑕。惟有指以爲朋。則可一時盡逐。至如大臣。已被知遇。而蒙信任。則難以他事動搖。惟有專權。是上之所惡。故須此說。方可傾之。臣料衍等四人。各無大過。而一時盡逐。弼與仲淹。委任尤深。而忽遭離閒。必有以朋黨專權之說。上惑聖聰者。臣請試辨之。昔年仲淹。初以忠言讜論。聞於中外。天下賢士。爭相稱慕。當時姦臣。誣作朋黨。猶難辨明。自近日陛下擢此數人。並在兩府。察其臨事。可見其不爲朋黨也。蓋衍爲人清愼。而謹守規矩。仲淹則恢廓自信而不疑。琦則純信而質直。弼則明敏而果銳。四人爲性。既各不同。雖皆歸於盡忠。而其所見各異。故於議事。多不相從。至如杜衍欲深罪滕宗諒。仲淹則力爭而寬之。仲淹謂契丹必攻河東。請急修邊備。富弼料以九事。力言契丹必不來。至如尹洙。亦號仲淹之黨。及爭水洛城事。韓琦則是尹洙。而非劉滬。仲淹

則是劉滬。而非尹洙。此數事尤彰著。陛下素已知者。此四人者。可謂天下至公之賢也。平日閒居。則相稱美之不暇。爲國議事。則公言廷諍。而不私。以此而言。臣見衍等。眞得漢史所謂忠臣有不和之節。而小人讒爲朋黨。可謂誣矣。臣聞。有國之權。誠非臣下其事權之迹。而但見其善避權也。權者。得名位。則可西。琦等讓至五六。陛下亦五六召之。富弼三命。學士兩命。樞密副使。每一命。皆再三懇讓。讓者愈切。陛下用之愈堅。臣但見其避讓太繁。不見其好權貪位也。及陛下堅不許辭。方敢受命。然猶未敢別有所爲。陛下見其皆未行事。乃特開天章。召而賜坐。授以紙筆。使其條事。然衆人避讓。不敢下筆。弼等亦不敢獨有所述。因此又煩聖慈。特出手詔。指定姓名。專責弼等。條列大事而行之。弼等遲回。又近一月。方敢略條數事。仲淹深練世事。必知凡百難猛更張。故其所陳。志在遠大。而多若迂緩。但欲漸而行之。以久。冀皆有功。弼性雖銳。然亦不敢自出意見。但多舉祖宗故事。請陛下擇而行之。自古君臣相得。一言道合。遇事便行。臣方怪弼等蒙陛下如此堅意委任。委任。督責丁寧。而猶遲緩自疑。作事不果。然小人巧譖。已曰專權者。豈不誣哉。至如兩路宣撫。聖朝常遣大臣。況自中國之威。近年不振。故元昊叛逆一方。而勞困及於天下。北虜乘釁。違盟而動。其書辭侮慢。至有貴國祖宗之言。陛下憤恥雖深。但以邊防無備。未可與爭。屈意買和。莫大之辱。弼等見中國累年侵凌之患。感陛下不次進用之恩。故各自請行。力思雪恥。沿山傍海。不憚勤勞。欲使武備再修。國威復振。臣見弼等用心。本欲尊陛下威權。以禦四夷。未見其侵權而作過也。伏惟陛下睿哲聰明。有知人之聖。此數人。驟加擢用。夫正士在朝。羣邪所忌。謀臣不用。敵國之福也。今此數人。一旦罷去。而使羣邪相賀於內。四夷相賀於外。此臣所爲陛下惜之也。伏惟陛下聖德仁慈。保全忠善。退去之際。恩禮各優。今仲淹四路之任。亦不輕矣。惟願陛下拒絕羣謗。委任不疑。使盡其所爲。猶有裨補。方今西北二虜。交爭未已。正是天與陛下經營之時。如弼與琦。豈可置之閒處。伏望陛下早辨讒巧。特加圖任。則不勝幸甚。臣自前歲召入諫院。十月之內。七受聖恩。而致身兩制。方思君寵至深。未知報效之所。今羣邪爭進讒巧。正士繼去。朝廷乃臣忘身報國之秋。豈可緘言而避罪。敢竭愚瞽。惟陛下擇之。

論修河第三狀

右臣伏見。朝廷定議開修六塔河口。回水入橫隴故道。此大事也。中外之臣。皆知不便。而未有肯爲國

家極言其利害者。何哉。蓋其說有三。一曰畏大臣。二曰畏小人。三曰無奇策。今執政之臣。用心於河事。亦勞矣。初欲試十萬人之役。以開故道。既又捨故道而修六塔。未及興役。遽又罷之。已而終爲言利者所勝。今又復修。然則其勢難於復止也。夫以執政大臣。銳意主其事。而又有不可復止之勢。固非一人口舌可同。此所以雖知不便而罕肯言也。李仲昌小人。利口僞言。衆所共惡。今執政之臣。既用其議。必主其人。且自古未有無患之河。今河浸恩冀。目下之患雖小。然其患已形。回入六塔。將來之害必大。而其害未至。夫以利口小人。爲大臣所主。欲與之爭未形之害。勢必難奪。就使能奪其議。則言者猶須獨任恩冀爲患之責。使仲昌得以爲辭。大臣得以歸罪。此所以雖知不便。而罕敢言也。今執政之臣。用心太過。不思自古無不患之河。直欲使河不爲患。若得河不爲患。雖竭人力。猶當爲之。況開仲昌利口詭辯。謂費物少而用功不多。不得不信爲奇策。於是決意用之。今言者爲故道既不可復。六塔又不可修。詰其如何。則又無奇策以取勝。此所以雖知不便。而罕肯言也。衆人所不敢言。而臣今獨敢言者。臣謂大臣非有私仲昌之心也。直欲興利除害爾。若果知其爲患愈大。則豈有不回者哉。至於願小人之後患。則非臣之所慮也。且事欲知利害。權輕重。有不得已。則擇其害少而患輕者爲之。此非明智之士不能也。況治水本無奇策。相地勢。謹隄防。順水性之所趨爾。雖大禹不過此也。夫所謂奇策者。不大利則大害。若循常之計。雖無大利。亦不至大害。此明智之士。善擇利者之所爲也。今言修六塔者奇策也。然終不可成。而爲害愈大。言順水治堤者常談也。然無大利。亦無大害。不知爲國計者。欲何所擇哉。若謂利害不可必。但聚大衆。興大役。勞民困國。以試奇策。而僥倖於有成者。臣謂雖執政之臣。亦未必肯爲也。臣前已具言河利害甚詳。而未蒙採聽。今復略陳其大要。惟陛下詔計議之臣擇之。臣謂河水未始不爲患。今順已決之流。治隄防於恩冀者。其患二而速。開六塔以回今患一而遲。塞商胡復故道者。其患二而速。開六塔以回今河者。其患三而爲害無涯。自河決橫隴以來。大名金堤埽。歲歲增治。及商胡再決。而金堤益大加功。獨恩冀之閒。自商胡決後。議者貪建塞河之策。未嘗留意於隄防。是以今河水勢浸溢。今若專意併力於恩冀之閒。謹治隄防。則河患可禦。不至大害。所謂其患一者。十數年閒。今河下流淤塞。則上流必有決處。此一患而遲者也。今欲塞商胡口。使水歸故道。治堤修埽。功料浩大。勞人廢物。困弊公私。此一患也。幸而商胡可塞。故道復歸。高淤難行。不過一二年閒。上流必決。此二患而速者也。今六塔河口雖云已有上下約。然全塞大河正流。爲功不小。又開六塔河道。治二千餘里隄防。移一縣兩鎮。計其功費。又大於塞商胡數倍。其爲困弊公私。不可勝計。此一患也。幸而可塞。水入六塔而東。橫流散溢。濱棣德博與

齊州之界。咸被其害。此五州者。素號富饒。河北一路財用所仰。今引水注之。不惟五州之民破壞田產。河北一路坐見貧虛。此二患也。三五年閒。五州凋弊。河流注溢。久又淤高。流行梗澁。則上流必決。此三患也。所謂爲害而無涯者也。今爲國謀計者。本欲除一患。而反就三患。此臣所不諭也。至如六塔不能容大河。橫隴故道。本以高淤難行而商胡決。今復驅而注之。必橫流而散溢。自澶至海二千餘里。堤埽甚多。士無愚智。皆所共知。不待臣言而後悉也。臣前未奉使契丹時。已嘗具言故道六塔皆不可爲。惟治堤順水爲得計。及奉使往來河北。詢於知水者。其說皆然。雖恩冀之人。今被災患者。亦知六塔不便。皆願且治恩冀隄防爲是。下情如此。誰爲上通。臣既知其詳。豈敢自默。伏乞聖慈特諭宰臣。使更審利害。速罷六塔之役。差替李仲昌等。不用選一二精幹之臣。與河北轉運使副。及恩冀州官吏。相度隄防。併力修治。則今河之水。必不至爲大患。且河水天災。非人力可同。惟當順導防捍之而已。不必求奇策。立難必之功。以爲小人僥冀恩賞之資也。況功必不成。後悔無及者乎。臣言狂計愚。惟陛下裁擇。

本論中

佛法爲中國患千餘歲。世之卓然不惑而有力者。莫不欲去之。已嘗去矣。而復大集。攻之。暫破而愈堅。撲之。未滅而愈熾。遂至於無可奈何。是果不可去耶。蓋亦未知其方也。夫醫者之於疾也。必推其病之所自來。而治其受病之處。病之中人。乘乎氣虛。而入焉。則善醫者。不攻其疾。而務養其氣。氣實則病去。此自然之效也。故救天下之患者。亦必推其患之所自來。而治其受患之處。佛爲夷狄。去中國最遠。而有佛固已久矣。堯舜三代之際。王政修明。禮義之教充於天下。於此之時。雖有佛無由而入。及三代衰。王政闕。禮義廢。後二百餘年而佛至乎中國。由是言之。佛之所以爲吾患者。乘其闕廢之時而來。此其受患之本也。補其闕。修其廢。使王政明而禮義充。則雖有佛。無所施於吾民矣。此亦自然之勢也。昔堯舜三代之爲政。設爲井田之法。籍天下之人。計其口而授之田。凡人之力能勝耕者。莫不有田而耕之。斂以什一。差其征賦。以督其不勤。使天下之人力皆盡於南畝。而不暇乎其他。然又懼其勞且怠。而入於邪僻也。於是爲制牲牢酒醴以養其體。弦匏俎豆以悅其耳目。於其不耕休力之時。而教之以禮。故因其田獵而爲蒐狩之禮。因其嫁娶而爲婚姻之禮。因其死葬而爲喪祭之禮。因其飲食羣聚而爲鄉射之禮。非徒以防其亂。又因而教之。使知尊卑長幼。凡人之大倫也。故凡養生送死之道。皆因其欲而

爲之制飾之物采而文焉。所以悅之使其易趨也。順其情性而節焉。所以防之使其不過也。然猶懼其未也。又爲立學以講明之。故上自天子之郊。下至鄉黨。莫不有學。擇民之聰明者而習焉。使相告語而誘勸其愚惰。嗚呼。何其備也。蓋堯舜三代之爲政如此。其慮民之意甚精。治民之具甚備。防民之術甚周。誘民之道甚篤。行之以勤而被於物者洽。浸之以漸而入於人者深。故民之生也。不用力乎南畝。則從事於禮樂之際。不在其家。則在乎庠序之閒。耳聞目見。無非仁義。樂而趨之。不知其倦。終身不見異物。又奚暇夫外慕哉。故曰。雖有佛無由而入。者。謂有此具也。及周之衰。秦幷天下。盡去三代之法。而王道中絕。後之有天下者。不能勉強。其爲治之具不備。防民之漸不周。佛於此時。乘閒而出。千有餘歲之閒。佛之來者日益衆。吾之所爲者日益壞。井田最先廢。而兼幷游惰之姦起。其後所謂蒐狩。婚姻。喪祭。鄉射之禮。凡所以教民之具。相次而盡廢。然後民之姦者有暇而爲他。其良者。泯然不見禮義之及己。夫姦民有餘力。則思爲邪僻。良民不見禮義。則莫知所趨。佛於此時。乘其隙。方鼓其雄誕之說而牽之。則民不得不從而歸矣。又況王公大人。往往倡而崇之曰。佛是眞可歸依者。然則吾民何疑而不歸焉。幸而有一不惑者。方帩然而怒曰。佛何爲者。吾將操戈而逐之。又曰。吾將有說以排之。夫千歲之患。徧於天下。豈一人一日之可爲。民之沈酣入於骨髓。非口舌之可勝。然則將奈何。曰。莫若修其本以勝之。昔戰國之時。楊墨交亂。孟子患之。而專言仁義。故仁義之說勝。則楊墨之學廢。漢之時。百家並興。董生患之。而退修孔氏。故孔氏之道明而百家息。此所謂修其本以勝之之效也。今八尺之夫。被甲荷戟。勇蓋三軍。然而見佛則拜。聞佛之說則有畏慕之誠者。何也。彼誠壯佼。其中心茫然無所守而然也。一介之士。眇然柔懦。進退畏怯。然而聞有道佛者。則義形於色。非徒不爲之屈。又欲驅而絕之者。何也。彼無他焉。學問明而禮義熟。中心有所守以勝之也。然則禮義者勝佛之本也。今一介之士知禮義者。尙能不爲之屈。使天下皆知禮義。則勝之矣。此自然之勢也。

春秋論上

事有不幸出於久遠。而傳乎二說。則奚從。曰。從其一之可信者。然則安知可信者而從之。曰。從其人而信之可也。衆人之說如彼。君子之說如此。則捨衆人而從君子。君子博學而多聞矣。然其傳不能無失也。君子之說如彼。聖人之說如此。則捨君子而從聖人。聖人。此舉世之人皆知其然。而學春秋者獨異乎是。孔子聖人也。萬世取信一人而已。若公羊高。穀梁赤。左邱明三子者。博學而多聞矣。其傳不能無失者

也。孔子之於經。三子之於傳。有所不同。則學者寧捨經而從傳。不信孔子而信三子。甚哉其惑也。經於魯隱公之事。書曰。公薨。孔子始終謂之公。三子者曰。非公也。是攝也。學者不從孔子謂之公。而從三子謂之攝。其於晉靈公趙盾也。是趙穿也。學者不從孔子信爲趙盾。而從三子信爲趙盾。止弒其君。買。三子者曰。非弒之也。買病死。而止不嘗藥耳。學者不從孔子信爲弒君。而從三子信爲不嘗藥。其捨經而從傳者何哉。經簡而直。傳新而奇。簡直無悅耳之言。新奇多可喜之論。是以學者樂聞而易惑也。予非敢曰不惑。然信於孔子而篤者也。經之所書。予所信也。經所不言。予不知也。難者曰。子之言有激而云爾。夫三子者。皆學乎聖人。而傳所以述經也。經文隱而意深。三子者從而發之。故經有不言。傳得而詳爾。非爲二說也。予曰。經所不書。三子者何從而知其攝也。弒君者不復見經。而盾復見經。此傳得知其弒君非盾也。君弒賊不討。則不書葬。而許悼公書葬。此傳得知世子止之非實弒也。經文隱矣。傳出而暢之。學者以謂三子之說。聖人之深意也。是以從之耳。非謂捨孔子而信三子也。予曰。然則妄意聖人而惑學者。三子之過而已。使學者必信乎三子。予不能奪。使其惟是之求。則予不得不爲之辨。

春秋論中

孔子何爲而修春秋。正名以定分。求情而責實。別是非。明善惡。此春秋之所以作也。自周衰以來。臣弒君。子弒父。諸侯之國相屠戮而爭爲君者。天下皆是也。當是之時。有一人焉。能好廉而知讓。立乎爭國之亂世。而懷讓國之高節。孔子得之於經。宜如何而褒顯之。其冥沒其攝位之實。而雷同衆說。誣以爲公乎。所謂攝者。臣行君事之名也。伊尹周公共和之臣。嘗攝矣。不聞商周之人謂之王也。使息姑實攝。而稱號無異於正君。則名分不正而是非不別。夫攝者。心不欲爲君。而身假行君事。雖行君事。而其實非君也。今書曰公。則是息姑心不欲之。實不爲之。而孔子加之。失其本心。誣以虛名。而沒其實善。夫不求其情。不責其實。而善惡不明。如此。則孔子之意疎。而春秋繆矣。春秋辭有同異。尤謹嚴而簡約。所以別嫌明微。愼重而取信。其餘是非善惡難明之際。聖人所盡心也。息姑之攝也。會盟征伐賞刑祭祀。皆出於己。舉魯之人。皆聽命於己。其不爲正君者幾何。惟不有其名耳。使其名實皆在己。則何從而知其攝也。故息姑之攝與不攝。惟在爲公與不爲公。別嫌明微繫此而已。且其有讓桓之

志未及行而見殺。其生也。志不克伸。其死也。被虛名而違本意。則息姑之恨。何申於後世乎。其甚高之節。難明之善。亦何望於春秋乎。今說春秋者。皆以名字氏族予奪爲輕重。故曰。一字爲褒貶。且公之爲字。豈不重於名字氏族乎。孔子於名字氏族。不妄以加人。其隱實爲攝。則孔子決不書曰公。孔子書爲公。則隱決非攝。難者曰。然則何爲不書卽位。曰。惠公之終。不見其事。則隱之始立。亦不可知。孔子從二百年後。得其遺書而修之。闕其所不知。所以傳信也。難者又曰。謂爲攝者左氏耳。公羊穀梁。皆以爲假立以待桓也。故得以假稱公。予曰。凡魯之事出於己。舉魯之人聽於己。生稱曰公。死書曰薨。何從而知其假。

春秋論下

弑逆大惡也。其爲罪也莫贖。其爲人也不容。其在法也無赦。法施於人。雖小必愼。況舉大法而加大惡乎。既輒加之。又輒赦之。則自侮其法。而人不畏。春秋用法。不如是之輕易也。三子說春秋書趙盾以不討賊。故加之大惡。既而以盾非實弑。則又復見於經。以明盾之無罪。是輒加之而輒赦之爾。以盾爲無弑心乎。其可輕以大惡加之。以盾不討賊。情可責而宜加之乎。則其後頑然未嘗討賊。既不改過以自贖。何爲遽赦使同無罪之人。其於進退皆不可。此非春秋意也。趙穿弑君。大惡也。盾不討賊。不能爲君復讐。而失刑於下。二者輕重。不較可知。就使盾爲可責。然穿焉得免也。今免首罪爲善人。使無辜者受大惡。此決知其不然也。春秋之法。使爲惡者不得幸免。疑似者有所辯明。所謂是非之公也。據三子之說。初靈公欲殺盾。盾走而免。穿盾族也。遂弑而盾不討。其迹涉於與弑矣。此疑似難明之事。聖人尤當求情責實。以明白之。使盾果有弑心乎。則自然罪在盾矣。不得曰爲法受惡。而稱其賢也。使果無弑心乎。則當爲之辯明。必先正穿之惡。使罪有所歸。然後責盾縱賊。則穿之大惡。不可幸而免。盾之疑似之迹獲辯。而不討之責亦不得辭。如此則是非善惡明矣。今爲惡者獲免。而疑似之人陷於大惡。此決知其不然也。若曰盾不討賊。有幸弑之心。與自弑同。故寧舍穿而罪盾。此乃逆詐用情之吏。矯激之爲爾。非孔子忠恕。春秋以王道治人之法也。孔子患舊史如此。其肯從而不正之乎。其肯從而稱美。又教之以越境逃惡乎。此可知其繆傳也。問者曰。然則夷皐孰弑之。曰。孔子所書是矣。趙盾弑其君也。今有一人焉。操刃而殺其父。使吏治之。是三人者。其罪同乎。曰。雖庸吏猶知其不可同

也。躬藥而不知嘗者。有愛父之孝心。而不習於禮。是可哀也。無罪之人爾。不躬藥者。誠不孝矣。雖無愛親之心。然未有殺父之意。使善治獄者。猶當與操刃同其罪乎。此庸吏之不爲也。然則許世子止。實不嘗藥。則孔子決不書曰弑君。孔子書爲弑君。則止決非不嘗藥。難者曰。聖人借止以垂教爾。對曰。不然。夫所謂借止以垂教者。不過欲人之知嘗藥耳。聖人一言明以告人。則萬世法也。何必加孝子以大惡之名。而嘗藥之事。卒不見於文。使後世但知止爲弑君。而莫知藥之當嘗也。教未可垂。而已陷人於大惡矣。聖人垂教。不如是之迂也。果曰責止。不如是之刻也。難者曰。然則盾曷爲復見於經。許悼公曷爲書葬。曰。弑君之臣不見於經。此自三子說爾。果聖人法乎。悼公之葬。且安知其不討賊而書葬也。自止以弑見於經後四年。吳敗許師。又十有八年。當定公之四年。許男始見於經。而不名。許之書於經者略矣。止之事迹。不可得而知也。難者曰。三子之說。非其臆出也。其得於所傳如此。然則所傳者皆不可信乎。曰。傳聞何可盡信。公羊穀梁。以尹氏卒爲譏尹氏卒。左氏以尹氏卒爲隱母。一以爲男子。一以爲婦人。得於所傳者。蓋如是。是可盡信乎。

朋黨論

臣聞。朋黨之說。自古有之。惟幸人君辨其君子小人而已。大凡君子與君子。以同道爲朋。小人與小人。以同利爲朋。此自然之理也。然臣謂小人無朋。惟君子則有之。其故何哉。小人所好者祿利也。所貪者財貨也。當其同利之時。暫相黨引以爲朋者僞也。及其見利而爭先。或利盡而交疎。則反相賊害。雖其兄弟親戚。不能相保。故臣謂小人無朋。其暫爲朋者僞也。君子則不然。所守者道義。所行者忠信。所惜者名節。以之修身。則同道而相益。以之事國。則同心而共濟。終始如一。此君子之朋也。故爲人君者。但當退小人之僞朋。用君子之眞朋。則天下治矣。堯舜之時。小人共工讙兜等四人爲一朋。君子八元八凱。十六人爲一朋。舜佐堯。退四凶小人之朋。而進元凱君子之朋。堯之天下大治。及舜自爲天子。而皐夔稷契等二十二人並列於朝。更相稱美。更相推讓。凡二十二人爲一朋。而舜皆用之。天下亦大治。書曰。紂有臣億萬。惟億萬心。周有臣三千。惟一心。紂之時。億萬人各異心。可謂不爲朋矣。然紂以亡國。周武王之臣三千人爲一大朋。而周用以興。後漢獻帝時。盡取天下名士。囚禁之。目爲黨人。及黃巾賊起。漢室大亂。後方悔悟。盡解黨人而釋之。然已無救矣。唐之晚年。漸起朋黨之論。及昭宗時。盡殺朝之名士。投之黃河。曰。此輩清流。可投濁流。而唐遂亡矣。夫前世之主。能使人人異心。不爲朋。莫如紂。能禁絕

善人爲朋。莫如漢獻帝能誅黨錮清流之朋。莫如唐昭宗之世。然皆亂亡其國。更相稱美推讓而不自疑。莫如舜之二十二臣。舜亦不疑而皆用之。然而後世不謂舜爲二十二人朋黨所欺。而稱舜爲聰明之聖者。以能辨君子與小人也。周武之世。舉其國之臣三千人。共爲一朋。自古爲朋之多且大。莫如周。然周用此以興者。善人雖多而不厭也。夫興亡治亂之迹。爲人君者可以鑒矣。

縱囚論

信義行於君子。而刑戮施於小人。刑入於死者。乃罪大惡極。此又小人之尤甚者也。寧以義死。不苟幸生。而視死如歸。此又君子之尤難者也。方唐太宗之六年。錄大辟囚三百餘人。縱使還家。約其自歸以就死。是以君子之難能。期小人之尤者。以必能也。其囚及期而卒自歸無後者。是君子之所難。而小人之所易也。此豈近於人情。或曰。罪大惡極。誠小人矣。及施恩德以臨之。可使變而爲君子。蓋恩德入人之深。而移人之速。有如是者矣。曰。太宗之爲此。所以求此名也。然安知夫縱之去也。不意其必來以冀免。所以縱之乎。又安知夫被縱而去也。不意其自歸而必獲免。所以復來乎。夫意其必來而縱之。是上賊下之情也。意其必免而復來。是下賊上之心也。吾見上下交相賊。以成此名也。烏有所謂施恩德與信義者哉。不然。太宗施德於天下。於茲六年矣。不能使小人不爲極惡大罪。而一日之恩。能使視死如歸。而存信義。此又不通之論也。然則何爲而可。曰。縱而來歸。殺之無赦。而又縱之而又來。則可知爲恩德之致爾。然此必無之事也。若夫縱而歸來。而赦之。可偶一爲之爾。若屢爲之。則殺人者皆不死。是可爲天下之常法乎。不可爲常者。其聖人之法乎。是以堯舜三王之治。必本於人情。不立異以爲高。不逆情以干譽。

唐宋八家文卷十終

唐宋八家文卷十一

歐陽修永叔著

上范司諫書

前月中。得進奏吏報。云自陳州召至闕。拜司諫。即欲爲一書以賀。多事卒卒。未能也。司諫七品官爾。於執事得之不爲喜。而獨區區欲一賀者。誠以諫官者。天下之得失。一時之公議繫焉。今世之官。自九卿百執事。外至一郡縣吏。非無貴官大職。可以行其道也。然縣越其封。郡逾其境。雖賢守長。不得行。以其有守也。吏部之官。不得理兵部。鴻臚之卿。不得理光祿。以其有司也。若天下之失得。生民之利害。社稷之大計。惟所見聞。而不繫職司者。獨宰相可行之。諫官可言之爾。故士學古懷道者。仕於時。不得爲宰相。必爲諫官。諫官雖卑。與宰相等。天子曰不可。宰相曰可。天子曰然。宰相曰不然。坐乎廟堂之上。與天子辨。可否者宰相也。天子曰是。諫官曰非。天子曰必行。諫官曰必不可行。立殿階之前。與天子爭。是非者諫官也。宰相尊行其道。諫官卑行其言。言行者。天下之責。然宰相九卿而下失職者。受責於有司。諫官之失職也。取譏於人。宰相諫官。繫天下之事。亦任天下之責。然宰相君子。有司之法。行乎一時。君子之譏。著之簡冊。而昭明垂之百世。而不泯。甚可懼也。夫七品之官。任天下之責。懼百世之譏。豈不重邪。非材且賢者。不能爲也。近執事始被召於陳州。洛之士大夫。相與語曰。我識范君。知其材也。其來不爲御史。必爲諫官。及命下。果然。則又相與語曰。我識范君。知其賢也。他日聞有立天子陛下。直辭正色。面爭廷論者。非他人。必范君也。拜命以來。翹首企足。竚乎有聞。而卒未也。竊惑之。豈洛之士大夫。能料於前。而不能料於後也。將執事有待而爲也。昔韓退之作爭臣論。以譏陽城不能極諫。卒以諫顯。人皆謂城之不諫。蓋有待而然。退之不識其意。而妄譏。修獨以謂不然。當退之作論時。城爲諫議大夫。已五年。後又二年。始廷論陸贄及汨裴延齡。作相。欲裂其麻。纔兩事耳。當德宗時。可謂多事矣。授受失宜。叛將强臣。羅列天下。又多猜忌。進任小人。於此之時。豈無一事可言。而須七

年耶。當時之事。豈無急於沮延齡陸贄兩事耶。謂宜朝拜官而夕奏疏也。幸而城爲諫官七年。適遇延齡陸贄事。一諫而罷。以塞其責。向使止五年六年。而遂遷司業。是終無一言而去也。何所取哉。今之居官者。率三歲而一遷。或一二歲。甚者半歲而遷。此又非可以待乎七年也。今天子躬親庶政。化理清明。雖爲無事。然自千里詔執事。而拜是官者。豈不欲聞正議而樂讜言乎。今未聞有所言說。使天下知朝廷有正士。而彰吾君有納諫之明也。夫布衣韋帶之士。窮居草茅。坐誦書史。常恨不見用。及用也。又曰。彼非我職。不敢言。或曰。我位猶卑。不得言。得言矣。又曰。我有待。是終無一人言也。可不惜哉。伏惟執事思天子所以見用之意。懼君子百世之譏。一陳昌言。以塞重望。且解洛士大夫之惑。則幸甚幸甚。

與高司諫書

修頓首再拜白司諫足下。某年十七時。家隨州。見天聖二年進士及第榜。始識足下姓名。是時予年少。未與人接。又居遠方。但聞今宋舍人兄弟。與棄道卿鄭天休數人者。以文學大有名。號稱得人。而足下厠其間。獨無卓卓可道說者。予固疑足下。不知何如人也。其後更十一年。予再至京師。足下已爲御史裏行。然猶未暇一識足下之面。但時時於予友尹師魯。問足下之賢否。而師魯說足下正直有學問。君子人也。予猶疑之。夫正直者。不可屈曲。有學問者。必能辨是非。以不可屈之節。有能辨是非之明。又爲言事之官。而俯仰默默。無異衆人。是果賢者耶。此不得使予之不疑也。自足下爲諫官來。始得相識。侃然正色。論前世事。歷歷可聽。褒貶是非。無一謬說。噫。持此辯以示人。孰不愛之。雖予亦疑足下眞君子也。是予自聞足下之名。及相識。凡十有四年。而三疑之。今者推其實迹而較之。然後決知足下非君子道家。足下詆訶希文爲人。予始聞之疑是戲言。及見師魯。亦說足下深非希文所爲。然後其疑遂決。希文平生剛正好學。通古今。其立朝有本末。天下所共知。今又以言事觸宰相。得罪。足下既不能爲辨其非。辜又畏有識者之責已。遂隨而詆之。以爲當黜。是可怪也。夫人之性。剛果儒軟。稟之於天。不可勉強。雖聖人亦不以不能責人之必能。今足下家有老母。身惜宮位。懼飢寒而顧利祿。不敢一忤宰相。以近刑禍。此庸人之常情。不過作一不才諫官。爾雖朝廷君子。亦將閔足下之不能。而不責以必能也。今乃不然。反昂然自得。了無媿畏。便毀其賢。以爲當黜。庶乎飾己不言之過。夫力所不敢爲。乃愚者之不逮。以智文其過。此君子之賊也。且希文果不賢耶。自三四年來。從大理寺丞。至前行員外郎。作待制。日日備顧問。今班行中無與比者。是天子驟用不賢之人。夫使天

子待不賢以爲賢。是聰明有所未盡。足下身爲司諫。乃耳目之官。當其驟用時。何不一爲天子辨其不賢。反默默無一語。待其自敗。然後隨而非之。若果賢邪。則今日天子與宰相。以忤意逐賢人。足下不得不言。是則足下以希文爲賢。亦不免責。以爲不賢。亦不免責。大抵罪在默默爾。昔漢殺蕭望之與王章。計其當時之議。必不肯明言殺賢者也。必以石顯王鳳果忠邪。望之與章果不賢邪。當時亦有諫臣。必不肯自言。畏禍而不諫。亦必曰。當諫而不足諫也。今足下視之。果當諫耶。是直可欺當時之人。而不可欺後世也。今足下又欲欺今人。而不懼後世之不可欺耶。況今之人。未可欺也。伏以今皇帝卽位已來。進用諫臣。容納言論。如曹修古劉越。雖歿猶被褒稱。今希文與孔道輔。皆自諫諍擢用。足下幸生此時。遇納諫之聖主。如此猶不敢一言。何也。前日又聞。御史臺牓朝堂。戒百官。不得越職言事。是可言者惟諫臣耳。若足下又遂不言。是天下無得言者也。足下在其位而不言。便當去之。無妨他人之塗。其任者也。昨日安道貶官。師魯待罪。足下猶能以面目見士大夫。出入朝中。稱諫官。是足下不復知人間有羞恥事爾。所可惜者。聖朝有事。諫官不言。而使他人言之。書在史冊。他日爲朝廷羞者。足下也。春秋之法。責賢者備。今某區區。猶望足下之能一言者。不忍便絕。足下而不以賢者責也。若猶以謂希文不賢而當逐。則予今所言如此。乃是朋邪之人爾。願足下直攜此書於朝。使正予罪。而誅之。使天下安道家。召予往論希文之事。時坐有他客。不能盡所懷。故輒布區區。伏惟幸察。不宣。

答吳克秀才書

修頓首白先輩吳君足下。前辱示書及文三篇。發而讀之。浩乎若千萬言之多。及少定而視焉。纔數百言爾。非夫辭豐意雄。靡然有不可禦之勢。何以至此。然猶自患倀倀。莫有開之使前者。此好學之謙言也。修材不足用於時。仕不足榮於世。其毀譽不足輕重。氣力不足動人。世之欲假譽以爲重。借力而後進者也。然而惠然見臨。若有所責。得非急於謀道。不擇其人而問焉者歟。夫學者未始不爲道。而至者鮮焉。非道之於人遠也。學者有所溺焉爾。蓋文之爲言。難工而可喜。易悅而自足。世之學者往往溺之。一有工焉。則曰。吾學足矣。甚者至棄百事不關於心。曰。吾文士也。職於文而已。此其所以至之鮮也。昔孔子老而歸魯。六經之作。年之頃耳。然讀易者如無春秋。讀書者如無詩。何其用功少而至於至也。聖人之文。雖不可及。然大抵

道勝者。文不ㇾ難而自至也。故孟子皇皇。不ㇾ暇ㇾ著ㇾ書。荀卿蓋亦晚而有ㇾ作。若ㇾ子雲仲淹。方勉焉以模ㇾ言語。此道未ㇾ足而彊言者也。後之惑者。徒見ㇾ前世之文傳。以爲學者文而已。故力愈勤而愈不ㇾ至。此足下所ㇾ謂終日不ㇾ出ㇾ於軒序。不ㇾ能ㇾ縱橫高下皆如ㇾ意者。道未ㇾ足也。若道之充焉。雖ㇾ行ㇾ乎天地ㇾ入ㇾ於淵泉。無ㇾ不ㇾ之ㇾ也。足下之文。浩乎霈然。可ㇾ謂ㇾ善矣。而又志ㇾ於爲ㇾ道。猶自以爲未ㇾ廣。若不ㇾ止焉。孟荀可ㇾ至而不ㇾ難也。修學ㇾ道而不ㇾ至者。然幸不ㇾ甘ㇾ於所ㇾ悅。而溺ㇾ於所ㇾ止。因ㇾ吾子之能不ㇾ自止。又以勵ㇾ修之少進ㇾ焉。幸甚幸甚。

答ㇾ祖擇之ㇾ書

修啓。秀才人至。蒙ㇾ示ㇾ書一通。幷詩賦雜文兩冊。諭之曰。一覽以爲ㇾ如何。某旣陋。不ㇾ足ㇾ以辱ㇾ好ㇾ學者之問。又其少賤而長窮。其素所ㇾ爲。未ㇾ有ㇾ足ㇾ稱以取ㇾ信於ㇾ人。亦嘗有ㇾ人問者。以ㇾ不ㇾ足ㇾ問之愚。而未ㇾ嘗答ㇾ人之問。足下卒然及之。是以愧懼不ㇾ知ㇾ所言。雖然。不ㇾ遠ㇾ數百里。走ㇾ使者以及門。意厚禮勤。何敢不ㇾ報。某聞。古之學者。必嚴ㇾ其師。師嚴然後道尊。道尊然後篤敬。篤敬然後能自守。能自守然後果於用。果於用然後不ㇾ畏而不ㇾ遷。三代之衰。學校廢。至ㇾ兩漢。師道尙存。故其學者。各守ㇾ其經。以自用。是以漢之政理文章。與ㇾ其當時之事。後世莫及者。其所從來深矣。後世師法漸壞。而今世無ㇾ師。則學者不ㇾ尊ㇾ嚴。故自輕ㇾ其道。輕之則不ㇾ能ㇾ至。不ㇾ至則不ㇾ能ㇾ篤ㇾ信。信不ㇾ篤則不ㇾ知ㇾ所ㇾ守。守不ㇾ固則有ㇾ所ㇾ畏而物可ㇾ移。是故學者惟俯仰狥ㇾ時。以希ㇾ祿利爲ㇾ急。至於忘ㇾ本趨ㇾ末。流而不ㇾ返。夫以ㇾ不ㇾ信不ㇾ固之心。守ㇾ不ㇾ至之學。雖ㇾ欲ㇾ果於自用。莫ㇾ知ㇾ其所ㇾ以用ㇾ之之道。又況有ㇾ祿利之誘。刑禍之懼。以遷ㇾ之哉。此足下所ㇾ謂志ㇾ古師ㇾ道之士。世所ㇾ鮮。而未ㇾ有ㇾ合者ㇾ由ㇾ此也。足下所爲文。用ㇾ意甚高。卓然有ㇾ不ㇾ顧ㇾ世俗之心。直欲ㇾ自到於古人。今世之人。用心如ㇾ足下ㇾ者有ㇾ幾。是則鄉曲之中。能爲ㇾ足下之師ㇾ者。謂誰。學不ㇾ師則守不ㇾ一。議論不ㇾ博則無所ㇾ發。明而究ㇾ其源。足下之言高趣遠甚善。然所守未ㇾ一。而議論未ㇾ精。此其病也。竊惟足下之交游。能爲ㇾ足下稱ㇾ才譽美者不ㇾ少。今皆捨之。遠而見及。乃是以言之不ㇾ敢隱。夫世無師矣。學者當師ㇾ經。師經必先求ㇾ其意。意得則心定。心定則道純。道純則充於中者實。中充實。則發爲文者輝光。施於事者果毅。三代兩漢之學不ㇾ過ㇾ此也。足下患世未ㇾ有ㇾ合者。而不ㇾ棄ㇾ其愚。將某以爲合。故敢道ㇾ此。未ㇾ知於足下之意合否。

與ㇾ張秀才第二書

前日去後。復取ㇾ前所ㇾ貶古今雜文十數篇。反覆讀之。若ㇾ大節賦。樂古。太古曲等篇。言尤高而志極大。尋足下之意。豈非閔ㇾ世病ㇾ俗。究古明道。欲援ㇾ今以復之古。而翦剔齊整。凡今之分殺駁冗者。歟。然後益知足下之好學。甚有志者也。然而述ㇾ三皇太古之道。捨近取遠。務高言而鮮事實。此少過也。君子之於ㇾ學也。務爲道。爲道必求知古。知古明道。而後履之以身。施之於事。而又見ㇾ文章。而發之以信。後世。其道周公孔子孟軻之徒。常履而行之者是也。其文章。則六經所ㇾ載。至今而取信者是也。其道易ㇾ知而可ㇾ法。其言易明而可ㇾ行。及ㇾ誕者言之。乃以混蒙虛無爲道。洪荒廣略爲古。其道難法。其言難行。孔子之言道。曰。道不ㇾ遠ㇾ人。言中庸者曰。率ㇾ性之謂道。又曰。可ㇾ離非道也。春秋之爲ㇾ書也。以成ㇾ隱讓。而不ㇾ正之。傳者曰。春秋信ㇾ道不ㇾ信ㇾ邪。謂隱未ㇾ能ㇾ蹈ㇾ道。齊侯遷衞。書城ㇾ楚邱。與ㇾ其道者也。豈如ㇾ誕者之言者耶。堯舜禹之書。皆曰若稽古。傳說曰。事不ㇾ師ㇾ古。匪ㇾ說攸聞。仲尼曰。吾好ㇾ古。敏以求之。古傳說之事。又豈如ㇾ誕者之言者耶。此君子之所ㇾ學也。夫所ㇾ謂法之遠。孰與今去ㇾ堯舜遠也。孔子刪ㇾ書。斷自ㇾ堯典。而弗ㇾ道ㇾ其前。其所ㇾ謂學。則曰祖ㇾ述堯舜。如ㇾ孔子之聖且勤